國譯禪學大成

第二十一卷

國譯禪學大成第二十一卷凡例

一、本大成第二十一卷には、圓通大應國師語錄三卷及び緇門寶藏集三卷の二部六卷を收載せり。

一、以上の中、圓通大應國師語錄は一名、『南浦錄』ともいひ、鎌倉建長寺第十三世、勅賜圓通大應國師南浦紹明和尚一代の語要を蒐錄したるものにして、我が臨濟派の語錄中其の宗旨を闡明する點に於て、最も緊要の書に屬す。本錄は南北朝の頃、卽ち應安五年、國師の法孫たる宗興和尚が初めて之を開板せしが、今や其の流傳極めて稀なり。德川時代に入りては、國師十三世の法孫江月玩和尚、寛永十八年に之を再板に附し、尋いで延寶二年、京都の澤田又兵衞、復た之を開刻せり。近代に至りては、縮冊大藏經及び禪學大系などに編入せられて行はる。今次、國譯するに際しては、專ら寛永の再板本に據れり。

一、緇門寶藏集は德川初期の名僧、勅諡定慧明光佛頂國師の撰述にして、國師が華竺の諸經論、祖錄中より學道の心得となるべき格言、適例などを引用し來つて、參禪者の龜鑑とせしものなり。而して本書は國師の滅後、寛文十三年の春、門人惠詢和尚が初

めて之を版に鏤りて世に流布せり。然れども寶永の頃、其の版木は池魚の患に罹りて烏有に歸せしかば、安永八年に至りて良哉和尚等、再び版行して叢林に行へり。今次國譯に就いては、安永の版本に據り、校合に際しては寛文十三年版を參照せり。

一、以上二部の書中、大應語錄は彼の大燈語錄と共に、實に我が臨濟門下の眼睛にして、機鋒峻峭の中に自ら一脈の春風を藏し、誠に瞎眼の衲子をして慧眼を開かしむるに足り、又緇門寶藏集に至りては、其の所說懇到にして、恰も兒を愍んで醜を忘るゝが如く、寔に參禪者、日常服膺し、辨道の指針としては之に過ぎたるもの無しと謂はる。

昭和五年八月

編者　黃楊道人識す

國譯禪學大成 第二十一卷

目次

國譯圓通大應國師語錄

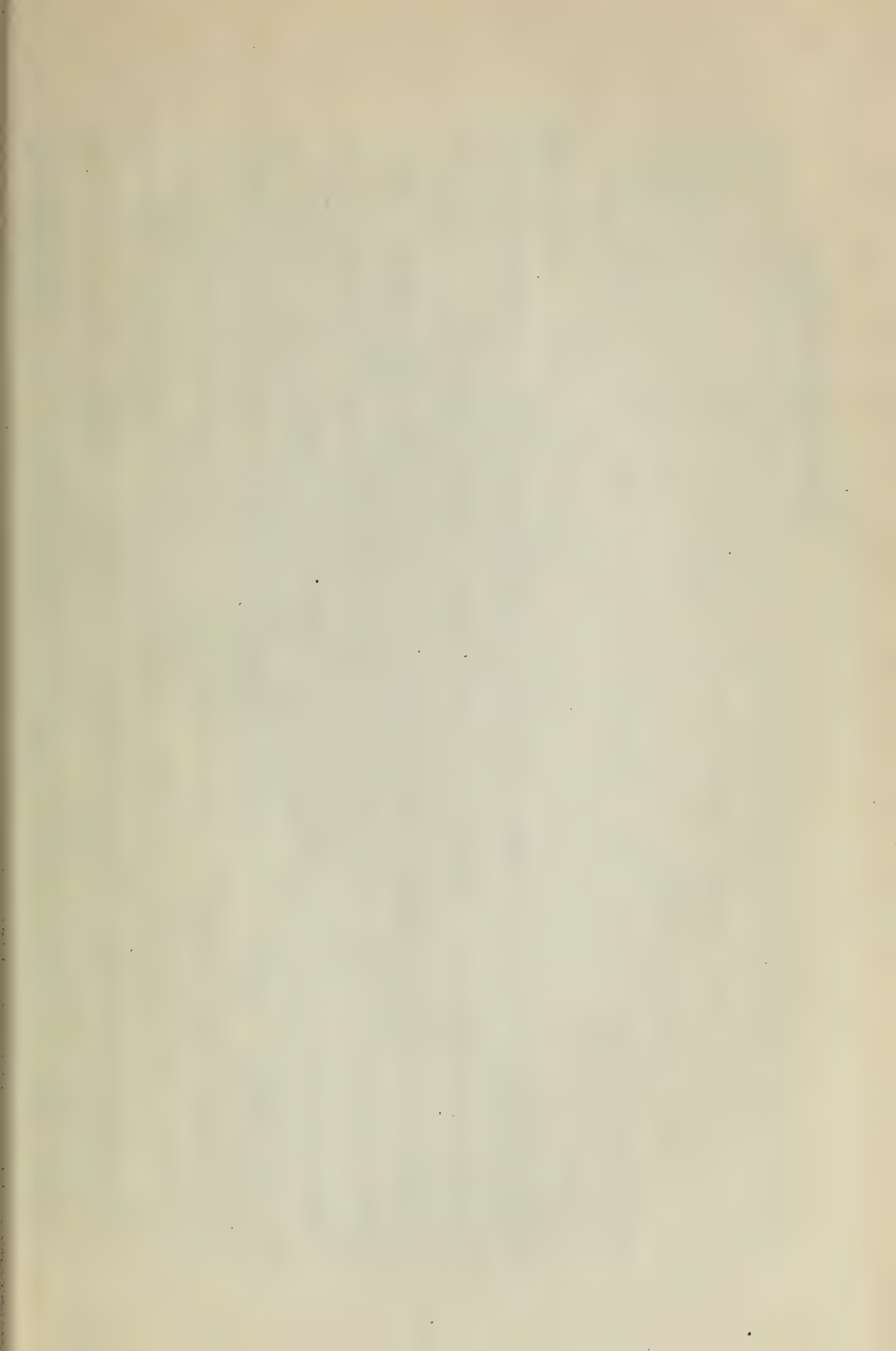
解題

大應國師は後深草天皇の正元元年に入宋し、徑山の虚堂和尚に投じて其を法を傳へ、歸來、四たび大刹に住して大いに元旨を振ふ。其の下に通翁鏡圓、絶崖宗卓、峰翁祖一、宗峰妙超、物外可什、可翁宗然、月堂宗規などの俊傑が起り、就中、妙超（大燈國師）は最も著名にして、其の下に關山慧玄（無相大師）が崛起し、其の末流は益々繁興して、景川宗隆、特芳禪傑、大休宗休、東陽英朝、白隱禪師の如きも皆此の派に屬す。是を以て現今、我が國の臨濟宗は、殆ど此の大應、大燈二祖の末流と謂ふも敢て過言にあらざるなり。

本書大應國師語錄は乃ち國師一代の法語を蒐載したるものにして、初めには筑前の興德禪寺語錄を收め、次ぎに同國崇福寺語錄を載せ、第三卷には洛陽の萬壽寺語錄及び鎌倉建長寺語錄、法語、佛祖贊、小佛事、偈頌及び支那杭州萬壽寺の廷俊撰の國師塔銘等を收錄し、外に宗泐の叙、西澗、智及、楚俊、崇彭等の跋を附す。編者は皆師の侍者祖照、慈禪、宗心、克原等なり。而も其の語、簡古にして嚴整、毫末も虚妄浮薄の跡なく、誠に學者を開示するの好文字と謂ふべし。故に西澗子曇は本錄に跋して曰く、

「今、興德堂頭南浦法兄禪師の綱要を擧揚するを覽るに、長劍快馬の運轉して風の如くなるあり。略々縫罅の窺測を容るべきなし。若し其れ眨眼の流ならば、豈に止に横死萬里のみならんや。余意ふに、虛堂老伯も未だ必ずしも此の作あらざるなり」と謂へるは、必ずしも溢美の言に非ざるなり。

國師の傳を案ずるに、名は紹明。諱は南浦、俗姓は藤原氏、駿州安倍郡の人なり。四條天皇の嘉禎元年を以て生る。此の年、入宋せる東福寺の聖一國師は、實に師と同郡の出なり。幼にして本州建穗寺の淨辯法師の門に入り、十五歲にして薙髪す。尋いで鎌倉に往き、當時、常樂寺に於て禪風を擧揚せる蘭溪道隆に謁す。後、道隆の建長寺に入るや、師も亦隨ひて至り、參究倦むことなし。正元元年、師年二十五歲、辭して宋に渡り、遍く知識に參じ、後、淨慈寺の虛堂智愚に謁す。虛堂乃ち命じて賓客を典らしめ、送迎の外、參扣弛まず。咸淳元年の秋、虛堂、徑山に遷り、師も亦倶に從ふ。一夜、定より起つて豁然として大悟す。乃ち偈を作りて曰く、「忽然心境共忘時、大地山河透脫機。法王法身全體現、時人相對不相知」と。虛堂之を見て大いに喜び、衆に告げて曰く、「明知客。參禪大徹し了れり」と。咸淳三年（本朝の龜山天皇の文永四年）の秋、師辭して歸朝す。其の去るに臨み、虛堂、偈を贈りて曰く、「敲磕門庭細揣摩、路頭盡處再經過。明明說與虛堂叟、東海兒孫日轉多」と。一山の大衆、別を惜み、詩を賦し餞するもの四十三人、以て師の衆中に推重せられしことを知るに足る。歸朝後復た道隆の席下にありて知藏となる。文永七年冬、師年三十六歲、筑前の興德寺に出世し、明年更に太

宰府の崇福寺に遷る。斯くして師は九州に在ること三十三年、參徒日々に盛んにして、西海の禪風大いに興れり。嘉元二年、詔を奉じて京師に入り、後宇多院、宮掖に召して法要を問ふ。奏答旨に稱ふ。勅して輦下の萬壽寺に住せしむ。又東山の故址に嘉元寺を創し、師に詔して第一祖たらしむ。德治二年、北條貞時の請によりて關東に下り、正觀寺に留まる。同年、無隱圓範の後を嗣いで建長寺第十三世となる。入寺の夕、小參に曰へることあり、「今年臘月二十九日、來るに所來無く、明年臘月二十九日、去るに所去無し」と。大衆驚訝して其の意を諭るもの無し。翌延慶元年臘月二十九日、忽ち微疾を示す。二更に至りて偈を書して曰く、「訶レ風罵レ雨、佛祖不レ知、一機瞥轉、閃電猶遲」と。書し畢つて、跏趺して逝く。世壽七十有四、法臘六十。勅して圓通大應國師と謚す。語錄三卷、法語一卷、假名法語一卷あり。又勅して西京に龍翔寺を建て、塔を普光と曰ふ。門人、靈骨を分ちて天源(建長寺內)、瑞雲(崇福寺內)の兩庵に收む。其の木牌は今尙ほ尾州の妙興寺に存すと傳ふ。猶ほ詳しくは本錄卷末の塔銘を參看せられよ。

國譯日本國㋑建長寺明禪師語錄敍

吾が佛㋺敎外別傳の旨を以て大迦葉に付し、二十八傳して菩提達磨に至る。梁の武帝の時に當つて中國に徠り、㋩無上心印を以て可大師に授け、而して中國始めて禪宗あり。自後㋥派別支分して華夏に彌布す。唐宋の間、號して極盛となす。日本國は遠く大海の東にあり、唐より以徠、㋭空海・㋬最澄・㋣奝然・㋠寂照の流の若きと雖も、但だ中國に徠つて敎乘を傳ふるのみ。宋の南度に至つて、㋷千光禪師榮西なるもの、徠つて天童の㋦虛庵敞公に參じ、禪學を得て以て歸る。日本の禪宗あるは則ち西公より始まる。而して㋸覺阿は徠つて、靈隱の㋾瞎堂遠公に參じ、妙に心要を悟る。亦言ふ、彼國未だ禪學あらずと。是れによつて言へば、則ち西と阿と㋻蓋し同時ならんと云ふ。厥の後、禪を學んで中國よりして歸るもの、勝げて計ふべからず。今に至るまで彼の國禪宗大い

㋑建長寺。師、建長に住すること滿一年。
㋺敎外別傳。五千四十八卷にも說かれぬ、父子不傳の妙なり。
㋩無上心印。釋迦彌勒、觀音勢至の額に打ち込む燒印。
㋥派別支分。五家七宗、楊岐、黃龍、應安、大惠、密庵、破庵と支分す。
㋭空海。延曆三十三年入唐す。
㋬最澄。延曆十三年入唐す。

㋣奝然。永觀元年入宋す。
㋠寂照。長保四年入宋し、彼の地に沒す。
㋷千光禪師榮西。仁安文治の兩度入宋す。
㋦虛庵敞。黃龍下の尊宿なり。
㋸覺阿。承安元年入宋す。
㋾瞎堂遠。圓悟の法嗣、楊岐下の尊宿。
㋻蓋し同時。此の評あたれり、仁安三年と承安元年とは、中

に盛なり、凡そ叢林の典禮、一に中國の制に放ふ。玆に建長寺圓通大應國師明公の語錄を讀むに、㋕信に然り、公は徑山虛堂愚公の道を得、歸つて其の國を化し、㋵四たび名刹に遷り大いに玄旨を敷き、㋟學徒駢集す。而して王公貴人入室問道のもの甚だ衆し。㋹蓋し其の履踐眞實にして、學者を開示するの語、簡古嚴整にして毫髮の虛僞なし、眞に一代の宗師なり。嗟乎中國の日本に於ける、同じく閻浮提の内にあり、同一天地、同一日月、山海の限りありと雖も、而も人物の性情と夫の得るところの道德の懿とは、其れ同じからざる者あらんや。公の言行を觀るに、卓異なることかくの如し、古人の所謂何れの地にか才良なからん。徵あるかな。㋞三復感歎して、乃ち其の錄の首に敍す。洪武八年㋡倉龍乙卯五月十有九日戊寅、天界善世禪寺住持天台釋㋤宗泐敍す。

間二年を隔つるのみ。
㋕信に然り。禪宗の盛と、規矩の彼れに則るを見る。
㋵四たび名刹に遷る。興德、崇福、萬壽、建長なり。
㋟學徒云々。師崇福にあること三十三年、參學のもの、常に八十餘員を下らず、事、本錄處々に出づ。
㋹蓋し其の履踐眞實云々。評判甚だ貧弱なり、全室は國師を洞見し得ざりしならん、人物を眞實と云ひ、文章を簡古嚴整と云ひ、宗旨を虛僞なしと云ふ、食ひ足らぬでは無いか。
㋞徵。明なり、驗なり。
㋡倉龍。大歲なり。
㋤宗泐。全室と號す、笑隱訢の法嗣なり。按ずるに、此の敍は滅宗和尙の此の錄を刊せしとき敍を乞ひしものならん、當時は支那崇拜の熱、盛にして、彼土大家の敍を用ふるを誇りとせしなり。

國譯圓通大應國師語錄

初住筑州早良縣興德禪寺語錄

侍者祖照等編

師、㋑文永七年十二月二十八日に於て入寺。

山門、「無門の門、了に㋺遮護なし。若し是れ眞正の道流ならば、㋩這裏便ち一歩を進めん。」彈指一下。

佛殿、「㋥德嶠・韶陽、只だ㋭錐頭の利を見て鏨頭の方を知らず、新興德は別に㋬條章あり。山門頭に合掌し、佛殿裡に燒香す。」

據室、「百千の諸佛、這裡を出でず。且く道へ、這裡是れ什麼の所在ぞ。」拄杖を卓すること一下。

拈衣、「佛々授手、祖々相傳、畢竟傳ふる底は是れ什麼ぞ。」衣を擧して云く、「看よ看よ、歡喜して之を受け、頂戴して之を披す。」

㋑文永七年。國師三十五歲なり、是より先、文永四年、宋より歸朝し、關東に在ること三年、玆の年興德に住持す、以下載する處の入寺の語、幷に嗣法の書を虛堂に呈す、虛堂喜んで曰く「吾が道東せり矣」と。

㋺遮護。遮はさへぎり止むなり、護は守護なり、上霄漢に通り、下黃泉に徹し、さへぎり隔てなしと。

㋩這裏便ち一歩を進めん。普通一枚悟りの漢は、此處に得蹈

法座、「八面四方、通霄の活路、行かんと要すれば便ち行き、坐せんと要すれば便ち坐す。㋣須彌燈王も也た須らく退墮すべし。」

師、陞座、香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、恭しく爲に、

㋠今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬々歲を祝延したてまつる。陛下、恭しく願はくは、㋷堯天等しく覆ひ、舜日普く臨み、四海仁に歸し、萬邦拜手せんことを。

此の香曾て㋦凌霄峰頂にあつて、無心の中に忽然として拾ひ得たり、今日人天普く會す、敢て嚢藏せず。爐中に爇向して、前住大宋徑山興聖萬壽禪寺虛堂和尚大禪師に供養し、用つて法乳に酬ゆ。」

師、衣を斂めて座に就いて乃ち云く、「㋸刹竿を望んで便ち回るも、正に半途にあり、㋾招手を見て横に趨るも、猶は江を隔つるとあり。何に況んや㋻棒頭に旨を領じ、喝下に承當する。萬里の崖州未だ遠しとせざるとあり。所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳、未だ曾て親近せざるに早く大千を隔つ。與麽の告報、㋕法を盡せば民なし、退身三歩、如何が相見せん。」乃ち

み込まぬ、一條の活路子。

㋥德嶠韶陽。德山と雲門なり、德山は佛殿を拆き、雲門は一棒に打殺すと云へり。

㋭錐頭云々。差別なきの平等は惡平等なり、鑿頭の方、平等なきの差別は惡差別なり。錐はきり、鑿はのみ。

㋬條章。おきて、箇條書なり。

㋣須彌燈王云々。此の場合に至つて、須彌燈王も、よけて大應をすわらせればならぬ、おいらがすわる故、おりろと。

㋠今上。龜山天皇なり。

㋷堯德の天、舜德の日。拜手は猶ほ稽顙のごとし。

㋦凌霄峰。徑山にあり。

㋸刹竿を望んで回る。吉州資福寶禪師上堂に曰く、「江を隔てて資福の刹竿を望見して回り去るも、好し二十棒を與ふるに、況んや江を過ぎて來るをや。」（會元九）

拂子を竪てゝ云く、「還つて見るや、㋵霜花月に和して冷かに、梅雪烟を帶びて寒し。若し這裡に向つて見得徹し去らば、皇恩佛恩一時に報じ畢らん。其れ或は未だ然らずんば、切に忌む㋟鐘を喚んで甕となすことを。」叙謝は錄せず。

復た㋹保壽開堂の公案を擧し、師拈じて云く、「大衆、二大老の㋞落處を知らんと要すや。㋡象王回顧師子嚬呻、凜々たる神威誰か敢て近傍せん。然も是の如くなりと雖も、點檢し將ち來れば、總に㋧這の僧に勘破せらる。且く道へ、那裡か是れ他の勘破の處、具眼の者は辨取せよ。」

當晩小參、「㋤德山小參、答話せず、寰中は天子の勅、趙州小參、答話を要す、塞外は將軍の令。二老漢箏鬪の㋶一拶一挨、自然に風行けば草偃し、㋰太平路を得たり。然も是の如くなり

㋾招手を見て横に趨る。襄州高亭の簡禪師、德山に參ぜしとき、江を隔てゝ纔かに見て、便ち云ふ、「不審し」と、德山乃ち扇を搖かして之を招く、禪師忽ち開悟、乃ち横に趨り去り、更に回顧せず。(會元七)

㋻棒頭喝下。鞭をあてられて、走り出す樣な駑馬では、遠くして遠し、千里萬里なりと。

㋕盡法無民退身三步。商鞅の法では、民がなつかぬ、餘り嚴しくすれば、學者は育たぬ、大まけに、みあしもすさつて、仕切りやらうと。

㋵霜化月に和して冷に。霜花は菊なり、白隱和尙は現成底などと、乞食婆の樣な、見方をすなと注意してある、學者の力量次第なり。

㋟鐘を喚んで甕となす。誰もかれも鐘がごんと鳴ると、鍋かうなると云ふ。

㋹保壽開堂の公案。保壽和尙開堂の日、三聖和尙が一僧を推し出された、保壽便ち打す、三聖云く、「恁麼に爲人せば、鎭州一城の人の眼を瞎却し去ることあり」と、保壽便ち方丈に歸る。此の公案は中に一人の坊さんを置いて、兩人が商量する處が、かはつてゐる。

㋞落處。落ち付き場處なり、手元と云ふが如し。

㋡象王云々。豪傑の出合で、地響き打つて居る。

㋧這の僧。推出の一僧か南浦和尙か。勘破とは役人が白洲で、罪人の腹の底を見破るを云ふ。

㋤德山は問話のものは三十棒と高く出られた、趙州は問話の者あれば問を致し來れと、おだやかに出られた。寰中塞外の二句は國師の評なり。

㋶一拶一挨。一拶はたゝきふせ

と雖も、㋒重ねて此の令を行ずべからず。今夜只だ自家に據るに、一條の活路子あり、汝諸人と共に同じく一歩を行ぜん。」拄杖を卓すること一下。

復た擧す、僧、香嚴に問ふ、「如何なるか是れ㋼直截根源の處。」嚴、拄杖を擲下して方丈に歸る。師云く、「若し直截を論ぜば、早く是れ㋨紆曲にし了れり。古人は卽ち且く置く、而今合に作麽生か云はん。㋔天寒し久立珍重。」

次の日、㋗兩班を謝する上堂、「衲僧家は、一動一靜、活路にあらざるなし。一歩を退くれば㋳瞿曇の眼睛を踏着し、一歩を進むれば達磨の鼻孔に築着す。只だ不退不進の如きんば、又且つ如何。」良久して云く、「㋮吹毛元動ぜず、偏界髑髏寒じ。」

冬至小參、「㋘法々本來法、日々杲日天に麗く、心心無別心、處々清風匝地。便ち恁麽に會し去らば、釋迦は用つて出世せず、達磨は必ずしも西來せず、人々分上、壁立萬仭、箇々面前に㋻大寶光を飛す。㋙一念萬年、萬年一念、餓ゑ來れば飯を喫し、困じ來れば卽ち眠る。誰か㋓陰陽の代謝、四序の變遷をか管せん、甚の㋢滴水氷生、天寒人寒とか說かん。然も恁

ろ、一挨はもちあげる。

㋰太平路を得。天下太平行路安全なり。

㋒重れて此の令を行ずべからず。其の樣な背骨のへし折れる樣な、ひどいことは出來ぬ。

㋼直截。直下截斷の略。

㋨紆曲。まはりどほいこと、紆は紆回、曲は屈曲。

㋔天寒云々。おゝ寒いや、長く立たせてたいぎであつたといふ意。

㋗入寺兩班の謝上堂。兩班は東西の兩班なり、東班は知事、西班は頭首、東西の兩班、住持を輔けて法社を匡持す、尙ほ朝廷に文武の兩官あるが如し。謝語、動靜進退を用ふるは、兩班に襯するなり。

㋳瞿曇は釋迦なり。釋迦ゝ目玉を踏みにじり、達磨の鼻づらを蹴飛ばすとの意。

㋮吹毛云々。吹毛は寶劍なり。

麼にし去ると雖も、猶は是れ尋常の行履、畢竟向上如何が顯露せん。」拂子を擊つて云く、「㋐冬寒からずんば臘後に看よ。」

復た擧す、「古德云く、『佛性の義を識らんと要せば、當に㋚時節因緣を觀ずべし』と、時節既に至れば、其の理自ら彰る、今㋖書雲の令節に當る、且く道へ、彰る〻底の理、又作麼生。」拂子を擊つて云く、「㋙一陽生じて萬彙生ず。」

次の日上堂、「一言に道ひ盡せば㋱崖崩石裂、一着機に當れば頭々漏泄。㋯洞山の菓子、㋛潙仰の家風、㋾陳年の滯貨、施設することを用ひず、畢竟今朝如何が說くべき。」拄杖を卓して云く、「時なるかな時なるかな、一陽復り來つて、㋪家々鬧熱。」

上堂、擧す、「趙州、㋲雪中に臥して云ふ、『相

未だ寶劍の鞘を拂はざるに、しやりかうべがひやりとした。

㋘法々本來法。諸法盡く本來の面目、心々無別心、善惡無記盡く朔心なし。日々處々の二句は下語なり。

㋫大寶光。眞如の月なり。

㋙一念萬年。一念子に萬年を越え、萬年を一念に收む。

㋓陰陽代謝は寒暑の往來なり、四序は四時なり。

㋢滴水氷坐は黃龍の語、天寒人寒は仰山の語。

㋐冬寒からずんば云々。暖い暖いと云ふてゐると、あとが恐ろしい、今年の春も、節分迄は暖かかつた、が、節分がすんでから目をむく樣に寒い。

㋚時節因緣。いそいでもあかぬ、油斷してもあかぬ、時節因緣なりと。

㋖書雲。冬至のと。冬至に雲物を書すと云ふこと左傳に見ゆ。

㋙一陽生じて云々。大小の國師、字は三寫を歷て烏焉馬となる(古人の評)。萬彙は萬類なり。

㋱崖崩石裂。地獄天堂こな微塵。頭々漏泄は百草頭上の祖師意と同じ。

㋯洞山の菓子。洞山、泰首座と冬節に菓子を喫する次、乃ち問ふ、「一物あり、天を拄へ地を拄へ、黑きこと漆に似たり、常に動用の中にあつて、動用の中に收め得ず、且く道へ、過、甚麼の處にかある、」泰曰く、「過は動用の中にあり、」洞山卽ち侍者をして菓卓を掇退せしむ。(會元)

㋛潙仰の家風。潙山上堂に曰く、「仲冬嚴寒は年々の事、晷運推移の事若何、」仰山進前叉手して立つ、潙山云く、「我れ情に知る、汝が此の話に答へ得ざることを、」香嚴云く、「某此の

救へ相救へ』と、時に僧あり、便ち趙州の身邊に來つて臥す、州便ち起ち去る。」師云く、「這の僧、然も趙州を救ひ得ると雖も、爭奈せん㋝便宜を得る處便宜に落つることを。且く道へ、那裡か是れ他の便宜に落つる處、具眼のものは辨ぜよ。」

上堂、擧す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ道。」州云く、「㋜墻外底。」僧云く、「這箇の道を問はず。」州云く、「儞那箇の道をか問ふ。」僧云く、「大道。」州云く、「大道長安に透る。」師、頌して曰く、「分明に指示する處、㋑覿面相謾せず。大道は弦の直きが如し、行人自ら難をなす。」

上堂、擧す、僧、鏡淸に問ふ、「如何なるか是れ佛法の源。」淸云く、「㋺這裡より流出す。」師云く、「大衆、流出は則ち問はず、且く道へ、這裡是れ什麽の所在ぞ。」拂子を擊つて云く、「諸人若し也た會得せば、㋩四海浪平かに、百川潮落つ。」

上堂、「山僧、早良縣裡にあつて、箇の小々の㋥茆香皂角の鋪子を開く、爭酬競買のもの、全く無しとは道はず、只だ是れ㋭價數相當るものあること罕なり。今朝臘月十五、未だ㋬折本して諸人に賣與し去ることを免れざ

話に答へ得ん、」潙山又前問を躡む、嚴亦進前叉手して立つ、潙云く、「賴に寂子が不會に遇ふ。」(會元)

㋾陳年の滯貨。店ざらしの賣れ殘り、くず籠の古ふんどし。

㋪家々閙熱。さなきだに、梅こでも白袴で御慶。(古書入)

㋲雪中に臥す。踏みすべつて雪の中にこけた。

㋝便宜を得る處便宜に落つ。利口なものは利口の穴に落つ、非戶掘つて非戶の中へころりとおちた。

㋜墻外底。墻根の外に道路ありしなり。

㋑覿面相謾ぜず。ちつともだましはせぬ、似せ金は使はぬ。弦は弓のつる、行人は旅人。

㋺這裡より流出す。古人は「うぬが鼻しづくが、さうじやわい、吞み込め」と云ふてある。

㋩四海浪平云々。大亂の後には

るなり。」拄杖を卓して云く、「(ト)有利無利、行市を離れず。」

臘月二十五日上堂、「(チ)雲門に一曲あり、(リ)臘月二十五、流落して幾多年ぞ、今日重ねて新に擧す、重ねて新に擧す。(ヌ)巣は風を知り、穴は雨を知る。」

(ル)歳夜小參、「高く寶鑑を懸けて、萬象を目前に列し、横に鏌鎁を按じて、群機を量外に截る。蓋天蓋地、透色透聲、卷舒我れにあり、殺活時に臨む。把定放行、全く掌握に歸す。所以に衲僧家は、(ヲ)行不到の處に說到し、說不到の處に行到し、千變萬化、七縱八横、(ワ)六十甲子を亂却し、七十二候を抹過するも、分外となさず。然も此の如くなりといへども、今夜且つ一着を放過す。臘の盡るは舊に依る、他の春の回

斯様な太平が來る。

(ニ)茆香皀角鋪子はきぐすりやの事なり。爭酬競買は高島屋の倉ばらへで、我れいちと買ひに往く。

(ホ)價數相當。直段書通りに買ふ。

(ヘ)折本。もとねをきるを折本と云ふ。

(ト)有利無利行市を離れず。まうけがあつても無くても、賣らねばならぬは市町のならひ。

(チ)雲門に一曲あり。周禮の注に雲門は黃帝の樂、蓋し樂の莊嚴神秘なるもの。(字解)

(リ)臘月二十五は人間の末路、流落云々は郞當悲酸。(字解)

(ヌ)巣は風を知り穴は雨を知る。風のある年は低き處に鳥巣ふ、雨多き年は乾きたる地に蟲穴を穿つ、是れ此の語の出所なり。

(ル)歳夜。除夜なり。寶鑑は山川萬象を照破す、鏌鎁は殺人刀活人劍、量外は限量の外、勘定出來ぬ處。

(ヲ)行不到は月の横町三丁目、說不到はしやつくりの鎗先。

(ワ)六十甲子。一年に六十甲子あり、七十二候、彼岸土用寒食淸明等の七十二の氣候あり。

(カ)順時保愛。其の場其の場で護持するを順時保愛と云ふ、滔行窰提、工夫相談する也。古人此處を許して「是れは國師のはめてなり、手前に取りまはさずば行くまい」と。

(ヨ)北禪露地の白牛。潭州北禪の智賢禪師、除夜の小參に「年窮まり歳盡くるも、諸人と分歳すべきなし、老僧一頭露地の白牛を煮、黍米飯を炊き、野菜根を煮、榾柮の火を燒き、大家喫し了つて村田樂を唱へん、何が故ぞ、他の門戸により、他の墻に傍ひ、剛ひて時人に喚んで郞となさるゝを免

るに還す。何が故ぞ、也た諸人の ㋕ 順時保愛せんことを要す。」

復た ㋵ 北禪、露地の白牛を烹るの公案を擧し、師拈じて云く、「北禪老師、恁麼の按排、謂つべし是れ富貴と、興德家貧にして、許多の ㋟ 按排なし、只だ現定に據つて、㋹ 諸人と分歲せん。然りと雖も、汝諸人をして ㋞ 快活不徹ならしめん。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「㋡ 佛に獻ずるには香の多きを用ひず。」

㋧ 歲旦上堂、拄杖を卓して云く、「一處透れば處々透り、一處眞なれば處處眞なり。畢竟如何が見得せん。」又拄杖を卓すること一下して云く、「㋤ 元正啓祚、萬物咸新なり。」

元宵上堂、拂子を以て圓相を打して云く、「這の一燈を點ずれば、燈々郎ち明かなり、森羅萬象、形を逃るゝところなし。若し也た ㋶ 覆盆の下は、爭か ㋰ 山僧を怪み得ん。」良久して云く、「且く道へ、那一燈ぞ。」

上堂、「㋒ 馬祖陞堂、百丈卷席す、㋼ 風塵草動、便ち來由を知る。好大衆、衲僧家は須らく是れ恁麼にして始めて得べし。㋨ 一等に是れ箇般の時節、切に忌む、眼を開いて瞌睡することを。」便ち下座。

ろ」と、便ち下座。(會元十五)

㋟ 按排は獻立てなり、現定は出來合せなり。

㋹ 諸人。坊主もあり、在家もあり、是れが露地の白牛なり。

㋞ 快活不徹。愉快でたまらぬ。不徹は徹せざらんやの反語で、徹と同じ、閑不徹、笑不徹などの例多し。

㋡ 佛に獻ずるに香の多きを用ひず。此の語子細あり、容易の觀をなすなかれ。又云ふ、知音少れなり。(古人評)

㋧ 歲旦。文永八年の歲旦、國師三十八歲、此の時分は隨分騷騷しき世の中なり、此の年趙良弼、元の使として博多に來り、西澗子曇又來る、國師と趙良弼との唱和に、「外國の高人日本に來る、相逢ふて談笑眞機を顯す」の語あり。

㋤ 元正啓祚云々。新年おめでたう、野も山も皆目出度う。

㋔佛涅槃上堂、「㋗涅槃一片の心に住せず、㋳端なく賣弄す紫金身、今に至るまで㋮醜惡遮掩しがたし、㋘狼藉たり年々桃李の春。」

三月旦上堂、「禪と說き道と說き、妙と談じ玄と談す、好肉に瘡を剜る、畢竟如何。㋫常に憶ふ江南三月の裡、鷓鴣啼く處百花香し。」

上堂、「春日晴れて黃鶯鳴き、春風浩々たり、春水冷々たり。㋙妙德空生都べて會せず、善財走得して㋓太忙生。」

上堂、擧す、㋢眞淨和尙、衆に示して云く、「頭陀石、莓苔に裹まれ、擲筆峯、薜荔に纏はらる。羅漢院裡一年に三箇の行者を㋐度し、歸宗寺裡參退喫茶。」師拈じて云く、「㋚眞語の者、實語の者、不妄語の者。所以に興德依つて之を行ず、大衆下座、巡堂喫茶。」

㋶覆盆の下。油斷のならぬ穴なり、と。

㋰山僧を怪み得ん。和尙さんのかほばかりを見る。

㋒馬祖陞堂百丈卷席。馬祖陞堂衆纔かに集る、百丈出でて席を卷却す、祖便ち下座、百丈躡つて方丈に至る、祖曰く、「我れ適來未だ說話せざるに、汝何として便ち席を卷却す、」百丈曰く、「昨日、和尙に鼻を扭られて、鼻頭の痛を得たり、」祖曰く、「汝昨日甚の處に向つてか心を留む、」百丈曰く、「鼻頭今日痛まざるなり、」祖曰く、「汝深く昨日の事を明らむ、」百丈作禮して退く。（會元三）

㋼風塵草動。そよと吹く風。

㋨一等。おしなべて、拈鎚竪拂も咳唾掉臂も。

㋔二月十五日の上堂、此の偈頌、幅もあり奧もあり、技巧もあり、上出來なり、大應今日涅槃に入る。

㋗涅槃一片の心。見性的の當體。

㋳端なく云々。四十九年、紫摩金色の身を切り賣りす。

㋮醜惡。三千年もさらされた死骸。

㋘狼藉たり云々。花の下に、拔き身を振ふなんて殺風景なことよ。

㋫常に憶ふ云々。僧、風穴に問ふ、「語默離微に涉る時如何が通じて不犯ならん、」風穴應ずるに此の語を以てす。綺ときをすると瘡が付く。

㋙妙德空生。文殊須菩提、善財は五十三の善知識に遍參す。

㋓和尙三十八歲、時節は春の盛り、法語もみづ／＼して居る。

㋢眞淨文禪師は黃龍の法子。

㋐度は剃度なり。

㋚眞語の者云々。國師は二枚舌よ。（古人評）

浴佛上堂、「衲僧家は尋常㋖高く釋迦を揖し、彌勒を拜せず、甚によつてか今日特地に香湯を調和し金軀を灌沐す。㋴三尺と一丈六と、且つ同じく手を携へて歸る。」

結夏小參「雲山蒼々として㋱圓覺の伽藍を成見し、海水泱々として全く平等性智を彰す。燈籠露柱、㋯狸奴白牯、若しくは凡若しくは聖、情と無情と、同じく此に結制安居、平等無平等のものあることなし。一夏九十日の内、經行及び坐臥、常に其の中にあり。然る後、山僧這の保社に入らず、行は是れ自ら行じ、坐は則ち自ら坐す。何が故ぞ。是れ時人と共に住しがたきにあらず、大都て㋛緇素分明ならんことを要す。」

復た擧す、㋹古德云く、「若し是れ全く宗乘を擧せば、汝等諸人甚れの處に向つてか領會せん。所以に㋪古今獨露、隱顯無方」と。拈じて云く、「㋲依稀として曲に似て、纔かに聽くに堪へたり。又風に別調の中に吹かる。」

次の日上堂、「興德の一乘、是れ多からずと雖も、箇々頂天履地、人々鼻直眼横、甚の三月安居、九旬禁足とか說かん、畢竟如何。㋝南地の竹、

㋖高く釋迦を揖し彌勒を拜せず。先佛の釋迦を揖し、當來下生の彌勒を拜せず。

㋴三尺と一丈六と同じく手を携へて歸る。倶尸長者、身のたけ僅かに三尺、衆見を恥ぢて、佛前に至らず、佛彼を愍み、丈六の身を變じて、三尺の小身を現じ、手を携へて精舍に歸る(倶尸經)。三尺の小供と一丈六の翁となり。

㋱圓覺伽藍。圓覺經に「大圓覺を以て我が伽藍となし、心身平等性智に安居す。」

㋯狸奴はねこ、白牯はうし。

㋛緇素分明。黑白分明なり。

㋹古德。鼓山智岳了宗禪師の上堂語。(會元八)

㋪古今獨露。三世十方獨脫顯露、隱顯無方、之を見れば前にあり、忽然として後にあり、定方あるなし。會元には「古今常顯、體用無始」に作る。

北地の木。」

上堂、乾峯和尚示衆に云く、「法身に三種の病二種の光あり、一々透得して始めて是れ穩坐。」雲門大師、衆を出でて云く、「庵内の人、甚によつてか庵外の事を見ざる。」師拈じて云く、「韶陽老人也た是れ㋜邪に隨ひ惡を逐ふ。當時只だ是れ㋑冷笑一聲せば、乾峯身を隱すに路なきことを管取せん。」

端午上堂、「諸方今日㋺善財の藥を採ることを說かず、便ち㋩東山の神符を說いて以て佛事をなす。只だ是れ興德門下、渾べて說くべきなし。何が故ぞ。家に㋥白澤の圖なければ妖怪自然に消滅す。㋭滅滅、長安夜々家々の月。」

上堂、「結夏已に一月を經、山僧日々㋬業識茫々、本の據るべきなし、未だ曾て兄弟と本分の事を說着せず。且く道へ、本分の事作麼生か說かん。」良久して云く、「今日は大熱、且つ別時を待て。」

中夏上堂、「九旬已に半を過ぐ、也た諸人自ら合に時を知るべし。寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺す。切に忌む、㋣當面に諱却することを。空しく光陰を度らば、更に阿誰をか恨みん。」

七月旦上堂、「一葉落ちて天下秋なり、㋠一塵起つて大地收まる。未だ言

㋲依稀。彷彿、或は幽砂の意なり、古德の舉揚には、斯る面白き樣子あり。

㋝南地の竹北地の木。支那の南方は竹を產し、北方は木材を出す、松直棘曲と同じと、又天上の星、地下の木と用ひし處もあり。

㋜邪に從ひ惡を逐ふ。泥坊は胸がびくつく。

㋑冷笑一聲。にがわらひ。乾峯は尻ひんまくつて逃げるところなし。

㋺善財採藥。文殊善財に謂ふ、「藥を採り將ち來れ。」

㋩東山神符。五祖上堂、「今日端午の節、白雲に一道の神符あり、也た些子の靈驗あり、敢て隱藏せず、諸人に舉示せん。」(五祖錄)

㋥白澤。神獸の名、之を寫して妖邪を伏す、普通なれば、白澤の圖ありと云ふべき處を無しと

はざるに先づ知るも、猶ほ是れ鈍漢、未だ擧せざるに先づ領ずるも、是れ俊流にあらず。何が故ぞ。定光(リ)招手、智者點頭。」

解夏小參、「一結に結定して針箚不入、一解に解開して處々(ヌ)通方。東に去るも也た得たり、西に去るも也た得たり、甚の萬里無寸草とか說かん。淨地却つて人を迷はす、誰か管せん門を出でゝは便ち是れ草。(ル)眼睛血を流出す、恁麼恁麼、大地に踏翻し、脚に信せて行く。不恁麼、不恁麼、横に榔栗を擔ふて秋風に舞ふ。然も是の如くなりと雖も、興德が拄杖子、猶ほ未だ(ヲ)放過せざることあり。何が故ぞ。(ワ)吾が王庫の内、是の如きの刀なし。」

復た臨濟無位の眞人の話を擧し、(カ)雪峰の語を擧し了つて、師拈じて云く、「白拈未白拈は卽

云ふは力量なり。昔黄帝恒山に白澤を得たり、神獸能く萬物の情を言ふ、因つて天地鬼神の事を問ひ、寫して圖となし、祓邪の文を作つて以て之を祝す。(軒轅記)

(ホ)滅々長安夜々家々月。無くなつたなくなつた。そのあとは家家の月も、戸戸の月もある、毎晩々々。

(ヘ)業識茫々。作務よ托鉢ようは調子なりと。

(ト)當面に諱却。熱さ寒さ、往さ來るさの、えりきらひをするな。

(チ)一塵起つて大地收まる。一片の落葉天下の秋を含み、一微塵裡に盡大地を收む。

(リ)招手は手まねぎ、點頭は合點。天台智者、十五歲の時、佛像を禮するとき、恍然として大海際の峰頂に一僧あり、招手して、一伽藍に接入して云く、「汝當に此に居るべし、當に此に終るべし」と、天台の佛壠に定光禪師あり、弟子に謂つて云く、「久しからず、當に善智識あつて此に至るべし」と、俄爾として智者至る、定光曰く、「還つて疇昔手を擧げて招引の時を憶ふや否や。」(祖庭事苑)

(ヌ)通方。八方に通ず、西は九州、東は奥羽までも。

(ル)眼睛血を流出す。ありがたくて、空涙がぼろ〱こぼれる。此の句上の結びの如くも見え又下の起しの樣にも見ゆ、下へ掛くれば目玉をつきつぶせと見るべし。

(ヲ)放過。ほつて置くこと。

(ワ)吾王庫の内。其の樣なぬきさし出來ぬなまくらはなし。

(カ)雪峰の語。定上座の擧揚を聽いて、雪峯云く、「臨濟大いに白拈賊に似たり。」白拈はひろ

ち且く置く、若し是れ無位の眞人ならば、但だ面門より出入するのみにあらず、見んと要すや。」拄杖を擲下し、喝して云く、「元來只だ是れ拄杖子。」

次の日上堂、「布袋口打開すれば、徧界路の通ずるあり、露柱燈籠、一々眼活し、狸奴白牯、各々心空ず。汝等諸人、㋵甚によつてか更に這裡に來つて、低頭接耳、叉手當胸するや。可煞だ向背を知らず、西東を辨ぜず。忽ち箇の出で來つて道ふあらん、長老、良を壓して賤となすべからずと。也た他を怪むこと得ず。何ぞや。㋟西風一陣來、落葉兩三片。」

中秋上堂、「秋聲日に高く、秋水澄んで淸し、秋風は颯々、秋月は圓明。畫けども又畫きならず、描すれども又描しならず。是れ㋹王老師にあらずんば、誰か能く拂袖して行かん。」

上堂、「秋風八極に吹き、木落ちて千山を露す。見成の公案、達磨不識、六祖不會、㋞大難大難。」便ち下座。

開爐上堂、「㋡火熖、三世の諸佛の爲に說法す、㋧人貧にして智短し。三世の諸佛立地に聽く、㋤馬瘦せて毛長し。更に一句子あり、且つ暖處に去つて商量せん。」

とんびなり。

㋵甚によつて更に這裡に來つて低頭接耳。野郎ども丸で解制の氣分を知らぬと。

㋟西風一陣來落葉兩三片。露柱眼活、狸奴心空のところなり。

㋹王老師。王老師みたやうな分らずやで無くては、此のところは得離れまい。

㋞大難大難。我が法妙難思なりと。

㋡火燄。雲峯云く、「三世の諸佛火燄に向つて大法輪を轉ず。」雲門拈じて云く、「火燄三世の諸佛の爲に說法す、三世の諸佛立地に聽く。」(會元十五)

㋧人貧智。貧すれば鈍する。

㋤馬瘦せて毛長。苦勞が花よ。

㋶虛堂忌。十月七日なり。

㋰巴鼻は尻の先、鼻づら。來由は因緣由來。

㋒楊岐頂上拳。其の師慈明の忌日に、兩手をもつて拳を揑つ

㋶虛堂和尙の忌日拈香、香を以て圓相を打して云く、「只だ這箇是れ什麽ぞ、㋰沒巴鼻來由あり。㋒楊岐頂上の拳、㋼鎭州の蘿蔔頭。」便ち香を挿む。

上堂、「南來のものも三十棒、北來のものも三十棒、㋨梁山徹骨の貧窮、亦能く人を濟ふ。興德には然も棒ありと雖も、曾て動着せず。何が故ぞ。黃金自ら黃金の價あり、終に㋔沙に和して人に賣與せず。」

十一月旦上堂、㋗明招風頭稍硬しの公案を、師拈じて云く、「明招老漢、斯の道を以て斯の民を覺せんと欲す。之を囑して又囑す、是なることは則ち是なり、興德は則ち然らず、者裡風頭稍硬し、切に忌む商量することを。」

冬至小參、「㋳璿璣未だ動ぜざるとき、一句を道得すれば、鐵樹花を開く。朕兆纔かに分るゝ處、一機を轉得すれば、氷河焔を發す。直に得たり、㋮嘉州の大象、滿面に光を生じ、㋘陝府の鐵牛、通身に汗出づることを。洞山の菓子、又見る一番新に、㋫皓老の布裩舊によつて赫赤たり。然も是の如くなりと雖も、若し也た向上の全提ならば、㋙冬至寒食に到る、更に一百五の在るあり。何が故ぞ。當頭霜夜の月、任運前溪に落つ。」

て頭上に安ず。

㋼鎭州の蘿蔔。尾張大根などといふに同じ。一圓相に就いての働き。

㋨梁觀禪師は同安志の法嗣、此の垂語あり。

㋔沙に和す云々。似せものにして安賣せぬ。

㋗明招。德謙禪師の天寒上堂、衆僅かに聚る、師云く、「風頭稍々硬し、是れ汝が安身立命の處にあらず、且く暖處に歸つて商量せん。」便ち方丈に歸る、大衆隨ひ到つて立つ、師云く「纔かに暖室に到れば、便ち瞌睡を見る」と、一時に逐ひ出す。（會元八）

㋳璿璣。書の舜典に出づ、天文を正すの器なり。

㋮嘉州の大象。統記に「唐の玄宗の朝に沙門海通なるもの、嘉州に彌勒佛を造る、高さ三百六十尺」と。

次の日上堂、「一冬二冬、叉手當胸、達磨不會、隻履忽々たり。寒山掌を撫して呵々として大笑す。何が故ぞ。㋓海水天寒を知り、枯桑天風を知る。」

除夜小參、「古往今來、日は上り月は下る。一年十二月、月々一般、一日十二時、時々相似たり。見成の公案、按排を迥絶す。德山棒あるも、手を下すにところなく、臨濟喝あるも口を開くの分なし。山僧與麼の告報、別に也た他なし。只だ諸人の時を知り節を知り、㋢化機に渉らず、自ら一條の活路子を行ぜんことを要す。然る後、之と手を把つて共に行かん、其れ或は未だ然らずんば、㋐明年更に新條の在るあり。春風に惱亂して卒に未だ休せず。」

復た㋚東村の王老夜燒錢の公案を擧し、頌して云く、「東村の王老夜燒錢、歳晩年々㋖事遷らず。若し箇の中に向つて㋶指的を求めば、㋳新羅の鷂子天邊に過ぐ。」

上堂、擧す、僧、香林に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」林云く、「㋱坐久成勞。」師拈じて云く、「大衆、切に忌む㋛動着することを。動着せば則

㋘陝府の鐵牛。禹王河を鎭する爲めに作る、首は河南にあり、尾は河北にあり。

㋫皓老の布裩。玉泉の皓禪師、赤ふんどしに歷代祖師の名を書して之を用ふ、(禪類)嘗て垂示して曰く、「暑運推移、布裩赫赤、怪むなかれ洗はず、又替換するなきことを。」

㋙冬至から寒食迄には一百五日ある、是れ位の隔りあり。

㋓海水枯桑。飜案の語なり、海水凍せず、是れ天寒を知らざるなり、枯桑に枝葉なし、故に天風を知らず。今は更に飜して、海水天寒を知り、枯桑天風を知るとす。

㋢化機に渉らず。暑さ寒さの化機なり。

㋐明年云々。羅隱の柳の詩なり。

㋚東村王老夜燒錢。會元十四に石門徹禪師、僧問ふ、「年窮歳盡の時如何、」師曰く、「東村

ち禍生せん、何が故ぞ。㋽白玉瑕なし、文を彫つて德を喪す。」

上堂、臨濟因に院主に問ふ、曰く、「什麼の處よりか來る。」云く、「州中に㋪黄米を糶り來る。」濟拄杖を以て劃一劃して云く、「還つて這箇を糶り得んや。」主便ち喝す、濟便ち打す。須臾にして典座來る、濟、前話を擧す、座云く、「院主、和尚の意を會せず。」濟云く、「儞作麼生か會す。」座禮拜す、濟亦打す。頌に云く、「㋲桃李無言相映じて開く、紅々白々何れよりして來る、忽然として一陣㋝春風惡く、狼藉たる園林綠苔に點ず。」

佛殿を拽く上堂、㋜雲門大師、衆に示して云く、「和尚子、妄想することなかれ、山は是れ山、水は是れ水。」時に僧あり、出でゝ云く、「某、山は是れ山、水は是れ水と見るとき如何。」門云く、「佛殿甚に因つてか這裡より過ぐ。」僧云く、「恁麼なるときは則ち妄想し去らず。」門云く、「我れに話頭を還し來れ。」師拈じて云く、「然らば則ち㋑開き易きは始終の口、保ち難きは歲寒の心なり。這の僧當時才かに他の雲門の佛殿、甚によつてか這裡より過ぐと道ふを聞いて、但だ㋺應當如是と云はゞ、唯だ自己の光明を表顯するのみにあらず、亦乃ち雲門の脚跟を覰破せん。」

王老夜燒錢。」錢は紙錢なり。

㋖事不還。來る年も來る年も、みそかのどたばたは同じことなりと。

㋴指的。玄指端的なり。

㋱新羅鷂子。昨日の空に飛鳥のあと、弓も鐵炮もとゞかぬ。

㋯坐久成勞。すわりくたびれ。九年面壁から思付きしならん。

㋛着云々。鵠林云く、「動着せい、動着せいで何とせう。」

㋽白玉瑕なし云々。鵠林曰く、「たゝきくだけ。」

㋪黄米。古米なり。

㋲桃李。院主典座、紅々白々、喝と禮拜。

㋝春風惡。臨濟の打。

㋜雲門示衆。會元十五雲門章に「三門什麼によつてか佛佛に騎つて這裡より過ぐ」に作る。

㋑開き易きは云々。初めあつて終りなし、龍頭蛇尾の漢。

佛涅槃上堂、「佛身法界に充滿し、普く一切群生の前に現す。」拂子を竪起して云く、「這箇は是れ拂子、佛身什のところにかある。諸人若し這裡に向つて一隻眼を着得せば、便ち靈山の一會儼然として未散なることを見ん。其れ或は遲疑せば、古佛過ぎ去つて久し。」

三月半上堂、「(ハ)正法眼、涅槃心、頭々顯露、追尋することを用ひざれ。陌上の桃花都べて落盡し、黃鶯啼いて綠楊の陰にあり。」

法堂の前、靑草を剗除し、白沙を布くの上堂、「若し是れ一向に宗乘を擧揚せば、固に是れ法堂前、靑草離々たらん。未だ免れず(ニ)牙關を咬定して、一線道を放ち去ることを。」拄杖を卓して云く、「只だ這の些兒、(ホ)人の憎を得たり。古に亘り今に亘つて變易なし。(ヘ)噁。端なく沙を撒し土を撒し了んぬ。」拄杖を靠けて下座。

浴佛上堂、「未だ都率を離れず、已に閻浮に降す。(ト)天は東南に高し、未だ母胎を出でずして、度人已に畢んぬ。地は西北に傾く、恁麼に會得せば、黃面老子、豈に但だ(チ)今日始めて降生するのみならんや。如し其れ未だ然らずんば、興德又一杓の惡水を費し去らん。」拂子を以て潑水の勢をなして

(ロ)應當如是。いかさま仰せのとほり。

(ハ)正法眼藏、涅槃妙心、實相無相の法門あり、摩訶迦葉に附屬すと、是れ佛の記莂なり。

(ニ)牙關を咬定。誠に口惜しいけれども。

(ホ)人の憎を得。這の茶目は、いたづらがすぎる。

(ヘ)噁。惡聲、励聲なり、噫噁叱咤、千軍皆伏す。噁の字、咽喉より迸る音。

(ト)天は東南に高く地は西北に傾く。着語の體なり、列子には「地は東南に傾き、天は西北に高し。」

(チ)今日。四月八日なり。

(リ)二千年前の影子。釋迦の繩張を跳不出。

(ヌ)迂之遠を打す。葛藤語箋に、「迂曲直徑ならざるを云ふ」と。蓋し外邊を遶匝して、中間を得ざるなり。

云く、「看よ看よ、我今灌沐諸如來。」

結夏小參、「大圓覺を以て、我が伽藍となす、天網恢々疎にして漏さず。身心安居、平等性智、十方刹海、包括して遺すことなし。衲僧伎倆をなし盡して、自ら謂らく、多少の奇特ありと。殊に知らず、總に這の（ノ）一千年前の影子を跳り得ざることを。興德恁麼に道ふ、放不過底あることなきや、出で來つて禪床を掀倒し、大衆を喝散せよ。如し無くんば高く鉢嚢を掛け、拄杖を拗折し、長夏の中、外に向つて（ヌ）之遶を打することを得ざれ。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「（ル）趙州東壁に胡盧を掛く。」

復た天平、（ヲ）西院に到るの公案を擧して、師拈じて云く、「天平、當時才かに西院が上座の錯か西院の錯かと道ふを聞いて、但だ錯と云つて、西院の口を開かんと擬するを待つて、拂袖して便ち行らば、惟に西院の口頭を塞斷するのみにあらず、亦乃ち諸方に檢責せらるゝことを免れん。」

結夏上堂、（ワ）雲門、衆に示して云く、「聞聲悟道、見色明心。」師云く、「（カ）築着磕着、回避するにところなし。觀音菩薩、胡餅を買ふ、手を放下すれば、元來是れ饅頭。」師云く、「只だ這の些子の説話、多少の人妄に卜度を

（ル）趙州錄に、問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意、」州曰く、「東壁上に胡盧を掛く、多少時ぞ。」胡盧は瓢簞。

（ヲ）天平西院に到る、平常に云ふ、「道ふことなかれ佛法を會すと、箇の話を擧するの人を覓むるも亦無し」と、一日西院遙かに見て、召して云く、「從漪、」平、頭を擧す、西院云く、「錯、」平行くこと兩三步、西院又曰く、「錯、」平近前す、西院云く、「適來の兩錯、是れ西院の錯か、是れ上座の錯か、」平云く、「從漪が錯、」西院云く、「錯、」平休し去る、西院云く、「且く這裡に在つて夏を過し、待て、上座と共に這の兩錯を商量せん、」平當時便ち去る。

（ワ）雲門示衆。雲門錄に曰く、「古に言ふ、聞聲悟道、見色明心と、作麼生か是れ聞聲悟道見

生ず。殊に知らず、㋵兎馬角あつて、牛羊に角なきことを。會得せば、眸を展じて一夏を終へん。然らずんば、更に九旬禁足のある在り。」

上堂、「古者の道ふ、『結夏已に十日なり、㋟水牯牛作麼生。』又云く、『結夏已に十日なり、㋹寒山子作麼生』と。人を㋞抑逼して作麼せん。興德は則ち然らず、結夏已に十日なり、但だ是れ㋡飢ゑては飯を喫し、熱しては涼に乘じ、且く恁麼に時を過す。何が故ぞ。智者は之を見て之を智と謂ひ、仁者は之を見て之を仁と謂ふ。」

端午上堂、「今朝五月端午、㋧桃符艾虎を用ひずして、兎角の拄杖、龜毛の拂子、覿面に全提して、佛病祖病倶に拈却し、魔孽妖怪都べて掃蕩す。正恁麼の時、畢竟如何。天外に出頭して看よ、誰か是れ我が般の人。」

上堂、擧す、僧、六祖に問ふ、「黃梅の意旨、什麼人か得る。」祖云く、「佛法を會する人得。」「和尙は

色明心」、乃ち云く、「觀音菩薩、錢を將ち來つて、餬餅を買ふ。」手を放下して云く、「元來是れ饅頭。」

㋕築着磕着。コツツリ、カッチリ。物と物と交つて發する聲。磕は石と石と相打つ聲なり。

㋵兎馬角あつて云々。つぼ皿の蓋をとつたれば、あしげの馬がれて居る。

㋟水牯牛作麼生。青か赤か、れたか起きたか。

㋹寒山子作麼生。いんだか、きたか。

㋞抑逼。いぢめぬくなり。水牯牛はどうした、寒山子はどうしたと、學者をせめさいなむ。

㋡有りがたくもない點心、樂でもない涼みなり。

㋧桃符艾虎。桃の木のふだ、艾で作つた虎、是れは端午の節に厄除けに用ふるもの。

㋤我れは佛法を會せず。言ふなかれ佛法を會すと、此の擧語の人を求むるも又得がたし。是れ天平和尙の語なり。

㋶此の地金二兩なし。或人二兩の金を盜み、之を土中に埋む、人の知るを恐れて、告げて曰く「此の地に金二兩なし」と。人此の語によつて所在を知る。

㋰俗人酒三升を沽ふ。俗酒を買ふて私かに藏す、人の知るを恐れて、人に示して曰く「此の三升の酒は俗人沽ひしなり」と、人此の語によつて俗の沽ひしを知る、此の二語は隱さんとして彌々露るを云ふ。

還つて得るや否や。」「得ず。」「甚によつてか得ざる。」「㊉我れは佛法を會せず」と。師拈じて云く、「既に是れ佛法を會せず、甚によつてか祖師と作る、會すや。㊀此の地に金二兩なし、㊁俗人酒三升を沽ふ。」

上堂、「今朝六月一、那の事本見成、水上靑々たる綠、元來是れ浮萍。」

興徳寺語録　終

太宰府萬年崇福禪寺語錄上

侍者慈禪等編

師、文永九年臘月二十五日に於て入院。

山門、「山は翠壁を横へ、水は高源より出づ。㋑解脱門開く、大衆、㋺歸去來、歸去來。」

佛殿、「㋩麻三斤、㋥殿裡底、㋭狹路に相逢ふて、卒に回避しがたし。」香を挿んで云く、「還つて見るや、若し也た遲疑せば、㋬古佛過ぎ去つて久し。」

方丈、「德山の棒、臨濟の喝、這裡一時に㋣倚閣す。」拄杖を靠けて云く、「㋠大坐當軒、壁立萬仞、儞等諸人、甚麼の處に向つてか相見せんと擬する。㋷吽々。且く門外に居く。」

法座、「㋦向上の一路滑かに、壁立萬仞嶮し。且く道へ、如何が歩を進めん。」脚を擧げて云く、「看よ看よ、㋸行によつて掉臂を妨げず。」

拈香に云く、「此の一瓣の香、根は盤して空劫以前にあり、葉の生ずるとは

㋑解脱門。空、無相、無作を表して、三解脱門と云ふ。

㋺歸去來。本分の田地に歸入するなり。

㋩麻三斤。會元十五に、僧、洞山に問ふ、「如何なるか是れ佛、」山云く、「麻三斤。」

㋥殿裡底。會元四に、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ佛、」州云く、「殿裡底。」

㋭狹路云々。鼻と鼻と突き合ふた。

㋬古佛過ぎ去つて久し。昨日の空の飛鳥の跡なり。

㋣倚閣。こゝでは、懷へねぢこんでおく。

威音那畔に於てす。曾て早良縣裡興德禪寺にあつて拈出すること一番、天を熏じ地を炙す、今日人天普く會す。未だ免れず重ねて新に拈出することを。前住大宋徑山虛堂和尙大禪師に供養して、用つて法乳の恩に酬ゆ。」

師、趺座して乃ち云く、「道遠からんや、嶺頭雲淡々たり、聖遠からんや、磵下水冷々たり。須らく知るべし、瞿曇日々に出現し、達磨時々に西來することを。靈山の一會、何ぞ今日に異ならん、少室の家風正に此の時にあり。便ち見る、佛日輝を增し、堯風永く扇ぐことを。世出世間の能事、云に畢んぬ。然も是の如くなりと雖も、輿座の告報、也た是れ箇の時機に應ず、若し是れ向上の全提ならば、遠うして遠し。何が故ぞ。㋾青山長飛の勢を鎖さず、滄海合に來處の高きを知るべし。」

復た擧す、㋻張無盡相公、㋕玉泉の皓老を請ず、開堂陞座して云く、「君見ずや、君見ずや。」無盡云く、「見る。」皓老便ち下座。師拈じて云く、「恁麼の事は恁麼の人に遇ふて拈出するが故に是なり。且く道へ、無盡相公見ると云ふ、㋵畢竟箇の甚麼をか見るや。若しまた會得せば、明上座、今日開堂、功浪に施さず。其れ如し未だ然らずんば、切に忌む、妄に㋟消息を通

㋠大坐當軒云々。天の天外、地の地外まで徹底一枚。

㋷吽々。牛の鳴き聲、且く門外に居くは、まあ門の外で鳴かせておかう。

㋦向上云々。須彌座の上は、つるつるにすべつてゐる、須彌座の階は、中々危いぞ。

㋸行によつて掉臂を妨げず。學生が兵式體操の時、歩きだすと、一二と手をふる。

㋾青山云々。雲を帶ぶるの山は、勢飛ばんとす、磵下淸冷の水は、高く曹源より來る。此の二句は起句を受けて云ふ、古句に「白雲盡くる處是れ青山、行人は更に青山の外にあり」と。

㋻張無盡。名は商英、初め佛法を信ぜず、其の妻俊邁、深く禪奧に達す、無盡其の化を受けて初めて此の事あることを知る。

ずることを。」

・當晩小參、「㋹法に定相なし、縁に遇はゞ卽ち宗なり。立處皆眞なれば、㋞方に隨つて主となる。興德を離れて崇福に到る、其の縁に非ざるなし。法幢を建て宗旨を立するは、其の處を擇ばず。直に得たり、風六合に淸く、月四海に明かに、頭々轍に合し、應用虧くるなきことを。所以に道ふ、佛性の義を知らんと欲せば、㋡當に時節因縁を觀ずべしと、時節既に至らば、其の理自ら彰る。時節は則ち諸人共に知る。且く道へ、㋧彰るゝ底の理、又作麼生。」良久して云く、「吾れ爾に隱すことなし。」

復た擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ㋤雲門の一曲。」門云く、「㋶臘月二十五。」師拈じて云く、「㋰黃鐘大呂、陽春白雪は、固に是れ古今の絕唱なり、明上座、今夜一曲を唱へん、看よ。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「㋒意は流水に隨つて遠く、聲は暮雲を遏めて寒じ。且く道へ、故人と相去ること多少ぞ。」

上堂、崇山が家風別に奇特なし、黃葉庭際に滿ち、野鹿林坳に叫ぶ。然も是の如くなりと雖も、祖意敎意、㋭闘湊し得て恰好。且く道へ、何を以

㋕玉泉の皓。皓初め叢林に沈滯す、無盡惜んで、鄂州の大陽に出世せしむ。

㋵畢竟箇の甚麼をか見る。浮つかり大應の口車に乘るなよ。

㋟消息云々。電信電話も、屆かぬ屆かぬ。

㋹法に定相なし云々。此の語通俗にも味あり、世の中の者が、仁義禮智よ忠臣孝悌よと、定相をこさへるから、泥田の中に足を踏みこむなり、ほんたうの處は、石と金と打ち合せて、火の出る樣なものなり、活潑々地でなくてはならぬ。

㋞方。方所、どこでも彼こでも。

㋡當に時節因縁を觀ずべし。大抵の人は枯骨をしぼつて汁を出さうとする。

㋧彰るゝ底の理作麼生。青か赤か、いたちのくつしやみ、猫のふん。

㋤雲門の一曲。昔し黃帝、雲門

てか見得せん、具眼の者は辨取せよ。」

上堂、「㋨三九二十七、籬頭篳篥を吹く。㋔三世の諸佛有ることを知らず、狸奴白牯却つて有ることを知る。阿呵呵、會すや。這裡風頭稍㋗硬し、且く暖處に歸せん。」

除夜小參、「年窮まり歳盡き、瞿曇の眼睛突出す。臘盡き春回つて、達磨の鼻孔㋳崢嶸たり。開眼も也た着、合眼も也た着、歩を擧すれば踏着し、手を伸ぶれば觸着す。築着磕着、溝を塡め壑を塞ぐ。頭々顯露、處々渠に逢ふ。恁麼も也た得、不恁麼も也た得、恁麼不恁麼總に得たり。山僧が與麽の告報、忽ち人あり、聽き得て出で來つて道はん、我れ會せり、我れ會せりと。崇福㋮低々地、他に向つて道はん、㋘謝三娘秤金と。」

復た擧す、僧、古德に問ふ、「如何なるか是れ㋫不遷の義。」德云く、「㋙城上已に吹く新歲の角、窓前猶ほ點ず舊年の燈。」師拈じて云く、「古德恁麼に道ふ、放行の處に把定し、把定の處に放行す、猶ほ未だ㋓勦絕を得ざることあり。崇福は卽ち然らず、如何なるか是れ不遷の義、只だ他に向つて道はん、㋢舊歲今宵盡き、新年明日來ると。」

の曲を製す、前に出づ。

㋶臘月二十五。臘月は年の暮れ、二十五は月の終り、此の一曲は猿笛の様な響あり。

㋰黃鐘大呂は律呂の調、陽春白雪は歌曲の譜なり。

㋒意は流水に隨つて遠く云々。山姥の謠をうたふには、山姥の心持を吟味すべし、且く道へ、此の二句の意作麽生。

㋼鬪揍。揍は揷なり、左官が土とすさとをきりかへし、これまぜる如きを云ふ。

㋨三九二十七云々。五雜爼に「一九と二九と、相逢ふて手を出さず、三九二十七、籬頭に篳篥を吹く」とあり、時候寒き故相逢ふても、ふところ手也、陽氣回り來れば、籬頭にひちりきの曲聲を聞く。

㋔三世の諸佛云々。南泉示衆の語なり。

㋗硬。顏がこはい硬まること。

歳旦上堂、僧問ふ、「五葉花開いて瑞色新に、千古少林の春を挽回す。正與麽の時、願はくは提唱を聽かん。」師云く、「雲淨うして日月正しく、雪消して天地春なり。」進んで云く、「恁麽なるときは、則ち一氣言はず、有象を含む、萬靈何れの處にか㋐無私を謝せん。」師云く、「好箇の消息。」進んで云く、「記得す、僧、鏡清に問ふ、『新年頭還つて佛法ありや也た無や。』清云く、『有り』と、意旨如何。」師云く、「山青く水綠なり。」進んで云く、「如何なるか是れ新年頭の佛法。清云く、『元正啓祚、萬物咸く新なり』と、如何が委悉せん。」師云く、「現成の公案。」進んで云く、「僧又明敎に問ふ、『新年頭還つて佛法ありや也た無や。』敎云く、『無し』と、何の道理かある。」師云く、「㋚天高うして萬象正し。」進んで云く、「僧云く、『年々是れ好年、日々是れ好日、甚麽としてか無きや。』敎云く、『㋖張公酒を喫すれば李公醉ふ』と、又作麽生。」師云く、「㋓東山手を拍てば西山舞ふ。」進んで云く、「鏡清は有りと道ひ、明敎は無しと道ふ、優劣あることなきや。」師云く、「㋱一に多種あり、二に兩般なし。」進んで云く、「若し人あり、和尚に新年頭に佛法ありや也た無やと問はゞ、未審し和尚如何が祇對せん。」師云く、「㋯婆子の裙子を借つ

㋳崢嶸は山の嶮峻なり。

㋮低々地。小聲にさゝやくこと。

㋘謝三娘秤金。謝家の三番娘の、はかりのめもりと云ふこと、お玉さんの秤の目もりは、かけちがひが出來はせぬか、覺束ないぞ。

㋫不遷。生死去來、是非善惡を跳出せる處。

㋙城上已に吹く新歲の角、窓前猶ほ點す舊年の燈。あちらでは雜煮を食ふてゐる、こちらではまだ算用のまつさいちゆうである。

㋓勦絕。書經の甘誓に出づ、勦は截斷なり、はさみきりが、きつぱりせぬこと。

㋢舊歲今宵盡云々。是れは遷流ではないか、不遷はどこに隱れて居るか。

㋐無私。日月に私照なし。

㋚天高うして萬象正し。天が晴れると日月星辰、威儀森然た

て婆年を拜す。」進んで云く、「上來已に師の指示を蒙る、向上の宗乘、又若何。」師云く、「㋛須彌頂上に金鐘を擊つ。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「㋓斬新の日月、特地の乾坤、佛祖の大機、衲僧の㋪巴鼻、恒沙の福智、無量の妙用、者裡より頓に發す。何が故ぞ。」拄杖を卓すること一下して云く、「元正啓祚、萬物咸く新なり。」

元宵、因に經を講ずる上堂、僧問ふ、「心徑若生ずれば、㋲迷魂の地に坐在し、燈影裡に行らば、㋝朝打暮打、一途を離却して、請ふ師と相見せん。」師云く、「天外に出頭して看よ。」僧云く、「只だ終日火を道つて口を燒かざるが如きんば、是れ名實相當らざることなきや。」師云く、「㋜桑を指して柳を罵る。」僧云く、「恁麼なれば則ち樓臺上下、㋑火、火を照し、車馬往來、人、人を看る。」師云く、「只だ㋺一橛を道ひ得たり。」僧云く、「記得す、㋩古德云く、『火焔、三世の諸佛の爲に說法す、三世の諸佛㋥立地に聽く』と、未審し、火焔甚麼の法をか說く。」師云く、「㋭明皎々暗昏々。」僧云く、「三世の諸佛如何が聽くや。」師云く、「聽くものは方に知る。」僧云く、「學人還つて聽くことを得んや。」師云く、「儞に分なし。」僧云く、「誰か聽くことを得ん。」

り、何のあるないの沙汰があらうぞ。

㋖張公云々。法身邊の境界。

㋴東山手を拍つ云々。川向の喧嘩を止めて見よ。

㋱一は一助、二は二助なり。

㋯婆子の裙子を借つて婆年を拜す。お婆さんの上着をかりて、お婆さんおめでたうと、語言三昧。

㋛須彌云々。あゝ向上の宗乘か、須彌山の絶巓に鐘かごんとなると。

㋓斬新。禪語、新鮮の極を云ふ。

㋪巴鼻。巴は尾なり、巴鼻はとらまへどころと譯す。

㋲迷魂の地に坐在す。迷惑の衆生なり。

㋝朝打暮打。見地あつて未だ桶底を脫せざるなり、朝から晩迄、死水裡に坐在するなり、打の字打擊とも見、又打坐とも見る。

師云く、「露柱燈籠。」僧禮拜す。又僧問ふ、「梅花、雪を銜いて發き、黃鶯、柳梢に囀ず。箇は是れ現前の三昧なり、請ふ師別に擧揚せよ。」師云く、「向上に會取せよ。」進んで云く、「記得す、僧、趙州に問ふ、『如何なるか是れ祖師西來意。』州云く、『庭前の柏樹子』と、此の意如何。」師云く、「松は直く棘は曲れり。」進んで云く、「僧云く、『和尚、境を將つて人に示すことなかれ。』州云く、『老僧、境をもつて人に示さず。』僧云く、『如何なるか是れ祖師西來意。』州云く、『庭前の柏樹子』と、又如何。」師云く、「是れ苦心の人にあらずんば知らず。」進んで云く、「西來意は且く置く、如何なるか是れ柏樹子。」師云く、「㋬青々は時の人の意に入らず。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「燈を以て燈を傳へ、燈々相續して放光動地、動地放光。所以に道ふ、『㋣今佛放光明助發實相義』と、放光明は則ち且く置く、如何なるか是れ實相義。」拄杖を卓すること一下、「花の開くことは㋠栽培の力を假らず、自ら春風の㋷伊を管待するあり。」

上堂、「佛祖の大機全く掌握に歸し、人天の性命總に這裡にあり。把定すれば則ち乾坤光を失し、放行すれば則ち瓦礫光を生ず。把定と放行は則

㋦桑を指し云々。お三を八助と呼ぶことなり。

㋑火は火を照し人は人を見る。一體を拈じて答話を賛揚せしなり。

㋺一橛。半分なり。

㋩古德。雲門大師のこと。

㋥立地。卽坐と云ふがごとし。

㋭明皎々。油を掛けたら明皎々、水を洒げば暗昏々なり。

㋬青々は時の人の意に入らず。柏樹子は世界一ぱいに滿ちて居れども、えい合點せぬ。

㋣今佛放光明。法華經序品の文なり。

㋠栽培の力を假らず。餘人の手は無用なりと。

㋷伊を管待するあり。自然にあれをせわするよ。

㋦認着。あれは拂子なりと認むるなり。

㋸參。手前と手前に實參實悟せよとの意。

ち且く置く、如何なるか是れ佛祖の大機、人天の命脈。」拂子を竪起して云く、「看るや看るや、(ヌ)認着せば依然として還つて不是。(ル)參。」

佛涅槃上堂、「(ヲ)手を以て胸を摩して精魂を弄し、雙趺示し出して兒孫を累はす。西天此土二千載、(ワ)毘盧を撼かし得て海岳昏し。」

三月半上堂、「春山青く、春光美はし、春鳥は春風に啼き、春魚は春水を弄す。左顧右眄、可も不可も無く、東行西行、是も不是もなし。然も是の如くなりと雖も、」拄杖を卓すること一下して云く、「此に過ぎたるはなし。」

浴佛上堂、僧問ふ、「(カ)鐵壁鐵壁、之を號して佛と曰ふ、常に苦海の中にあつて立つ、只だ今日の如きんば、降生する底是か苦海の中に立つ底是か。」師云く、「二倶に不是。」僧云く、「天上天下唯我獨尊。聻。」師云く、「(ヨ)也た是れ草裡の漢。」僧云く、「雲門の棒頭短く、藥山の杓柄長し。還つて報恩の分ありや。」師云く、「恩を知つて方に恩を報ずることを解す。」僧云く、「(タ)遵布衲の浴佛、水江石卵を浸す。此の意如何。」師云く、「未だ曾て他を浴し得ず。」僧云く、「佛未だ出世せざる時如何。」師云く、「天高うして日月正し。」僧云く、「出世して後如何。」師云く、「清風匝地。」僧云く、「出世と不出世とは則ち且く置く、即今佛什麽の處にかある。」師云く、「脚下を看よ。」僧禮拜す。又僧問ふ、「世尊初生下、天を指し地

(ヲ)偈なり、精魂を弄すは、死にぎはに、のたうちまはること。

(ワ)毘盧を撼得。毘盧遮那佛を引くりかへして、天地まつくらなりと。

(カ)鐵壁々々。百千の諸佛も、穴のぞきならぬ、分寸のすきまもない。（虚堂錄）

(ヨ)也た是草裡の漢。矢張りぢゝむさき處にしやがんで居ろ。

(タ)遵布衲云々。會元に藥山儼禪師の章に、遵布衲佛に浴す、藥山云く、「這箇は汝の浴するに任す、還つて那箇を浴し得んや、」遵云く、「那箇を把り將ち來れ、」藥山乃ち休す。

を指し、周行七歩じて云く、『天上天下唯我獨尊』と、此の意如何。」師云く、「衆の爲に力を竭す。」僧云く、「雲門云ふ、『我れ當初若し見ば、一棒に打殺して、狗子に與へて喫せしめて、貴ぶらくは天下太平を圖らん』と、意什麽の處にかある。」師云く、「未だ曾て他の影子を打着せず。」僧云く、「雪竇云ふ、『我れ當初若し見ば、便ち與に禪床を掀倒せん』と、又如何。」師云く、「劒去つて久し。」僧云く、「二大老の用處、是れ同か是れ別か。」師云く、「倶に隻手を出して門戸を扶竪す。」僧云く、「上來一々指示を蒙る、向上の宗乘又如何。」師云く、「金烏は急に、玉兎は速かなり。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「佛身法界に充滿し、普く一切群生の前に現ず、諸人釋迦老子を見んと要すや。開眼か也た着、合眼も也た着、尙ほ自ら遲疑少間せば、大佛殿に詣つて、(レ)一杓の惡水什麽の處に向つても着けん。」

結夏小參、「崇福山高く、頂顙に到得するも、猶ほ(ツ)途に涉ることあり。磵泉水急なり、淵源を探得するも、猶ほ(ノ)脈を隔つることあり。若し是れ眼乾坤を蓋ひ、皮下に血あらば、山を見ても是れ山ならず、水を見ても是れ水ならず。圓覺伽藍を掀飜し、平等性智に住せず、千聖と途を同じうせす。自ら一條の活路子を行じ、方に乃ち山を見ては是れ山、水を見ては是れ水、頭々是れ圓覺伽藍、物々卽ち平等性智、狸奴白牯、露柱燈籠、若しくは聖、若しくは凡、情と無情と、同じく此に結制安

(レ)一杓惡水云々。ひしやくの頭に眼をむきだせ。
(ツ)途に涉る。途中造作を免れず。
(ノ)脈を隔つ。肝心の水脈と隔絕す。

居するも分外とせず。其れ或は未だ然らずんば、㋧雲は嶺頭にあつて閑不徹、水は澗下に流れて太忙生。」

復た梁山和尚、衆に示して云く、「南來のものも三十棒、北來のものも三十棒」の公案を擧し、師拈じて云く、「梁山老漢、恁麽の垂示、也た是れ力を費すこと少からず。崇福は卽ち然らず、南來のものも北來のものも、一等に他をして㋤明窓下に按排せしむ。何が故ぞ。彼此出家兒。」

五月旦上堂、一を擧して二を擧するを得ず、一着を放過すれば第二に落在すの公案、師拈じて云く、「㋶氈拍板、無孔笛、㋰狹路に相逢ふ。而今諸方の語に隨つて解をなすもの、只管一二を論ず、豈に曾て夢にだも二大老の落處を見んや。今㋒五月初一、妨げず、山前山後、三三兩々、山を看水を翫ぶことを。且く道へ、放過すや放過せずや。」

端午上堂、「今朝五月五、用ひず㋼土を咒し壁に書することを。崇福に一道の眞言あり、纔かに擧すること一返せば、㋨吉にして利ならざることなし。」驀に拄杖を拈じて卓すること一下して云く、「且く道へ、華言か梵語か、㋔劈箭機前急に薦取せよ。」

㋧雲は嶺頭云々。ぢいさんは山へ柴刈りに、婆さんは川へ洗濯に。

㋤明窓下に按排。雲水を優遇するを云ふ。

㋶氈拍板。毛氈張つたひやうしぎ、音のせぬものなり。

㋰狹路に相逢。關取りと男だてが、せまき露地で出逢ふと、よけようがない。

㋒五月初一云々。一は一助、二は二助、三三が九助の、ちり毛が五本。

㋼土を呪し壁に書す。唐土の風俗、陰陽師のまじなひなり。

㋨吉にして利。周易の語、回向の文に諸緣吉利を慣用す、うんざりする程、福德が舞ひ込むこと。

㋔劈箭機前。劈箭はきりきりし

擧す、慧山の智炬和尚看經の次、僧問ふ、「㋗元字脚を掛けず、何ぞ多學するを得ん。」炬云く、「文字性異に、法性體空なり。迷ふときんば則ち句々瘡疣、悟るときんば則ち文々般若、若し取捨なくんば、何ぞ㋳圓伊を害せん。」師拈じて云く、「慧山和尚也た是れ取捨の心未だ忘ぜず、崇福は則ち然らず。或は人あり、元字脚を掛けず、何ぞ多學を得ると問はゞ、只だ他に向つて道はん、句々眞如、文々般若と。敎他あれ別に生涯あることを。」

半夏上堂、九夏半を過ぎ、事として辨ぜざることなし。開單展鉢、喫粥喫飯、㋮北番を收得して東西自ら安し。且く道へ、何を以てか驗とせん。」良久して云く、「後五日に看よ。」

六月十五日、㋘兵火の後上堂、「馬祖喝下に百丈を聾せしめ、黃蘗の棒頭臨濟を活す。㋫德を以て人を服するものは王たり、力を以て人に假すものは霸たり。崇福が者裡は、這の兩邊に屬せず。何が故ぞ。」良久して云く、「㋙鵰弓已に掛けて狼煙息み、萬里歌謠太平を賀す。」

七月旦上堂、「涼飈乍ち起つて葉初めて墮つ、時節因緣㋓相饒さず。若し是れ當陽に薦得し去らば、何ぞ妨げん分外逍遙に任すことを。或は人あ

ぼつて、きつて放せし、箭の出掛けを云ふ。

㋗元字脚。元の字の脚は、乙の字、乙は一なり、一は文字の初なり、故に文字を摠じて元字脚と云ふ。（俗語解）

㋳圓伊。圓は丸なり、伊は三角なり、丸でも三角でも、點でも、害にならぬ、伊は梵に∴に作る、古人に圓伊を名とせる人あり。

㋮北番云々。是れは文永九年、國師三十八歲、史を按ずるに、前年に元より趙良弼を使して和親を求めしも、吾れ應ぜずして元使空しく歸れり、蓋し此の時分一時小康を得て、太平を謳歌せしものか、次の六月十五日の上堂にも又此の意あり。

㋘兵火の後。兵塵消して太平來る、故に馬祖黃蘗の因緣を用ふ。

り、出で來つて道はん、時節因緣は卽ち且く置く、如何なるか是れ佛法の大意と。只だ他に向つて道はん、火を覓めて煙に和して得、泉を擔つて月を帶びて歸る。」

解夏小參、「二千年前風淸く月白し、二千年後月白く風淸し。幸に自ら瘡なし、之を傷ることなかれ。若し結制解制を論ぜば、邪に隨ひ惡を逐ふ、禁足護生は無繩自縛。所以に崇福が這裡は、四月十五も也た與麼、敢て諸人の一絲毫許りをも錯誤せず、七月十五も也た與麼、亦諸人の一絲毫許りをも動ぜず。諸人若し佛祖未生以前に向つて會得せば、又何ぞ妨げん、㋢晝は兜率、夜は閻浮、脚頭到るところ是れ生涯なることを。其れ如し未だ然らずんば、迦葉門前に㋐刹竿あり。」

復た擧す、僧、雲門に問ふ、「樹凋み葉落つる時如何。」門云く、「體露金風。」師頌して云く、「體露金風㋚處々同じ、時人空しく自ら西東に走る。㋖憐むべし只だ蘆花の色を見て、白蘋の蓼紅に對することを見ず。」

八月旦上堂、僧問ふ、「參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべしと、如何なるが是れ實參。」師云く、「參じて始めて得べし。」僧云く、「如何

㋻王者は德により、霸者は力を恃む、孟子に出づ、此の前語は馬祖黃檗の句に襯す。
㋙鵰弓は射鵰の强弓、狼烟は烽火なり。
㋓相饒さず。世間に公道なるは唯だ白髮、貴人頭上にも曾て饒さずと。
㋢晝は兜率夜は閻浮。彌勒無着の因緣、箱根へ往うと、別府へ往うと、まゝよ。
㋐刹竿あり。酒旗なり、高きこと三萬三千尺、浮つかり目をつくな、あぶないぞ。
㋚處々同じ。何くに往くも秋の夕暮れ、袈裟文庫掛けて、西へ東と、うろ／＼うろつく。
㋖憐むべし只だ花の色を見て云々。古人も牛窓櫨や、疎山壽塔を透過すると、こゝどころがほんのりすると云ふてある。
㋴如來禪云々。是れは香嚴擊竹

なるか是れ實悟。」師云く、「悟つて始めて得べし。」僧云く、「凡夫を轉じて賢聖となし、賢聖を抑へて凡夫となすことは、則ち和尙無きにはあらず。」師云く、「更に一着のある在り。」僧云く、「記得す、仰山、香嚴に謂つて云く、『㋷如來禪は師兄の會することを許す、祖師禪は未だ夢にだも見ざることあり』と、此の意如何。」師云く、「言中に響あり。」僧云く、「如何なるか是れ如來禪。」師云く、「㋦鷄足山前風悄然。」僧云く、「如何なるか是れ祖師禪。」師云く、「少室峰下雪猶ほ寒し。」僧云く、「如何なるか是れ和尙の禪。」師云く、「還つて㋸腦門の重きを覺ゆるや。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「蟬は高樹に鳴き、蛩は草底に吟ず、槿花煙を凝らし、白露珠を垂る。從來法の商量するなし、只だ現成の受用を要す。大衆、還つて委悉すや。」良久して云く、「田を種ゑて㋾摶飯を喫し、脚を伸べて牀上に睡る。」

浴佛上堂、僧問ふ、「佛未だ出世せざる時、甚としてか靈山に密旨ある。」師云く、「天は是れ天、地は是れ地。」僧云く、「佛已に出世して後、甚としてか杳として消息なき。」師云く、「㋻天を指し地を指し、狼藉少からず。」僧云く、「出世不出世は則ち且く置く、卽今佛甚の處にかある。」師云く、「高く眼を着け

悟道後の事なり、此の語賊機あり。

㋦鷄足山。又狼足山とも云ふ、迦葉入定の處、迦葉は一大藏經を結集す。

㋸腦門の重き云々。自分の頭の重さを知つたか。

㋾摶飯。にぎりめしの如し、摶は丸めるなり、飯を丸めて、口へ放り込むことを摶飯喫と云ふ。

㋻天を指し云々。一手は天を指し、一手は地を指し、唯我獨尊などとぢやむさきものを撒きちらす。

て看よ。」僧云く、「爭奈せん金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳となることを。」師云く、「眼を將つて看ること莫れ。」僧云く、「只だ雲門の一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめんと道ふが如きんば、是れ何の心行ぞ。」師云く、「家富んで小兒嬌る。」僧云く、「今朝大家、手を出して金軀を灌沐す。復た是れ報恩とせんか、復た是れ酬怨とせんか。」師云く、「是れ怨家にあらざれば頭を聚めず。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「閻浮に降下して、王宮に誕生し、㋪九龍水を吐いて金軀を灌沐す。今に到るまで千古㋲雨洗ひ風磨す。金容の妙相光輝を増し、天を照し地を鑑み、何の極りかあらん。命根落在す祟禍が手、一杓の惡水驀頭に澆ぐ。何が故ぞ。㋝之を齊しうするに禮を以てす。」

結夏小參、「南贍部洲、大日本國、筑州太宰府裡、橫岳山中に、一座の清淨伽藍あり、大にしては刹海を包み、細にしては隣虚に入る。若しくは聖、若しくは凡、有情無情、盡く裡許にあつて結制安居す。九十日の內、行かんと要すれば便ち行き、須彌那畔、大洋海底も、一時に走徧す。二六時中、坐せんと要すれば即ち坐し、東弗于提、西瞿耶尼、盡十方世界も、直下に坐斷す。正恁麼の時、汝等諸人、甚麼の處に向つてか氣を出さん。然も是の如くなりと雖も、有る時は把定し、有る時は放行し、卷舒我れにあり、殺活時に臨む。今夜儞をして一々氣を出し去らしめん。」拄杖を拈じて卓すること兩下して云く、「會

㋪九龍水を吐く。善曜經に出づ。
㋲雨洗風磨。雨の灌頂、風の洗禮。
㋝之を齊しくする。禮義でなければ家が治まらぬ。
㋜頂門眼通天竅。ひたひの眞中に立つまなこ、あたまのてつぺんの耳の穴、美事氣燄を吐くか、吐かぬか。

すや、㋦頂門の眼、通天の竅。」

復た擧す、東京法雲の杲和尚、衆に示して云く、「老僧、熙寧三年の㋑文帳、鳳翔府に在つて供申、當年華山の四十里を崩り了り、八十村の人家を壓倒す。汝が輩、後生の㋺茄子瓠子、幾時か知り得ん。」師拈じて云く、「㋩高山流水只だ知音を貴ぶ、惜むべし當時一衆、人の賞音するなし。若し是れ明上座ならば、才かに恁麼に道を聞いて、手を拍つて㋥呵々大笑せん。何が故ぞ。詩は會人に向つて吟ず。」

次の日上堂、「十五日以前は㋭天は東南に高く、十五日以後は地は西北に傾く。正當十五日、天は是れ天、地は是れ地、僧は是れ僧、俗は是れ俗、甚の三月安居、九旬禁足とか説かん。這裡に向つて畢竟如何が箇の消息を通せん。」拂子を擊つて云く、「薫風自南來、微涼生殿閣。」

上堂、擧す、僧、智門に問ふ、「蓮華未だ水を出でざる時如何。」門云く、「蓮華。」僧云く、「水を出でゝ後如何。」門云く、「荷葉。」師拈じて云く、「崇福は卽ち然らず、蓮花未だ水を出でざる時如何、水は是れ水。水を出でゝ後如何、蓮華は是れ蓮華。崇福恁麼に道ふ、還つて落處を知るや。風無きに荷葉動く、決定魚の行くことあらん。」

㋑文帳。出家得度の屆出を鳳翔府に差出す、是れを虚空消殞鐵山摧くる端的などゝ、いやどうして夢にだも會せずとなり。

㋺茄子瓠子。成程なすや青瓢簞の知つたことでない。

㋩高山流水。呂氏春秋の伯牙子期の故事なり。

㋥呵々大笑。すてきな聲を出しなさる、びつくりするは。

㋭天は東南に高く、地は西北に傾く。往古共工と祝融と戰ひし時、共工怒つて頭を不周山に觸る、天柱地維崩裂して、天は西北に高く、地は東南に傾く。

七月旦上堂、僧問ふ、「擧一明三は尋常の茶飯、只だ聲前の一句の如きんば、如何が緇素を分たん。」師云く、「一葉落ちて天下秋なり。」僧云く、「恁麽なる則は㋬石鏡を懸くるを勞せず、天曉自ら分明。」師云く、「只だ一半を道ひ得たり。」僧云く、「記得す、㋣長生、靈雲に問ふ、『混沌未分の時如何。』雲云く、『露柱懷胎。』意旨如何。」師云く、「無孔の鐵鎚、當面に擲つ。」僧云く、「生云く、『分れて後如何。』雲云く、『片雲の太清に點ずるが如し、』『又如何。』」師云く、「一賽兩彩。」僧云く、「生云く、『太清還つて點を受くるや也た無や。』雲答へず、何の道理かある。」師云く、「毒龍行く處草生せず。」僧云く、「生云く、『與麽なれば含生不來ならん。』雲又答へず、如何が委悉せん。」師云く、「要津を坐斷す。」僧云く、「生云く、『直に純清絶點を得る時如何。』雲云く、『尙ほ是れ㋠眞常流注す』と、意何の處にかある。」師云く、「痛處に針錐を下す。」僧云く、「生云く、『如何なるか是れ眞常の流注。』雲云く、『鏡の長に明かなるに似たり』と、如何が理會せん。」師云く、「㋷山河は鏡中にあつて觀えず。」僧云く、「生云く、『向上還つて事ありや也た無や。』雲云く、『有り。』生云く、『如何なるか是れ向上の事。』雲云く、『鏡を打破し來れ、儞と相見せん』と、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「破鏡重ねて照さず。」僧云く、「古人誵訛の處、和尙已に㋦許露す。和尙誵訛の處、未審し何

㋬石鏡。山の名、潯陽記に、「石鏡山の東に一圓石あり、崖に掛る、明淨人を照し、形を見る。」

㋣長生。雪峯義存の法嗣。靈雲は志勤禪師、桃花を見て悟道せし人、長慶安の法嗣。

㋠眞常流注。悟の穴にしやがみ込むは、この處の吟味が足らぬから。

㋷山河は鏡中にあつて觀えず。山河で鏡を照すことなり。

㋦許露。許は告許と熟して、あばき出すなり、露は顯露の露

人か點檢せん。」師云く、「衆眼も瞞じ難し。」僧云く、「恁麼なるときは則ち此の話大いに天下に行はれ去らん。」師云く、「諸方に擧似するに一任す。」僧云く、「作家の宗師、㋸天然あるあり」と。便ち禮拜す。

師乃ち云く、「葉落ちて秋を知り、絃を動かして㋾曲を別つも、未だ衲僧本分の事に當らず。且く道へ、如何なるか是れ衲僧本分の事。崇福直に得たり口を開くに處なきことを。然も是の如くなりと雖も、㋻雲中の鴈を見ずんば、爭か沙塞の寒きを知らん。」

解夏小參、「暑退き涼生じ、樹凋み葉落つ。古佛の家風を全彰し、衲僧の巴鼻を成現す。蹉過するもの、千々萬々、錯つて會するもの、萬々千々。若し是れ未だ言はざるに先づ領じ、未だ擧せざるに先づ知らば、方に始めて少分の相應あらん。猶ほ未だ是れ全機の作略にあらず、有般の漢は十二時を以て一日となし、九十日を以て一期となし、坐して安居を守る。大いに木に緣つて魚を求め、舟を刻んで劍を尋ぬるに似たり。崇福今夜、㋕忍俊不禁、別に一條の活路子を通せん。」良久して云く、「㋵住みね住みね、若し頻に淚を下さしめば、滄海も也た須らく乾くべし。」

なり。

㋸天然あるあり。自然天然に備つて居る。

㋾曲を別つ。吳の周瑜は、音律に精し、大醉の後と雖も、誤りあれば必ず之を知る。

㋻雲中の鴈云々。空飛ぶ鴈を見て、朔北の沍寒を知る。

㋕忍俊不禁。こらへかぬること。

㋵住みれ住みれ云云。やつぱり、やめよと、已れに存分泣せたら、東の海も盡きるなり。

㋟雲門示衆。會元十五、上堂、「乾坤の內、宇宙の間、中に一寶あり、形山に秘在す、燈籠を指じて佛殿裡に向ひ、三門を將つて燈籠上に來す、作麼生。」自ら代つて云く、「物を逐はゞ意移る。」

㋹大家平分。大家は皆さんと云ふが如し、過不及なき樣に分けて取れと。

㋷君に勸む云々。王維の詩に「渭

復た擧す、㋟雲門、衆に示して云く、「乾坤の內、宇宙の間、一寶あり、形山に秘在す。」師拈じて云く、「此の寶は但に形山にあるのみにあらず、崇福今夜、情を盡して拈出し、普く大衆に施し、九夏の賞勞とせん。」驀に拄杖を拈じて擲下して云く、「㋹大家平分。」

次の日上堂、「烏兎停まらず、時自然に臨む。九十日の內、曾て說着せざる底の一句子、分明に諸人の與に說破し去らん。」拄杖を卓して云く、「㋞君に勸む此の一盃の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人なからん。」

中秋上堂、僧問ふ、「㋡天上月圓に、人間月半なり。是れ人あることを知る、未審し中間の㋧樹子は何人にか屬する。」師云く、「從來主人のあるあり。」僧云く、「恁麼なれば則ち天香の桂子落ちて紛々たり。」師云く、「見る者還た稀なり。」僧云く、「馬祖月を翫ぶ次、西堂に問うて云く、『正與麼の時如何。』堂云く、『㋤正に好供養』と、意旨如何。」師云く、「早く光影に隨ふ。」僧云く、「祖、百丈に問ふ、丈曰く、『㋶正に好修行』と、又如何。」師云く、「簷前に月を捧ぐ。」僧云く、「祖、又南泉に問ふ、泉、拂袖して便ち行る、意、那裡にかある。」師云く、「㋰行に因つて臂を掉ふ。」僧云く、「祖曰く、『經

城の朝雨輕塵をひたす、客舍青々として柳色新たなり、君に勸む此の一杯の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人なからん」と。他國へ出ると、茶を飲めと云ふものも無いとの意なり。

㋡天上云々。仰いで見れば、天月圓滿、人間世界は十五日で、一月の半分處なりと。

㋧樹子。天香を發する桂子なり、箇々具足底のあみださん。

㋤正好供養。さて〳〵結構な御供養なり。

㋶正好修行。純清絕點の修行の端的。

㋰行に因つて臂を掉ふ。歩むと手が動きだす。

㋒年老心孤。年よつて淋みしくなつた、丁度婆が孫をかはゆがる樣なり。

㋼鼓山拂袖。玄沙衆に示して曰く、「世尊靈山會上にあつて道

は藏に歸し、禪は海に歸す。只だ普願のみあつて獨り物外に超ゆ』と、畢竟如何。」師云く、「ワ年老いて心孤なり。」僧云く、「當時若し馬祖、正與麽の時如何と云ふを見ば、和尚如何が祇對せん。」師云く、「便ち一掌を與へん。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「南泉は驟歩して便ち行る、ヰ鼓山は拂袖して衆に歸す。ノ寒山子馬駒兒、總に未だ光影裡を出でず。且く道へ、畢竟月。聻、オ噁。洎んど錯つて名言を下す。」

上堂、「崇福門下百事宜しきに隨ふ、飯に遇ふては飯を喫し、茶に遇ふては茶を喫し、寒には卽ち火に向ひ、困じては卽ち打眠す。左之右之、可も不可も無し。德山臨濟、常流を出でず、却つて憶ふ寒山子、言無くして笑つて點頭することを。」

達磨忌上堂、「ク少室山下、雪寒く冰苦し、熊耳峯前、月冷に風高し。因つて憶ふ、ヤ普通年遠の事、鐵作の心肝も也た斷腸。」

虛堂の忌日拈香、「世界未だ分れず、生佛未だ具はらざるに、早く這箇あり、天を熏じ地を炙す。從上の佛祖、這の些子を得て頭を競ふて出で來り、

ふ、吾に正法眼藏あ、摩訶大迦葉に附囑すと、猶ほ月を畫くが如く、曹源の拂を竪つるは猶ほ月を指すが如し、」時に鼓山衆を出でて曰く、「月、聻、」沙云く、「這箇の阿師、我に就いて月を覓む、」山肯はず、却つて衆に歸して云ふ、「我れ他に就いて月を覓む」と道へり。（類聚十四）

ノ寒山、馬祖皆月を翫びし人。

オ噁。發聲、「エイ」とか「ヤイ」とか云ふが如し、名言は繪とき講釋なり。

ク少室山は達磨の居處、熊耳峯は達磨の墓所。

ヤ普通。梁武帝の年號、普通七年九月廿一日達磨初めて漢土に入る。

マ鈍置。人を馬鹿にするなり。

ケ拳を行ず云々。人の頭をはれば、人からはりかへされる。

フ萬象の中云々。福州長慶稜禪

貴買賤賣す。大驚小怪、崇福一年一度、諱日に臨む毎に、特地に拈出し、這の老和尚の鼻孔を熏じ、㋮鈍置一上す。何が故ぞ。㋘拳を行せば須らく拳を喫する時あるべし。」

冬至小參、「崇福山前、戒岸寺後、一物あり、杲々として明かなること日の如く、漫々として黑きこと漆に似たり。上は天を拄へ、下は地を拄へ、目前を離れず、全く象外に超ゆ。陰陽の消長を逐はず、豈に寒暑の變遷に同じからんや。所以に道ふ、㋬萬象の中獨露身、唯だ人自ら肯つて乃ち方に親し。諸禪德、朝々暮々、來々往々、幾般か看見し、幾廻か撞着す。滿眼滿耳、廻避するに處なし、甚によつてか落處を知らざる。」良久して云く、「吾れ常に此に於て切なり。」

復た擧す、「慈明和尚、冬日僧堂前に榜示して此の相○○○二二二一八[illegible]柮を作す。若し人識得せば、四威儀の中を離れず。首座一見して、乃ち衆に謂つて云く、『和尚今日放參』と。」師拈じて云く、「天神は一見して天に歸し、地神は一見して地に歸す。者箇は則ち且く置く、首座一見して和尚今晩放參と云ふ、又作麽生。」良久して、「㋙一百單五、清明に近く、清明は定めて寒食の後にあり。」

次の日上堂、「晷運推移し、日南長至、石筍條を抽き、鐵樹花を生ず。老胡㋓不合に流沙を過ぐ。」

師の頌に曰く、「萬象の中獨露身、唯だ自ら肯つて乃ち方に親し、昔日錯つて途中に向つて覓む、今日看來れば火裡の氷。」

㋙一百單五。冬至から寒食まで一百五日。

㋓不合。不可を推しとほす意あり、むだごとでも謂すべきか、達磨は來ないでもよいに、推付けて流沙を過ぎ來れり。

上堂、擧す、五臺山下に一婆子ありて接待す、凡そ僧臺山の路甚麽に去ると問ふことあれば、婆云く、「驀直に去れ。」僧才かに去る、婆云く、「好箇の師僧も又與麽に去る」と。是の如くすること既に久し、游僧傳へて趙州に到る。和尙聞き得て乃ち云く、「待て、老僧汝が爲に去つて勘破せん」と。州往いて便ち問ふ、「臺山の路甚麽の處に向つてか去る。」婆云く、「驀直に去れ。」州才かに行く、又云く、「好箇の師僧も又與麽に去る」と。州回つて陞座して云く、「婆子已に諸人の爲に勘破し了れり。」師頌して云く、「㋢煙塵を發動す箇の老婆、趙州の㋻一語干戈を定む、茲より四海淸うして鏡の如し、㋚贏ち得たり將軍の凱歌を奏することを。」

上堂、僧問ふ、「雲門に三句あり、還つて咨參を許すや也た無や。」師云く、「㋖大海は細流を讓らず。」僧云く、「如何なるか是れ函蓋乾坤の句。」師云く、「天の高きも蓋ひ盡さず。」僧云く、「如何なるか是れ隨波逐浪の句。」師云く、「十字街頭の破草鞋。」僧云く、「如何なるか是れ截斷衆流の句。」師云く、「㋙水中の江石卵。」僧云く、「恩大にして㋜都べて語なし、懷抱自ら分明。」師云く、「分明に記取せよ。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「嶺上白雲多く、澗下流水足り、寒月虚庭を照し、霜風林底

㋢煙塵云々。此の婆、並大抵でない、煙塵を發動して、初僧の眼をくらます。

㋻一語。勘破了の一語、婆子の筋骨を拔いた。

㋚贏ち得たり。太平の効、師一人に歸す。

㋖大海云々。泰山は土壤を讓らず、河海は細流を擇ばず、よりぐひせぬから、何でももつてこい。(史記に出づ)

㋙水中の江石卵。伊勢の海千尋の底の一つ石、顚もします、水もします、齒も立たない。

㋜都べて語なし。口で言ひ露し樣がござらぬ、胸の中はぐわらりといたしました。

を動す。一切成現、更に缺少なし。崇福恁麼に道ふ、口を開くことは舌頭上にあらず、甚によつてか是の如くなる。㊀虎體元斑あり。」

上堂、僧問ふ、「三通鼓罷んで、四衆筵に臨む、學人上來、請ふ師提唱せよ。」師云く、「秋雲秋水共に悠々。」僧云く、「恁麼なれば則ち群生恩に霑ひ去らん。」師云く、「何人か不恁麼なる。」僧云く、「趙州、一庵主を訪うて云く、『有り麼、有り麼。』主、拳頭を竪起す。州云く、『水淺うして是れ舟を泊する處にあらず、』意旨如何。」師云く、「㊁鵝王乳を擇ぶ、元鴨の類にあらず。」僧云く、「州又一庵主を訪うて云く、『有り麼、有り麼。』主、拳頭を竪起す、州便ち禮拜讃嘆す、如何が委悉せん。」師云く、「一手は擡、一手は搦。」僧云く、「問答已に一般、甚としてか一人を肯ひ一人を肯はざる。」師云く、「兩頭を離却して會取せよ。」僧云く、「若し人ありて、有り麼有り麼と問はゞ、未審し和尚如何が祗對せん。」師云く、「劈脊に便ち打たん。」僧便ち禮拜す。

師乃ち擧す、「僧、百丈に問ふ、『如何なるか是れ奇特の事。』丈云く、『㊂獨坐大雄峯』と。百丈和尚善く來機に應ず。是なることは則ち是なり、崇福は卽ち然らず、若し人ありて、如何なるか是れ奇特の事と問はば、只だ他に向つて道はん、主山は高く、案山は低しと。」

上堂、「鐘は鐘鳴をなし、鼓は鼓響をなす。十分現成の處は、我が衲僧家に還す。然も是の如くなり

㊀虎の斑文に、繪解はいらぬ。

㊁鵝王乳を擇ぶ。正法念所經六十四に曰く「譬へば水乳同じく一器に置くが如し、鵝王之を飲めば只だ乳汁を飲み、其の水は猶ほ存す、其の形は似たれども鴨と同じからず。」

㊂獨坐大雄峯。天上天下唯我獨尊と坐斷した處。

と雖も、甚によつてか㋪鉢盂口天に向ふや。若し也た知り得て分曉ならば、長連床上の喫粥喫飯に一任す。」

㋲東福開山聖一和尙の忌日の陞座、「㋝關を摩竭に掩ひ、身を藏して影を露す。口を毗耶に杜ぢ、耳を掩ふて鈴を偸む。爾より西天の四七、東土の二三、虛を承け響を接し、一人は一人に傳へ、㋜濫觴止まらず、天に滔るに至る。玆によつて我が日本國洛陽東山東福開山聖一和尙、事已むを獲ず、出で來つて宗乘を播揚すること四十餘年、正按傍提、橫該竪抹、千變萬化、七縱八橫、頭々轍に合し、應用虧くることなし。一切の有情無情を度し盡し、驀忽に時節到來翻身し去る。電影追ひ難く、佛祖も知らず、然も是の如くなりと雖も、未だ是れ東福老漢、眞實行履の處にあらず。且く道へ、如何なるか是れ眞實行履の處。」良久して云く、「㋑日面佛月面佛。」

復た擧す、「巖頭、德山に問ふ、『從上の諸聖、甚麼の處に向つてか去る。』山云く、『㋺作麼、作麼』と。覿面當機疾く、當機覿面に提ぐ。頭便ち禮拜す。㋩燒磚打着す連底の凍、只だ東福開山老師の如きんば、遷化の後四十九日、畢竟甚れのところに向つてか去る。」拂子を擊つて云く、「紅輪決定西

㋪鉢盂口天に向ふ。會元十九に、楊岐會禪師因に僧問ふ、「天は一を得て以て淸く、地は一を得て以て寧し、衲僧は一を得て何を作すにか堪へたる。」禪師曰く、「鉢盂口天に向ふ。」

㋲是れ弘安三年の陞座なり。崇福は隨乘房湛慧の創剏にして聖一國師に開堂演法せしむる處、故に七七忌日の拈香あるなり、蓋し聖一國師は此の年十月十七日に示寂せらる。

㋝關を摩竭に掩ふ。西域記に、「昔如來摩竭陀國に於て、初めて正覺を成ず、梵王七寶堂を建て、帝釋七寶座を建て、佛其の上に坐し、七日中に思惟す云々。」

㋜濫觴。孔子家語に「江は岷山に出づ、其の始め觴を濫ぶべし、江津に至るに及べば、航舫にあらずんば以て渉るべか

に沈み去る、白雲舊によつて青山を覆ふ。」

上堂、「衲僧の用處、水の地を行くが如く、東行西流、可不可なく。七穿八穴、是不是なし。諸天尋覓するに路なく、魔外潛に覰へども見えず。何が故ぞ是の如くなる。達磨識らず、六祖會せず。」

三月旦上堂、僧問ふ、「三月初一、花は紅に柳は緑なり、現成の公案、如何が商確せん。」師云く、「春日遲々春光美なり。」僧云く、「(ニ)靈雲曾て道ふ、『桃花を一見せしよりして後、直に而今に至るまで更に疑はず』と、那裡か是れ他不疑の處。」師云く、「桃花舊によつて春風に笑む。」僧云く、「已に是れ不疑、玄沙甚によつてか道ふ、(ホ)敢保す老兄の未徹在と。」師云く、「(ヘ)一家事あれば百家忙はし。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「一莖草上に瓊樓玉殿を現じ、一微塵裡に大法輪を轉ず。法法皆宗、頭々是れ令、一切處に成就し、一切處に建立す。只だ者箇の力に憑る。且く道へ、者箇は是れ甚麽ぞ。」拄杖を拈じて卓一下して、「噁、幾乎ど(ト)諱に觸る。」

解夏小參、「結するときは則ち盡大地一時に結して、針箚不入、水瀉げど

らず。」源水の綿々を云ふ。

(イ)日面佛月面佛。斯樣のしたゝかな上堂は、穴のぞきも出來るものでない、南泉、長沙、楊岐、黃龍、虛堂の面を見るやうな。

(ロ)作麼作麼。なんじや、なんぢやと。

(ハ)燒塼打着す連底の凍。眞赤に燒けた瓦を氷の中へ打ち込んだ、師匠も弟子もびくともせぬ、岩頭の拜は上霄漢に通り、下黃泉に徹して居る。

(ニ)靈雲。桃花を見て悟道す、その頌に曰く、「三十年來劍客を尋ぬ、幾回か葉落ち又枝を抽く、桃花を一見せしよりして後、直に如今に至つて更に疑はず」と、誠に立派な白狀なり。

(ホ)敢保。たしかにうけあふと云ふこと。

(ヘ)一家事あれば、女學生が一人

も着かず、解するときは則ち徧法界一時に解し、他の風吹き又日炙るに任す。翠岩の眉毛在不在、雲門の關字常に現前す。(チ)蠟人氷、鵝護雪、總に是れ一邊に拈放す。黑色の拄杖又摩滓し、鉢嚢鞋袋重ねて挑起して、(リ)一家は一家の事に管せず、各自に疆を守り界を保す。然も是の如くなりと雖も、九十日中、且く道へ、甚麼邊の事をか明かにす。前三三後三三。」

復た(ヌ)洞山和尙、示衆に云ふ、兄弟家初秋夏末の公案を擧して、拈じて云く、「洞山老漢、一條の大路を豁開す、只だ要す盡大地の人共に行かんことを。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、路頭什麼の處にか在る。(ル)脚下を看よ。」

上堂、「大野涼風颯々、長天疎雨濛々、祖師の(ヲ)心印、衲僧の巴鼻、一時に漏泄す。古より今より人の遮藏するなし。崇福是れ不背なりと雖も、試みに爲に遮藏す看よ。」袖を以て拂子を掩ふて云く、「噁、千眼大悲覰れども見えず、三賢十聖那ぞ能く知らん。」

佛殿釋迦安座上堂、「一會靈山、儼然未散、今古に凌跨し、虛空に逼塞す。盡大地の人(ワ)仰望すれども及ばず、森羅萬象總に下風にあり。而今面目現

殺されると、京大阪中が大騷ぎよ。

(ト)諱に觸る。陛下の諱に觸れると、舌を拔かれる、南無三寶、ふみすべらうとした。

(チ)蠟人氷鵝護雪。蠟細工の人形を浮べる氷水、鵝鴨の護持せる雪塊と云ふことか、事苑の解分明ならず、鵝護雪は蔡城の故事かとも疑はる。

(リ)一家は一家の事に管せず。おれの處は他人の事件に携りなし。

(ヌ)洞山。類集十四に、洞山价禪師衆に示して曰く、「初秋夏末兄弟、東に去り西に去る、直に須らく萬里無寸草の處に向つて去り始めて得べし。」又曰く、「只だ萬里無寸草の處の如きんば作麼生か去らん。」

(ル)脚下を看よ。堀やら、陷穽にはまるな。

(ヲ)心印。額の眞中、打ち込む燒

在、坐ながら寰中を鎭す。仰ぎ冀はくは、法輪常に轉じ、應用無窮ならんことを。」

上堂、「(カ)倶胝指頭を竪起し、(ヨ)魯祖人を見て面壁す。(タ)冷地に看來れば、早く是れ便を着けず。所以に崇福、緣に遇ひ境に觸れて、分に隨ひ(レ)羞を知る。」

冬至小參、「天平かに地平かに、日上り月下り、陰剝して陽主となり、否極まりて泰來る、自然に時あり節あり。端なく從上(ソ)沒般次の漢、(ツ)陳年の菓卓を羅列し、爛臭の布裩を提起す。一錯百錯、錯而今に到る、未だ免れず一年一度人の唇齒に掛くることを。崇福今夜、忍俊不禁、別に一條の活路子を開き、汝諸人をして(ネ)太平象なきことを管取せしめん。」拄杖を拈じて卓すること一下して云く、「直に得たり、崇福山頂枯木花を開き、太宰府裡和氣靄然たることを。君子小人各其の宜しきを得、正恁麼の時、親切の一句作麼生。」良久して云く、「一氣言はず(ナ)有象を含む、萬靈何れの處にか無私を謝せん。」

復た潙山、仰山に問ふ、(ラ)仲冬嚴寒の公案を擧して、師拈じて云く、「潙

印。

(ワ)仰望すれども及ばず。仰げば彌々高しと。

(カ)倶胝。天龍和尙一指を竪てて倶胝に示す、胝當下に大悟す、是れより學者の參問するあれば、唯だ一指を擧し、別に提唱なし、將に順寂せんとするとき、衆に謂つて曰く、「吾れ天龍一指頭の禪を得て、一生受用不盡」と、言ひ訖つて滅を示す。(會元四)

(ヨ)魯祖。池州魯祖山寶雲禪師、尋常僧の來るを見れば、便ち面壁す。

(タ)冷地に看來。かた影から窺ふなり、丸で人を寄せつけぬ。

(レ)羞を知る。はぢを知るから、ぢゞを知り、ぢゞを知るからばゞを知る。

(ソ)沒般次。分けの分からぬを云ふ。

(ツ)陳年の菓卓。洞山冬夜の因緣、

仰父子、互に相熱謾す、爭奈せん身を藏して影を露すことを。且く道へ、㋰那裡か是れ他の影を露す處、具眼の者は辨取せよ。」

次の日上堂、「光陰箭の似く、日月流るゝが如し。㋻事は眼前より過ぎ、覺えず老の頭に臨むことを。寒暑に干らず世縁に渉らず、如何が信を通せん。一冬二冬、叉手當胸。」

上堂、僧問ふ、「㋼佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべしと、未審し是れ何の時節ぞ。」師云く、「一等に是れ恁麼の時節。」進んで云く、「如何なるか是れ佛性の義。」師云く、「頭々上に明かに、物々上に現ず。」進んで云く、「趙州云く、『有佛の處住することを得ず、無佛の處急に走過す。三千里外人に逢ふて錯つて擧すること莫れ』と、此の意如何。」師云く、「早く是れ錯つて擧し了れり。」進んで云く、「僧云く、『恁麼なるときは則ち去らざるなり』と、又如何。」師云く、「也た是れ伶利の漢。」進んで云く、「州云く、『㋨摘楊花、摘楊花』と、如何が委悉せん。」師云く、「㋔蘇嚕蘇嚕。」進んで云く、「恁麼なるときは則ち昔日の趙州、今日の和尚。」師云く、「還つて東壁に胡蘆を掛くることを知るや。」僧無語、便ち禮拜す。

爛臭布裩、皓老の故事。

㋧太平象なし。天下大いに亂れしとき、何れの時か太平を得んと嘆きしに、或人答へて日く、「太平象なし」と。

㋤有象。柳は綠、花は紅、無私、平等大慈の恩澤。

㋶仲冬。潙山上堂云く、「仲冬嚴寒年々の事、晷運推移の事如何。」仰山進前叉手して立つ、山云く、「我れ誠に知ろ、汝が此の話に答へ得ざることを。」

(會元九)

㋰那裡か是れ他の影を露す處。狸の化けた大入道は、石地藏の影なり。

㋻事は眼前より過ぐ。見る中にさつさと過ぎ去る。

㋼佛性云々。涅槃經の文、時節因緣、春が來れば花咲き、秋が來れば葉墜つ。

㋨摘楊花々々。おさらば、おさらばなり。離別の語なり。

師乃ち云く、「山は是れ山、水は是れ水、草は本天下同じ。山は是れ山ならず、水は是れ水ならず、桑を指して柳を罵る。也た是れ尋常、也た是れ尋常。只だ一塵未だ起らず、一漚未だ發せざる以前の消息の如きんば、甚麼の處に向つてか得來らん。」拂子を擊つこと一下して云く、「諸人若し會得せば、㋗晝錦還鄕、其れ如し未だ然らずんば、㋳鳳林咤之。」

維那・知客・典座を謝する上堂、槌を鳴し鉢を展べ、鼓を擊つて上堂、「照あり用あり、賓あり主あり、有漏の笊籬、無漏の木杓、頭々轍に合し、應用虧くることなし。然も是の如くなりと雖も、柄欛は我が手裡にあり。」驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「㋮要且つ大家力を着けよ。」

臘八上堂、「正令を全提せば、佛祖も命を乞ふ、直饒ひ釋迦老子、雪山に端坐すること六載、臘月八夜に逗到して、明星現ずる時、忽然として悟り去るも、猶ほ未だ放過せざることあり。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「我が王庫の內、是の如きの刀なし。」

歲節小參、「年窮まり歲盡き、㋘牛頭沒し馬頭回る。臘盡き春來り、㋫驢井を覰ひ、井驢を覰ふ。文殊維摩は手を撒して歸去し、拾得寒山は掌を

㋔蘇嚕蘇嚕。陀羅尼なり。
㋗晝錦還鄕。錦の衣を着けて晝の日中に故鄕に還る。
㋳鳳林咤之。蘇軾は學問自慢であつたが、東坡が此の四字を示したら、うんとつまつた。
㋮要且云々。是れは「且つ大家の力を着けんことを要す」と讀むべきなれども、古來「要且つ」と讀み「大家力を着けよ」と讀む習慣あり、臨濟錄に多し。
㋘牛頭沒し馬頭回る。俗語解に「間に髮を容れざるなり」牛馬に用なし、あちらに引込むと、こちらにつんでる。
㋫驢井を覰ひ云々。會元十三、曹山章に、彊上座に問ふ「佛の眞法身は猶ほ虛空の如し、物に應じて形を現す、水中の月の如しと、作麼生か、この應ずる底の道理を說かん」曰く「驢の井を覰ふが如し」山

撫して大笑す。是れ新年頭の佛法にあらず、亦舊歳の因縁にあらず。這裡に到つて、銅頭鐵額の漢も、也た觜を挿むの處なし、畢竟如何が信を通せん。」禪床を拍つて云く、「㋙東村の王老夜燒錢。」

歳旦上堂、「昨夜舊年を送り、今朝新歳を迎ふ。㋓現量の法門、活祖師の意、若し也た身を橫へて擔荷し得去らば、自然に春風和氣。然らずんば、」拂子を擊つて云く、「又是れ㋢從頭に起さん。」

元宵雪に因つて上堂、「㋐瑞を三五の節に開いて上元に屆る、在處に燒燈し、以て上帝に享す。崇福例に隨つて也た一燈を點ず。所以に道ふ、一燈點出す百千燈、燈々相續すと。忽ち人あつて出で來つて道はん、燈々相續は卽ち且く置く、雪千山を覆ふ、甚によつてか孤峯白からざる。只だ他に向つて道はん、㋚我見燈明佛、本光瑞如此。」

三月半上堂、僧問ふ、「祖令當行、十方坐斷、正恁麼の時、請ふ師祝聖せよ。」師云く、「雲淨うして日月正し。」僧云く、「『雪峯、衆に示して云く、『盡大地是れ解脫門、手を把つて拽けども入らず、』此の意如何。」師云く、「㋖甚麼の處にかある。」僧云く、「爭奈せん門外にあることを。」師云く、「㋴甚麼を喚んでか門となす。」僧云く、

云く、「道ふことは甚だ道ひ得たり、祇だ八成を道ひ得たり。」曰く、「和尙又如何。」山云く、「井の驢を覷ふが如し。」驢の井を窺ふは、有功用、井の驢を窺ふは、無功用。

㋙東村の王老云々。東隣りの權兵衞が、紙錢を燒いて、先祖の祭をする。

㋓現量。ありのまゝと云ふが如し。

㋢從頭。いろはのいの字。

㋐瑞。豐年の瑞、三五の節は正月十五日、上元は十五日の夜。

㋚我見燈明佛。法華經序品の語、雪と燈をはらつた。

㋖甚麼の處にかある。貴様は全體どこに居る。

㋴甚麼を喚んでか門となす。そちが目には門があるか。

「甚としてか肯て入らざる。」師云く、「儞獨り入るを得ず。」僧無語、師云く、「果然果然。」又僧あり問ふ、「臨濟一日衆に示して云く、『有る時は奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、有る時は人境兩俱奪、有る時は人境俱不奪』と、是れ何の章句ぞ。」師云く、「四句を離却して會取せよ。」僧云く、「如何なるか是れ奪人不奪境。」師云く、「目前に闍梨なし。」僧云く、「如何なるか是れ奪境不奪人。」師云く、「面を仰いで天を見ず、頭を低れて地を見ず。」僧云く、「如何なるか是れ人境兩俱奪。」師云く、「花散じて鳥來らず。」僧云く、「如何なるか是れ人境俱不奪。」師云く、「天は是れ天、人は是れ人。」僧云く、「畢竟如何。」師云く、「天の高きも蓋ひ盡さず。」僧云く、「猿子を抱いて青嶂の後に歸り、鳥花を啣んで碧巖の前に落す。者箇は是れ㋑夾山の境、如何なるか是れ崇福の境。」師云く、「雲山蒼々、澗水潺々たり。」僧云く、「如何なるか是れ境中の人。」師云く、「㋺天外に出頭して看よ。」僧、禮拜す。

乃ち云く、「日暖かに風和ぎ、春色晩に向とす。處々桃花開いて錦に似たり、靈雲の見處今猶ほ在り。知らず諸人、疑ふや疑はずや、徹すや徹せずや。相識天下に滿つ、知心能く幾人ぞ。」

四月旦上堂、僧問ふ、「猿子を抱いて青嶂の後に歸り、鳥花を啣んで碧巖の前に落つ。者箇は是れ夾山の境、如何なるか是れ橫嶽の境。」師云く、「雲は嶺頭にあつて閑不徹、水は澗下に流れて太忙生。」僧云く、「如何なるか是

㋑夾山。船子和尙に嗣法す。
㋺天外に出頭して看よ。大燈國師の歌に、「雲よりも上なるそらに出でぬれば、雨の降る夜も月をこそみれ。」
㋩屋頭の青山云々。主人と青山と青山と主人と二つはない。
㋥趙州。會元四、趙州の章に、

れ境中の人。」師云く、「㋙屋頭の青山青更に青。」僧云く、「未審し、人と境と相去ること多少ぞ。」師云く、「高く眼を着けて看よ。」僧云く、「只だ㋡趙州の如きんば、曾て到るも曾て到らざるも、一等に他をして茶を喫し去らしむ。意甚の處にかある。」師云く、「喫茶の者方に知る。」僧云く、「學人卽今此間に到る、和尙何の施設かある。」師云く、「齋時飯を喫し去れ。」僧云く、「人を成ずるものは少く、人を敗するものは多し。」師云く、「恩を知つては方に恩を報ずることを解す。」僧便ち禮拜す。

乃ち云く、「一言に道ひ盡せば、㋪佛祖の與に師となる、一言に道ひ盡さずんば、人天の與に師となる。且く道へ、那の一言ぞ。滿地の殘紅春色去り、潑天の張綠夏初めて來る。」

端午上堂、「五月五は㋲天中の節、時淸く道泰かに、門安く戶靜なり。㋝張天師・李道士、土を呪し符を書することを要せず、何ぞ必ずしも更に善財の藥を採り、文殊の藥を用ひることを擧せん。崇福門下、自然に太平路を得。何が故ぞ。」良久して、「㋜皇天親なし、惟れ德是れ輔く。」

中夏上堂、「九夏半を過ぐ、見成の公案、諸人若し會得せば、事として辨

師新到に問ふ、「嘗て此間に到るや、」曰く、「曾て到る。」師云く、「喫茶去、」又僧に問ふ、僧曰く、「曾て到らず、」師云く、「喫茶去、」後に院主問ふ、「何として曾て到るも喫茶去、曾て到らざるも也た喫茶去と云ふや、」師院主と召す、院主應諾す、師云く、「喫茶去。」

㋪佛祖。人天の師となる。臨濟錄に出づ。

㋲天中節。「五月五日の午の刻を天中の節となす」と提要錄に出づ。

㋝張天師。端午に張天師の像を畫いて以て賣り、又泥塑の張天師を作り、艾を以て拳となし、蒜を以て鬚となし、門上に置く、是れ支那端午の俗禮、張天師は後漢の趙道陵なり、符は厄除のお守なり。

㋜皇天親なし云々。書經蔡仲の命に、「皇天親なし、是れ德是

ぜざるなし。長連床上に喫粥喫飯することを妨げず、其れ脱し未だ然らずんば、更に那の㋑一半の有る在り。」

解夏小參、「金風拂々たり、秋色澄々たり。蛩は幽砌に吟じ、蟬は高樹に鳴く。全く靈山の家風を彰し、潛に少林の密旨を通ず。若し是れ眼裡に珠あり、皮下に血あらば、朝遊夕處、只だ現成を領じ、左之右之、了に異解なし。一念萬年、萬年一念、日々是れ九夏、時々是れ三秋、更に甚の㋺克期取證、法制周圓とか說かん。總に是れ風を生じ草を起す。正恁麽の時、親切の一句、作麽生か道はん。」良久して云く、「雕弓已に掛けて狼煙息み、萬里の歌謠太平を賀す。」

次の日上堂、「㋩祖師意百草頭、㋥衲僧眼拄杖頭、爭か如かん崇福が這裡、布袋の結頭を打開し、東去も也た得、西去も也た得。㋭風流ならざる處也た風流。」

中秋上堂、「見成の公案、更に他說なし。八月十五、中秋の令節、㋬寒山子太だ饒舌、饒舌することを休めよ、長安夜々家々の月。」

重陽上堂、「重陽只だ是れ九月九、若し佛法の要妙を說かば、㋣特地の干戈、或は黃花白醪を賞せ

れ輔く、民心常なし、惟れ惠に是れ懷づく。」

㋑一半。まだ殘りの半分がある。

㋺克期取證。圓覺經に、「若し道場を建てば、まさに期限をたつべし、長期百二十日、中期百日、下期八十日」

㋩祖師意百艸頭。西來の端的、百草頭上に活躍す。

㋥衲僧眼拄杖頭。衲僧家の一隻眼は拄杖頭に放光す。

㋭風流ならざる處也た風流。婢は出でうせ、おら臥てくらす。

㋬寒山子。我が心秋月に似たり。

㋣特地干戈。花見の席のはたしあひ。

ば、俗氣除かず。何に況んや茫々として嶮を渉り、高きに登るをや。何ぞ曾て自家の活路を踏着せん。且く道へ、如何なるか是れ自家の活路、是れ佛殿前僧堂後なることなきや。」良久して云く、「不識。」

上堂、「我れ本此の希求することあるに心なし、天より降下し、地より湧出す。風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ。甚によつてか此の如くなる。」拄杖を卓して云く、「(チ)物は有主に歸す。」

上堂、「見成の公案、迴かに商量を絶し、渾崙の句子、未だ擧せざるに全く彰る。直に得たり、崇福口を開くの處なきことを。諸人合に作麼生。噁、切に忌む、妄に消息を通ずることを。」

(リ)聖一國師第三年の爲に陞座、「威音那畔の一着子、古に亘り今に亘り、天に輝き地を鑑む。若し這裡に向つて承當し得去らば、不報の恩を報ずるに堪へたり。其れ如し未だ然らずんば、更に第二義門に向つて、箇の消息を露し去らん。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「二千年前、摩竭陀國に於て、親しく此の令を行ず。」又卓一下して云く、「二千年後、日本國中に於て、全く此の令を提げて、一絲毫許りを移さず。崇福久しく此の要を默し、速說を務めず。今東福開山聖一和尚遷化の後、第三年の忌辰に當り、此に嗣法の小師龍華長老、崇福をして宗乘を擧揚せしむるに臨み、敢て囊藏被蓋せず。直に得たり、重々に說破し去ることを。」拄杖を拈じて又卓一下して云く、「正當恁麼の時、聖一老師、甚麼の處にあつてか此の事を證

(チ)物は有主に歸す。主心が大事なり、主心なければ明き屋も同然、狐狸が入りかはる。

(リ)聖一國師の三周忌は、弘安五年十月十七日に相當す、大應國師、時に四十八歲、崇福入院より九年目なり、元寇の翌年に相當す。

明す。」拄杖を靠けて云く、「紅日門に當つて照し、淸風匝地に寒じ。」

復た擧す、神鼎諲和尙、因に首山の忌日上堂云く、「山僧、先師を離れしより來、所願の未だ滿たざるあり。先師を離るゝこと較早うして、始終相隨はず、今日更に哭一聲せんと擬欲す。知らず大衆、許容すや否や。若し哭せば俗に異ならず、若し哭せずんば、者の敬何にかある。且く道へ、哭するが卽ち是か、哭せざるが卽ち是か。」衆、無對。乃ち云く、「蒼天蒼天。」師拈じて云く、「神鼎和尙、謂つべし、是れ恩を知つて方に恩を報ずることを解すと。衆無對、蒼天の中更に寃苦を加ふ。今日龍華長老、先師の忌日に於て、大齋會を設け、大佛事を作し、報恩已に畢る。且く道へ、古人と是れ同か是れ別か。」良久して云く、「九九元來八十一。」

三月半上堂、僧問ふ、「摩尼珠人識らず、如來藏裡に親しく收得すと、如來藏は則ち問はず、如何なるか是れ摩尼珠。」師云く、「天を照し地を照して光焰々。」僧云く、「學人只だ一顆の珠を索む、和尙一(ヌ)栲栳を傾出す。」師云く、「一肩に擔取し去れ。」僧云く、「只だ牛頭未だ四祖に見えざる時の如きんば、百鳥甚としてか花を啣んで獻ず。」師云く、「(ル)彩は齪家に奔る。」僧云く、「見えて後、甚としてか花を啣んで獻ぜざる。」師云く、「落花枝に上らず。」僧云く、「見と未見とは則ち且く置く、牛頭卽今甚麼の處にかある。」師云く、「當面に薦取せよ。」僧云

(ヌ)栲栳。柳行李なり。
(ル)彩は齪家に奔る。齪は齷齪の齪、小說に「ぢゝむさき」を齷齪と云ふ、賽と彩と通ずるか、賽の目は賢い男へは行かぬ、馬鹿の方へ奔ると。
(ヲ)楊德意。史記に司馬相如子虛の賦を作る、同郡の楊德意、

く、「㋾楊徳意によらずんば、爭か馬相如を識らん。」師云く、「更に須らく子細にして初めて得べし。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「春色晩に向として、綠暗く紅稀なり。滿地の落花風掃ひ盡し、黃鶯啼いて綠楊の陰にあり。衲僧門下、㋻忉々たるを用ひず。㋕」

結夏小參。「山青く水綠に、花笑ひ鳥啼く、一々㋵覿體全眞、箇々當陽に漏泄す。所以に崇福尋常、聲前句後に向つて、人家の男女を鼓弄することを欲せず。何に況んや三月安居、九旬禁足をや。網底の遊魚に異ならず、什麼の快活の處かあらん。當頭に坐斷して、別に生涯を立つるも、也た是れ風を生じ草を起す。總に不與麼ならば、未だ常情を出でず。且く道へ、畢竟如何が卽ち是ならん。」拂子を擊つて云く、「㋟碧落を衝開す松千尺、紅塵を截斷す水一溪。」

復た擧す、僧、睦州に問ふ、「一言に道ひ盡す時如何。」州云く、「㋹老僧汝が鉢囊裡にあり。」師拈じて云く、「睦州老兒、這の僧に一問せられて、直に得たり、心肝を露出することを。崇福は則ち然らず、忽ち人あつて一言に道ひ盡す時如何と問はゞ、低々地に他に向つて道はん、㋞且緩々と。」

上に侍して之を誦す。帝云く、「朕恨むらくは此の人と時を同じうせざることを。」徳意曰く、「臣が里人司馬相如自ら言ふ、此の賦を作ると。」帝大いに喜び、召拜して郎となす。

㋻忉々。言語大多を云ふ。

㋕此の章疑らくは脫語あらん。

㋵覿體。見えたまゝ、當陽は正面なり。

㋟碧落を衝開す松千尺。泉谷の百拙和尚が寶藏寺の門に聯を掛けようと思ふて、さる學者に相談せられしに、篤と考へて見ましようと、二月三月たちて、此の語を得、喜んで泉谷に斷けつけしに、ちやんと此の語が聯に成つて揭げてあつたと云ふ逸話がある。

㋹老僧汝が鉢囊裡にあり。えぐい語なりと。

㋞且緩々。これも少しやんわりやつてくれ。

次の日上堂、拄杖を拈じて卓一下して云く、「諸佛此に於て大法輪を轉ず。」又卓一下して云く、「諸佛此に於て結制安居、克期取證。且く道へ、什麽の法をか取證す。」又卓一下して云く、「是れ這箇の法なること莫しや。」良久して云く、「不是、不是。」

結夏小參、僧問ふ、「烏兎馳するが如く、聖制已に臨む。節に應ずるの一句、願はくは擧揚を聽かん。」師云く、「薫風自南來、殿閣生微涼。」僧云く、「如何なるか是れ圓覺伽藍。」師云く、「(の)青山流水。」僧云く、「如何なるか是れ平等性智。」師云く、「鵲噪鴉鳴。」僧云く、「畢竟如何が安居せん。」師云く、「頭上漫々、脚下漫々。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「世界未だ分れず、形名未だ兆さゞるとき、誰か是れ釋迦、誰か是れ彌勒、如何が安居し、如何が禁足せん。(ネ)一向に恁麼にし去らば、土曠く人稀にして相逢ふもの少なり。世界纔かに分れ形名已に兆さば、釋迦は自ら釋迦、彌勒は自ら彌勒、青山流水、明月白雲、頂門上、脚跟底、總に是れ圓覺伽藍、平等性智にあらざることなし。與麽の告報、未だ常情を出でず、向上全提の一句、如何が委悉せん。」拄杖を卓すること一下して、「(ナ)千峯の勢は嶽邊に到つて止まり、萬派の聲は海上に歸して消す。」

(の)青山流水。叡山加茂川、皆圓覺伽藍なり、鵲噪鴉鳴、柱は竪、敷居は横、皆平等性智なり。

(ネ)一向に恁麼にし去る。大圓鏡の眞たゞ中に坐斷する。

(ナ)千峰の勢。白山、立山も富士に出合ふては頭は上らぬ、早瀬の信濃川、天龍川も海へ落ちては音沙汰は無いぞ。

擧す、僧、潙山に問ふ、「如何なるか是れ道。」潙云く、「無心是れ道。」僧云く、「學人不會。」潙云く、「不會底を會取せよ。」僧云く、「如何なるか是れ不會底。」潙云く、「只だ是れ儞、是れ別人にあらず。」師拈じて云く「潙山恁麽に老婆心切なり、爭奈せん者の僧肯て承當せざることを。今夜還つて承當し得る底ありや、崇福猶ほ說のあるあり。何が故ぞ。無心猶は一重の㋶關を隔つ。」

次の日堂上、僧問ふ、「一峯雲片々、雙澗水潺々、是れ二千年前の消息なることながらんや。」師云く、「㋰認着せば依前として還つて不是。」僧云く、「衲僧家、尋常氣宇王の如し、甚によつてか今朝者裡に坐在して、無繩自縛なる。」師云く、「㋒火を覓めては煙に和して得。」僧云く、「與麽なるときは則ち龍、水を得る時意氣を添へ、虎、山に逢ふ處威獰を長ず。」師云く、「靈利の漢。」僧云く、「記得す、㋼古者の道く、『護生は須らく是れ殺すべし、殺し盡して始めて安居、箇中の意を會得せば、㋨鐵船水上に浮ぶ』と、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「恁麽の人方に恁麽の事を知る。」僧云く、「如何なるか是れ護生は須らく是れ殺すべき。」師云く、「上に佛祖なく、下己躬を絕す。」僧云く、「如何なるか是れ殺し盡して始めて安居。」師云く、「外に一物あるを見ず。」僧云く、「如何なるか是れ箇中の意。」師云く、「佛祖も知らず。」僧云く、「鐵船水上に浮ぶ、又如何。」師云く、「輕きこと鴻毛の如く、重きこと山の如し。」僧云く、「者箇は則ち且く置く、和尙別に結制

㋶關。關所、此の雖一重が儘ならぬ。
㋰認着。既に合點せば遲八刻。
㋒火を覓めて煙に和して得。無繩自縛も外の物で無い。
㋼古者。龐居士の偈なり。
㋨鐵船水上に浮ぶ。印籠の二重目の富士の山。

底の一句あることなしや。」師云く、「西天令嚴なり。」僧禮拜す。又僧問ふ、「四月江天雨霽れ晴れ、青山萬朶雙眉に上る。衲僧眼裡に重ねて屑を添ふ、九句禁足事如何。」師云く、「(オ)處々原に逢ふ。」僧云く、「只だ大千を總べて一伽藍となし、古今を併めて一期限となし、四聖六凡を驅つて此の網子に入るが如きんば、還つて網を漏るゝ底ありや。」師云く、「網を漏るゝ底なし。」僧云く、「西天に(ク)蠟人を以て驗となすは則ち問はず、(ヤ)東土鐵彈を以て驗となす意旨、如何。」師云く、「團圝縫罅なし。」僧云く、「蠟人鐵彈、相去ること多少ぞ。」師云く、「西天東土(マ)路迢々。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「衲僧家三月安居、九旬禁足、虎の山に靠るが如く、龍の水を得るに似たり。甚によつてか是の如くなる。」拂子を擊つて云く、「(ケ)水は竹邊より流出して冷かに、風は花裡より過ぎ來つて香し。」

書記の秉拂を謝する上堂、僧問ふ、「諸佛行不到の處、如何が說かん。」師云く、「(フ)一步は是れ一步。」僧云く、「行說俱に到る、是れ何人の分上の事ぞ。」師云く、「天外に出頭して看よ。」僧云く、「記得す、乾峯、衆に示して云く、『一を擧して二を擧することを得ざれ、一着を放過すれば第二に落在す』

(オ)處々原に逢ふ。柳綠花紅、皆是れ別のものでない。

(ク)蠟人。蠟を以て人形を製する、其の人清淨なれば蠟色亦清淨、其の人汚濁なれば蠟人亦汚濁なり。一說に蠟は臘なり、法臘を以て人の高下を定む。

(ヤ)東土鐵彈。會元十二に、僧長慶惠運文慧禪師に問ふ、「西天蠟人を以て驗となす、未審し、此間何を以て驗となす。」師曰く、「鐵彈子。」僧曰く、「意旨如何。」師曰く、「大底は大、小底は小。」

(マ)路迢々。十萬八千里。

(ケ)水は竹邊云々。大應國師に逢ふと、盲が目をあき、聾が聽えると云ふことなり。

(フ)一步は是れ一步。錢金のこと

と、意旨如何。」師云く、「松は本直く、棘は本曲れり。」僧云く、「雲門、衆を出でて云く『昨日人あり、天台より來る、又南嶽に行き去る』と、如何が委悉せん。」師云く「知音知つて後、更に誰か知る。」僧云く、「峯云く、『典座來日普請するを得ず』と、畢竟如何。」師云く、「問あり答あり。」僧云く、「恁麼ならば、則ち ㊂碑文白字を刊り、道に當つて青松を種う。」師云く、「好箇の一句。」又僧あり、問ふ「時節因緣は則ち問はず、如何なるか是れ向上宗乘の事。」師云く、「須彌山。」僧云く、「恁麼ならば則ち佛祖も身を退くに分あり。」師云く、「但だ佛祖のみにあらず。」僧云く、「記得す、龐居士、馬祖に問ふ、『本分を昧まさゞるの人、請ふ師高く眼を着けよ。』祖直上に覷る、此の意如何。」師云く、「目前分明。」僧云く、「士云く、『一種の沒絃琴、唯だ師彈じ得て妙なり、』祖直下に覷ると、又如何。」師云く、「讃嘆するに分あり。」僧云く、「士禮拜す、祖便ち方丈に歸る、意何の處にかある。」師云く、「㊃路は桃源に入つて深うして更に深し。」僧云く、「者箇は則ち且く置く、如何なるか是れ和尚爲人の處。」師云く、「還つて腦門の重きを覺ゆるや。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「通天路あり、㊄夜行を許さず、㊅大道人無し、明に投じて須らく到るべし。且く道へ、甚によつてか是の如くなる。一字劃を着けず、八字兩丿なし。」

では無い、きびきび歩みませい。

㊂碑文白字を刊る云々。白い者へ白をほれば、何んだか知れぬ、大道の眞中へ松を植ゑて、道ふさぎするといふ意。

㊃路は桃源に入つて云々。居士と馬祖の出合は深くして深しと。

㊄夜行を許さず。少しも曇りけやら、暗があつてはならぬ。

㊅大道無人。京極や銀座には人一人もなし。

解夏小參、「横岳一峯靑し、黯々として以て長時に現前す。雙磵泉水の聲、潺々として日夜常に流る。諸人此に於て結制安居、朝遊夕處、飽味を觀るに足れり。意、玄に停まらず、㋚眼、戶に掛けず、今は則ち三期、滿を告げて、聖制周圓、箇々天を頂き地を履む。人々鼻直眼横、内修する所なく、外證する所なし。然らば則ち只だ㋖田を開き粟を種ゑ、晝は飡し夜は寢ぬることを知る。」且く道へ、㋙文殊三處に夏を度る、又作麽生。」良久して云く、「㋱意氣ある時は意氣を添へ、風流ならざる處却つて風流。」

復た洞山萬里無寸草のところに去るの公案を擧して、師拈じて云く、「洞山恁麽に人に指示す、覺えず全身草に入る。石霜只だ洞山に相見せんことを要す、未だ免れず同じく草裡に在ることを。崇福は則ち然らず、初秋夏末、兄弟東に去り西に去り、各自に途中㋯善爲せよ。」

次の日上堂、「布袋頭結して、大地行蹤を絶す、布袋頭開いて偏界活路を通ず。且く道へ、結ぶ底是か、開く底是か。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「西風一陣來、落落兩三片。」

重陽上堂、拄杖を拈起して云く、「我れ若し拈起すれば、汝未だ拈起せ

㋚眼戶に掛けず。眼を戶口にぶらさげて、けろりかんとして居ぬ、遊びたがる者は戶口に目がつく。

㋖田を開き粟を種ゑ云々。井を掘つて飲み、田を耕して食ふ、帝力何ぞ我にあらんや。

㋙文殊三處に夏を度る。類聚十四解結門に曰く、世尊因に自恣の日、文殊、三處に夏を過し來つて靈山に至る、迦葉問うて曰く、「仁者今夏何の處に安居せし。」文殊曰く、「一月は祇園精舍にあり、一月は童子學堂にあり、一月は婬房酒肆にあり。」迦葉云く、「何ぞ此の不如法の處に住するを得たる。」遂に乃ち佛に白して、文殊を擯せんと欲す、佛の云く、「意に隨へ。」迦葉乃ち白槌して、纔に槌を拈ずれば、乃ち百千萬億の文殊を見る、迦葉

ざる時に向つて道理をなす、我れ若し未だ拈起せずんば、汝拈起するところに向つて主宰となる、大衆還つて會すや。」拄杖を卓して云く、「菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る。」

開爐上堂、「堆々坐して寒爐を擁し、片々頻に落葉を燒く。誰か管せん㊂無賓主の話、甚の三界唯心とか說かん。但だ些子の火種を得ること在り、自然に暖氣春よりも勝れり。」

上堂、㊃現前を得んと要せば、順逆を存することなかれ。祖師恁麽に道ふ、途轍なき中翻つて途轍を成す、且く道へ、順時逆時、寒時熱時、何の時か現前せざらん。然も是の如くなりと雖も、如何なるか是れ現前底の道理。」良久して云く、「開眼も也た着、合眼も也た着。」

浴佛上堂、「淨法界身、本出沒なし、知らず今日更に那箇の佛をか浴する。諸人若し也た會得せば、親しく釋迦老子を見ん。其れ脫し未だ然らずんば、崇福下座、㊄頂門上に一杓の惡水を潑ぎ去らん。諸人急に眼を着けて看よ。」

結夏小參、「岳峰峭峻にして其の頂を窮め難く、戒岸池深うして其の源を測ることなし。若し也た其の源を測り得ば、四大海水、只だ一滴に在り。若し是れ其の頂を窮め得ば、百億の須彌只だ一塵に在

其の神力を盡せども、槌擧ぐること能はず、世尊遂に迦葉に問ふ、「汝那箇の文殊を貶せんと擬す」、迦葉對ふるなし。

㊀意氣云々は迦葉白槌して文殊を擯せんとする處。風流ならざる處云々は槌子擧ぐる能はざる處。

㊁善偈。無事平安を希ふ語。

㊂無賓主の話は趙州、三界唯心は法眼。

㊃現前。信心銘の語なり。

㊄頂門上。てまへたちの頭からぶちかけてやらう、浮つかりびつくりして逃げるなよ。

り。所以に道ふ、一毫頭上に根源を識得し、十世古今、始終當念を離れず。一念萬年、萬年一念、塵劫來の事、只だ而今にあり。等しく是れ恁麼の時節、何ぞ便ち領取し去らざる。那ぞ更に三月安居、九旬禁足とか說くに堪へん。然も是の如くなりと雖も、煙を見て便ち火を知る處に會し去らば、㋲飯熟すること已に多時、其れ脫し未だ然らずんば、拂子を擊つて云く、「㋝西天令嚴なり。」

復た擧す、臨濟、德山に侍する次、山云く、「老僧今日困ず。」濟云く、「㋜寐語して什麼をかなす。」㋑山、棒を拈ぜんと擬す、濟、禪床を掀倒す。師拈じて云く、「若し是れ崇福ならば、當時纔かに老僧、今日困ずと道ふを聞いて便ち云はん、請ふ和尚喫茶と。彼此干戈相待することを見るを免る。何が故ぞ、㋺老いては筋力を以て能となさず。」

次の日上堂、「三月安居、布袋頭結す。要津を坐斷して、聖凡路絕す。正當恁麼の時、汝等諸人、甚麼の處に向つてか氣を出す。」拄杖を卓すること一下。

書記の秉拂を謝する上堂、「碧雲流水、明月淸風、㋩是れ禪ならず、是れ道ならず、是れ物ならず。且く道へ、是れ何の章句ぞ、文彩已に彰る。」

㋥端午上堂、「崇福從來、些子の靈藥を收得して、囊藏被蓋すること久し。今朝端午の節、手に信せ

㋲飯熟すること。運八刻の意。
㋝西天令嚴。夏中はきつと規矩に準ぜよ。
㋜寐語。あてなしの語ゆゑ。
㋑山棒を拈ぜんと擬す云々。象王回顧、獅子嚬呻。
㋺老いて筋力。禮記の曲禮に、「貧しきものは貨財を以て禮となさず、老いたるものは筋力を以て禮となさず。」
㋩是れ禪ならず云々。禪なり道なりと誰が云ふた。
㋥よき垂示なり。

て拈じ來りて大衆に布施す。」驀に拄杖を拈じて衆に示して云く、「唯だ鐵を點じて金となすのみにあらず、亦乃ち凡を轉じて聖となす。佛病祖病、身病意病、一切の病悉く皆之を除く。且く道へ、是れ什麼の藥ぞ、恁麼の奇特をか得たる。」良久して云く、「神仙の秘訣、父子傳へず。」

上堂、「十五日以前は、白雲敢て白ならず、十五日以後は、青山未だ青となさず。正當十五日、ホ白雲は自ら白雲、青山は自ら青山。崇福恁麼に道ふ、還つて爲人のところありや也た無や。」良久して云く、「ヘ仁者は之を見て之を仁と謂ひ、智者は之を見て之を智と謂ふ。」

解夏小參、「天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、四月十五日も也た與麼、七月十五日も也た與麼、一絲毫許りを移易せず。然も是の如くなりと雖も、纔に擬して與麼なれば、便ち不與麼、窮すれば則ち變じ、變ずれば便ち通ず。看よ看よ、拂子乾坤大地を吞却す。正恁麼の時、天は是れ天ならず、地は是れ地ならず、山は是れ山ならず、水は是れ水ならず。若し這裡に向つて身を轉得し、氣を吐き得ば、妨げず、舊によつて天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、拂子は是れ拂子。所以に道ふ、佛法二千年、一絲毫許りをも移さず。這箇は卽ち且く置く、只だ解制自恁底の一句の如きんば、作麼生か道はん。」良久して云く、「四海而今鏡よりもト淸し、行人路の與に難を爲すことなかれ。」

ホ白雲は自ら白雲。悟了同未語。
ヘ仁者云々。此の世界を人間がみれば娑婆、天人が見れば淨玻璃、餓鬼が見れば地獄。
ト行人路云々。旅に出るに、しかめずらすな。

復た擧す、僧、雲門大師に問ふ、「初秋夏末、東に去り西に去る、前程忽ち人あつて問はば、未審し、如何が祇對せん。」門云く、「(チ)大衆退後。」僧云く、「某甲什麼の過かある。」門云く、「我れに(リ)九十日の飯錢を還し來れ」と。拈じて云く、「雲門大師放去收來、風の如く電の如し。然も是の如くなりと雖も、且つ(ヌ)大人の相なし。若し人ありて崇福に問はゞ、他に向つて道はん、前三三後三三、如何と擬せんを待つて、驀口に便ち打す。」

次の日上堂、「宗師たるものは、只だ本分の事を以て人を接することを貴ぶ。崇福、一夏九旬の內、牙關を咬定して、曾て兄弟の與に本分の事を說著せず。何が故ぞ此の如くなる。人に逢ふては且つ(ル)三分の話を說き、未だ全く(ヲ)一片の心を抛つべからず。」

上堂、擧す、乳源和尙、衆に示して云く、「西來的々の大意、擧唱し易からず。」時に僧ありて出づ、源云く、「(ワ)什麼の時節ぞ、出頭し來る」といつて便ち打す。師拈じて云く、「乳源老漢、(カ)覿面當機、惜むべし、這の僧肯て承當せざることを。且く道く、崇福が者僧、還つて人の承當得することありや。」良久して云く、「有なることは卽ち有、只だ是れ人の知るなし。」

(チ)大衆退後。皆々ひつこめ、のいた〳〵。

(リ)九十日の飯錢を還。不都合したなら飯代拂へ。

(ヌ)大人の相なし。言ふや一ひやうし、眞向から斬り付けるなんて、餘りにおとなげなし。

(ル)三分。十の者なら、三つ程云へ。

(ヲ)一片の心。腹の底丸出しの處を云ふ、陳琳の魏の文帝に語るの語に「人に逢ふては須らく三分の話を說くべし、未だ全く一片の心を抛つべからず、人長へに我れと相好からず、花長へに春と盛開するなし、昨友は今日の寃讎、昨花は今日の塵埃。」

(ワ)什麼の時節ぞ。丑三つの夜中に、こそ〳〵出るのは、盜人か追はぎなり。

(カ)覿面當機。誠にはしこい芝居

開爐上堂、「崇福が開爐は、諸方と同じからず、寒時火に向はざるも、自然に暖氣相洽し、熱時㋵涼に乘せざるも、自ら清風の骨に徹するあり。何が故に、是の如くなる。」拄杖を卓じて云く、「㋟百丈道ふ底。」

冬至小參、「群陰剝盡す、屋頭の山色靜悄々たり。一陽復た生ず、門外の水聲鬧浩々たり。鬧浩々の處靜悄々、靜悄々の處鬧浩々たり。㋹來由あり、巴鼻なし、石筍條を抽く三兩枝、鐵樹花開いて數朶秀づ。要且つ是れ佛法の道理にあらざるなり。只だ是れ時節因緣、且く道へ、是れ什麼の時節ぞ、甚麼の因緣かある。」㋞喝一喝して云く、「曹溪門下、切に忌む㋡俗談することを。」

復た擧す、僧、多福に問ふ、「如何なるか是れ多福一叢の竹。」福云く、「一莖兩莖は斜に、三莖四莖は曲れり。」虛堂先師拈じて云く、「往々に多福を知つて㋤竹を知らず、往々に竹を知つて㋠多福を知らず。」師拈じて云く、「㋭大凡そ衲僧家は、煙を見るのところ便ち火を知る、虛堂和尚甚に因つてか恁麽に道ふ、還つて委悉すや。鶴は㋶九皐の翥翼し難きあり、㋰馬は千里の追風を讃ずる無し。」

を打たれる。

㋵涼に乘。木かげにもよらず、扇も使はぬ。

㋟百丈道底。百丈の道ふ體なり。

㋹來由あり巴鼻なし。わけはある、とらまへどころはない。

㋞喝一喝。ならぬ。

㋡俗談。おだれさいだれなり。

㋤竹を知らず。竹を寄せつけない。

㋠多福を知らず。多福をよせつけない。

㋶鶴は九皐。千里縱橫の九澤で飛べない。

㋰馬は千里。一瞬千里の能なくして、走ること風をも追ひ越す。

㋒叉手當胸。兩手を組んで胸にあてる。

㋭兩手に鼻を揑す。揑はこするなり、二十一日は冬夜、二十二日は冬至。

㋨白衣相に拜。百姓から一足飛

次の日上堂、「一冬二冬、㋒叉手當胸、二十二二十二は、㋼兩手に鼻を摸す。
諸人若し也た會得せば、恰も㋨白衣の相に拜する如く、平生を慶快す。
其れ或は未だ然らずんば、冬至寒食に到る㋔一百單五。」

びに太政大臣と云ふこと。
㋔一百單五。大分時間が違い。

崇福寺語錄上終

太宰府萬年崇福禪寺語錄下

侍者　慈禪等　編

臘月旦上堂、擧す、㋑金峯、僧ありて參ず。峯云く、「吾れに一則の因緣あり、儞に擧似す、切に忌む錯つて會することを。」僧聽く勢を作す。峯云く、「早く錯り了れり。」僧拂袖して便ち出づ。峯云く、「雪上更に霜を加ふ。」師拈じて云く、「高山流水、子期能く之を聽く、是なることは則ち是なり。且く道へ、峰云く、雪上更に霜を加ふと、又作麼生。限りなき清風來つて未だ休せず。」

上堂、「㋺言ふて足れば、終日言ふて盡く道、言ふて足らざれば終日言ふて盡く物なり。且く道へ、道と物と、是れ一か是れ二か。」良久して云く、「一冬二冬、㋩叉手當胸。」

除夜小參、「崇福由前、戒岸寺畔、一片の田地あり、古より今より、曾て變易せず。來々往々、千々萬々なるも、未だ曾て踏着せず。若し人あり、曾て踏着し得ば、脚跟下破㋥糾々地なり。行かんと要すれば、則ち三世の諸佛、手を把つて共に行き、往まらんと要すれば、則ち歷

㋑金峰。曹山の法嗣。

㋺言ふて足る云々。莊子則陽篇に出づ。

㋩叉手當胸。寒いから手出しせぬ。

㋥糾々。三つぐりの繩を糾ふと云ふ、故に糾々は引きしまる形、詩經に「糾々たる葛屨、以て霜を履むべし」とあり。

代の祖師、眉毛厮結ぶ。森羅萬象、總に裡許にあり、清風浩々たり、明月凛々たり。臘月三十日に㋭逗到するも、也た只だ是れ恁麼。臘盡き春囘るも、舊によつて前の如し。且く道へ、是れ什麼の田地ぞ。」拄杖を卓して云く、「㋬契券分明。」

復た擧す、僧、㋣谷隱の慈照禪師に問ふ、「如何なるか是れ道。」照云く、「臘月三十日。」師拈じて云く、「古人恁麼に道ふ、㋠蟲の木を禦んで偶爾として文をなすが如し。忽ち人あり、崇福に如何なるか是れ道と問はゞ、卽ち他に向つて道はん、㋷角は奏す舊年の曲、花は開く新歲の枝と。」

元宵上堂、「風蕭々、雪漫々、古佛心只だ而今、且く道へ、何を以てか驗とせん。」良久して云く、「過去燈明佛、木光瑞如此。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「雨淡紅を洗つて桃萼嫩に、風淺碧を動かして柳絲輕し。如何なるか是れ瞿曇の面目。」師云く、「慈顏已に露る。」僧云く、「柰何せん、露柱㋦横に點頭することを。」師云く、「㋸將に謂へり、人の證明するなしと。」僧云く、「記得す、世尊入涅槃に臨み、文殊佛の再轉法輪を請ふ、世尊咄して云く、『文殊、吾れ四十九年世に住し、未だ曾て一字を說かず、汝吾が再轉法輪を請ふ、是れ吾れ曾て法輪を轉ずるか』と、此の意如何。」師云く、「平生の肝膽、人に向つて傾く。」僧云く、「畢竟

㋭逗到。逗は投と通ず、物の相投合するなり。
㋬契券分明。地卷面に僞なし。
㋣谷隱。首山省念禪師の法嗣。
㋠蟲の木を禦。智度論に出づ、「佛の言く、善く說いて失なきは佛語に過ぐるはなし、諸の外道等、喩へ好言語あるも、蟲の木を食ふて、偶々文を成すが如きのみ。」
㋷角。らつぱのこと。
㋦横點頭。あたまを横にふります。
㋸將に云々。證明のし手はあるまいと思ふたら、えらい知音に遇ふたと。

轉法輪か、不轉法輪か。」師云く、「兩頭を離却して看よ。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「百花競ひ發き、萬物(ヲ)敷榮す。瞿曇滅を示して、迦葉眉を攢む。波旬の(ワ)失笑を引き得たり、一片の涅槃身、頭々都べて漏泄す。今に至るまで千古遮掩し難し。(カ)狼藉たり年々二月の春。」

三月旦上堂、「春色晩に向として、(ヨ)落花地に滿つ、靈山の一會、儼然未散、拈花微笑、萬古に現成す。更に何人かあつて眼流星の如くなる。」喝一喝して云く、「(タ)大家這裡にあり。」

三月半上堂、「春風浩々、春雨微々、水は溪澗に滿ち、風は落花を掃ふ。好箇衲僧の巴鼻、(レ)巴鼻なく來由あり、眼を眨得し來れば三千里。」

擧す、僧雲門に問ふ、「如何なるか是れ清淨法身。」門云く、「山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。」師拈じて云く、「韶陽老人恁麼に道ふ、是なることは卽ち是なり、諸人恁麼に(ソ)會せば、卽ち未だ可ならざることあり。且く道へ、(ツ)利害什麼の處にかある。具眼のものは試みに辨じて看よ。」

浴佛上堂、「聲前の一路、佛未だ出世せざるとき、早く是れ漏逗す。末後の一機は、佛出世の後、處

(ヲ)敷榮。あまねく榮ゆるなり。
(ワ)失笑。やれ〳〵、てもまあ、目出度やとふきだす。
(カ)狼藉。常樂我淨四智圓福の身が、あちらにも、こちらにも、亂暴狼藉なりと。
(ヨ)落花地に滿つ。花は散れども散らない花がある。
(タ)大家這裡にあり。皆の衆よ、こゝにある。
(レ)巴鼻なく來由あり。手がかりは無いぞ、而も春風春雨あり。
(ソ)會。湛へて藍の如しが、清淨法身と認めばなり。
(ツ)利害。長短と同じ。

處に成現す。直饒ひ恁麼に會得し去るも、釋迦老子を見んと要せば、太だ遠きことあり。何が故ぞ、豈に道ふことを見ずや、天上天下(ネ)唯我獨尊。」

上堂、僧問ふ、「一機一境、盡く今時に落つ。化門に渉らず、如何が信を通ぜん。」師云く、「南地の竹、北地の木。」僧云く、「露柱暗中に横に點頭す。」師云く、「更に知音のあるあり。」僧云く、「只だ馬祖陞堂、百丈捲席の如き、意何の處にかある。」師云く、「燒塼打着す(ナ)連底の凍。」僧云く、「祖便ち下座して方丈に歸る、又如何。」師云く、「他家自ら(ラ)通霄の路あり。」僧云く、「恁麼ならば則ち鯨海水を呑み盡して、珊瑚の枝を露出す。」師云く、「更に一歩を進めよ、看ん。」僧云く、「(ム)稛載して往き、垂橐して歸る」と。便ち禮拜す。

師乃ち云く、「渾崙句子、現成の公案、從上の佛祖、提撕不起、天下の衲僧、名狀し出さず。纔かに思惟に渉れば、白雲萬里。崇福今朝(ウ)快便逢ひがたし、分明に說破し去らん。山前麥熟すや也た未だしや。」

結夏小參、「偏法界即ち圓覺の伽藍、何の處か安居せざる。盡大地是れ衲僧の自己、阿誰か平等ならざる。況んや是れ烏山林に啼いて世尊の密語を顯揚し、水磵下に流れて古佛の心宗を潛通す。頭々轍に合し、處々原に逢ふ。恁麼に會得せば、劍樹刀山も意に任せて遊戲し、鑊湯爐炭も入らんと要せ

(ネ)唯我獨尊。一は聲前、二は末後、三は唯我獨尊。
(ナ)連底。水底迄一枚の氷、燒け瓦が打ちぬいた。
(ラ)通霄の路。人の知らないぬけみち。
(ム)稛載。車に一ぱい載せること、垂橐は空らぶくろをぶらさげること。
(ウ)快便逢ひがたし。こゝちよきたよりは、二度と得難い。

ば便ち入る。是の如く護生し、是の如く禁足し、方に始めて沙門行履の處となす。其れ如し未だ然らずんば、長連牀上、粥あり飯あり。」

復た擧す、僧、雲門大師に問ふ、「如何なるか是れ直截の處。」門云く、「㋼主山の後。」僧云く、「師の指示を謝す。」門云く、「㋨皮袋を合取せよ。」師拈じて云く、「雲門大師、是なることは卽ち是なり、崇福は卽ち然らず、忽ち人あり、如何なるか是れ直截の一路と問はゞ、便ち云はん、法堂前と。他の師の指示を謝すと道ふを待つて、只だ他に向つて道はん、禮拜し了つて退けと。」

次の日上堂、擧す、五祖云く、「今日結夏、大衆に供養すべきなし、㋔一家宴をなして、諸人を管待せん。」遂に手を擧して云く、「羅囉招、邏囉遥、邏囉送、怪む莫れ空疎なることを。伏して惟れば珍重。」師拈じて云く、「五祖老人、好箇の家宴、只だ是れ㋗節拍全くなし。崇福今日結夏、也た是れ大衆と箇の家宴をなさん。德山の歌、雲門の曲、㋳氈拍板、無孔笛、一時に吹唱して叢林を鬧熱し、諸禪德をして貧を拔き富をなさしめん。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「一曲兩曲人の會するなし、雨過ぎて青山溪水深し。」

上堂、「五月初一、舊時の話頭を擧せず、只だ現成の公案によつて、諸人と相見せん。」驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「山前麥熟すや也た未だしや。」

㋼主山の後。後の山の其の又うしろ。まはり遠い答なり。
㋨皮袋を合取せよ。だまれ、やかましいと、眞向から出た。
㋔一家宴、出來合せの御馳走なり。
㋗節拍。かうした節拍と云ふ、丸で葱の様で、ふしも打ち込みもない。
㋳氈拍板。毛氈で包んだひやうし木、鳴らぬもの。

端午上堂、「崇福尋常、禪を說かず道を說かず、麁食淡飯、分に隨つて時を過す。今朝五月五天中の節、却つて請ふ拄杖子、箇の消息を通ぜよ。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「㋮天行已に過ぐ、使者須らく知るべし。」

五月半上堂、「人々自ら一片の田地あり、四至界畔、曉然として明白、諸人若し也た一踏に踏著せば、行住坐臥、常に其の中にあり、左之右之、是不是なし。飽食安眠、未だ分外となさず、然も是の如くなりと雖も、且く道へ、其の中の事又作麼生。」拂子を擊つて云く、「薫風自南來、微涼生殿閣。」

中夏上堂、擧す、㋘梁山因に、眞園頭問ふ、「家賊防ぎ難き時如何。」山云く、「識破せば冤をなさず。」眞云く、「識破して後如何。」山云く、「無生國裡に貶向す。」眞云く、「是れ他の安身立命の處なること莫しや。」山云く、「死水、龍を藏さず。」眞云く、「如何なるか是れ活水の龍。」山云く、「波を興して浪を作さず。」眞云く、「忽然として㋫傾湫倒嶽の時如何。」山下座、扭住して云く、「老僧の袈裟角を濕却することを得ざれと。」若し人あり、崇福に家賊防ぎ難き時如何と問はゞ、只だ他に向つて道はん、㋙贓に和して敗闕すと。敗闕して後如何、身を藏すに路なし。」

七月旦上堂、「暑退き涼生じ、樹凋み葉落つ、時節因緣相慢せず、林下の衲僧機用活す。崇福門庭

㋮天行云々。天帝の行令は、最早すんだ、行令の使者は知つてゐる。
㋘梁山。緣觀禪師は、同安の志の法嗣、會元の十四に載す。
㋫傾湫倒嶽。堤が切れ山抜けする時、浪を作さずを、踏んで云ふ。
㋙贓に和して敗闕。コンミツシヨンを取られて、公事はまけたり。

此れより昌盛。且く道へ、何を以てか驗とせん。」拂子を擊つて云く、「秋至つて㊁鴈蘆を含む。」

解夏小參、僧問ふ、「九夏の賞勞、請ふ師言薦せよ。」師云く、「淸風徧野に動き、塞鴈長天に鳴く。」僧云く、「便ち恁麽にし去る時如何。」師云く、「更に須らく子細にすべし。」僧云く、「臨濟に三句あり、如何なるか是れ第一句。」師云く、「黃葉虛庭に落つ。」僧云く、「如何なるか是れ第二句。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」僧云く、「如何なるか是れ第三句。」師云く、「無孔の鐵鎚當面に擲つ。」僧云く、「三句分明に指示を蒙る、向上の宗乘又如何。」師云く、「天の高きも蓋ひ盡さず。」僧便ち禮拜す。又僧あり、問ふ、「聖制已に圓に、秋風面に滿つ。正與麽の時、願はくは提唱を聽かん。」師云く、「秋林葉落ち、秋月戶に當る。」僧云く、「恁麽なるときは則ち意氣ある時は意氣を添へ、風流ならざるところ又風流。」師云く、「更に奇特のあるあり。」僧云く、「記得す、翠岩、衆に示して云く、『一夏兄弟の爲に東語西話す、看よ、翠岩が眉毛在りや』と、意何の處にかある。」師云く、「爛泥裡に刺あり。」僧云く、「保福云ふ、賊となる人心虛ると、如何が委悉せん。」師云く、「賊、賊を知る。」僧云く、「長慶云ふ、生也と、又如何。」師云く、「兩重の公案。」僧云く、「雲門云ふ、關と、畢竟如何。」師云く、「突出辨じ難し。」僧云く、「只だ三古德の翠岩の門風を扶起するが如きんば、還つて優劣ありや也た無や。」師云く、「途を同じうして轍を同じうせず。」僧云く、「當時若し翠岩の看よ眉毛在りやと道ふを見ば、未審し

㊁雁含蘆。淮南子脩務に曰く、「雁は風に順つて以て氣力を養ひ、蘆を含んで翔り、以て繒弋に備ふ」と。是れは翼を射られるを恐れて、蘆を含んで的を亂すなり。

和尚如何が祇對せん。」師云く、「覿面相瞞ず。」僧云く、「學人今夜小出大遇」と。便ち禮拜す。

師乃ち云く、「九旬制内、崇福の一衆、㋢眼戸に掛けず、意、玄に停まらず、水邊林下に、懷を忘じ照を絶し、石上松根に、月に嘯き雲に眠る。今は則ち法歳周圓、三期滿を告ぐ。行かんと要すれば便ち行き、坐せんと要すれば則ち坐し、當處を離れず、物外に逍遙す。拄杖頭邊淸風を起し、草鞋跟底乾坤闊し、甚の萬里無寸草とか說かん。㋻彩は鯫家に奔る、笑ふに堪へたり門を出づれば是れ草、㋚隨婁搜の漢、粟を種ゑ畬を開き、晝飡夜寢、又是れ靈龜尾を拽く。崇福門下は總に不與麽、畢竟如何が行履せん。」拄杖を卓すること一下して、「大鵬一擧九萬里。」

擧す、雲門、僧に問ふ、「何の處よりか來る。」僧云く、「岳山より來る。」門云く、「吾れ曾て人の與に㋖葛藤せず。」乃ち云く、「來れ。」僧近前す。門云く、「去れ。」師拈じて云く、「雲門大師、人をして近前退後せしむ、早く是れ葛藤し了れり。崇福は卽ち然らず、僧に問ふ、何の處よりか來る、僧の岳山より來ると云ふを待つて、劈脊に便ち打たん。何が故ぞ、吾れ曾て人の與に葛藤せず。」

次の日上堂、僧問ふ、「禁足安居は、㋙困魚濼に止まる、剋期取證は、鈍

㋢**眼戸に掛けず云々**。是れは聖制中の樣子、兩樣に見ゆれども外はどうじやと戸口をながめ、式は玄々の窠窟に停滯する事は、許さぬと把住の方に見るべし。

㋻**彩は鯫家に奔る**。賽の日はへたばくちの方へ飛ぶものなり。

㋚**隨婁搜**。是非の辨別なくして他人の語に從ふを云ふ、傍人看場と同じ。

㋖**葛藤せず**。まはりくどいことはせぬ。

㋙**困魚濼に止まる、鈍鳥蘆に棲む**。濼は道路の凹みにたまつた雨水、濼水の魚、蘆葦中の鈍鳥は、一時の小康を得るも

鳥籠に栖む。今朝解制、如何が轉身せん。」師云く、「徧界活路通ず。」僧云く、「恁麼なれば則ち青山綠水草鞋底、明月清風拄杖頭。」師云く、「前面、虎に逢着せば、道ふことなかれ、㋱翁々道ひ來らずと。」僧云く、「記得す、洞山、衆に示して云く、『兄弟、初秋夏末、直に須らく萬里無寸草のところに向つて去るべし』と、意旨如何。」師云く、「也た是れ草裡の漢。」僧云く、「石霜の云ふ、『何ぞ門を出づれば是れ草と道はざる』と、又如何。」師云く、「知らず脚下草還つて生ずることを。」僧云く、「山聞いて云く、『大唐國裡、能く㋯幾人かある』と、如何が理會せん。」師云く、「千里同風。」僧云く、「只だ萬里無寸草の處の如きんば、如何が去らん。」師云く、「急に㋰走過せよ。」僧云く、「前程忽ち人ありて、和尙に今夏の事を問着せば、未審し如何が祗對せん。」師云く、「前三三後三三。」僧便ち禮拜す。又僧あり、問ふ、「㋙袖頭に領を打し、腋下に襟を剜ることは則ち問はず、獨脫底の句、願はくは舉揚を聽かん。」師云く、「㋪脚頭脚底清風を起す。」僧云く、「尙ほ㋲廉纖に涉ることあり。」師云く、「㋝韓獹、塊を逐ふ。」僧云く、「只だ自恣斯に臨み、㋜法堂新に開くが如きんば、還つて新底の佛法ありや也た無や。」師云く、「燈籠露柱に

眞個の安樂の大澤深林にあらず。

㋱翁々道ひ來らず。此の樣な恐ろしい目に遇ふた時、爺さん氣がきかない、なぜ言ふて吳れなんだなどと、泣言云ふな。

㋯幾人がある。大鼓を敲いて搜しても一人もない。

㋰走過。馬鹿め、ぐづつくな。

㋙袖頭云々。會元十一に鎭州萬壽和尙、僧問ふ「如何なるか是れ迦葉上行の衣、」壽云く、「鶴は飛ぶ千點の雪、雲は鎖す萬重の關、」問ふ「何如なるか是れ丈六の金身、」壽云く、「袖頭に領を打し、腋下に襟を剜る」に基く、袖口にえりを付けたり、腋の下へあなをほがしたりすることは問はぬと。

㋪脚頭脚底。大德開山投機の頌に「金色の頭陀手を拱して還る、脚頭脚底清風を起す」の句あり、蓋し大應の錄を愛讀せ

掛く。」僧云く、「記得す、臨濟、衆に示して云く、『赤肉團上に一無位の眞人あり、常に諸人の面門にあつて出入す、未だ證據せざるものは、看よ看よ』と、此の意如何。」師云く、「覿面當機更に㋑回互なし。」僧云く、「時に僧あり、出でて問ふ、『如何なるか是れ無位の眞人。』濟擒住して云く、『道へ道へ。』如何が領略せん。」師云く、「迅雷耳を掩ふに及ばず。」僧云く、「僧擬議す、濟托開して云く、『無位の眞人、是れ何の乾屎橛ぞ』と、又如何。」師云く、「㋺曲直を藏せず。」僧云く、「㋩岩頭聞き得て覺えず舌を吐く、是れ何の心行ぞ。」師云く、「知音知つて後、更に誰か知る。」僧云く、「雪峯の云ふ、『臨濟大いに㋥白拈賊に似たり』と、還つて臨濟を識得すや也た未だしや。」師云く、「早く雪峯に覰破せらる。」僧云く、「畢竟如何なるか是れ無位の眞人。」師云く、「高く眼を著けて看よ。」僧云く、「與麼なれば則ち粉骨碎身も、未だ酬ゆるに足らず。」師云く、「恩を知つては方に恩を報ずることを解す。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「暑退き涼生じ、樹凋み葉落つ。林下の衲僧、㋭全機獨脫なり。露柱燈籠、箇々心空、狸奴白牯、一々眼活す。然も是の如くなりと

られしより成りしか。

㋲廉纎。圓悟心要に出づ、むしやむしやすることを云ふ、廉も纎も微細の義あれば、こまごましき有樣のところ。

㋝韓獹は倭犬の名。

㋜法堂新に開く。師崇福住持中に法堂の新築ありしと見ゆ。

㋑回互。折れまがりなし。

㋺曲直を藏せず。曲つたものは正直を寄せつけない。

㋩岩頭聞き得て云々。是れは臨濟の沒後に、其の弟子常上座より此の話を聞きしなり。

㋥白拈賊。ひるとんび、きんちやくきりなり。

㋭全機獨脫。帶もふんどしも脫いだ。

㋬楚鷄と丹鳳とは姿は似ても、貴賤霄壤、昔し楚鷄を丹鳳と間違へて、王に献ぜしものあり。

㋣冷地。局外と同じ。局外者は

雖も、崇福が拄杖子、猶は未だ點頭せざることあり。何が故ぞ。㋬楚鷄は是れ丹山の鳳にあらず。」

八月旦、大風の後上堂、「大機を顯し大用を發し、門に入つては便ち棒し、門に入つては便ち喝す、恰も疾風卒雨、傾湫倒嶽の如し。然も是の如くなりと雖も、㋣冷地に看來れば、力を費すこと少からず。所以に崇福順時保愛、坐ながらに太平を致す。且く道へ、甚によつてか是の如くなる。」良久して云く、「豈に道ふことを見ずや、㋠萬般の施設、常には如かず。」

中秋上堂、「靈山に月を指し、曹溪に月を話る。當頭未だ光影を出でず、南泉拂袖して歸り去るも、猶ほ第二に落つ、㋷長沙一踏に踏倒するも、一半を用ひ得たり。且く道へ、如何なるか是れ那一半。」拂子を以て圓相を打して云く、「㋦團々として海嶠を離れ、漸々として雲衢を出づ。」

九月旦上堂、「風颯々、雨濛々、黃葉は地に滿ち、塞鴈は空に橫ふ。是れ佛法の要妙にあらずや、只だ是れ時節因緣。且く道へ、今日は是れ什麼の時節ぞ、什麼の因緣かある。大衆若し也た會得せば、妨げず㋸途中受用なることを。其れ如し然らずんば、㋾世諦流布に一任す。」

頭腦冷かなり。

㋠萬般の施設常に如かず。種種雜多の心遣ひよりは、尋常普通のあしらひがまし。

㋷長沙一踏。長沙の岑和尚と仰山の寂と月見をせし時、仰山が誰にもこれがあるに、見事用ふること出來ないと云ふたら、岑がいや丁度お前を借ふて用ひさせて見ようと云ふ、すると仰山がお前はどう用ふるなどとやり返すと、岑は卽座に仰山の胸元へこぶしをあてゝ倒るゝと、胸元をいやと云ふ程踏みつけた、仰山は覺えずきやつと叫んで、丸で猛虎の樣な和尚じやと云つた。

㋦團々として海嶠を離れ云云。是れは如滿の詩なり、如滿此の句を得て喜び極つて狂し、鐘を亂打す。雲衢は半天に橫はる雲なり。

㋸途中受用。右往左往に菩薩の

開爐上堂、「大地を爐となし、須彌を炭となす。崇福が家風、未だ是れ寂寥ならず、且つ火邊に去つて坐せよ。㋻切に忌む更に商量することを。」喝一喝す。

冬至小參、僧問ふ、「葭管㋕灰を飛ばし、繡紋線を添ふ。時節に渉らず、請ふ師提唱せよ。」師云く、「天は東南に高く、地は西北に傾く。」僧云く、「潙山、仰山に問ふ、『仲冬嚴寒年々の事、晷運推し移る事若何。』仰山叉手進前して立つ、意旨如何。」師云く、「亂に㋵懷袋を呈す。」僧云く、「潙云ふ、『情に知る、汝が此の話に答へ得ざることを』と、又如何。」師云く、「爛泥裡に刺あり。」僧云く、「潙山又此の話を以て香嚴に問ふ、嚴云く、『某㋟偏に此の話に答へ得ん。』潙云く、『汝如何。』嚴叉手進前して立つ、如何が領略せん。」師云く、「同坑に異土なし。」僧云く、「潙云ふ、『幸に寂子が不會に遇ふ』と、畢竟如何。」師云く、「㋹眼東南を觀て意西北にあり。」僧云く、「和尚今夜徹底老婆。」師云く、「更に一歩を進めよ看ん。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「㋞群陰消盡、葭灰未だ飛ばず、玄機を未兆以前に戢め、一氣潛通、律管先づ知り、㋡冥運を卽化の際に藏す。洞山菓卓を撥退し、皓

行を行ずるなり。

㋾世諦流布。目出度や悲しや、欲しや、憎くや也。

㋻切に忌む商量。おれの處は、斯く迄、富貴自在なり、其れによそは、飯が白いの、黑いの、作務が荒いの、樂なのと、言つてゐる。

㋕灰を飛ばし線を添ふるは、一陽來復の端的なり。

㋵懷袋。大根のはしや、芋の皮や飯の殘りを入れた乞食袋、ちゞむさき袋をかつぎだした。

㋟偏に。的確にと云ふ程ならん。

㋹眼東南意西北。仰山にひいた弓が香嚴に中つた。

㋞群陰云々。時節を云ふ、洞山菓卓云々は、引喩、所以に崇福云々は本意。

㋡冥運。冥々裡の推移、卽化、晷運推移すれば化其の中にあ

老の布裩を洗はず。潙仰父子、進前退後、總に這裡を出でず。所以に崇福只だ現定によつて、時に應じて(ネ)禕を納れ、他の否極まつて泰來るに還す。自然に時あり節あり。何が故ぞ、是の如くなる。」良久して、「皇天親なし、(ナ)惟だ德是れ輔く。」

擧す、(ラ)荷澤、思和尚の處に到る、思問うて云く、「何の處よりか來る。」澤云く、「曹溪。」思云く、「曹溪の意旨如何。」澤(ム)身を振つて立つ。思云く、「猶ほ瓦礫を帶ぶることあり。」澤云く、「(ウ)此間黃金あることなしや。」思云く、「縱ひあるも甚の處に向つてか著けん。」師拈じて云く、「二老の相見、賓主歷然、然りと雖も、未だ勦絶することを得ざることあり。若し是れ崇福ならば、他の此間、黃金あることなしやと問ふを待つて、便ち(オ)一拳を與へん。何が故ぞ。黃金自ら黃金の價あり、終に沙に和して人に賣與せず。」

次の日上堂、僧問ふ、「朔風地を拂つて黃葉を捲き、門外の千峯寒色凛たり、正與麼の時、願はくは擧揚を聽かん。」師云く、「冬日煕々として門に當つて照す。」僧云く、「恁麼なれば則ち岸柳未だ眼を開かざるに、庭梅先づ花を發く。」師云く、「(ノ)劫外春風動く。」僧云く、「佛眼の遠禪師、寒夜孤坐、爐を撥つて火一豆許りを見て云く、『深々に撥つて些子あり』と、遽かに几上の傳燈錄を閱し、

り。

(ネ)禕を納れ。無量の福壽海を享受す。

(ナ)惟德。正人君子も斬り取り劫盜も、其れぐ御助けがある。

(ラ)荷澤神會禪師が、青原行思禪師の處にやつて來た。

(ム)身を振つて立つ。裾や袂をふりはらつて、によつきりとつつ立つた。

(ウ)此間黃金。此の貧乏寺には小判はありはすまい。

(オ)一拳。こがれか、しろがれか、はたあらがれか。

(ノ)劫外。億劫以前なり。

㋔破竈墮の因縁に到つて、忽然として大悟す。還つて端的なりや也た無や。」師云く、「貧兒の寶を得るが如し。」僧云く、「圜悟因つて㋗青林搬土の話を以て之を驗す、乃ち云く、『且喜すらくは、遠兄便ち活人の句あり』」と、又如何。」師云く、「知音知つて後更に誰か知る。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「天寒人寒、㋳大家者裡にあり、便ち與麼に去る、都べて㋮縫罅なし。崇福今朝、略一線路を通じ去らん、普天の和氣を管取せよ。」拂子を擊つて云く、「直に得たり、一陽來復、人々東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、箇々拜する底は拜し、賀する底は賀す。何が故ぞ是の如くなる。㋘一氣言はず有象を含む、萬靈何の處にか無私を謝せん。」

上堂、乾峯、衆に示し、「㋫一を擧して二を擧するを得ざれ、一着を放過せば、第二に落在す。」雲門、衆を出でて云く、「昨日人あり、天台より來る、今日却つて南嶽に往き去る。」峯云く、「典座、來日普請することを得ざれ。」師拈じて云く、「氈拍板、無孔笛、㋙狹路に相逢うて音靑霄に徹す。崇福也た是れ一を擧し去らん。今朝臘月初一日、諸人㋓切に忌む、道着することを。來日は初二日。」

㋔破竈墮の因縁。是れは破竈墮和何が、竈に引導を授けて、破碎せし因縁なり、引導の語に、杖を以て竈を敲くこと三下して曰く「咄、此の竈、泥瓦合成、聖何より來り、靈何より起る、恁麼に物命を烹宰すや、」又打つこと三下す、竈爲に破墮すと、蓋し佛照は此の偈にて自己を證明せしなり。

㋗青林搬土の話。是れは竈を敲くこと三下より、柴三束を運ばしむる因縁を持ち出して驗せしなり、鐵輪天子寰中の旨にて、衲僧もさうとりつめられて身はたらきが出來ぬ、さあどうじやと切り掛けし時帝釋宮中より赦書を放つと、佛眼が答へた故、圜悟も遠兄活人の句ありと賞せしなり。

㋳大家這裡にあり。皆々こゝに縮こまつて居る。

除夜小參、「只だ這の一枝の拂、眞に椶櫚鐵作骨、古より今に至るまで、未だ嘗て變易せず。年窮まり歳盡くるも也た是れ(テ)烏散々地、臘去り春廻るも舊によつて前の如し。然も是の如くなりと雖も、拈起せば也た天廻り地轉ず、放下せば也た風行き草偃す。不拈不放なるとき(ア)時に應じて祐を納れ、坐ながら太平を致す。且く道へ、這の一枝の拂子、箇の什麼に憑つてか恁麼に奇特なることを得たる。」良久して云く、「只だ(サ)老胡の知を許して、老胡の會を許さず。」

復た擧す、僧、谷隱の慈照禪師に問ふ、「如何なるか是れ道。」照云く、「臘月三十日。」師拈じて云く、「好し大衆、一片の皓玉瑕なし、切に忌む(キ)動著することを。何が故ぞ、文を雕つて德を喪す。」

正旦上堂、「大機圓應、大用無方、天の普蓋の如く、地の普擎に似たり。風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ。且く道へ、甚に因つてか是の如くなる。」拄杖を拈じて一下して云く、「(ユ)彩は齪家に奔る。」

上堂、「古者の道ふ、法輪未だ轉ぜず、食輪先づ轉ず。崇福が這裡、法輪常に轉じて、食轉未だ轉ぜず。忽ち若し兩輪共に轉ずる時如何。」驀に拄杖

(マ)繃𦁤。わひめ、かけめ、丸で鋼鐵で張り詰めた樣で、微塵も漏さぬ。

(ケ)一氣言はず。冬至は陰の極なり、陰極の處、既に白々紅々廿四番の春を含む。

(フ)一を擧して云々。お茶と云ふたら、まう飯は持つて來るな、一寸ゆるめると、直きに增長する。

(コ)狹路に云々。幡隨院長兵衞と水野十郎左衞門が、露地で出逢ふて、頭をコツツコするとがんと云ふ音が天まで響いた。

(エ)切忌道着。内證じやぞ、えいか、人に話すな。

(テ)烏散々地。烏は拂子の毛の黑きを云ふならん、散々はばらばらするをいふ。

(ア)時に應じて祐を納る。其の時節時節に應じて福德圓滿を授與し、天下の泰平を挽回す。

を拈じて連卓兩下して云く、「三世の諸佛立地に聽き、森羅萬象齊しく鼓舞す。」

三月旦上堂、「孟春は猶ほ寒く、孟夏は漸く熱す。諸人自ら合に時節を知るべし、山僧が口を開いて說くを待つことなかれ、黃鶯枝上に分明に說く。且く道へ、(メ)箇の什麼をか說く。」喝一喝す。

三月半上堂、「桃花は紅に梨花は白し、靈雲の悟處尙ほ依然たり、玄沙の未徹人の識るなし。人の識るなし、吾をして特地に(ミ)南泉を憶はしむ。」

結夏小參、「天際日上り月下り、檻前山青く水綠に、南斗は七北斗は八、牛頭沒し馬頭回る。幸に自ら恬然として一事なし、二千年前の大覺世尊事已むことを獲ず、模を起し樣を畫し、喚んで圓覺伽藍平等性智となす。若しくは聖若しくは凡、情と無情と、總に裡許にあり、菩薩乘に據り寂滅行を修し、玆より後代の兒孫をして、箇々(シ)梅林を望んで渴を止めしむるを致す。一人の獨脫底の漢あることを見ず、崇福が拂子、今夜忍俊不禁にして、出で來つて一擊に靈山多年の窠窟を擊碎す。」拂子を以て擊一擊して云く、「一擊に擊碎し了れり。又甚麼の處に向つてか禁足護生せん。」良久し、

(サ)老胡の知。尻撥く丈はまけてやるが、屁垂れる事はならぬと云ふ語なり。

(キ)動着。けろつくな、けろつくと正月の餅喰へぬ。

(ユ)彩は齷家に奔る。賽の目は、へたばくちへ往くとも、きれいな女が、醜夫に嫁すとも用ひらる。彩は精彩なり、齷は齷齪にて、ちゞむさいことなり。

(メ)箇の什麼をか說く。鶯は法華經をば忘れはて、うら淋みしくもぎやく〳〵と鳴く。

(ミ)南泉を憶はしむ。靈雲は、桃花を一見してより、更に疑はずといつたに、大應國師は、いなした媽の味が忘れられぬと。

(シ)梅林を望んで渴を止む。面白き言ひ廻しなり、昔し曹操軍に臨む、兵士渴を憂ふ、操云く、「進め、近く梅林のあるあ

て云く、「切に忌む㋽囚に停めて智を長ずることを。」

復た擧す、藥山和尚坐する次、僧あり來り參ず、問うて云く、「和尚兀々地に箇の什麼をか思量す。」山云く、「不思量底を思量す。」僧云く、「不思量底、如何が思量せん。」山云く、「非思量。」師拈じて云く、「藥山老漢、一等に是れ老婆心切なり、然も是の如くなりと雖も、大衆還つて不思量底を知るや。」良久して云く、「㋪分明に記取せよ。」

次の日上堂、「靈源不昧なれば、萬法を擧して全く彰れ、妙用繁興せば、法界を稱げて齊しく起る。一歩を行ずれば瞿曇の眼睛を踏著し、一指を擧すれば達磨の鼻孔に築著す。恁麼の禁足ぞ、恁麼の安居ぞ、㋲眼を眨すれば便ち一夏を過す。其れ或は未だ然らずんば、㋝西天令嚴なり。」

藏主の秉拂並に齋を謝する上堂、「一句子あり、百味具足す。從上の佛祖も提持し到らず、一大藏敎も該載し及ばず、今日㋜快便逢ひ難し。崇福手に信せて拈出して、諸人に供養せん。」驀に拄杖を拈じて擲下して云く、「麁湌は㋑飽き易く、細嚼は飢ゑ難し。」

解夏小參、「橫岳峰頂、峭峻巍々、千古萬古到るもの還つて稀なり。霧擁し雲屯し、日炙し風吹く。

り」と、兵士皆津液を生ず。

㋽囚を停めて智を長ず。裁判官がぐづぐづして、判決を怠ると、其の内に罪人めが罪を免れる口實を考へ出す。

㋪分明に記取。忘れてしまへで無くて、覺えて置けなり。

㋲眼を眨すれば便云々。兀十六億七千萬年も、唯だ是れ一刹那。

㋝西天令嚴。威儀凜々として、風をも通ぜず。

㋜快便。此の樣な痛快な、追手風は容易に逢ひ難し。

㋑飽き易く飢ゑ難し。飽くもひもじいも、同じとなり、千松は腹がへつてもひもじうない。

歷代の祖師も仰望し及ばず、天下の衲僧も脚を著くること得ず。今夏九十日の內、八十餘員の禪和、同じく此に結制安居し、各自に尅期取證す。風前月下、兩々三々、林邊水際、任意に遊戲す。今は則ち法歳周圓す、且く道へ、還つて一箇半箇の親しく頂顙に到る底ありや。其れ或は未だ然らずんば、」拂子を擊つて云く、「千峯の勢は㋺岳邊に到つて止まり、萬派の聲は海上に歸して消す。」

復た擧す、僧あり仰山に到る。(山)云く、「甚麽の處よりか來る。」僧云く、「廬山より來る。」山云く、「曾て五老峯に到るや。」(僧云く、)「曾て到らず。」山云く、「㋩闍梨曾て遊山せず。」雲門大師云く、「仰山、此の語、慈悲の故に落草の譚あり。」師拈じて云く、「仰山恁麽に道ふ、當時大唐國裡能く幾人かあつて知る。雲門此の一語を著得す。殊に知らず、㋥落草の譚愈甚だしきことを。具眼のものは辨取せよ。」

次の日上堂、「結は是れ誰か結す、虛空㋭釘橛、解は是れ誰か解す、虛空剝烈。解結以前に見得して親しければ、千里萬里一條の鐵。」

重九上堂、僧問ふ、「汾陽云ふ、『㋬重陽九日菊花新なり』と、意旨如何。」師云く、「現成の公案。」僧云く、「臨濟會下、兩堂の首座、相見齊しく喝と下す時如何。」師云く、「也た㋣照あり、也た用あり。」僧云

㋺岳邊。五岳なり。千峰一々五嶽にあつまり、江河の萬派、皆東海に朝す、止と消とは國師提唱の眼目。
㋩闍梨曾て遊山せず。こちらはどう、あちらはどうと、眺め廻さぬ男なり。
㋥落草譚愈甚。仰山一橛と得、雲門半橛と得たり。
㋭釘橛剝烈。釘橛は虛空の釘付け、豆腐のかすがひ、剝烈は虛空の皮むき、烈は蓋し裂の字の誤り。
㋬重陽九日。汾陽の三玄三要の提頌に、「三玄三要事難ㇾ分、得意忘言道易ㇾ親、一句明々該二萬象一、重陽九日菊花新。」
㋣照用。本體と作用。

く、「僧あり、問ふ、『這の兩喝、還つて賓主ありや也た無や。』濟云く、『賓主歷然』と、又如何。」師云く、「文彩已に彰る。」僧云く、「人天衆前、伊を(チ)蓋覆し得るや也た無や。」師云く、「蓋覆するに處なし。」僧云く、「甚としてか蓋覆するに處なき。」師云く、「賓主歷然。」僧便ち禮拜す。又僧問ふ、「重陽九日風光別に、處々の樓臺人を醉倒す。這般の保社に入らずんば、和尚如何が施設せん。」師云く、「天高うして萬象正し。」僧云く、「只だ步々高きに登る底の人の如きんば、還つて向上の一路を踏著すや也た無や。」師云く、「蹉過すれども也た知らず。」僧云く、「記得す、僧、古德に問ふ、『如何なるか是れ祖師西來意。』德云く、『東籬の黃菊』と、意旨如何。」師云く、「突出辨じがたし。」僧云く、「請ふ、師一枝を拈起して看よ。」師云く、「未だ拈起せざる時、全機顯露す。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「黃花は舊叢に發き、茱萸は烟紫を凝し、塞雁は長天に鳴き、蟋蟀は草底に吟ず。古佛心、祖師意、一時に漏泄す。甚に因つてか是の如くなる。」良久して云く、「(リ)時節既に至る。」

虛堂和尚忌、香を拈じて、「大宋淩霄峯頂に收得して、多年囊藏被蓋す。日本崇福山中に拈じ來つて、幾廻か天を薰じ地を炙す。斤兩多きことをなし、根苗異なることあり、(ヌ)巴陵の三轉語を說くことを休めよ。只だ要す偏界

(チ)蓋覆。おほひつゝむの意、此の僧仄かに文彩を知る、故に此の問を發す。

(リ)時節。此の時節は、佛性の義を知らんと欲せば、時節因緣を觀ずべしの時節なり。

(ヌ)巴陵三轉語。岳州巴陵の顥鑒禪師、住院の後、嗣法の書を呈せず、只だ三轉語を以て雲門に呈す、曰く、「如何なるか是れ提婆宗、銀椀裡に雪を盛る。」「如何なるか是れ吹毛劍、珊瑚枝々撐二着月一。」「如何なるか是れ道、明眼人落井。」雲門曰く、「他後老僧が忌日に、此の三轉語を擧すれば以て恩に

香風の起らんことを。」

十月半上堂、擧す、明招の謙和尙、衆に示して云く、「這裡(ル)風頭稍硬し、且く煖處に歸つて商量せん。」衆後に隨つて到る。招云く、「纔かに煖處に到つて、便ち瞌睡するを見る」と、便ち趁ひ散ず。師拈じて云く、「明招老漢、盤に和して撥出す夜明珠。惜むべし、當時一衆、眼裡に筋なく、人に隨つて上下す。大衆若し也た會得せば、一場の富貴。其れ或は未だ然らずんば、切に忌む商量することを。」

冬至小參、「六陰剝盡して、群機を未兆に戢め、一陽來復して、萬象を不言に含む。直に得たり、鐵樹花を開き、石筍條を抽くことを。君子小人、各其の宜しきを得、情と無情と同じく欣顏を展ぶ。太宰府裡、崇福山頭、和氣藹然たり。然も是の如くなりと雖も、仲冬嚴寒、晷運推移し、日南長至す。皓老の布裙は、依然として(ヲ)赫赤、又作麼生。陰陽到らざる處、分外の好風光。」

復た擧す、「潙山、仰山に問ふ、「即今の事を問はず、古よりの事如何。」仰山叉手進前す。潙云く、「猶ほ是れ即今の事。」仰山叉手退後す。潙云く、「我れ汝を屈し汝我れを屈す。」師拈じて云く、「仰山進前退後す、步々古今の一路を踏着す。還つて潙山の年老いて心孤なるを知るや。汝我れを屈し我れ汝を屈す。」

次の日上堂、「(ワ)璿璣未だ動かず、全機獨脫、一氣言はず、萬象歷然、一切見成、了に欠少なし。所

報ずるに足れり」と、自後忌辰に、果して囑する所の如くす。

(ル)風頭稍硬。風の劍尖がするどい。

(ヲ)赫赤。あかふんどし。

(ワ)璿璣玉衡は、天文をはかる器械。

以に崇福順時保愛、坐ながら太平を致す。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「陽氣發するとき(カ)硬地なし。」

元宵上堂、僧問ふ、「昔日瞿曇無所得を以て燃燈の記を受く、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「虚を承け響を接す。」僧云く、「西天の迦葉初めて燈を傳ふ、如何なるか是れ傳ふる底の燈。」師云く、「天に輝き地を鑑む。」僧云く、「迦葉已に傳ふ、(ヨ)龍潭甚としてか吹滅すや。」師云く、「只だ大家の(タ)暗中に行かんことを。」僧云く、「後來僧、香林に問ふ、『如何なるか是れ室内一盞の燈。』林云く、『三人龜を證して鼈となす』と、意旨如何。」師云く、「千聞は一見に如かず。」僧云く、「忽ち人あり、如何なるか是れ室内一盞の燈と問はゞ、聻。」師云く、「露柱光を放つ。」僧云く、「恁麽なれば則ち處々に光輝を發し去らん。」師云く、「果然果然。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「春日晴れ、春光美に、春蝶春風に舞ひ、春魚春水を弄す。黄鶯は枝上に語り、錦雉は溪畔に啼く。限りなきの好風景、一時に都べて漏泄す。且く道へ、是れ何の祥瑞ぞ。過去燈明佛、本光瑞如此。」

二月旦上堂、僧問ふ、「向上に全提せば、鐵壁銀山、線路を放開して、如何が相看せん。」師云く、「十分の春色江湖に滿つ。」僧云く、「便ち是れ和尚爲人の處なることなからんや。」師云く、「儞の(レ)耳朶、聽なし。」僧云く、「世尊昔日、百萬の衆前に向つて、一枝の花を拈起す、意那裡にかある。」師云く、「突出

(カ)硬地。九冬嚴寒、大地凍つて堅きこと鐵の如し。
(ヨ)龍潭。德山をめくらにせし和尚なり。
(タ)暗中。蒲團上にあり。
(レ)耳朶無聽。貴樣の耳は、からつんぼ。

辨じ難し。」僧云く、「只だ迦葉のみあつて、破顔微笑す、未審し何の道理をか見し。」師云く、「㋞赤眼撞着す火柴頭。」僧云く、「世尊乃ち云く、『吾れに正法眼藏あり、摩訶迦葉に付囑す』と、如何なるか是れ正法眼藏。」師云く、「桃花は紅に、李花は白し。」僧云く、「畢竟分付ありや分付なきや。」師云く、「㋡虛を承け響を接す。」僧云く、「只だ卽今日暖かに風和し、百花競ひ開くが如きんば、甚麽の處に向つてか世尊を見ん。」師云く、「當面に蹉過す。」僧云く、「靈山の一會、儼然として未散。」師云く、「只だ一半を見得す。」僧禮拜す。又僧ありて問ふ、「玄を談じ妙を說くは、好肉に瘡を剜る、拳を竪て喝と下すは、平地の波瀾。如何なるか是れ直截の一路。」師云く、「天高うして群象正し。」僧云く、「爭奈せん、尙ほ迂曲に涉ることを。」師云く、「㋧韓獹、塊を逐ふ。」僧云く、「恁麽なれば則ち家々の門首、長安に透る。」師云く、「脚下を看よ。」僧云く、「記得す、僧、雲門に問ふ、『如何なるか是れ清淨法身。』門云く、『㋤花藥欄』と、意旨如何。」師云く、「㋶劈腹剜心。」僧云く、「僧問ふ、『便ち恁麽にし去るとき如何。』門云く、『金毛の獅子』と、又作麽生。」師云く、「未だ敢て相許さず。」僧云く、「今日和尙に問ふ、如何なるか是れ清淨法身。」師云く、「雲は嶺頭にあつて閑不徹。」僧云く、「便ち恁麽にし去る時如何。」師云く、「㋰邯鄲に唐步を

㋞赤眼撞着す火柴頭。赤眼は鬼なり、鬼がたき火に頭を打ちつけた、進むを得ずして頭を縮却するなり。

㋡虛を承け響を接す。うそを聞いて、又うそをこれまぜる。

㋧韓獹。猛犬の名。

㋤花藥欄。雪隱かくしの花の籬。

㋶劈腹剜心。腹の底をぶちまけた。

㋰邯鄲に唐步を學ぶ。邯鄲は歌舞の地なり、宋人往いてあゆみのこなしを學ぶ、遂に其の秘を得る能はず、而も亦宋國の步法をも失却す。以に向ふにとられて、足元の、らつく

學ぶ。」僧云く、「者箇は則ち且く置く、如何なるか是れ㋻法身向上の事。」師云く、「水は磵下に流れて太忙生。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「敎中に道ふ、『十方佛土中、唯有一乘法』と、一花開いて天下春に、一塵起つて大地收る。大衆會すや、若し也た遲疑せば、拄杖子、重說偈言し去らん。」卓拄杖一下して云く、「㋭但だ願はくは春風の齊しく力を着け、一時に吹いて我が門に入り來らんことを。」

上堂、「結夏の後半月を過ぐ、㋨寒山子を問はず、水牯牛を論せず、諸人上來問訊せば、山僧合掌低頭す。照あり用あり、賓あり主あり。且く道へ、甚に因つてか此の如くなる。」良久して云く、「風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ。」

端午上堂、「今朝端午の節、崇福禪を說かず、一枝の拂子を提起す。自然に時に應じ、㋔門安く戶靜なり。且く道へ、甚によつてか是の如くなる。」拂子を擊つて云く、「東山下の左邊底。」

解夏小參、「卽心卽佛は、山青く水綠に、非心非佛は、樹凋み葉落つ。不是心不是佛は、風颯々水冷冷、等しく是れ恁麼の時節、其の土曠く人稀なることを奈せん。今は則ち法歲周圓、㋗三期滿を告ぐ、

に喩ふ。

㋻法身向上の事。玉泉の皓に、法身邊の事、法身向上事の話あり。

㋭但願。腰に十萬貫をつけて、鶴に乘つて揚州に遊ぶと云ふ樣な語なり。

㋨寒山子水牯牛。古德垂語に曰く、「結夏已に半を過ぐ、寒山子作麼生。」又云ふ、「結夏已に半を過ぐ、水牯牛作麼生。」

㋔門安戶靜。時豐に家富み、門戶安く靜に、是れ那邊の住處ぞ。

㋗三期。長期百二十日、中期百日、下期は八十日、之を三期と云ふ、期とは相約するの義、期限を立てゝ猛く修行の精彩をつくるなり。

崇福未だ免れず言薦賞勞し去ることを。」拄杖を拈じて卓すること一下す。

復た仰山、潙山に問訊す、山云く、「一夏上來せず、下面にあつて何の所務ぞ」といふ公案を擧す。師拈じて云く、「潙仰父子、當時一夏空過せず、崇福門下の一衆、一夏都べて所務なく、山僧も亦所作なし。且く道へ、空過すとせんか、空過せずとせんか、具眼の者は試みに辨じて看よ。」

上堂、「九旬の安居今已に滿ち、林下の衲僧活路通ず。大地を踏飜して寸土なし、横に榔栗を擔つて秋風に舞ふ。然も是の如くなりと雖も、崇福猶ほ說のあるあり。」拄杖を拈じて一畫して云く、「此に過ぎたるはなし。」

中秋上堂、「十五日以前は、風清く月白く、十五日以後は、月白く風清し。正當十五日、此夜一輪滿てり、淸光何の處にかなからん。」

九月旦上堂、「頭々是、物々是、塞鴈長空に過ぎ、野鹿林底に叫ぶ。屋頭の山、門前の水、一々他物にあらず、箇々自己に歸す。且く道へ、如何なるか是れ自己。」良久して云く、「㋳吾れ爾に隱すことなし。」

上堂、「如來禪、祖師意、嶺上の白雲、澗下の流水、百草頭邊、十字街裡、頭々是、物々是。何が故ぞ是の如くなる。」拄杖を卓して云く、「萬物主なきにあらず。」

衆客を謝する上堂、趙州和尙云ふ、「宗師者は、須らく本分の事を以て人を接して始めて得べし。」師云く、「諸人上來問訊す、山僧低頭合掌す。且く道へ、還つて本分の事に契得すや也た無や。」良久して

㋳吾爾に隱すなし。吾れは是れ汝、爾は是れ吾。

云く、「客は是れ主人の㋮相師。」

十月半上堂。「崇福尋常、禪を說かず、道を說かず、㋘飯に遇ふては飯を喫し、茶に遇ふては茶を喫す。時に應じて㋫衲を納れ、宜しきに隨つて施設す。諸天花を雨らすに路なく、魔外潛かに覷ふに門なし。便ち恁麼にし去るとき如何。崑崙生鐵を嚼む。」

冬至小參、僧問ふ、「陰盡き陽生じて、㋙碓觜花を開く、時節に涉らず、願はくは提唱を聽かん。」師云く、「雲淨うして日月正し。」僧云く、「松源に三轉語あり、還つて學人の咨參を許すや也た無や。」師云く、「問ひ將ち來れ。」僧云く、「大力量の人、甚によつてか脚を擡げ起さゞる。」師云く、「一步は是れ一步。」僧云く、「口を開くこと甚によつてか舌頭上にあらざる。」師云く、「㋓鴉鳴鵲噪。」僧云く、「明眼の人、甚によつてか脚下の㋢紅線不斷なる。」師云く、「㋐程を貪ること太だ疾し。」僧云く、「恁麼なれば則ち昔日の松源、今日の和尚。」師云く、「儞何の處に向つてか松源を見る。」僧無語。師云く、「當面に蹉過す。」僧禮拜す。又僧あり問ふ、「陰魔沮伏し、陽氣發生す、正與麼の時、請ふ師指示せよ。」師云く、「枯木花を生じ、鐵樹枝を抽んづ。」僧云く、「僧巴陵に問ふ、「祖意敎意、是れ同か是れ別か。」陵云

㋮相師。主人の人相見、長居するのも、早く立つのも、皆主人の顏色を以て決す。此處は大應のつらつきは、御客の眼玉次第と云ふ文字なり。

㋘飯茶。後語の根源。

㋫納衲施設。福分もとろが、御馳走もする。

㋙碓觜。石臼のはな。

㋓鴉鳴鵲噪。からすはかあ〳〵かさゝぎはかさ〳〵。

㋢紅線不斷。結ぶの神の赤繩に結ばれて居る。

㋐程を貪る。白隱和尙も、是れはよくやられたとある。足元をよく見よ。

く、『鷄寒うして樹に上り、鴨寒うして水に下る』と、此の意如何。」師云く、「山青く水綠なり。」僧云く、「僧問ふ、『如何なるか是れ吹毛の劍。』陵云く、『珊瑚枝々月を撐著す』と、又作麼生。」師云く、「寒光凜凜、人に逼って寒し。」僧云く、「僧問ふ、『如何なるか是れ㋚提婆宗。』陵云く、『銀椀裏に雪を盛る』と、如何が委悉せん。」師云く、「明々歷々。」僧云く、「如何なるか是れ祖意。」師云く、「少室峯前雪未だ消せず。」僧云く、「如何なるか是れ敎意。」師云く、「鷲峯の山色青更に青。」僧云く、「是れ同か是れ別か。」師云く、「向上に眼を着けて看よ。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「㋖群陰剝盡して、大地平沈す。淸寥々、白的々、黃梅の石女、身を藏すに處なく、少室の鐵牛、露地に安眠す。㋴一氣潛通して、萬物敷榮す。暖烘々、鬧浩々、露柱燈籠、滿面に光生じ、狸奴白牯、同じく歡顏を展ぶ。直に得たり、崇福山中和氣熏春、佛法世法一時に昌盛、何を以てか驗となす。」良久して云く、「㋱露。」

擧す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ道。」州云く、「墻外底。」僧云く、「遮箇の道を問はず。」州云く、「那箇の道をか問ふ。」僧云く、「大道。」州云く、「大道長安に透る。」師拈じて云く、「大道遮障なく、坦然として長安に透る。紛々たり路を問ふもの、憐むべし自ら㋯難を作すこ

㋚提婆宗。凡そ言句あるは皆提婆宗と馬大師言へり。

㋖群陰剝盡して。柳綠を失ひ、花紅を失ひ、覺知見聞に處なし。

㋴一氣潛通して。野老謳歌し、家々三臺に舞ふ。

㋱露。茶人は露堂々を、つゆ堂々と讀むげな、成程露の字は其れとして、堂々がすまぬで無いか、いやたう／＼たらりと云ふは、水の落つる音なりと、何でも繪解きをするところんなものなり、露。

㋯難を作す。關所は皆自分がこさへるものなり。

とを。大衆還つて大道を知るや、脚下を看よ。」

次の日上堂、僧問ふ、「㊂六陰剝盡して、一陽復た生ずることは則ち問はず、如何なるか是れ不遷の義。」師云く、「日は東方に出で、夜西に落つ。」僧云く、「恁麼なれば則ち㊃一冬二冬、叉手當胸。」師云く、「好箇の一語。」僧云く、「兜率に三句あり、還つて咨參を許すや也た無や。」師云く、「何ぞ妨げん問ひ將ち來れ。」僧云く、「參玄は只だ見性を圖る、卽今上人の性、什麼の處にかある。」師云く、「徧界曾て藏さず。」僧云く、「已に見性を得れば生死を脫す、眼光落地の時如何が脫せん。」師云く、「甚麼を喚んでか生死となす。」僧云く、「生死を脫得すれば、須らく去處を知るべし、四大分散の時什麼の處に向つてか去る。」師云く、「山は自ら山、水は自ら水。」僧云く、「向上更に事ありや也た無や。」師云く、「有り。」僧云く、「如何なるか是れ向上の事。」師云く、「向下に薦取せよ。」又僧あり問ふ、「㊄冬至月頭なれば、被を賣つて牛を買ひ、冬至月尾なれば、牛を賣つて被を買ふと、意旨作麼生。」師云く、「見成の公案、直下に會取せよ。」僧云く、「如何なるか是れ冬來の事。」師云く、「白雪天に滿つ。」僧云く、「一番寒骨に徹するに因らずんば、爭か梅花の鼻を撲つて香しきを得ん。」師云く、「好箇の消息。」僧便ち禮拜す。

㊂六陰剝盡。周易の山地剝の上の一爻が剝落さされると、直に地雷復となりて、一陽下に生ず、是れ遷流の義なり。

㊃一冬二冬叉手當胸。初冬と仲冬は、寒いから手を組んで胸にあてる。

㊄冬至云々。十二月の月の初に冬至のある年は暖い、冬至が月の末に入る時は、非常に寒い、故に月の初に入る年は、蒲團を賣つて牛を買ふ、月尾に入れば牛賣つて蒲團を買ふなり。

師乃ち云く、「仲冬嚴寒、晷運推移、枯木花を開き、㋲冰河焔起る。㋝左之右之、吉にして利ならざることなし。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「陽氣發する時硬地なし。」

燈節上堂、「一燈纔かに明かなれば、百千の世界、無量の國土、一時に卽ち明かなり。若しくは佛、若しくは祖、有情無情、此の光中に於て、各〻㋜自位に住し、大安樂の地を得、同じく燃燈の記を受く。且く道へ、是れ那の一燈ぞ。」

浴佛上堂、「㋑我れ今諸如來を灌沐す。見るや見るや、淨智莊嚴功德聚、突出辨じがたし。五濁の衆生、垢を離れしめ、泥裡に土塊を洗ひ、同じく如來の淨法身を證す。大家這裡にあり。崇福恁麼に說く、早く是れ一杓の惡水を將つて、諸人に潑ぎ了れり。然も是の如くなりと雖も、恩を知るものは少く、恩に負くものは多し。」

結夏上堂、「靑春已に去り、朱夏初めて臨み、薰風南來、殿閣生涼、正に是れ諸佛出身の時節なり。甚の安居禁足、剋期取證とか說かん。然も是の如くなりと雖も、㋺一日作さゞれば、一日食はず。」

㋲冰河焔起。川から湯氣がむらむら立つ。

㋝左之右之。立つもゐるも。

㋜自位に住。自己の持前を發揮す。

㋑我今灌沐。浴佛の偈文、浴佛功德經に出づ、文に曰く「佛像を浴するは、諸供養中に於て殊勝となす、先づ妙香を以て湯水となし、淨器の中に置き以て佛を浴し、水を下す時、偈を以てすべし、偈に曰く、我今灌沐諸如來、淨智莊嚴功德聚、五濁衆生令離垢、同證如來淨法身。」今此處に抄出に係る、精しくは象器箋に就くべし。

㋺一日作さざれば一日食はず。白隱が片手の聲を聞くよりも兩手扣いてあきなひがまし」是れでよし。

㋩興德寺。今尙ほ存す、應祖前

(ハ)興德寺佛殿、釋迦を安ずる陞座、「佛身無爲、觸處全眞、等しく塵刹に應じ、沙界に豁周す。無形にして現じ、(ニ)相々炳然たり。無聲にして說く、法々無盡。若し也た見聞に落ちずして見得して親切に、聲色に涉らずして、聞得して分明ならば、便ち知る靈山の一會、儼然として未散なることを。其れ如し未だ然らずんば、(ホ)三拜起き來つて、高く眼を着けて看よ。」

書記の秉拂を謝する上堂、「諸佛說不到の處、列祖提不起底、未だ口を開かざる時、文彩全く彰る。何ぞや。(ヘ)畫前元易あり、删後更に詩なし。」

端午上堂、「靑山流水、明月白雲、頭々是れ活祖師意、人々死法の會をなすことなかれ。崇福與麼の告報、意何にかある。」拄杖を卓して云く、「五月五端午の節。」

上堂、「久雨晴れず、衲僧の(ト)皮草、甚麼の處に向つてか曬眼せん。崇福今朝雲霧を畫斷して、日輪を放出し、天を照し地を照し去らん。」拄杖を以て劃一劃して云く、「雨過ぎて靑山碧に、雲淨うして日月正し。」

中夏上堂、「九旬の安居、今朝半を過ぐ、數日已來、連綿たる霖雨、瞿曇の眼睛を爆却し、衲僧の鼻孔を滴破す。崇福今日、雲霧を畫斷して、晴天

住の處なれば、陞座を乞ひしものならん、筑前姪濱興德寺、大應國師自贊の像あり。

(ニ)相々炳然云々。八十種好三十二相の一相一相、八萬四千の諸法の一法一法。

(ホ)三拜云々。三拜して本位に歸り、によきりそりかへつて、眼をすゑて見よ。

(ヘ)畫前元易あり删後更に詩なし。此の畫前の易と云ふことは、邵康節や朱子等の八ヶ間敷く說いた處である、元來宋學の日本へ傳はりしは、岐陽あたりと相場をきめて居るが、どうして、もつともつと古くから入宋する人は皆習つて歸つたものである、宋の儒者共が法喜禪悅せしは、北宋より極めて盛なり、吾輩の祖先も儒家と親しむ機會多かりしなれば、皆其の學を傳へ歸られしものなり。孔子古詩三千を删つ

白日に向ひ、諸人と相見し去らん。」拄杖を以て畫一畫して云く、「㋠相見渾べて無事、來らざれば還つて君を憶ふ。」

㋷焙經上堂、「三百餘會も、收拾し上せず、二千年後も提掇不起、岳に積み山に堆く、㋦風吹き日炙す。衲僧門下、一擊を消せず。」拂子を擊つて云く、「六月㋸松風を賣らば、人間恐らくは價なからん。」

解夏小參、「雨炎暑を洗ひ、徧界淸涼、現成の公案、迥かに商量を絕す。若し這裡に向つて會し去らば、開眼合眼、是れ解脫にあらざることなし。左之右之、了に異解なし、卷舒は我れにあり、與奪誰にか憑る。然も是の如くなりと雖も、解制自恣底の一句、作麼生か道はん。」拂子を擊つて云く、「秋風梧桐を吹き、落葉兩三片。」

復た擧す、臨濟和尙、衆に示して云く、「一無位の眞人あり、汝等諸人の面門より出入す、未だ證據せざらんものは、看よ看よ。」師云く、「臨濟老漢、未だ是れ白拈賊にあらず、甚の證據未證據とか說かん。直下に㋾元物を識取せよ。何が故ぞ、㋻靑氈元是れ我が家の舊物。」

中秋上堂、擧す、僧、德山に問ふ、「㋕靈山に月を指し、曹溪に月を話

て三百五篇となす、淘汰極めて嚴整なりしかば、删後に取るべき詩なきなり。

㋣皮草。「みの」なり、虛堂錄に「皮草か曬眼す」の語あり、みのをほすことなり。

㋠相見して渾べて無事。逢ふて見れば話すこともないが、離れると色々と思ひ出す、面白き境界なり。

㋷焙經上堂。一切經の土用ぼしに就いて上堂、骨折る雲衲計りの集まつてあるから、物につけ事につけ上堂があつた。

㋦風吹き日炙す。是れ隨分面白き語、故に色々に用ひられてある。宋人は髑髏の贊に「風吹日炙掩彩掩彩」と頌して、世の擊節する處となりしが、藏經の蟲干にもきつかりとはまつて居る。

㋸松風。此の松風に逢ふと五千四十餘卷、八十萬字は一時に

することは卽ち問はず、如何なるか是れ眞月。」山云く、「昨夜三更西に轉向す。」師云く、「德山恁麽に答ふ、昨夜三更大雨下る、大衆作麽生か會せん。山僧一頌あり、大衆に擧示せん、昨夜三更雨連綿、淸光舊によつて山川を照す、茫々として總に明暗を逐ふ底、爭か十分㋵桂影の圓かなるを識らん。」

九月旦上堂、「雨蕭々たり、風颯々たり、黃葉虛庭に滿ち、鴻雁寥泬に鳴く。子細に㋟好し觀を生じ、西來に妙訣なく、妙訣あり。大衆分明に㋹自決せよ。」喝一喝す。

上堂、「一人眞を發し源に歸すれば、十方虛空悉く皆㋞消殞す。五祖云く、『一人眞を發すれば、十方虛空㋡築着磕着す』と。崇福は則ち然らす、一人眞を發し源に歸すれば、十方虛空只だ毫端にあり。且く道へ、故人と是れ同か是れ別か。大衆試みに辨じて看よ。」

開爐上堂、「崇福門庭、從來滴水冰生ず、今朝開爐、寒灰焰を發し、一時に暖熱す、祖意教意、趙州無賓主の話、面前に突在す。然も是の如くなりと雖も、如何なるか是れ無賓主の話。」拂子を擊つこと一下して便ち下座。

すうつと消えうせる。

㋾元物。臨濟は正直で、ひろえんびでなく、證據も未證據もいらぬ、直に元の木地を見よと、之をとりぞこなふと、欽山の樣なひどい目にあはねばならぬ。

㋻靑氈。王羲之の息子の獻之の處へ、盜人がはいつた、其時外の物は何も入らぬが、其の靑毛氈丈けはわしの家の傳來品ゆゑ、殘して呉れと云ふた。

㋕靈山に月を指。靈山會上の示しは月を指すが如く、曹溪の禪は月を話するが如しと、玄沙の語也。

㋵桂影。月影なり、大燈國師の歌に「雲よりも上なるそらへ出でぬれば、雨降る夜も月をこそみれ」とあるが、玆は穴倉の底にふしたる炭俵、雨ふる夜にも月をこそみれと。

達磨忌上堂、「㋧熊耳峯前、峭峻巍々、日日清風匝地、夜々明月流輝。盡く言ふ、隻履西に歸り去ると、誰か知らん千古鎭に長く存することを。且く道へ、如何なるか是れ長く存する底の一句子。」良久して云く、「㋤衆眼瞞じがたし。」

虚堂忌拈香、「生佛未だ具はらざる以前、早く這箇あり、世界纔かに分れて、便ち見る天を熏じ地を炙することを。崇福一年一度當陽に拈出して、這の老和尙に供養す、要且つ是れ恩を報じ德に酬ゆるにあらざるなり、只だ是れ㋶水を借りて花を獻ず。」

上堂、「雪上に霜を加へ、瑞をなし祥をなす。妙應私なく、商量を用ひず。」拄杖を卓すること一下して、「千古萬古只だ是れ者れ、何ぞ必ずしも胡僧㋰勸めて擧揚せん。」

臘月半上堂、祖師の云く、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、仁者の心㋒動く」と。巴陵拈じて云く、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、什麽の處に向つてか著けん。」雪竇云く、「是れ風、是れ幡、甚の處にか著けん。」師拈じて云く、「二大老、途を同じうして轍を同じうせず、崇福は

㋟好生觀。よく吟味せよ。

㋹自決。けつの穴が、太いか細いか、自分に見よ、面白い上堂なり。

㋞消殞。四大海水みづ一滴も無くなる。

㋡纏着儘着。こつつりこと云ふことにて、山河並に大地、全く法王身を現ずる處。

㋧熊耳峰前。夜々明月流輝、二千年後斯の如し。

㋤衆眼瞞じがたし。皆が見て居るので、手品がつかへぬ。

㋶借水獻花。水は借りもので無いけれども、花を獻ずる爲めに之を用ふ、吾々の立つもれるも行くもすわるも、皆借水獻花なり。

㋰勸めて擧揚せん。是れは大方和尙がいやがるのを、無理に上堂させたものであらう。

㋒巴陵は仁者の心動くが、いやじやから、什麽の處にか着け

然らず、是れ風、是れ幡、切に忌む㋖動著することを。何が故ぞ、㋨喉を轉ずれば諱に觸る。」

㋔知客を謝する上堂、「古德云く、「一喝賓主を分ち、照用一時に行ず。」喝一喝して云く、「那箇か是れ賓、那箇か是れ主、若し也た未だ明かならずんば、賓主未だ分たず、若し也た明得し去らば、賓あり主あり照あり用あり。妨げず照用一時に行ずることを。」拂子を擲下して云く、「且く道へ、照か用か。」

元正上堂、「日暖かに風和し、花紅に柳綠なり、新年の佛法、一切成現す。崇福與廢の告報、新歲君聽得し、春風影裡に點頭す。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「大機㋗圓應。」

上堂、「春山青く、春水綠に、春雨未だ晴れず、春風復た作る。」春雨春風共に惡しからず、諸人若し也た會得し去らば、㋳雲門の露、㋮報慈の隔。」

佛涅槃上堂、「㋘手を以て胸を摩し當に慇懃なるべし。雙趺出示して肝心を露す、二千年遠人の見るなく、㋫花笑ひ鳥啼く二月の春。」

二月旦上堂、「日暖かに風和し、鳥啼き花笑ふ。是れ如來禪にあらず、亦西來意にあらず、且く道へ、畢竟如何。只だ㋙老胡の知を許して、老胡の

んと出かけた、雪竇は又あなさがしで、あらずあらずを取り除けた、大應國師は又別に一頭地を出された。

㋖動着。さはらしやんすな。

㋨喉を轉ずれば諱に觸る。のど佛が一寸ゐざるとまう諱に觸れる。

㋔知客の謝上堂故、臨濟賓主歷然の則を拈ず。

㋗圓應。大應の諡號は是に原づくか。

㋳雲門の露。僧、雲門に問ふ、「父を殺し母を殺せば、佛前に懺悔す、佛を殺し、祖を殺せば、何れの處に向つてか懺悔せん、」雲門云く、「露。」

㋮報慈の隔。僧、匡化禪師に問ふ、「情生ずれば智隔たり、想變ずれば體殊なり、唯だ情生ぜざる時の如きんば如何、」化曰く、「隔、」匡化は報慈に住す。

㋘七言四句の偈なり。

會を許さず。」

浴佛上堂、「㋓天を指し地を指し太だ端なし、語を送り言を傳へ泥裡に輥ず。讒に香湯を把つて年々洗ふ、今に至るまで千古兒孫を累はす。今日如何が爲に屈を雪がん。」拄杖を卓すること一下して下座。

結夏㋢小參、「一毫頭上に結制安居、十方虛空一時に逼塞す。若しくは聖若しくは凡、情と無情と、總に裡許にあつて逃出するに門なし。釋迦老師の影子裡に墮在す。規矩に拘はらず、練行を修せず、酒肆茶坊、禁足護生するも、又㋗七佛の師、舊時の途轍に落つ。呼喚すれども廻らず、羅籠すれども住まらず、行かんと要すれば便ち行き、住まらんと要すれば則ち住まる。活潑々、轉轆々、正に是れ而今の衲僧の用ふる底、未だ敢て相許さず。且く道へ、竟畢如何が行履せん。」良久して云く、「㋚若し是れ鳳凰兒ならば、那邊に向つて討ねず。」

復た擧す、梁山和尚頌あり、衆に示して云く、「我れに一枝の拂あり、眞㋖棕鐵作骨、㋷顯道蚊蟲を嚇かし、㋱指南相屈せず、佛祖の病を掃除し、衲僧の窟を擊破す。若し是れ上々の人ならば、終に喚んで物となさず。」德

㋻花笑鳥啼。花は手を打つて哄ひ、鳥は涙をたれて泣く。

㋙老胡知云々。如來禪は師兄の知るに任す、祖師禪は夢にだも見ざることあり。

㋓天を指す云々。四句有韻の偈、釋迦が天を指し地を指すは、そゝつかしいしわざなり、後來の坊主共が、天上天下唯我獨尊と云はれたなどと、言語の飛脚をするのは、實に見ともない。

㋢此の小參三折、第一折は把住、第二折は放行、第三折は把放自在。

㋗七佛師。文殊也、文殊曾て酒肆淫坊に夏を過す。

㋚若し是れ云々。鳳凰のひよこは、そんな處でも討ねずと。

㋖棕は棕櫚、鐵作骨は鐵の骨、棕櫚の髭に鐵の骨のこと。

㋷顯道蚊蟲を嚇かす。妙道を顯す時は、蚊蟲驚き散す。

山聞いて云く、「梁山の好頌、話㋯兩橛となる」と。梁山後に聞いて云く、「我れ當時㋛子細を少く。」師拈じて云く、「二大老恁麽に道ふ意、何にかある、大衆還つて落處を知るや。子期と白牙と、是れ㋾閑相識にあらず。」

結夏衲班を謝する上堂、「衲僧家箇々眼乾坤を蓋ひ、人々口佛祖を呑む。左之右之、龍の水を得るが如く、進前退後、虎の山に靠るに似たり。甚麽によつてか九十日の內、無繩自縛なる。」拄杖を卓して云く、「若し㋪水に入らずんば、爭か長人を見ん。」

藏主の秉拂を謝する上堂、「崇福山頭一片の雲、一大藏敎說不到、戒岸池底の一滴水、天下の衲僧看不透。看得透し說得透する時如何。」良久して云く、「㋲君子は可八。」

中夏上堂、「㋝一百二十日の長期、今朝恰も半に過ぐ。崇福舊公案を擧せず、只だ現定に據つて、汝諸人の爲に箇の消息を通せん。」拄杖を卓すること一下して云く、「六月松風を賣らば、人間恐らくは價なからん。」

六月半上堂、僧、智門の祚和尙に問ふ、「蓮華未だ水を出でざる時如何。」祚云く、「蓮華。」「水を出でゝ後如何。」「荷葉。」師頌して云く、「蓮華荷

㋱指南相屈せず。右向け左向けと指麾すれば、ぐにやりとせぬ。

㋯兩橛となる。德山が一本のくひをふたつに切つた。

㋛子細を少く。成程さう云ふ答、少し入れればを明けて置いた。

㋾閑相識。閑は閑冗の閑にて、通り一邊のちかづきなり、閑相識に非ずは、眞の知音と云ふこと。

㋪水に入らずんば。競走や、川渡りの時に、背の高い男が勝をしめる。

㋲君子可八。烏龜忘八の反、君子は仁義禮智忠信孝悌の八德を行ふ。(諸錄俗語)

㋝百二十日。當時長期を用ひし證據。

㋜泥水。拖泥帶水なり、知解情識の葛藤を離る。

㋑點埃を絕す。馬の糞でも美味、擂鉢でもほこり一つない。

葉(ヌ)泥水を離れ、出未出の時(イ)點埃を絕す。限りなき清香收不得、風に和し雨を帶びて滿池に開く。」

解夏小參、「布袋頭結す、大地寸土なく、布袋打開し、徧界活路を通ず。所以に衲僧家、拄杖を塵逴し、鉢囊を(ロ)抖擻し、仰山の畬田を踏飜して、纖塵立せず。鹽官の扇子を擘破して、清風餘りあり。有佛のところ肯て住まらず、脚下泥深きこと三尺。無佛のところ急に走過す、平地上滑なること砥の如し。三千里外人に逢ふて錯つて擧すること莫れ、早く已に錯つて擧し了んぬ。這箇は卽ち且く置く、且つ解制自恣底の一句の如きんば、又作麽生。」拄杖を卓して云く、「(ハ)一片の白雲、西より東よりす。」

復た擧す、茱萸和尙、大衆侍立の次、茱萸云く、「只だ恁麽に(ニ)平白立、箇の說處なし、一場の(ホ)氣悶。」時に僧あり、出でゝ問はんと擬す、茱萸云く、「衆の爲に(ヘ)力を竭す」と、便ち方丈に歸る。師拈じて云く、「當時纔かに、只だ恁麽に平白立、箇の說處なしと道ふを聞いて、一時に散じ去らん。但だ賓主諧和するのみにあらず、亦乃ち他の茱萸を勞して、衆の爲に力を竭さしむることを免れん。」

(ロ)抖擻。持鉢囊を打拂ふの意ならん、抖擻は俗語解に「妖怪がばける時に、精神をあつめて身ぶるひするを云ふ」とあり、又抖擻行脚の人など云ふ時の抖擻は頭陀と同じ、胸中三斗の塵を抖擻すとか、也た須老精神を抖擻すべしとか、塵埃の衣を抖擻すと云ふが如きは、本錄と同義なり。（佩文韻府）

(ハ)一片の白雲。風に任せて西より東より、逍遙自在。

(ニ)平白立。平白は、分曉の義、平白立は一絲亂れず、立班するを云ふ。

(ホ)氣悶。むなぶくれと同じ、何ぞ枯れ木の樣に、立ちやがつて、胸くそが惡いと。

(ヘ)力を竭す。一場の氣悶が大慈大悲なりと、又歸方丈へも掛けて見よ、國師の評語はこゝにあり。

次の日上堂、拂子を竪起して云く、「只だ這箇是れ什麽ぞ、二千年前說不到、十萬里來踏不着。今朝解制自恣、分明に諸人に與へて看せしめん。」拂子を擲下して云く、「(ト)之を見て取らざれば、之を思ふこと千里。」

重陽、(チ)直歲・知客・侍者を謝する上堂、「(リ)叉手して立つ、賓主歷然、三喚三應、家裡に人あり、然も是の如くなりと雖も、還つて汾陽老人の一句子あることを知るや。」拄杖を卓すること一下して云く、「重陽九日菊花新なり。」

九月半上堂、「秋葉落ち、秋林脫し、秋月圓明、秋風颯々。祖意敎意、一時に漏泄す。德山(ヌ)棒頭短く、臨濟口門窄し、甚によつてか是の如くなる。」良久して云く、「我れ常に此に於て(ル)切なり。」

開爐上堂、「風頭稍硬し、且く暖處に歸せん。這裡切に商量することを忌む、只だ時に應じて祐を納るゝことを要す。何が故ぞ是の如くなる。」拂子を擊つて云く、「火を(ヲ)覓めては煙に和して得、泉を擔ふては月を帶びて歸る。」

虛堂忌拈香、「世尊の三昧迦葉知らず、迦葉の三昧阿難知らず、先師の三昧崇福知らず、既に是れ彼此相知らず。甚麽によつてか一年一度炷香作禮すや。(ワ)嗚咿嗚咿、人の此の意を知るなし、我れをして南泉を憶はしむ。」

(ト)之を見て取らざれば之を思ふこと千里。是れは見た時貰ふて置かれば、跡から欲しいと思ふても、千里萬里の隔てありと云ふ俗語ならん。

(チ)直歲。直歲は一切の作務を掌る、殿堂寮舍の破損に修理を加へ、動用の什物其の數を檢し、役作には其の工程を稽ふる等、皆直歲の任なり、一年の幹事に直す、故に直歲と云ふ。

(リ)叉手。直歲、賓主知客、三喚侍者。

(ヌ)棒頭短く口門窄し。棒が短くては届かぬ、口がすぼんでは喝も吐けない。

(ル)幼にしては父母を慕ひ、壯なるものは少艾を慕ふ、君に得ざれば熱中す。(孟子)

(ヲ)坊主の身體も性根も、烟の樣なものなり、迷惑ながら、つ

十月半上堂、「禪は㋕意相にあらず、寒月輝々たり、道は㋵功勲を絶す、霜氣浩々たり。㋟會不會、疑不疑、坑に墮ち塹に落ち、道を去ること轉た遠し。畢竟如何。」拂子を擊つて云く、「當頭霜夜の月、任運前溪に落つ。」

㋹都寺・典座・浴主を謝する上堂、「趙州の一甌茶、楊岐の栗棘蓬、生薑は元是辣く、鑊湯に冷處なし。」喝一喝して云く、「喉を轉ずれば諱に㋞觸る。」

臘八上堂、「明星夜々現じ、白雪年々寒し、宇宙茫々として人無數、知らず何の處にか瞿曇を見ん。大衆、瞿曇を見んと要すや。」良久して云く、「吾れ爾に隱すことなし。」

除夜小參、「年窮り歳暮れ、古佛の家風、當陽に顯露す。臘盡き春廻り、祖師の巴鼻、觸處に現成す。便ち恁麼に去らば、釋迦雪山に入ることを用ひず、達磨流沙を渡るべからず。人々鼻直眼横、箇々天を頂き地を履む、坐ながら太平を致す。時に應じて祐を納れ、三十六旬、㋡七十二候、汝を㋧孩し着ず、其れ如し未だ然らずんば、寒梅香は動ず舊年の枝、岸柳金を拖く新歳の葉。」

復た擧す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ不遷の義。」州㋤手をもつて

きものなり。

㋻嗚咿。嗚は嘆聲なり、咿は呻吟なり、「おー〳〵」と泣くこゑ。

㋕意相。思慮分別。

㋵功勳。奇特玄妙。

㋟會不會疑不疑。會すと云ふも、會せずと云ふも、疑ふも更に疑はざるも、皆穴なり、溝なり、蹴破れけやぶれ。

㋹都寺。監寺をすぶるの意。叢林の一役なり。

㋞觸る。栗のいがや、にえ湯を呑むと、喉をそこなふ。

㋡七十二候。春夏秋冬を六氣宛に開いて、二十四氣となる、其の二十四氣を三つ宛に分ちて、都合七十二候となる。一例を云へば、立春は氣なり、之を三候に分ち、東風解凍、蟄蟲始振、魚上冰となすが如し、二十四氣七十二候を合せて、單に氣候と云ふなり。

流水の勢をなす、其の僧省あり。師拈じて云く、「趙州是れ善く來機に應ずと雖も、爭奈せん力を費すこと少からざることを。今夜忽ち人あり、崇福に如何なるか是れ不遷の義と問はゞ、他に向つて道はん、大盡三十日、小盡二十九と。」

元日上堂、「昨夜舊年を送り、今朝新歲を迎ふ。太宰府裡の藤三源四、崇福山中の露柱燈籠、拜する底は拜し、賀する底は賀す。一々我が家の眞機を漏泄し、頭々靈山の密旨を發輝し、山僧一半の(ラ)氣力を省得す。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「花の開くは栽培の力を假らず、自ら春風の伊を(ム)管帶するあり。」

(ウ)講經に因つて上堂、「世尊四十九年、橫說竪說、未だ曾て一字を說かず、崇福三十餘日、玄を談じ妙を談じ、未だ曾て一法を談ぜず。且く道へ、如何なるか是れ不談底の事。」拄杖を卓すること一下して云く、「(卄)三段同じからず、上科に收歸す。」

進退の兩班を謝する上堂、「(ノ)三脚の驢兒、獨角の麒麟、一進一退、賓主歷然。栴檀(オ)葉々香風起る、須らく知るべし鑊湯冷處なきことを。」

(オ)拔す。ゆさぶるなり。

(十)手をもつて流水の勢をなす。くちでざあ／＼ざあと云つて手をべら／＼と動かした。

(ラ)氣力を省得。おれも禪の賣買をやつてゐるが、今日は藤三源四のお蔭で助かつた。

(ム)管帶。欵待と同音。

(ウ)講經。お經の講釋があつたと見ゆ。

(卄)三段同じからず。經文を釋するに分科あり、上科より分れて中科となり又分れて下科となり、幹より枝を生ず、之を三段にして一字宛を還下す、是れ分科の法なり、世に科注と云ふもの是なり、斯く三段同じからざれども最上の根科に歸納す、三段を用ひしは上に卅日と系を引けり、白隱和尙曰く「一番高い方へ付く、今高いのは米じや、坊主共も食ふて寐て居ると地獄じや。」

結夏小參、「綠暗く紅稀にして、孟夏漸く熱す。等しく是れ恁麼の時節、阿那箇か是れ圓覺伽藍、什麽を喚んでか平等性智と作す。所以に崇福が一衆八十餘員、西天の㋗影子を守らず、豈に東土の時機に墮せんや、一絲毫の安居禁足底の事なし。崇福也た是れ敢て諸人の一絲毫許りを錯誤せず、只だ要す、各々自ら一條の活路子を行じて、風前月下、山邊水際、意に任せて遨遊し、自由自在ならんことを。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「但だ路の上るべきあれば、㋳更に高きも人也た行く。」

復た擧す、㋮天平の漪和尙、行脚の時、㋘西院に參ず、每に云ふ、「㋫佛法を會すと道ふこと莫れ、箇の擧話底を覓むるに也た無し」と。一日西院召して云く、「從漪。」平頭を擧く、院云く、「錯。」平行くこと兩三歩、院又云く、「錯。」平近前す。院云く、「適來者の兩錯、是れ西院が錯か、上座が錯か。」平云く、「㋙從漪が錯。」院云く、「錯。」平休し去る。院云く、「且く這裡にあつて夏を過し、上座が者の兩錯を商量するを待て。」平當時起ち去る、後に住院、衆に謂つて曰く、「我れ當時風に吹かれて、四明長老の處を過ぐ、他をして連りに兩錯を下さしめ、更に我れを留めて者の兩錯を商量せし

㋖三脚の驢兒、獨角の麒麟。楊岐三脚の驢兒、蹄を弄して往き、孔子春秋を作つて麒麟來る。

㋔葉々香風起る。褒賞の語。

㋗影子はお釋迦樣の齒くそ、時機は達磨の尻。

㋳更に高きも。大抵の者は龍門迄來ると、尾もひれもきずついて退却す。

㋮天平。淸谿進に嗣ぐ、進は羅漢琛に嗣ぐ、琛は玄沙備に嗣ぐ。

㋘西院。寶壽沼に嗣ぐ、沼は臨濟に嗣ぐ。

㋫佛法を會すと道ふことなかれは善いが、箇の擧話底を覓むるに也た無しとは、いやな處がある、西院のねらひはそこなり。

㋙從漪が錯。和尙も錯、從漪も錯と云へばよいに、是れでは又西院から又錯とはめらる。

む。那の時の錯とは道はず、南方に發足する時、早く錯り了れり。」師拈じて云く、「天平恁麼に道ふ、轉た敗闕を見る、若し是れ當時ならば、他の西院が錯か上座が錯かと道ふを待つて、喝一喝して便ち行かん。惟だ西院の肝膽を覰破するのみにあらず、亦乃ち後人に檢責せらるゝことを免れん。然も是の如くなりと雖も、崇福今夏切に忌む、者の兩錯を商量することを。」

次の日上堂、「㋓三百餘會、一笑を博せず、十萬里來、伎窮つて三拜。崇福今日、布袋頭一結に結定す。南來北來、若しくは聖若しくは凡、氣を出す處なし。且く道へ、古人と是れ同か是れ別か。」拄杖を卓すること一下す。

中夏上堂、「九夏半を過ぐ、見成の公案、諸人若し也た會得せば、一生參學の事辨ず。其れ如し未だ然らずんば、更に那の一半のあるあり。㋢道ふことなかれ言はずと。」

上堂、「時節至れば其の理彰る、桐葉落ちて秋風涼し、古佛の家風都べて漏泄す、衲僧門下商量することなかれ。何が故ぞ、眼底那ぞ㋐金屑を着く容けん。」

中秋上堂、「八月十五、月圓かに戸に當る、人々に這箇あり、只だ是れ用ひ得て別なり。長沙仰山を踏倒す、力を用ふること太だ過ぎたり。南泉拂袖して衆に歸す、靈龜尾を曳く。且く道へ、畢竟如何。大衆、久立珍重。」便ち下座。

は道理なり。

㋓三百餘會、十萬里來。釋迦の三百餘會も迦葉の一笑にあたらず、達磨十萬里を東來すれば、二祖伎倆まつて三拜す。

㋢道ふことなかれ言はず。是れが國師の御示しなり。

㋐金屑。桐の葉か落ちろと、やれさみしいと云ふ、秋風が涼しいと、鱸が食ひたいとさわぐ、皆金屑なり。

開爐上堂、「崇福が開爐、元未だ曾て開かず、火焰說法せず、諸佛如何が聽かん。無賓主の話を擧せず、誰か三界唯心を論ぜん。然も是の如くなりと雖も、須らく知るべし、冷灰裡㋚九轉ノ透瓶香。」

上堂、擧す、明招の示衆に、衆纔かに集る、招云く、「者裡の風頭稍硬し、且つ暖處に歸つて商量せん」と、便ち下座。衆隨つて方丈に至る、招便ち打つて云く、「纔かに暖處に至れば、便ち瞌睡を見る」と。師拈じて云く、「明招老漢、惜むべし暗に明珠を投ずることを。當時一衆、眼裡に筋なく、人に隨つて上下す。崇福は卽ち然らず、者裡の風頭稍硬し。大衆、久立珍重。」

佛成道上堂、「㋖明星夜々現じ、臘雪年々白し、諸人若し也た一見便見、一得永得ならば、妨げず、釋迦老子と同見同得なることを。其れ如し未だ然らずんば、天上の星、地下の木。」

除夜小參、僧問ふ、「德山小參答話せず、意甚麼の處にかある。」師云く、「天に倚る長劍人に逼つて寒じ。」僧云く、「趙州小參答話を要す、又作麼生。」師云く、「無孔の鐵鎚當面に擲つ。」僧云く、「和尙今夜小參、如何が爲人せん。」師云く、「儞聞くや也た未だしや。」僧云く、「恁麼なれば則ち㋴三段同じからず、上科に收歸す。」師云く、「向上に眼を著けて看よ。」僧便ち禮拜す。又僧あり問ふ、「舊歲今宵去る、甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「臘雪堆中に向つて去る。」僧云く、「新年明日來る、甚麼の處よりか來

㋚九轉の透瓶香。丹と云ふべきを、開爐故火に緣をとつて香と云ふ、九轉丹は精錬の極なり、精白瓶と色を同じうす。

㋖仰ぎみれば明星あり、俯して見れば臘雪白し。

㋴三段。上に德山、趙州並に和尙に問ひ來る。

る。」師云く、「黃鶯聲裡より來る。」僧云く、「還つて新舊に涉らざる底ありや也た無や。」師云く、「有り。」僧云く、「如何なるか是れ新舊に涉らざる底。」師云く、「金香爐下の鐵崑崙。」僧云く、「記得す、感首座、法昌に問ふ、『昔日北禪の分歲、露地の白牛を烹る。和尚今夜分歲、何の施設かある。』昌云く、『臘雪天に連つて白く、春風戶に逼つて寒し』と、此の意作麼生。」師云く、「㊅常住物を用ひて自己の用となす。」僧云く、「感云く、『大衆如何が喫せん。』昌云く、『冷淡無滋味を嫌ふことなかれ、一飽能く萬劫の飢を消す』と、如何が委悉せん。」師云く、「喫著するもの方に知る。」僧云く、「感云く、『是れ何人か置辨す。』昌云く、『無慚愧の漢、來處も也た知らず』と、又作麼生。」師云く、「果然果然。」僧云く、「古人は則ち且く置く、和尚今夜分歲、何の施設かある。」師云く、「金剛圈、栗棘蓬。」僧云く、「大衆如何が喫せん。」師云く、「只だ恐らくは呑吐不下なることを。」僧云く、「是れ何人か置辨す。」師云く、「高く眼を着けて看よ。」僧云く、「和尚與麽の施設、古人と是れ同か是れ別か。」師云く、「別に是れ一家風。」僧禮拜す。又僧問ふ、「歲窮り年盡き、禿頭の笤箒、路傍に舞をなす、學人上來、請ふ師提唱せよ。」師云く、「怪力亂神を見ず。」僧云く、「只だ北禪の露地の白牛を烹、榾柮の火を燒き、村田樂を唱ふと道ふが如きんば、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「也た是れ村裡の家風。」僧云く、「如何なるか是れ露地の白牛。」師云く、「趁へども去らず。」僧云く、「如何なるか是れ榾柮の火。」師云く、「烈焰天に亘つて紅なり。」僧云く、「如何なるか

㊅常住物を以て自己の用となす。臘雪や春風を私用すると云ふ意。

是れ村田樂。」師云く、「宮商に涉らず。」僧便ち禮拜す。
師乃ち云く、「天地覆載し、日月照臨す。陰陽代謝、四序變遷。㋯二十四番の花信、三十六旬の風光、一年三百六十日、數へて臘月三十日に到つて、總に是れ我が家の眞機、更に絲毫の他物なし。然も是の如くなりと雖も、舊年新歲、交頭結尾、轉身の一句、作麼生か道はん。」拂子を擊つて云く、「看よ看よ春風の動くことを、寒梅偏界に香し。」
擧す、僧、㋛鶴林に到りて門を敲く、林云く、「誰そ。」僧云く、「行脚僧。」林云く、「道ふことなかれ行脚僧、佛來るも也た㋽着けず。」僧云く、「既に是れ佛來る、甚によつてか着けざる。」林云く、「汝が棲泊の處なし。」師拈じて云く、「大小の鶴林、無佛の處に尊と稱す。崇福は則ち然らず、既に是れ佛來る、甚によつてか着けず。只だ他に向つて道はん、㋪客となることを會せずんば、主人を勞煩す。」
結夏小參、「青山綠水、明月白雲、滿眼滿耳、廻避するにところなし。是れ格外の玄機にあらず、亦世諦流布にあらず。所以に衲僧家、意、玄に停まらず、㋲眼、戶に掛けず、潛行密用、佛祖も識らず、㋝東倒西擂、魔外

㋯二十四番。梅花に始まつて楝花に終ふ、之を二十四番花信風と云ふ。（歲時記）
㋛鶴林。會元二にあり、四祖下の旁出六世金陵牛頭山の威禪師の法嗣にして、鶴林玄素禪師なり。
㋽着けず。寄せ付けぬ。
㋪客となることを會せずんば主人を勞煩す。折角茶事をやつても肝心の正席が茶心なくては主人の心遣りもむだになり、迷惑千萬なり。
㋲眼戶に掛けず。外へ出る氣も無ければ戶口に眼をつくる用事なし、內も見ず外もみず。
㋝東倒西擂。東にたふれ西にころがるなり、擂は石を推して高きより下るなり。

も測りがたし。林に入つて草を動かさず、水に入つて波を動かさず、終日談じて一語を說かず、終日行いて寸步を移さず。是の如く安居し、是の如く禁足して、始めて禁足底の事なけん。便ち恁麼に去るも、未だ常情を出でず、且く道へ、畢竟如何が行履せん。」拂子を擊つて云く、「是れ梧桐樹にあらずんば、鳳凰誓つて棲まず。」

復た擧す、長慶云く、「㋦惣に今日に似たらば、老胡望あり、㋑家富んで小兒嬌る。」保福云く、「㋺惣に今日に似たらば、老胡望を絕す、國清うして才子貴し。這箇は卽ち且く置く、畢竟今日の事、又作麼生。」良久して云く、「分明に記取せよ。」

結夏上堂、十五日以前は、頭天を頂き脚地を踏む、十五日以後は、面を仰いで天を見ず、頭を低れて地を見ず。正當十五日、天は是れ天、地は是れ地、甚の三月安居、九旬禁足とか說かん。何が故ぞ。」良久して云く、「㋩猛虎、伏肉を食はず。」

重陽上堂、「九月九是れ重陽、黃花猶ほ未だ發かず、野草分外に香し。見成の公案、逈に商量を絕す。若し是れ眼裡に筋ある底は、妨げず纔かに見て便ち承當することを。其れ或は未だ然らずんば、無事山に上つて行くこと一轉。」

㋦惣に今日に似たらば。禪宗も今時の樣であつたならば達磨も滿足であらう。
㋑家富んで、國清うして。此の二句は國師の一轉語なり。
㋺惣に今日に似たらば老胡望を絕す。禪宗も今時の樣であつたならば達磨もあきれるであらう。
㋩猛虎伏肉を食はず。一山三文の安悟りは眞正の衲子は、受取らぬ。

冬至小參、「葭灰未だ動かず、全機顯露、㋥六爻纔かに分れて、觀體現成す。衲僧家、人々口佛祖を呑み、箇々眼乾坤を蓋ふ。有る時は無陰陽の地に、胡拋亂撒し、有る時は、聲色頭邊に、東倒西擂す。所以に崇福尋常、聲前の句後に向つて兄弟を羅籠せず、今夜且く一着を放下して、別に一線の活路を通じ、普天の和氣を管取せよ。甚によつてか特地に是の如くなる。」拄杖を卓して云く、「㋭從前の汗馬人の識るなし、只だ要す重ねて蓋代の功を論ぜんことを。」

復た擧す、僧、巴稜に問ふ、「祖意教意、是れ同か是れ別か。」稜云く、「鴨寒うして水に下り、鷄寒うして樹に上る。」師拈じて云く、「而今の兄弟、十箇に五雙あり、只だ同別の會をなし去る、未だ嘗て夢にだも巴稜の肝膽を見ず。且く道へ、巴稜の意又作麼生、鴨寒うして水に下り、鷄寒うして樹に上る、大衆會すや。㋬鴛鴦を繡ひ出して君が看るに任す、金針を把つて人に度與せず。」

次の日上堂、「群陰剝盡し、㋣嶽峰依前として天を挿んで碧なり。一陽來復、磵泉長時に徹底清し、威音以前、盡未來際、未だ曾て一絲毫許りを移易せず、未だ曾て一絲毫許りを増減せず。便ち恁麼にし去らば、君子道長じて本長ぜず、小人道消して本消せず。一念萬年、萬年一念、然も是の如くな

㋥六爻纔かに分れて。六爻の内纔かに一爻が變じて、まつかうから現はれた。
㋭從前の汗馬。汗馬に鞭ち、千軍の内を馳駈し、幾たびか生死の境に奮闘して、正に功成り名遂ぐるを致す、然るに世の中の人は、只だ出世の榮顯ばかりを論じて、刻苦の本源を究むることなし。
㋬鴛鴦を繡ひ出し。巴陵の端的なり。
㋣嶽峯。横嶽峯なり。

りと雖も、恁麼の說話、也た是れ尋常座主底の見解、且く道へ、衲僧門下如何が擧似せん。」拂子を擊つて云く、「㋠劫外の一壺春更に好し、優曇華綻びて普天香し。」

庫堂を立つる上堂、「飯は㋷香積に取り、座は㋦燈王に借る。維摩大士力を費すこと少からず、崇福が這裡厨庫已に建ち、香飯自ら成る。一任す、人々喫せんと要せば便ち喫せよ。一微塵裡に法王剎を現ず、妨げず、箇々坐せんと要せば則ち坐せよ。然も是の如くなりと雖も、誰か恩力を承くる。」拂子を擊つて云く、「㋸明月照して盡くることなく、淸風來つて未だ休せず。」

上堂、「岳峰峰頂の寺、家風元自ら別なり。祖師禪に參ずること莫れ、各自に時節を知る。霏々たり黃梅の雨、滴々の聲歇むことなし。德山と臨濟と、也た是れ一橛を得たり。」

臘八上堂、「夜々明星輝を流し、人々頂門に眼を具す。一見便見、一得永得。且く道へ、釋迦老子、半夜に忽ち明星を覩ると、是れ同か是れ別か。」拂子を擊つて云く、「天上の星、地下の木。」

講經によつて上堂、「㋾致中に道ふ、『止みね止みね、說くことを須ひず、我法妙難思と』、崇福は即

㋠劫外の一壺。威音王以前、壺中の天地、別に日月あり。
㋷香積。佛の名、此の佛香飯を以て佛菩薩に供養す、故に後世庫司を香積と云ふ。
㋦燈王。文殊師利言く、「東方卅六劫河沙の國を隔てて世界あり、須彌相と名づく、其の佛を須彌燈王と名づく、彼佛の身長八萬四千由旬、其の師子の座、高きこと八萬四千由旬、嚴飾第一なり。」(維摩經)
㋸今時の衲僧は明月の照し、淸風の吹くを知つて、明月の照して淸風吹くことを知らず。
㋾致中。法華經なり。

ち然らず、説かんと要せば便ち説き、行かんと要せば則ち行く。何が故ぞ是の如くなる。我法(ワ)妙難思。」拄杖を卓すること一下して云く、「三段同じからず、上科に收歸す。」

三月旦上堂、「聲色不到の處、紅紫芬芳を競ふ。言詮不及の處、黃鸎枝上に啼く。且く道へ、是れ敎意か、是れ祖意か。」拄杖を拈じて一下して云く、「(カ)乾三連、坤六段。」

上堂、「三日一雨、五日一風、風條を鳴さず、雨塊を破らず。崇福直に得たり、謳歌鼓腹太平を致すことを。何が故ぞ、(ヨ)佛法は爛却を怕れず。」

佛生日上堂、「雨群峰を洗つて翠色を添へ、瞿曇の面目露堂々。(ス)韶陽の正令行不到、播土揚塵、未だ肯て休せず。崇福例に隨つて也た一杓の惡水を潑がん。」喝一喝す。

中秋上堂、擧す、盤山云く、「心月孤圓にして、光萬象を吞む。光は境を照すにあらず、境又存するにあらず、光境倶に忘ず。亦是れ何物ぞ。」師拈じて云く、「盤山恁麽に道ふ、黑山下に向つて活計を作すと。崇福は則ち然らず、光境倶に忘ず、只だ一橛を得たり、更に須らく全提の時節あることを知るべし。然も是の如くなりと雖も、那箇か是れ心月。」拄杖を卓して云く、「禾山の打鼓、雪峰の輥球。」

臘八上堂、僧問ふ、「釋迦老師、半夜城を逾え、雪山六年、一麻一麥、是れ何の心行ぞ。」師云く、「是

(ワ)妙難思。此の上堂三字を拈弄す、立つもれるも此の妙難思の働きなり。
(カ)乾三連坤六段。乾の卦は陽爻三本、坤の卦は陰爻三本、陰は中がきれてゐる。
(ヨ)佛法は爛却を怕れず。日に新に日日新なり。
(ス)韶陽の正令行不到。雲門の大師の正令の屆かぬ處に、後世の兒孫が、きたなきものをまきちらす。

れ苦心の人にあらずんば知らず。」僧云く、「正當明星現ずるとき、忽然として悟り去る、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「㋹射鵰の手によらずんば、爭か李將軍を知らん。」僧云く、「只だ一人眞を發し源に歸するが如きんば、大地の衆生、什麼の處にかある。」師云く、「大家這裡にあり。」僧云く、「釋迦老師、顚言倒語して道ふ、『奇なるかな、一切衆生、悉く如來の智慧德相を具す』と、既に是れ風なきに浪を起す、如何が太平を得去らん。」師云く、「釋迦老師を謗することなくんば好し。」僧云く、「恁麼なれば則ち切に忌む、㋞當初を愼まざることを。」師云く、「知つて始めて得べし。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「未だ雪嶺に登らざるに、雪山雪寒し、未だ明星を見ざるに、衆星朗然たり。悟と㋡未悟の時と、萬里一條の鐵。」

臘月半上堂、「光陰箭射の如く、今朝臘月半、氷は水より生じて、水よりも冷かに、青は藍より出でゝ、藍よりも青し。諸人若し會得せば、妨げず、㋥順時保愛することを。其れ如し未だ然らずんば、雪の消し去るを待ち得て、自然に春到來。」

結夏小參、「嶽峯の絶頂、峭峻孤危、老胡仰望し及ばず、古磵寒泉、徹底淸冷、衲僧覷視するに門なし。若し這裡に向つて覷得透し挨得入せば、方に仰望し及ばず、覷視するに門なき底の消息を知らん。身を轉じて活路を行じ、手を擺つて那邊に出づ。一切處に禁足し、一切

㋹射鵰の手。空飛ぶたかを、射落す位のうで前で無くては、李廣を知ることは出來ぬ。
㋞當初を愼まず。初めの粗雜の辭を取消します。
㋡悟りの頭から未悟の尻迄、里程を數ふれば壹萬里、金剛石疊み堅きこと鐵の如し。
㋥順時保愛。分相應に食つたり飲んだりせよ。

處に護生す。長期短期を問はず、豈に(ナ)寒岸異草を守らんや。然も是の如くなりと雖も、黑漆の拄杖、猶ほ未だ肯はざることあり、更に甚の殺盡して方に安居、鐵船水上に浮ぶとか說かん。力を費すこと少からず、拈出するを勞せず、畢竟崇福九夏、如何が行履せん。」拄杖を卓して云く、「(ラ)等閑に獨り超ゆ千聖の外、明月清風類して齊しからず。」

復た擧す、保福因に僧侍立す、福云く、「儞が恁麼に麁心なることを得たり。」僧云く、「甚の處か是れ某甲が麁心。」福、一塊土をもつて僧に度與して云く、「內外に抛向し着せよ。」僧、(ム)門外に抛向し、再び來つて却つて問ふ、「甚の處か某が麁心。」福云く、「我れ儞が(ウ)築着磕着を見る。所以に麁心と道ふ。」師拈じて云く、「保福一顆の明珠、這の僧に附與す、惜むべし、這の僧得て受用すること能はず。崇福門下、總に是れ麁心底。何が故ぞ、我れ諸人を見るに、也た是れ築着磕着。」

次の日上堂、僧問ふ、「衲僧家、尋常氣宇王の如し、甚としてか今朝無繩自縛なる。」師云く、「一事によらずんば、一智を長ぜず。」僧云く、「只だ朝に西天に到り、暮に東土に歸るが如きんば、還つて禁足底の道理ありや也た無や。」師云く、「終日行いて一步を動せず。」僧云く、「如何なるか是れ鵓護雪、臘人氷。」師云く、「甚の死急をか着けん。」僧云く、「如何なるか是れ(ヰ)鐵彈子。」師

(ナ)寒岸異草。小を得て大を忘す。

(ラ)壺中別に日月あり。

(ム)門外に抛向。此の樣に正直にきちやうめんに、云ふことを聞きます。

(ウ)築着磕着。頭を柱やとびらにつきあたつたり、こつつりこ、かつちりこばかりしてゐる。

(ヰ)鐵彈子。福州長慶の暹禪師、因に僧問ふ、「西天臘人を以て驗となす、未審し此の間は何を以て驗となす、」師云ふ「鐵彈子、」僧問ふ、「意旨如何、」師曰く、「大底は大、小底は小。」

云く、「團圝劈不破。」僧云く、「和尚此間、何を以てか驗となす。」師云く、「青山流水。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「四月十五、布袋頭結し、盡乾坤大地、一絲毫を漏さず。內放出せず、外放入せず、正恁麼の時、轉身の一句、作麼生か道はん。」拂子を擊つて云く、「㋨一把の柳枝收不得、風に和して搭在す玉欄干。」

上堂、「佛法の兩字、平地の波瀾、鼓を擊つて陞堂、已に㋔物義を傷る。且く道へ、崇福門下、畢竟如何が行履せん。」拄杖を卓すること一下して云く、「二時の粥飯、㋗氣力麄なり、無事山邊行くこと一轉。」

雨によつて上堂、「三日の晴、一日の雨、㋳天平に地平に、河滿ち井滿つ。崇福只だ㋮口あつて飯を喫することを得たり、何が故ぞ是の如くなる。㋘佛法は爛却を怕れず。」

中夏上堂、「㋫荷葉團々、菱角尖々、衲僧一見便見、一得永得。然も是の如くなりと雖も、猶ほ是れ半提、須らく全提の時節あることを知るべし。何が故ぞ、行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時。」

解夏小參、「二千年前、靈山會上、㋙怛薩阿竭、百萬の聖衆と、結制解制、長期短期、單に此の事を明す。二千年後、崇福山中、小僧紹明、八十餘僧

㋨一把柳枝。是れは黃山谷が晦堂和尚へ引導せし時の偈なり、そよふく風に柳の枝がさらりと欄干をなでた、さても其の儘、欄干に結びつく。

㋔物義を傷る。風無きの波、好肉に瘡を剜る。

㋗氣力麄。鬱勃の精神の遣りばがない。

㋳旱天に雲霓を得。四民歡抃。

㋮口あつて。口開けて居れば、飯が飛び込む。

㋘佛法は爛却を怕れず。捨てるものあれば拾ふ神あり。

㋫荷葉團々。會元五に、僧、夾山の會禪師に問ふ、「如何なる

と、三月安居、九旬禁足、全く此の事に憑る。西天此土、毫髮も移らず。所以に道ふ、㋓三十年藥山にあつて、只だ此の事を明むと、今は則ち聖制周圓、時自恣に臨む、試みに問ふ、「諸禪德、那箇か是れ此の事。」驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「若し這裡に向つて會得し去らば、初秋夏末、東去西去、脚頭脚底、七穿八穴。其れ如し未だ然らずんば、前程人に逢はば、錯つて㋢擧することを得ざれ。」

復た擧す、地藏和尚、僧に問ふ、「甚麼の處よりか來る。」僧云く、「南方。」藏云く、「南方の佛法如何。」僧云く、「商量浩々地。」藏云く、「爭か似かん、我が這裡田を種ゑ飯を摶めて喫するに。」僧云く、「㋐三界を爭奈何せん。」藏云く、「什麼を喚んでか三界となす。」師拈じて云く、「地藏阿師、只だ田を種ゑ、飯を摶めて喫することを解す。佛法は未だ夢にだも見ざることあり。崇福恁麼に道ふ、意何にかある。今夜暑氣未だ退かず、且つ來日を待つて、㋚汝諸人の爲に說破せん。」

次の日上堂、僧問ふ、「三月安居、今既に滿つ、九旬㋖公用の事如何。」師云く、「冬瓜は直うして儱侗、瓠子は曲つて灣々。」僧云く、「學人恁麼に去る

か是れ相似の句。」師云く、「荷葉團團鏡の如し、菱角尖尖錐に似たり。」

㋙怛薩阿羯。梵語、此に譯して如來と云ふ。

㋓三十年藥山にあつて此の事を明む。會元九に船子和尚、夾山に囑して曰く、「汝向後直に須らく藏身の處沒蹤跡、沒蹤跡の處身を藏する勿れ、吾れ卅年藥山に在つて、祇だ此の事を明む、汝今既に得、他後、城塱聚落に住する勿れ」と。

㋢擧することを得ざれ。馬鹿くちきくな。

㋐三界を爭奈何せん。食ふてねて居ては三界輪廻を何としませう。

㋚雀を放す時の、たとつひ來いじや。

㋖公用の事。九十日の本職の仕事、儱侗はぶらりとさがること、灣々はひねくりまがる。

時如何。」師云く、「㊀且緩々。」僧云く、「昔日馬祖八十四人の善知識を出す、箇々㊁阿漉々。今夏和尚、八十餘員の衲僧を接す、何の長處かある。」師云く、「人々天を頂き地を履む。」僧云く、「㊂未だ崇福の門に到らざるに、先づ知り了んぬ。」師云く、「更に須らく子細にして始めて得べし。」僧云く、「記得す、仰山、香嚴に語げて云く、『如來禪は師兄の會することを許す、祖師禪は未だ夢にだも見ざることあり』と、此の意如何。」師云く、「言中に響あり。」僧云く、「如何なるか是れ如來禪。」師云く、「四十餘年說不到。」僧云く、「如何なるか是れ祖師禪。」師云く、「九年面壁覰不破。」僧云く、「如何なるか是れ和尚の禪。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「杲々として明かなること日の如く、漫々として黑きこと漆に似たり。夜半甚だ分明、天曉還つて不露。衲僧一夏、頭を聚め耳を接し、東に覰西に覰れども覰不透、橫に咬み竪に咬めども咬不破、忽然として自恣の日到來、諸人合に作麽生。崇福未だ免れず、重ねて注脚を下し去ることを。」拂子を竪起して云く、「看よ看よ、杲々として明かなること日の如く、漫々として黑きこと漆に似たり。」

㊀且緩々。ちよつとよ、ちよつとまて。
㊁阿漉々。圓轉自在脫洒自由。
㊂未だ云々。頭に天を戴き足地を履む位の事は、生れた時から知つて居る。

崇福寺語錄下 終

洛陽(イ)萬壽禪寺語錄

侍者　宗(ロ)心　編

師、(ハ)嘉元三年七月二十日に於て開堂。

拈香に云く、「此の香、靈根空劫以前に生在し、瑞氣(ニ)九天の上に(ホ)盤旋す。爐中に爇向して、恭しく爲に今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬々歲を祝延したてまつる。陛下、恭しく願はくは、(ヘ)金輪統御して、天基永く茂り、四海仁に歸して、萬邦入貢せんことを。」

次に香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、恭しく太上天皇の爲にす。恭しく願はくは億萬年、天清く地泰かにして、永く皇圖を祚し、三千世時和し、歲豐かにして、咸く睿德を謳はんことを。」次に香を拈じて云く、「此の一瓣の香、日本に名聞え、大宋に貴を知られ、乳竇峰前、(ト)南屛圓裡、東に嗅ぎ西に嗅いで、

(イ)萬壽。五山の一、山城京城山。
(ロ)宗心。即庵宗心禪師なり。
(ハ)嘉元三年。二條院の年號、此の時師年七十一歲なり。
(ニ)九天。鈞天、蒼天、昊天、玄天、幽天、皓天、朱天、炎天、陽天をいふ、淮南子に出づ。
(ホ)盤旋。盤は盤桓、旋は旋回。
(ヘ)金輪は四輪王の一、四天下を統治す。
(ト)南屛。淨慈光孝禪寺、乳峰や南屛圓を嗅ぎまはしても更に香氣なし。

全く氣息なし。(チ)雙徑那畔五髻峯頭に逗到して、人に覷着せられて、天に熏じ地を炙す。扶桑に歸り來つて、一回拈出して一回新なり。爐中に爇向して、前住大宋　徑山興聖萬壽禪寺先師虛堂大禪師の爲にし奉り、用つて法乳の恩に酬ゆ。」

師遂に座に就き、垂語して云く、「絃を動かして曲を別ち、葉落ちて秋を知るは、也た是れ尋常。朕兆未だ分れず、文彩未だ彰はれざる以前に會得する底あることなしや。」僧問ふ、「法幢を建て宗旨を立するは、正に此の時にあり、祝聖の一句、請ふ師提唱せよ。」師云く、「雲淨うして日月正し。」進んで云く、「恁麼なれば則ち一言以て南山の壽を祝し、萬國歌謠して太平を賀せん。」師云く、「風行けば草偃す。」進んで云く、「記得す、梁の武帝、傅大士を請じて講經せしむ、士終に陞座、案を打つこと一下して、便ち下座す。此の意如何。」師云く、「未だ座に登らざる時、經旨既に明かなり。」進んで云く、「帝愕然たりと、又作麼生。」師云く、「將に謂へり、(リ)武帝忘却すと。」進んで云く、「志公云く、『大士講經し竟んぬ』と、如何が理會せん。」師云く、「知音知つて後更に誰か知る。」進んで云く、「今日聖主、和尚を請じて演法せしむ、何の祥瑞かある。」師云く、「無限の淸風來つて未だ休せず。」進んで云く、「龍吟ずれば霧起り、虎嘯けば風生ず。」師云く、「誰か敢て近傍せん。」僧禮拜す。僧又問うて云く、「(ヌ)釋迦の說法、多寶證明す、和尚今日開堂演法、未審し是れ甚麼の法をか說く。」師

(チ)雙徑五髻峯。徑山萬壽禪寺、虛堂の住處なり。
(リ)武帝忘却すと。靈山の密記を忘れられたかと思へば、立派に愕然せられた。
(ヌ)釋迦の說法多寶證明。法華寶塔品の文。

云く、「㋸法々本來法。」進んで云く、「恁麼なれば則ち大機圓應、大用無方。」師云く、「一葉落ちて天下秋なり。」進んで云く、「記得す、夾山初め住院のとき、因に僧ありて問ふ、『如何なるか是れ法身。』山云く、『法身無相』と、此の意如何。」師云く、「錯つて定盤星を認む。」進んで云く、「僧問ふ、『如何なるか是れ法眼。』山云く、『法眼瑕なし』と、意旨如何。」師云く、「學語の流。」進んで云く、「時に道吾座下にあつて失笑す、山請益し、衆に別れて、船子に參じて省發す。未審し、夾山什麼の見處かある。」師云く、「千聞は一見に如かず。」進んで云く、「道吾聞き得て、僧をして行いて問はしむ、『如何なるか是れ法身。』山云く、『法身無相』と、何の優劣かある。」師云く、「甜瓜は蔕に徹して甜く、苦瓠は根に連つて苦し。」進んで云く、「僧問ふ、『如何なるか是れ法眼。』山云く、『法眼瑕なし』と、意那裡にかある。」師云く、「意氣ある時は意氣を添へ、風流ならざる處也た風流。」進んで云く、「僧還つて道吾に擧似す、吾曰く、『者の漢、此の囘方に徹せり』と、道吾甚麼の眼目をか具す。」師云く、「鵝王乳を擇ぶ、素鴨の類にあらず。」進んで云く、「古人底は且く置く、今日人あり、如何なるか是れ法身と問はゞ、和尚作麼生か祇對せん。」師云く、「秋風渭水を吹き、落葉長安に滿つ。」進んで云く、「恁麼なれば則ち昔日の夾山、今日の和尚。」師云く、「切に忌む、亂に㋾針錐することを。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「目前に法なく、門外の車馬鬧浩々たり。意は目前にあり、屋頭の松竹冷青々たり。是

㋸法々。一法一法悉皆本來の法なり。

㋾針錐。壺を知らないで亂りに針を刺すと人を殺す。

れ目前の法にあらず、耳目の到るところにあらず、淸寥々、白的々、只だ這の些兒、人の憎みを得。古に亘り今に亘り、變易せず。釋迦老子、四十餘年、橫說竪說も說不到、達磨祖師、十萬里來、東覷西覷も覷不破。臣僧紹明、今日開堂、覺えず眸を擡げて、一覷に覷着し、端なく口を開いて、一句に說着す。說著覷著、太古の風を追囘し、純ら無爲の化を樂む。正恁麼の時、恩を知りて恩を報ずるの一句、作麼生か道はん。」拄杖を卓すること一下して云く、「四海而今鏡よりも淸く、三邊誰か敢て封疆を犯さん。臣僧紹明、恭しく聖旨を奉じて、今日開堂、正法眼藏を擧揚して、聖壽の無疆を祝延したてまつる。人天大會、草木叢林、情と無情と、同じく光輝を蒙り、共に聖恩に霑ふ。臣僧紹明、下情、感激の屛營の至に勝へず。」

「凡そ衲僧家は、時を知り節を知るを名けて靈利の漢となす。所以に道ふ、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべしと。一年三百六十日、一日十二時辰、虛しく棄つる底の時節なし。釋迦老子、達磨大師、皆是れ此の時節に應じ、出で來つて大法輪を轉じ、大妙用を顯す。乃至、自餘の諸大老、情と無情と、盡く是れ時に隨つて受用す。故に曰く、『時節既に至れば、其の理自ら彰はる』と。若し佛性の義を論せば、人々具すと雖も、天眼も也た看難し、箇々備ふと雖も、天耳も也た聽きがたし。然も是の如くなりと雖も、時節既に至れば、其の理自ら彰はる。眼を以て見るべく、耳を以て聽くべし、見聞の及ぶところ、一々皆是れ本

の屛營。 恐悚の義、三國志の吳語に、「山林中に屛營彷徨す」とあり、是れより轉化して表箋の通語となりしなり。

來の消息、本地の風光、今日人天普く會す。若し此の時節因緣を知らば、凡を轉じて聖となし、同じく、大光明藏三昧の中にあつて遊戯せん。」

擧す、太宗皇帝因に僧あり、朝見、座を賜ふて宣問す、「何の處よりか來る。」僧奏して云く、「廬山の臥雲庵。」帝云く、「㋕臥雲深き處天に朝せず、甚麽としてか這裡に至る。」僧無語。師云く、「太宗㋵日照して天臨み、幽として燭さゞるをなし。當時若し臣僧に、臥雲深き處天に朝せず、甚麽としてか這裡に至ると問はゞ、便ち奏して云はん、㋟遠く聖恩を蒙ると、管取せん皇情大いに悅ぶことを。」

八月旦兩班を謝する上堂、「雨炎暑を洗ひ、徧界清涼、白露珠を垂れ、槿花煙を凝す。頭々轍に合し、東西原に逢ふ。何が故ぞ是の如くなる。」拂を擊つて云く、「才を量つて職に補す。」

九月旦上堂、「頭々是、物々是、塞鴈長空を過ぎ、蟋蟀草底に吟ず。㋹三家村田井水、一々他物にあらず、箇々自己に歸す。且く道へ、何を以てか驗とせん。」拄杖を卓して云く、「公驗分明。」

重陽上堂、「天地同根、萬物一體、大千を方外に抛ち、須彌を芥子に納る。卷舒我れにあり、縱橫妙を得。左之右之、是不是なし、何を以てか驗となす。」拂子を擊つて云く、「重陽九日菊花新なり。」

㋕臥雲深處。白雲堆々裡に安臥して、天子に見えずと云ふ原語。
㋵日照天臨。天然の伶俐底を云ふ。
㋟遠く聖恩を蒙る。廬山の山奥まで聖恩を蒙る。
㋹三家村田井水。昔萬壽のあたりは茅屋一兩家に、はれ釣瓶の野井を認めしなり。

臘月旦上堂、「今朝臘月一、那事分明に極る、徧界分外に寒じ、萬里一條の鐵。」

(の)二月旦上堂、「春 山亂靑を疊み、春水虛碧を漾はす、寥々たる天地の間、獨立望何ぞ極らん。山僧の此の萬壽に住すること、恰も雪竇老人に似たり、東西山あり水あり、今日覺えず眸を擡げて、清興太だ遠きことあるを。何ぞ也た是の如くなる。」拄杖を卓すること一下して云く、「四海五湖皇化の裡、知らず何の處か是れ封疆。」

龜山法皇の(の)大祥、勅を奉じて嵯峨殿に就いて陞座、師香を拈じて云く、「此の香、天地覆載し、日月照臨し、瑞を爲し祥を爲し、雲と爲り蓋と爲る。爐中に爇向して、禪定法皇の爲にし奉る。恭しく願はくは、心華長く禪林無盡の晨に開き、玉葉鎭に御園萬古の春に芳しきことを。」師衣を斂めて座に就いて云く、「千聖の靈機、全く掌握に歸し、列祖の命脈、只だ目前にあり。此の旨を領得する底あることなきや。」僧問ふ、「金鷄曉を唱へ、玉鳳花を含む、一句無私、請ふ、師祝聖。」師云く、「天高うして群象正し。」僧云く、「只だ一句無心の法を將つて、仰いで堯天舜日の明を祝す。」師云く、「四海九州、雷動じ風行く。」僧云く、「昔日(ゑ)梵王、佛の說法を請ふとき、花を雨らし地を動す。今日聖主 師の說法を請ふ、何の祥瑞かある。」師云く、「杲日天に麗き、清風匝地。」僧云く、「恁麼なれば則ち四衆恩に霑ひ去らん。」師云く、「闔

(の)德治元年の二月、師七十二歲なり。

(の)大祥は三年忌なり、大祥小祥は禮の喪禮に出づ、後宇多院の御父なり、故に師を請じて此の導師とせられしなり。

(ゑ)梵王。法華化城喩品にあり。

國咸く知る。」僧云く、「前に釋迦なく、後に彌勒なし、正當恁麼の時、禪定法皇何の處にあつてか作佛し去る。」師云く、「㋤徧界曾て藏さず。」僧云く、「記得す、肅宗皇帝、忠國師に問ふ、『如何なるか是れ㋶十身調御。』師云く、『檀越、毗盧頂上を踏んで行け』と、此の意如何。」師云く、「歩々清風起る。」僧云く、「帝云く、『寡人不會。』國師云く、『自己の清淨法身を認むること莫れ』と、又作麽生。」師云く、「玄關を瞥轉し去る。」僧云く、「今日如何なるか是れ十身調御と問はゞ、和尚如何が祇對せん。」師云く、「巍々堂々、煒々煌々。」僧云く、「優曇花綻びて普天香し」と。便ち禮拜す。師云く、「時節逢ひ難し。」

師乃ち云く、「聲前の一句、乾坤未だ剖れざるに早く漏逗す、末後の一機、世界纔かに分れて便ち現成す。佛祖不傳の妙、觸處に全く彰る。人天性命の道、當陽に顯露す。天に輝き地を鑑み、色に透り聲に透る。歴代の祖師、天下の衲僧、千般の伎倆を倣し盡せども、總に這の影子を出でず。臣僧紹明、今日恭しく聖旨を奉じ、高く此の座に陞る。未だ免れず、佛祖未行の令を行じ、衲僧未拈の機を用ふることを。」驀に拄杖を拈じ、禪床に靠けて云く、「且く道へ、是れ何の宗旨ぞ。便ち見る、君臣慶會、時清く道泰かに、堯天舜日、共に昇平を樂むことを。且く闕を望み恩に酬ゆるの一句、作麽生か道はん。」拄杖を卓して云く、「但だ見る皇風の一片となることを。知らず何の處か是れ封疆。」

㋤**徧界曾て藏さず。**風吹き日炙す、皆是れ法皇の面目なり。

㋶**十身。**般若五百六十八卷に、「何をか十身となす、一には不等身、二には清淨身、三には無盡身、四には善修身、五には法性身、六には離尋問身、七には不思議身、八には寂靜身、九には虛空身、十には妙智身。」

臣僧紹明、恭しく惟れば、太上天皇、昔日靈山會上にあつて、親しく如來の㋰記莂を受く。今日王舍城中に於て正宗を扶竪し、祖道を光賛す。山野をして宗乘を擧揚し、人天大會、草木叢林、情と無情と、均しく光輝を蒙り、同じく恩澤に霑さしむ。臣僧紹明、下情、感激屏營の至に勝へず。」

又云く、「從上の佛祖、世に出興し、只だ本分の一着に據りて、略目前の些子を露はす、閃電光・擊石火の如くに相似たり。眼を眨得し來れば、三千里外。然も是の如くなりと雖も、若し本分を論ぜば、斷々として言語の上にあらず。所以に釋迦老子、㋒摩竭に室を掩ひ、此の事を思惟す。身を藏して影を露はす、天の普蓋するが如く、地の普擎するに似たり。當時一衆、若し這裡に向つて、一時に會し去らば、那ぞ更に四十九年、三百餘會、許多の葛藤を說き盡さん。又一日大衆雲集し定まる、世尊陞座、一言を措かず、明かなること杲日の如く、偏界藏さず、一衆猶ほ未だ會せざることあり。文殊白槌して云く、「諦觀法王法、法王法如是。」樵子の徑によらずんば、爭か㋭葛公が家に到らん。後來雪竇の明覺大師、頌して云く、「列聖叢中作者知る、法王の法令斯の如くならず、會中若し㋨仙陀の客あらば、何ぞ必ずしも文殊一槌を下さん。雪竇老漢、世尊未登座の時に向つて、箇の

㋰記莂。佛法は國王大臣有力の檀越に付囑するの記莂なり。

㋒摩竭に室を掩ふ。諸佛要集經に「世尊、摩竭陀國にあり、阿難に言つて曰く、諸の弟子人天四衆、我れ常に說法し、敬仰を生ぜず、我れ今因沙舊室の中に入つて、坐夏九旬せん、忽ち人あり、法を問はゞ、一切法不生、一切法不滅と說けと、言ひ訖つて、室を掩ふて坐す。」

㋭葛公。名は玄、丹霞洞に在つて錬丹し、飛來峯に得道す、文殊の手引によらずんば、世尊の不言は分らぬと。

㋨仙陀の客。伶俐の漢と云ふが如し、のみこみの早き人を仙

消息を通じて、恁麼に頌出す、却つて些子に較れり。ある時外道、佛に問ふ、『有言を問はず、無言を問はず』と、世尊良久す、外道悟り去つて、讃嘆して云く、『世尊大慈大悲、吾が迷雲を開いて、吾をして得入せしむ』と、只だ這の外道、也た是れ鈍漢、若し是れ世尊未だ良久せざる以前に悟り去らば、異道の名を免れ得ん。何に況んや、而今多くは是れ世尊良久の處に向つて會せんと要す、劍去つて久し矣、方に乃ち舟を刻む。其れ如し然らずんば、又甚麽の處に向つてか會し去らん。妨げず、目前に於て高く眼を著くることを。一見便見、一得永得なるも、未だ分外となさず。世尊既に是れ是の如し、況んや又祖師門下には、目前に一條の活路あり、他の一切の有情無情をして、同じく此の中に入つて、共に大安樂大自在の地に到らしむ。何が故ぞ是の如くなる、他家曾て㋾上頭の關を踏む。」

復た擧す、唐の太宗皇帝、因に僧朝見、奏して曰く、「陛下還つて記得すや也た無や。將に謂へり、皇帝㋻忘却す」と。帝云く、「何の處にか相見し來る、日照し天臨む。」僧云く、「靈山に一別してより、直に如今に到るまで、來風辨ずべし。」帝云く、「何を以てか驗となす。」僧無語。師拈じて云く、「皇帝天鑑無私、這の僧無語、公驗甚だ分明なり。何　故ぞ、既に是れ親しく龍顏に對す。」

萬壽寺語錄　終

陀の客と云ふ、涅槃經に出づ。

㋾上頭の關。父子不傳の呼吸なり。

㋻忘却。靈山の記莂を忘却するなり。

巨福山建長禪寺語錄

侍者　克原　編

師、德治二年臘月二十九日に於て入院。

山門、「南來北來、東より西に過ぎ、㋑諸方の門戶を歷遍し、却つて這裡に向つて歸るを知る。且く道へ、這裡是れ甚の所在ぞ。」喝一喝して云く、「到るもの方に知る。」

佛殿、「看よ看よ、古佛猶ほ在り、切に忌む當面に㋺諱却することを。」便ち座具を展ぶ。

土地堂、「我れは說法、儞は護法、須らく知るべし、心同じく道同じきことを。㋩大家齊しく力を着け、舊家風を扶起せよ。」

祖師堂、「諸祖の三昧、山僧知らず、山僧が三昧、諸祖知らず。既に是れ相知らず、㋥甚によつてか特地に炷香作禮す、彼此出家兒。」

方丈、「德山の棒、臨濟の喝、㋭這裡一時に倚閣、甚麼の處に向つてか相見せんと擬す。咄々、且く門外に居く。」

㋑諸方の門戶。師家の門庭を破するなり。
㋺諱却。佛の前に垣をゆふなり。
㋩大家。大權菩薩の皆樣方。
㋥甚によつてか特地。齊と楚とは風馬牛も相關せざるなり、甚によつてか特地に作禮す。
㋭這裡一時に倚閣。倚閣は手を付けないと云ふこと、方丈では左樣の用事なし。

(へ)府帖、「(ト)山川を該括し、天地を包容す。玉轉じ珠回り、祥をなし瑞を爲す。西來的々の意を撥揮して、此れより拂々香風起る。」

諸山疏、「桑を指して柳を罵る、叢林の風義、惡語人を傷ふ、一團の和氣。」

山門疏、「(チ)未だ擧せざるに先づ領じ、未だ言はざるに先づ通ず。家裡の人、家裡の話を説く、字々句々皆春風。」

江湖疏、「(リ)一言に道ひ盡して、頭々轍に合し、月四海に明かに、風六合に淸し。」

法座、「向上の一路、嶮崖の一機、歩を擧すれば踏着し、口を開けば説着す。須彌燈王、(ヌ)這邊を過ぎ着。」

師陞座、香を拈じて云く、「此の(ル)一瓣の香、爐中に爇向して、恭しく爲に、

今上皇帝聖躬萬歳萬歳萬々歳を祝延したてまつる。陛下、恭しく願はくは、金輪統御して、天基永く固く、四海仁に歸して、萬邦拜手せんことを。」

次に拈香して云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、

(へ)府帖。鎌倉幕府の請狀なり。
(ト)山川天地は將軍の德に就いて、玉轉珠回は機用に就いて、祥をなし云々は其の効果。西來的々は其の修用なり。
(チ)未だ擧せざる云々。こちらの注文する迄にちやんと承知して居る、こちらの發言しないに、ちやんと届いて居る。
(リ)一言云々。是れは疏中妙句を踏んで挨拶ありしなり。
(ヌ)這邊云々。着は助辭、須彌燈王佛はこゝらあたり通らるゝと。
(ル)後二條天皇のための拈香なり。
(ヲ)一品親王。久明親王なり。

ヲ一品親王征夷大將軍家の爲にし奉る。伏して願はくは、威三邊を鎭し、德四海に被り、永く上聖を佐けて、普く下民を澤せんことを。

此の一瓣の香、爐中に爇向して、本寺大檀那ワ最勝園寺殿の爲にし奉る。伏して願はくは、壽は南山に等しく、福は北溟より深く、皇家に柱石として、佛法にカ金湯たらんことを。

此の香、爐中に爇向して、前住大宋徑山興聖萬壽禪寺虛堂和尙大禪師の爲にし奉り、用つて法乳の恩に酬ゆ。」

師衣を斂め、座に就いて云く、「太華をヨ分破し、滄溟を劈開す。當機覿面、誰か敢て辨明せん。有りやありや。」僧問ふ、「大法幢を建て、大法輪を轉じ、四衆筵に臨む、請ふ師祝聖。」師云く、「瑞雪地に滿ち、祥雲空に徧し。」僧云く、「只だ金殿に禪を譚じてタ龍顏を怡悅するが如きんば、今日の勝會と是れ同か是れ別か。」師云く、「限りなきの淸風、來つて未だ已まず。」僧云く、「恁麼なれば則ち寰中は天子の勅、塞外は將軍の令。」師云く、「一句に道著す。」僧問ふ、「記得す、レ閻王、羅山和尙を請じて開堂、山陞座、僧伽梨を斂めて乃ち曰く、『珍重』と、便ち下座、意旨如何。」師云く、「ツ龍袖拂開して全體現ず。」僧云く、「閻王近前、手を把つて

ワ最勝園寺殿。北條貞時なり。
カ金湯。外護の意、漢書蒯通傳に「金城湯池攻むべからず」の語あり、金鐵の城、沸熱の湟近づきがたきなり。
ヨ分破。太華山を眞二つに分ち、東海を縱横につんざく、衲僧得力の處。
タ龍顏。後宇多院の召に應じて宮中に法を說く。
レ閻王。王審知なり、道閑禪師を請じて羅山に居らしむ。
ツ龍袖拂開。龍は寵なり、かき合せし袖を一時に開くなり。

曰く、『靈山の一會、何ぞ今日に異ならん』と、又作麼生。」師云く、「㋡天鑑私無し。」僧云く、「山曰く、『將に謂へり、是れ箇の俗漢』と、意那裡にかある。」師云く、「君臣道合。」僧云く、「後來白雲の端和尚頌して曰く、『㋤紛々たる雪影閩天に耀く、閩王欣逢して倍樂然、一旦春風大地を吹かば、更に㋤一點の階前に在るなし』と、此の意如何。」師云く、「錦上に花を添ふること又一重。」僧云く、「果して是れ人天の大導師。」便ち禮拜す。

師乃ち云く、「道は目前にあり、四面の青山碧空を磨す、目前觀難し、雙澗の泉水湛へて藍の如し。這裡に向つて會し去らば、人々分上、壁立萬仭、箇々面前、大寶光を飛ばす。朝遊夕處、賓主歴然、佛祖の命脈、全く掌握に歸し、衲僧の巴鼻、觸目現成。直に得たり、瑞雪地に滿ち、祥雲空に徧きことを。正に是れ鰲山成道底の時節、巨福峯鎌倉縣、和氣靄然たり。鷲峯の消息、正に斯の時にあり、少室の家風、又見る重ねて新なることを。正恁麼の時、畢竟㋶誰か恩力を承くる。」拄杖を卓すること一下して云く、「㋰天上に星あり皆北に拱す、人間水として東に朝せざるなし。」

復た擧す、㋒乳源和尚、衆に示して云く、「西來的々の大意、擧唱し易からず。」時に僧あり出づ、源便ち打つて云く、「是れ甚麼の時節ぞ出頭し來る」と。師拈じて云く、「乳源只だ諸人の時を知り節を知

㋡天鑑無私。天の照鑑にはかげひなたなし。
㋤紛々雪影。羅山を賞美し、閩王欣逢は、珍重の說法を聞いて樂む處。
㋤一點。一點の雪も一點の俗塵もなし、將に謂へり、是れ箇の俗漢を拈弄することを。
㋶誰か恩力。天子樣と將軍樣の御恩なり。
㋰天上に星あり。北辰其の處に居て衆星之に拱ふ。
㋒乳源。馬大師の法嗣。

らんことを要す。此の如きの㋖業々、這の僧、衆を犯して出づ。惜むべし未だ肯て㋨全く領ぜざることを。」

當晩小參、「法に定相なく、緣に遇ふて卽ち宗、立處皆眞、方に隨つて主となる。所以に山僧帝都にありて法幢を建つる、其の緣にあらざることなし。關東に來りて宗旨を立す、其の處を擇ばず。直に得たり、處々原に逢ひ、頭々轍に合することを。便ち見る、年窮り歲暮れて、㋔破沙盆子掛けて壁上にあり、臘盡き春回つて、大庾嶺上、㋨古佛光を放つ。恁麼底の時節、時に應じて㋳祐を納るゝの一句、作麼生か道はん。」拂子を擊つて云く、「四海の清風已に㋮駱蕩、㋗十洲の月色人を照して新なり。」

復た擧す、潙山因に僧問ふ、「如何なるか是れ道。」山云く、「無心是れ道。」僧云く、「學人不會。」山云く、「不會底を會取せよ。」僧云く、「如何なるか是れ不會底。」山云く、「只だ是れ儞、是れ別人にあらず。」師拈じて云く、「潙山恁麼に道ふ、明投暗合、然も是の如くなりと雖も、諸人切に忌む恁麼に會することを。何が故ぞ、㋻靈蹤更に猿啼の處あり。」

正旦雨班を謝する上堂、「風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ。左之右之、是

㋖業々。汲々と同意ならん。

㋨全く領ぜざることを。頭の先から足のつま先まで微塵程も全點しない。

㋔破沙盆。破れたすりばちなれども、此の處はふちのもげたざると講すべし。

㋨古佛光を放つ。清香十里に香ばし。

㋳祐を納る。天の祐助を容納する。

㋮駱蕩　駱の字は駘の誤ならん、駘蕩は春色舒放なり。

㋗十洲。十洲三島は仙人の住居なり。

不是なし。(ヨ)七穿八穴、(エ)吉にして利ならざることなし、何が故ぞ。」卓拄杖、「花の開くことは(テ)栽培の力を假らず、自ら春風の伊を管帶するあり。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「春日熙々、春風浩々、桃腮雨に媚び、柳眼煙を鎖す。如何なるか是れ瞿曇の眞面目。」師云く、「遍界曾て藏さず。」僧云く、「塵塵等しく是れ春光の裡、雙樹甚によつてか榮枯ある。」師云く、「無榮枯の處に向つて看よ。」僧云く、「(ア)生と道はず滅と道はず、脣吻に涉らず、願はくは一句を聽かん。」師云く、「天は東南に高く、地は西北に傾く。」僧云く、「只だ(サ)今日は卽ち有、明日は卽ち無と道ふが如きんば、如何が體會せん。」師云く、「桃花は紅に、李花は白し。」僧禮拜す。又僧問ふ、「十方(キ)薄伽梵、一路涅槃門、未審し路頭甚の處にかある。」師云く、「脚下を看よ。」僧云く、「乾峯拄杖を以て劃一劃して云く、『這裡にあり。聻』と。」師云く、「路頭分明。」僧云く、「記得す、世尊入涅槃に臨み、手を以て胸を摩し、普く大衆に告げて云く、『汝等諦かに吾が紫磨金色の身を觀、瞻仰して足ることを取れ、後悔せしむること莫れ』と、意旨如何。」師云く、「末後慇懃。」僧云く、「世尊又云く、『若し吾れ滅度すと謂はゞ、吾が弟子にあらず、若し吾れ滅度せ

(ヲ)蹉跎。仙境に猿の啼くのは一寸こたへると。

(ヨ)七穿八穴。七通八達と見るも可なり、人間の七竅八穴と見るもよし。

(エ)吉にして利ならざることなし。立春大吉。

(テ)栽培の力。强ひて助長せずとも、時節來れば渠自ら成る、骨折れば運が開ける。

(ア)生と道はず云々。世尊滅する時、手を以て胸を摩して曰く「汝等若し吾れ滅度すと謂はゞ、吾が弟子にあらず、若し吾れ滅度せずと謂はゞ、亦吾が弟子にあらず。」

(サ)今日は卽ち有云々。涅槃經遺敎品に、爾の時阿泥樓豆、阿難を安慰して言く「咄哉、何ぞ愁をなす、如來涅槃の時至るが若きんば、今日ありと雖も明日は卽ち無し。」

(キ)薄伽梵は佛のこと、十方薄伽

すと謂はゞ、亦吾が弟子にあらず、」畢竟如何が委悉せん。」師云く、「平生の肝膽、人に向つて傾く。」僧云く、「飲光來る時、更に雙趺を出す、是れ何の心行ぞ。」師云く、「恩大にして酬い難し。」僧云く、「爭奈せん今に至るまで骨節皮竅に連ねて、暴露す春風百草頭。」師云く、「狼藉少からず。」僧云く、「和尚如何が伊を蓋覆せん。」師云く、「一口に乾坤を呑却す、甚麽の處に向つてか摸索せん。」僧云く、「別に報恩底の句あること莫しや。」師云く、「恩を報じ了れり。」僧便ち禮拜す。師乃ち云く、「日暖に風和し、(ユ)萬蓁敷榮し、釋迦老子、此の時節に於て、百花叢裡に渾身を藏し得たり。然も是の如くなりと雖も、覺えず(メ)脚の露るゝことを。直に如今に至つて收不得、春風に(ミ)惱亂して卒に未だ休せず。」

四月旦上堂、「三月春已に去り、九夏今初めて來る、建長只だ順時保愛を得たり、諸人也た是れ自ら合に節を知るべし。其れ如し未だ然らずんば、只だ見る(シ)落紅風の掃ひ盡すことを、豈に庭樹綠陰の深きを知らんや。」

浴佛上堂、「母胎を未だ出でざるに、度人し畢んぬ、也た是れ我が家の第二機、誰そ更に天を指し復た地を指さん。端なく千古(エ)閑非を惹く、過犯彌天、如何が(ヒ)煎雪せん。」拄杖を卓して云く、「(モ)之を

梵は、十方法界悉皆成佛と同じ。

(ユ)蓁。しげることなり、艸の盛なる貌。

(メ)脚露。頭かくして尻まくり。

(ミ)惱亂。紅々白々、黄紫碧廿四番の觀世音。

(シ)落紅云々。光のどけき春の日に靜心なく花の散るらんなり。庭樹云々は青苔日に厚うして自ら塵なき底。

(エ)閑非。閑はむだごとなり、むだなしぞこなひ。

(ヒ)煎雪。煎は洗と同音相通ず。

(モ)之を齊しうす。臨濟の賊かくしに。大應國師が香を焚き拜をする。

齊しうするに禮を以てす。」

結夏小參、僧問ふ、「西天は蠟人を驗となす、建長門下は何を以てか驗となす。」師云く、「露柱燈籠。」僧問ふ、「未審し意旨如何。」師云く、「汝が面門を照破す。」僧又問ふ、「乾峰和尙、衆に示して云く、『法身に三種の病、二種の光あり、一々透過して始めて穩坐』と、意旨如何。」師云く、「㋝蛇、竹筒に入る。」「雲門衆を出でゝ云く、『庵內の人什麼としてか庵外の事を見ざる』と、此の意如何。」師云く、「㋜家裏の人、家裏の話を說く。」「峯呵々大笑す。門云く、『猶ほ是れ學人が疑處。』峯云く、『闍梨是れ甚麼の心行ぞ』と、此の意如何。」師云く、「㋑彼此知ることを要す。」「門云く、『也た和尙の委悉せんことを要す』と、又如何。」師云く、「㋺果然果然。」僧云く、「只だ乾峯和尙の法身に三種の病、二種の光あり、一一透得して初めて穩坐と云ふが如きんば、和尙如何が祇對せん。」師云く、「㋩一二三四五。」僧禮拜す。

乃ち云く、「我が宗に語句なく、一法の人に與ふるなし。須らく知るべし、當人分上、箇々眼乾坤を蓋ひ、人々舌梵天を拄ふることを。擧足下足、圓覺伽藍にあらざることなく、語默動靜、總に是れ平等性智、劍樹刀山、鑊湯爐炭、一切處に安居し、一切處に禁足するも、未だ分外となさず。建長與麽の告報、只だ諸人の自ら一條の活路子を行ぜんことを要す。其れ如し未だ然らず

㋝蛇竹筒に入る。もがきたふすと云ふことか。
㋜家裡の人云々。細々と內證ごと云ふてゐるわい。
㋑彼此知ることを要す。古人云ふ、ありがたい詞でござると。
㋺果然果然。さてこそさてこそ。
㋩一二三四五。いろはにほ三二一。

んば、(ニ)夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」
復た黄檗、衆に示して云く、「汝等諸人、盡く是れ(ホ)噇酒糟の漢、與麼に行脚せば、何の處にか今日あらん。還つて大唐國裡に禪師なきことを知るや」の公案を擧す。師拈じて云く、「這の老漢、(ヘ)敗闕少からず。且く道へ、那裡か是れ他の敗闕の處、諸人若し也た勘辨し得出さば、但だ親しく黄檗爲人の處を見るのみにあらず、亦乃ち自己の光明を表顯せん。」

次の日上堂、「衲僧家は尋常、千聖を慕はず、己靈を重んぜず。甚麼によつてか四月十五日、釋迦老子二千年前、漫天の網子裏に墮在して、一歩子を動し得ざる。」拂子を擊つて云く、「(ト)犀は月を翫ぶによつて文角に生じ、象は雷に驚されて花牙に入る。」

兩班を謝する上堂、「看よ看よ、東邊底、頂門上杲日空に當る、看よ看よ、西邊底、脚跟下清風地を匝る。一進一退、頭正しく尾正し。建長恁麼に道ふ、意何にかある。」良久して云く、「才を量つて職に補す。」

上堂、擧す、僧、鏡清に問ふ、「學人未だ源を知らず、請ふ師方便せよ。」清云く、「是れ什麼の源。」僧云く、「其の源。」清云く、「若し是れ其の源ならば、何の方便かあらん。」師云く、「鏡清と這の僧との相見は且く置く、如何なるか是れ其の源。」拄杖を卓すること一下して云く、「(チ)行いては到る水の窮るとこ

(ニ)夜行。暗い處でうろつくな。
(ホ)噇酒糟。粕くらひと云ふこと。
(ヘ)敗闕。お山の大將おれ獨り。
(ト)犀は水中に棲む、明月水を照して角中に文を生ず。
(チ)行いては到る云々。こつんと云はして、行いては、坐してはと唱へられた。

ろ、坐しては看る雲の起るとき。」

七月旦上堂、僧問ふ、「(り)火雲空に散じ、秋期時を待つ、萬緣に渉らず、如何が商量せん。」師云く、「曉風落葉を吹き、秋信梧桐に到る。」僧云く、「黃龍に三關の語あり、還つて咨參を許すや無や。」師云く、「問ひ將ち來れ。」僧云く、「我が手何ぞ佛手に似たる、意旨如何。」師云く、「散花燒香。」僧云く、「我が脚何ぞ驢脚に似たる、又如何。」師云く、「渡水過橋。」僧云く、「如何なるか是れ學人生緣の處。」師云く、「趙州(ヌ)東院の西。」又僧問ふ、「蟬は木末に鳴き、蛩は壁根に吟ず、見成の公案、迥に商量を絕す。脣吻に渉らず、如何が津を通ぜん。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」僧云く、「如何なるか是れ奪人不奪境。」師云く、「夜深けて月孤明。」僧云く、「如何なるか是れ奪境不奪人。」師云く、「花散じ盡して鳥猶ほ來る。」僧云く、「如何なるか是れ人境兩倶奪。」師云く、「花散じ盡して鳥來らず。」僧云く、「如何なるか是れ人境倶不奪。」師云く、「茶に遇ふては茶を喫し、飯に遇ふては飯を喫す。」僧又問ふ、「記得す、陸亘大夫、南泉に問ふ、『弟子、家中に一片の石あり、ある時は坐し、ある時は臥す。鐫つて佛となし得んや』と、此の意如何。」師云く、「儞が鐫つて佛となすに任す。」僧云く、「泉云ふ、『得ん』と、

(り)火雲秋氣。熱火は虛空に消散し、爽涼の秋氣今將に至らんとす。

(ヌ)東院の西。是れは面白き語にて、趙州が途で一婆に遇ふた、婆問ふ、「和尙いづれの處にか住すや。」州云く、「趙州東院せい。」州歸つて衆僧に問ふらく、『東院せいの「せい」の字如何なる字をか用ひし。』或るものは云ふ、「東西の西の字。」或るものは云ふ、「棲泊の棲の字」と、州云く、「汝等摠に鹽鐵判官たり。」衆僧曰く、「和尙なんとしてか然か云ふや。」州云く、「汝が摠に字を識るが爲なり。」(會元の四)

又如何。」師云く、「果然果然。」僧云く、「又問ふ、『得ざることなしや。』泉云く、『得ず』と、又如何。」師云く、「ある時は得、ある時は得ず。」僧便ち禮拜す。

師乃ち擧す、乾峯和尚、衆に示して云く、「一を擧して二を擧することを得ざれ、一着を放過せば第二に落在す。」雲門衆を出でゝ云く、「昨日人あり、天台より來る、今朝却つて南嶽に往き去る。」師拈じて云く、「一人は高々たる峯頂に在つて立ち、一人は深々たる海底に在つて行く、(ル)驀劄に相逢ひ、話し盡す山雲海月の意、然も是の如くなりと雖も、誰か是れ知音のものぞ。」

解夏小參、「長期短期、結制解制、靈山の舊話、古佛の家風、然も是の如くなりと雖も、衲僧家は(ヲ)陳年の曆日に管せず、自ら(ワ)肘後の靈符あり。等閑に歩を擧すれば、瞿曇の眼睛を踏著し、驀然として手を伸ぶれば、老胡の鼻孔に觸著す。東西南北、廻避するに門なく、四維上下、在處渠に逢ふ。頭々總に是れ生涯、物々妙用にあらざるとなし。解結不二、與奪自在、直饒ひ與麼なるも、建長が拄杖猶ほ未だ放過せざるとあり。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「日月輪邊氣象高く (カ)魚龍穴下盤根固し。」

擧す、(ヨ)大隋の眞和尚、因に僧辭す、隋問ふ、「什麼の處にか去る。」僧云く、「峨眉に普賢を禮し去

(ル)驀劄。驀直と同意。
(ヲ)陳年の曆日。古こよみなり。
(ワ)肘後の靈符。左のかひなにぶらさげたるやくよけのお守りなり。
(カ)魚龍穴下云々。奈落のどん底から生えぬいた樣な。
(ヨ)大隋法眞禪師は長慶の法嗣。傳は會元四にあり。

る。「隋拂子を竪起して云く、「文殊普賢、總に者裡にあり。」僧一圓相を畫して、背後に拋向す。隋云く、「侍者一貼の茶を將つて、者の僧に與へ去れ。」師拈じて云く、「大隋拂子を竪起し、者の僧圓相を打す。賓主歷然、然も是の如くなりと雖も、隋云く、『侍者一貼の茶を將つて、者の僧に與へ去れ』と、且く道へ、佗を肯ふか他を肯はざるか、具眼のものは試みに辨取せよ。」

次の日上堂、「三月安居、㋟羚羊角を掛く、九夏自恣、猛虎林を出づ。行かんと要すれば便ち行く、凛々たる神威、迥に羅籠を絶す。住らんと要すれば則ち住る。壁立千仭、誰か敢て近傍せん。然も是の如くなりと雖も、」手を以て禪床を拍つて云く、「總に㋹者裡を出でず。」

中秋上堂、「寒山子、馬簸箕、等しく是れ月を翫ぶ、建長門下、家風自ら別なり。別別、蝦蟇呑却す中秋の月。」

上堂、擧す、雲門大師、衆に示して云く、「乾坤の內、宇宙の間、中に一寶あり、形山に秘在す。」師拈じて云く、「山僧看來るに、此の寶但だ形山に秘在するのみにあらず、今朝情を盡して拈出して、大衆に普施せん。看よ看よ。」拂子を擲下して云く、「海人貴きことを知つて價を知らず、人間に留與して夜光と作す。」

九月旦上堂、「㋞庭に開く金菊宿根より生ず、來鴈新に聞く一兩聲、昨夜㋡七峯老輿を牽く、千思萬

㋟羚羊。かもしか、角が屈曲してゐるから、夜さりは角を樹に掛けて外患を避く。
㋹者裡を出でず。出ました、大きな睾丸が。
㋞庭に開く云々。五祖法演禪師上堂。
㋡七峯。閩の名、海會寺にあり、海會は五祖の住せし處。

想天明に到る。」師拈じて云く、「五祖老漢、只だ人の時と節とを知ることを要す、諸人還つて知る麼。福峯今朝清興を發す。」

佛光忌、香を拈じて云く、「破沙盆を提起し、正法眼を滅却し、㋧眞如境を踏翻し、㋤圓覺海を抹過して、巨福峯頂に撥到す。直に得たり、白浪滔天、佛祖も廻避するに路なく、衲僧も卒に近傍し難きことを。謂ふこと莫れ、而今光を韜み跡を晦すと。諱日斯に臨み、面目全く露る。」香を竪起して云く、「見る麼見る麼、一炷の香を燒いて、他の鼻孔を熏ず。佛光禪師、怪むことなかれ㋶觸忤することを。」

重陽上堂、「九月九是れ重陽、茱萸紫烟を凝し、黄菊露を帶びて香し。是れ禪ならず、是れ道ならず、亦西來祖意にあらず、畢竟如何。花根本艶なり。」

開爐上堂、拂子を竪起して云く、「只だ這の火種、人の見得することなし、「㋰龍淵水底より收拾し將ち來る、冷灰堆中に幾囘か焔を發す。近傍せんと擬欲すれば、面門を燎却す。看る時見ざれば、暗昏々地。建長、儞諸人の爲に吹起せん。看よ。」拂子をもつて吹くこと一吹して云く、「各自に眉毛を照顧せよ。」

達磨忌上堂、「未だ西竺を離れずして㋒迷情を救ふ、東土人の此の意を知るなし。空しく少林に向つ

㋧眞如。佛光國師、京都の眞如寺に住す。
㋤圓覺。圓覺寺なり、撥到はつきあたるなり。
㋶觸忤。角と角との突き合せ。
㋰龍淵。徑山方丈に龍淵室の額を揭ぐ。無準下なればなり、
㋒迷情。一華五葉、傳法偈中の文。

て安心を覓む、更に言ふ履を携へて還た歸り去ると。咦。元不來、今何ぞ去らん。㋧寥々たる千古、清風匝地。」

㋨大通忌、香を拈じて云く、「空刧以前、威音那畔、早く靈根あり、人の收得するなし。三世の諸佛、歷代の祖師、纔かに些子の氣息を得れば、敢て囊藏被蓋せず。頭を競ふて出で來つて、貴買賤賣、全提半提、横拈倒用して、一生拈弄し出さず。今日大通禪師三回の諱辰、㋔大檀那、山僧をして一炷の香を燒かしむ。山僧免れず分明に拈出して、他の鼻孔を熏ずることを。何が故ぞ是の如くなる。㋗同參面前、敢て自ら謾せず。」

次に㋳五部の大乘經を讃す、師乃ち陞座して云く、「恁麼恁麼、三世の諸佛說不到、不恁麼不恁麼、歷代の祖師提不起。不恁麼の中却つて恁麼、天下の衲僧名狀し出さず。恁麼不恁麼總に得ず、盡大地の人鋒を亡じ舌を結ぶ、便ち與麼に去る、土曠かに人稀なり。若し這裏に向つて身を轉じて活路を行じ、手を撒して那邊に出づれば、便ち見る、大地山河、草木叢林、一々全體の機を發し、明暗色空、見聞覺知、頭々眞宗にあらざることなし。所以に道ふ、法々隱藏せず、古今常に露る。大藏小藏、這裏より流出し、大機大用、此によりて頓發す。如來禪、祖師意、向上の

㋧寥々たる千古。あなわびし、鳥だに鳴かぬ奥山は。
㋨大通。西澗の子曇、大通禪師と諡す、石帆衍の法嗣、本錄の跋文を書す、極めて能書なり、遺墨多く世に存す。
㋔大檀那は北條貞時なり。
㋗同參面前。他人の前で吹く樣な法螺は吹けぬて。
㋳五部。般若部、寶積部、大集部、華嚴部、涅槃部、之れ五部の大乘と云ふ、慶讃ありしと見ゆ。

機、末後の句、又何の處よりか得來る。住みね住みね、只だ老胡の知を許して老胡の會を許さず。今日大通禪師三回忌斯に臨む、諸門弟子、山僧を請じて正法眼藏を擧揚せしむ。殊に知らず、山僧未だ座に登らざる以前、法々全く彰れ、法恩已に畢んぬ。且く道へ、報恩已に畢る底の一句、又作麽生。吾れ爾に隱すことなし。」

㋮虚堂忌拈香、建長、這の老和尚と相隨ふこと多年、面々相覩、眼々相照す。所以に一年一度、一炷の香を燒き、一甌の茶を點ず。㋘楊岐の女人拜をなさず、㋫蘿蔔從來鎭州より出づ。」

新舊兩班を謝する上堂、「一步を進むるときは則ち珠盤に走り、一步を退くるときは則ち盤玉を走らす。轉轆々、活鱍々、全賓全主、全是全非、甚によつてか是の如くなる。」良久して云く、「彼此出家兒。」

冬至小參、「陰魔㋙殂伏し、陽氣未だ生せず、大地平沈、渾べて縫罅なし。老胡名狀し出さず、衲僧覰覻するに門なし。便ち恁麽にし去らば、土曠かに人稀にして、相逢ふもの少なり。建長、今夜一線道を放ち、一針線を通じ去らん。」拄杖を卓すること一下して云く、「一氣此より滲通し、萬彙此より發生す。便ち見る、枯木花を開き、石筍條を抽き、普天の和氣、徧界春の如きことを。正恁麽の時、黑漆の拄杖子、又作麽生。」拄杖を擲げて云く、「等閑に穿却す禪床角、限りなき

㋮虚堂忌。十月七日なり。
㋘楊岐女人拜。楊岐、慈明の忌辰に、齋を設く。衆僧に集まる、楊岐眞前にて、兩手をもつて拳を拈じて頭上に安じ、座具を以て劃一劃して、一圓相を打し、便ち燒香し、退身三步、女人拜をなす。
㋫蘿蔔云々。宮重大根は尾張の產物。
㋙殂伏。殂は逝なり。

の風光誰にか付與せん。」

（エ）慈明和尙、冬日僧堂前に榜出するの公案を擧す。拈じて云く、「若し是れ人天の眼目にあらずんば、辨明をなしがたし。然も是の如くなりと雖も、上に三圓相を書し、下に九畫を書す。且く道へ、甚麽邊の事をか明す。來日一陽生ず。」

十一月半上堂、（テ）歸宗和尙、時に僧ありて辭す、宗云く、「時寒し、途中善爲せよ。」拈じて云く、「歸宗年老い心孤にして、慇懃に送行す。建長は卽ち然らず、若し僧ありて辭せば、只だ他に向つて道はん、（ア）去れと。何が故ぞ、家々の門首長安に透る。」

臘八上堂、僧問ふ、「臘雪寒岡に滿ち、溪梅一朶香し。底事ぞ現成の處、請ふ師更に擧揚せよ。」答へて云く、「天は是れ天、地は是れ地。」進んで云く、「記得す、（サ）孝宗、佛照に問うて云く、『雪山六年の所成は何事ぞ。』照奏して云く、『將に謂へり、陛下忘却す』と、意旨作麽生。」答へて云く、「天鑑私無し。」進んで云く、「孝宗龍顏大いに悅ぶと、是れ何の道理をか得たる。」答へて云く、「（キ）日照天臨。」進んで云く、「當時若し孝宗の雪山六年の

（エ）慈明云々。是れは國師は全則を擧揚せられしも、諸人皆知るの公案なれば、語錄の編者が省略せしなり。

（テ）傳燈錄七に、馬祖の法嗣廬山歸宗智常禪師、僧あり辭し去る、宗近前來と喚び、「吾れ汝が爲に佛法を說かん、」僧近前す、宗曰く、「汝諸人盡く事のあるあり、汝他日這裡に却り來つて、人の汝を識る無けん、時寒し途中善爲せよ」と。善爲とは躰を大切にせよと云ふとなり。

（ア）去れ。出で失せよ。

（サ）孝宗。南宗の第二世、佛照は大慧の法嗣佛照德光にて、化門旺盛い人なりしなり、孝宗が手紙で此の事を問はれしに、佛照折節施主家の齋に赴き、席上にて此の返事を書きて奏上せしなり。

所成何事ぞと問ふに遇はゞ、未審し和尙如何が奏對せん。」答へて云く、「雪山の雪寒骨に徹す。」進んで云く、「只だ世尊未だ明星を見ざる以前の如きんば、甚の處に在つてか行履せん。」答へて云く、「鷲峯の山色㋴靑更に靑。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「老瞿曇、老瞿曇、來由あり、巴鼻なし。元閻浮に降らず、何ぞ曾て雪嶺に上らん。若し明星を見て悟り去ると言はゞ、虛を承け響を接し、錯を將て錯に就く。既に然も是の如し、甚によつてか㋱靈山に密旨ある。」良久して云く、「參。」

上堂、擧す、金峰、僧あり來り參ず。峰云く、「吾れに一則の因緣あり、儞に擧似せん、切に忌む錯つて會することを。」僧聽く勢をなす。峰云く、「早く錯り了れり。」僧拂袖して便ち出づ。峰云く、「雪上に更に霜を加ふ。」師拈じて云く、「高山流水、子規能く之を聽く。是なることは則ち是なり、且く道へ、峰、雪上に更に霜を加ふと云ふ、又作麼生。㋯限りなき清風來つて未だ休せず。」

新に昭堂を開くの陞座、乃ち云く、「乾坤未だ剖れず、㋛大塊無象、諸佛出世せず、祖師西來せず。人々頂門に眼を具し、箇々皮下に血あり、純ら無爲の化を樂み、太古の風を追囘す。所以に德山云ふ、

㋖日照天臨の文字は多く天然のもちまへと云ふ意に用ふ。

㋴靑更に靑。藍より出で藍よりも靑し。

㋱靈山。末後靈山會上に、世尊密旨あり、迦葉覆藏せずとはどうじや。

㋯限なき清風來つて休せず。跨ぐその上に小便垂れるといふ事なりと古人云へり。

㋛大塊。莊子齊物論に出づ、大塊のあくびを名けて風と云ふ、或る時はさあ／＼と云ひ、或時はぷう／＼と云ふとあり、大塊は一物なき處を云ふ。

『吾が宗に語句なく、一法の人に與ふるなし。』趙州云く、『佛の一字、我れ聞くことを喜ばず。』點檢し將ち來れば、二老漢、只だ解す無佛の處に尊と稱することを。建長は卽ち然らず。㋾一莖草上に法王刹を現じ、一微塵裏に大法輪を轉じ、一切處に建立し、一切處に成就し、頭々轍に合し、處處原に逢ふ。正恁麽の時、且く道へ、誰か恩力を承くる。」拄杖を卓して云く、「皇天親み無く、惟れ德是れ輔く。」

擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、「東山水上行。」是なることは卽ち是なり、山僧は然らず、梵刹已に立ち、今日開堂。」

㋪師初め正觀寺に寓す、佛成道の日、太守請じて府裏に就いて拈香せしむ。云く、「空劫以前、威音那畔、早く這箇あり、天に熏じ地を炙す。昔日釋迦老子、纔に些子の臭氣を得て、四十九年三百餘會、直說曲說說不盡、橫拈倒用用未已。今朝臘月八日、山僧が手裏に落在し、大檀主一覰に覰着す、直に得たり這の老子を供養することを。是れ恩を報じ幷に德を酬ゆるにあらず、只だ要す徧界香風の起ることを。」

建長寺語錄 終

㋾一莖草。此の昭堂を建てんが爲に、上の地ならしがいるなり、昭堂の事は、象器箋に釋しあり「僧堂のうしろに一室あり、立僧首座の住持に代つて入室を開き普說をなす處、故に其の堂内にも法座を設く、元來其の屋僧堂に連りて、光線暗ければ、特に其の屋を高うし、敞明をとる、故に照堂と名く」と、本錄には照を昭に作る、是れは日本の禪林にては火を忌む、故に連火を去つて昭に作りしなり、他にも例あり、照牌の如きも昭牌と書す。

㋪德治二年丁未。國師北條貞時の聘に應じて京都より鎌倉に下る、時に年七十三、此の臘八上堂あり、越えて廿九日建長に入寺せられしなり。

三條二品資緒卿に示す

頂門の一着、古今辨明を爲し難し、見成の公案、㋑當頭如何が領畧せん。直饒ひ未だ言はざるに先づ領ずるも、猶ほ是れ鈍漢、未だ擧せざるに先づ知るも、是れ俊流にあらず。所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳と。㋺學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し。這裏に到つて、如何が湊泊し、如何が踐履せん。想ひ見るに、吾が二品尊閤、㋩別に見處あり、請ふ他の㋥一頭地を出して、高く眼を着けて覰よ。若し也た忽然として、一覰に覰得破せば、方に知る、㋭末後の一句、始めて牢關に到ると道ふことを。

㋬玄提禪人に示す

世尊拈花、迦葉微笑、㋣金金を博へず、水水を洗はず、此より遞代相尋いで、㋠虚を承け響を接し、一人は一人に傳與す。便ち見る、㋷東より

㋑當頭。出合がしらと云ふが如し。領畧は合點なり。
㋺學者云々。向ふに物があると思ふて、ひたすら取らう取らうとする、御苦勞千萬なり。
㋩別に見處あり。是れは資緒卿の現今力量底を指す。
㋥一頭地。百尺竿頭なり。
㋭末後の一句。いたちの最後屁と云ふこと、此の兩句は洛浦の元安禪師の上堂の語なり。(會元六)
㋬玄提禪人。日向の大慈寺の開山玉山玄提禪師なり、南禪寺の大明國師の法嗣、佛智大通禪師のこと。
㋣金々水水。世尊拈花は金なり、迦葉微笑も金なりなどと

西に過ぎ、西より東に過ぎ、禾山の打鼓、祕魔の擎叉、雪峰の輥毬、倶胝の竪指、麻三斤、柏樹子、自餘萬般の施設、百千の作用、㋦一摸に脫出し、一串に穿却す。若し是れ本分の衲僧ならば、誰か他家杓柄の長短を管せん。㋸胡蘆を傾けずして酢は越よ酸し。只だ自家の見成によつて、自ら活計をなす。提上人、世尊未だ曾て花を拈ぜざる以前に向つて、急に眼を着けて看よ。看來り看去り、工夫純熟して一念相應せば、便ち本來の面目、本地の風光を見ん。那の時黃面老子、金色の頭陀、㋾下風に立在せん。所以に云ふ、㋻大丈夫天地に先ちて心祖となると。提上人、之を思へ之を思へ。

㋕元冲禪人に示す

從上の佛祖、世に出興するや、只だ本分の一着に據つて、驀目前の些子を露はす。便ち見る、㋵牀を敲き拂を竪て、地を打ち叉を擎げ、鼓を打ち球を輥じ、土を搬び石を拽く。千鈞の弩は、㋟鼷鼠の爲に機を發たず。然も是の如くなりと雖も、沖上人、江湖に徧歷し、久しく叢林に遊ぶ。這般の㋹陳年の曆日に管せず、只だ自家見成の活路によりて、東に行き西に行き、㋞天に冲するの鷂子の如く、眼を眨すれば便ち那邊に過ぐ。其

云ふてはいかぬ。

㋠虛を承け云々。うそのつきあひ、山彥のかちあはせ。

㋷東より西に過ぎ。來々往々。

㋦一摸。摸は範なり、鑄形なり。

㋸胡蘆を傾けずして酢は越よ酸し。胡蘆はふくべなり、德利なり、德利を傾けずとも、酢は酸いぞ、一段酸いぞ餘り多く用ひて無いてふ語なり。

㋾下風。上風下風と云ふことあり、下風はかざしもなり。

㋻大丈夫云々。歸宗和尙の語。

㋕元冲禪人。秀山元冲禪師にして、佛燈國師の法嗣、寂室と兄弟なり、筑前聖福寺に住す。

㋵牀を敲。潙山、拂を竪つるは馬祖、地を打つは打地和尙、叉を擎ぐるは祕魔岩、鼓を打つは禾山、球を輥すは雪峰、土を搬ぶは靑林、石を拽くは

れ如し未だ然らずんば、生佛未だ具らず、世界未だ分れざる以前に、直下に看取せよ。二六時中、行住坐臥、綿々密々、看來り看去つて、工夫純熟し、驀忽に一念相應し、生死の心破れば、便ち本來の面目、本地の風光を見ん。一々分明なること、恰も十日の並べ照すが如くに相似たり。這の田地に到つて、㋡更に須らく子細にすべし。何が故ぞ、末後の一句、始めて牢關に到る。沖上人、相聚ること一夏、㋧忽ち他山の興を起す。行に臨み語を求む、筆に信せて之を書し、以て其の請を塞ぐ。

空證禪人に示す

佛祖の一大事因縁、日用應縁の中を離れず、㋤此土他方の間を隔てず、古に亘り今に亘り、天に輝き地を鑑む。所以に道ふ、塵劫來の事、只だ而今にあり、只だ貴ぶらくは、當人大丈夫の氣槩を具し、朕兆未分の時、文彩未だ彰れざる以前に向つて、猛く㋶精彩を着けよ。看來り看去り、工夫純熟し、一念相應し、生死の心破れ、忽然として本來の面目、本地の風光を明見して、一々分明ならば、則ち從上の佛祖と同見同聞、同知同用、方に出家行脚の本志に負かざることを得。空證禪人、之を勉めよ之を勉めよ。

歸宗、打地和尚は會元の三に出づ。
㋟鼫鼠。はつかねずみ、左傳に鼫鼠郊牛の角をかみて祭を臺なしにせしことあり。
㋹陳年の曆日。陳は陳腐の陳で、古きことなり、などとしのこよみは役立たぬもの。
㋞天に沖する鷂子。そら飛ぶはやぶさ目にもとまらぬ。
㋡更に須らく子細にすべし。是れが聖胎長養の眼目なり。
㋧忽ち他山の興を起す。元沖和尚一夏を終へて游方の志を起されたのである。
㋤此土他方。こゝかしこ。
㋶精彩。骨折らぬ者は此の精彩が不充分なりと。

玄安浴主に示す

頂門の一着、末後の一機、纔かに尋思せんと擬せば、白雲萬里。直饒ひ刹竿を望んで便ち回り、招手を見て横に趨るも、猶は是れ半提、未だ全機の作畧と爲さず。安浴主、諸方を遍參し、久しく叢林にあり、古人の途轍を守ることなく、直に須らく自ら一條の活路子を行くべし。東州西州、脚頭脚底、直下に用ひ得去らば、方に知らん、頂門の一着、天に輝き地を鑑み、古に耀き今に騰り、正に是れ自家安身立命の處なることを。崇福恁麽に道ふ、也た只だ是れ(ム)水を借つて花を獻ず、曾て一點の外料を加へず。上人之を思へ之を思へ。

玄臺比丘尼に示す

京師の玄臺大姉、慕道の志親切にして、常に來つて此の段の大事因緣を請益す。予一日渠に示して云く、「百尺竿頭に歩を進めよ。」渠云く、「百尺竿頭歩を進むるところなし。」予云く、「歩を進むる處無きに向つて、更に千百歩を進めて、方に丹霄に獨歩し、偏界全身なることを得ん。」渠、唯々として微笑するのみ。未だ領略し去ることを得ずと雖も、尋常平地上に(ウ)躁跟する底の漢に同じからず。今故都に歸らんと欲す、香を袖にし來つて一語を覓む。予曾て茶陵(井)郁山主の賛を做る。仍つて之を書して云く、「竿頭に

(ム)水を借つて花を獻ず。水に用事はなけれども花を獻ずる爲に用ふる、外料は外のまぐさ。

(ウ)躁跟。尻のすわるを桑根と云ふ。

(井)郁山主。山主、僧法燈に問ふ、「百尺竿頭如何が歩を進めん。」燈云く、「噁」と云ふ公案を拈提すること三年、一日驢に乘つて溪橋を渡る、橋板を踏み外づして墜ち、忽然として大悟す。喫攧はとんぼがへり。

歩を進むるは尋常の路、最も苦しきは溪邊喫攧の時、大地山河載せ起さず、❶虚空笑を含んで驢腮に滿つ」と。請ふ禪尼、時々提起して看よ、百尺竿頭如何が歩を進めん。驀忽に時節到來して、這の一歩子を進め得ば、虚空笑を含むこと定れり矣。記取せよ記取せよ。

玄傑禪人に示す

玄傑禪人、結夏以前に曾て來つて相見して道を問ふ。予云く、「我れ上座の爲に曾て覆藏せず。」傑無語、去つて後、夏了つて復た來つて、相見して云く、「和尚覆藏せざる處、學人會し了れり。」予云く、「如何なるか是れ我が覆藏せざるところ。」傑云く、「學人、和尚の爲に覆藏せず。」予云く、「今日非々想天、幾人かあつて退位す。」傑云く、「知らず。」予云く、「我が覆藏せざる處、上座未だ知らざることあり、更に問はん、麻三斤、柏樹子、一切の語言、予曾て覆藏せず、上座會すや否や。」云く、「不會。」予故に云く、「我が覆藏せざる處、上座未だ會せざることあり、豈に道ふことを見ずや、世尊密語あり、迦葉覆藏せず、上座若し、迦葉覆藏せざる處を知らば、便ち世尊の密語を知らん。其れ如し未だ然らずんば、船舷未だ跨がざる以前に、高く眼を着けて看よ。兩岸の蘆花、一葉の扁舟、上座の爲に覆藏するや、覆藏せざるや。咄。」傑禪人今故都に歸る、若し玄珍法兄に相見せば、只だ恁麽に擧似して看よ。行に臨み紙を袖にして語を求む。予一點の外料を加へず、筆に信せて之を書し、以て其の請を塞ぐのみ。

❶虚空笑を含む云々。虚空がにつと笑ふと、驢馬のあぎとに、ゑくぼが出來た。

曇翁居士に示す

從上の佛祖、世に出興する、只だ本分の一着による、事已むことを獲ずして、目前の些子を露す。撃石火、閃電光の如くに相似たり。眼を眨得し來れば、三千里外、若し是れ宿根靈利の漢ならば、宗師未だ口を開かざる以前に、早く來由を知る、方に共に語るに堪へたり。其れ如し未だ然らずんば、一念未だ起らず、文彩未だ彰れざるの時、直下に看取せよ。一切時、一切處、日用應緣の處、綿密々に、看來り看去り、工夫純熟して、驀忽に時節到來し、一念相應せば、生死の心破れ、本來の面目、本地の風光を明見せん。恁麼の田地に到り、聞見覺知、明暗色空、一々自家本來の消息、更に一點の外物なし。旃を勉めよ旃を勉めよ。豐州の曇翁居士、慕道の念深切にして、遠く崇福に來つて、日用工夫、用心の處を問ふ、予免れず、筆に信せて之を書し、以て其の請を塞ぐのみ。

オ鏡圓上人に示す　後に萬壽に住す

臨濟當年、黃檗を辭す、檗云く、「甚の處にか去る。」濟云く、「是れ河南にあらずんば、便ち是れ河北。」檗便ち打つ、濟、棒を扭住して、遂に一掌を與ふ。檗、呵々大笑して、侍者を喚んで云く、「百丈先師の禪板拂子を將ち來れ。」濟、侍者を召して云く、「火を將ち來れ」と、好兒、終に爺錢を使はず。檗云く、「汝但だ持ち去れ、已後、天下の人の舌頭を坐却することあらん。」這の老漢、兒を憐んで羞を

オ鏡圓。南禪の通翁和尚、大光國師元亨宗論の主宰。

覺えず。圓上人、㋑岳峰に相聚ること四載、辨道の志念堅確に、日用亂に走作せず、忽ち他山の興を起し、來つて崇福を辭す。上人㋺火を索むるの機ありと雖も、崇福分付すべきの禪板拂子なし。且く道へ、古人と是れ同か是れ別か。若し三家村裡十字路頭に到つて人に逢はゞ、錯つて擧することを得ざれ。

宗玄禪人に示す

宗玄禪人、嶽峯に相從ふこと一夏、辨道の念群ならず、常に來つて、大事因緣を請益す。予本分の事を以て之に示す。夏末紙を袖にし來つて一語を求む、若し是れ大事因緣ならば、㋩斷々として言語の上にあらず。三世の諸佛、橫說豎說するも、終に是れ說不到、歷代の祖師、全提半提するも、何ぞ曾て提げ得起さん。崇福更に是れ口を開くの分なし、禪人若し是れ文彩未だ彰れざる以前に會得せば、當人の頂門上、杲日空に當り、脚跟底淸風匝地、崇福恁麼に道ふ、也た是れ水を借つて花を獻ずと。禪人之を思へ之を思へ。

源朝道人に示す

佛祖の大事因緣は、日用應緣の中を離れず、此土他方の間を隔てず。所以に道ふ、大唐國裡未だ鼓を打たざるに、日本國中に曾て上堂、南山雲を起し、北山雨を下す。若し是れ宿根靈利底の漢ならば、

㋑岳峰。橫岳山崇福寺、鏡圓上人奈須の雲岩に參すること十七度、橫岳に上ること十七度、終に大應に嗣法す。
㋺火を索むる。臨濟の機。
㋩斷々。決してと云ふが如し。

未だ擧せざるに早く知り、未だ言はざるに先づ領じ、歩を動ぜずして大宋に歷偏し、口を開かずして言天下に滿つ。句々朝宗、法々是れ令、頭々轍に合し、處々源に逢ふ。源朝道人、其れ如し未だ然らずんば、一念未だ興らず、文彩未だ彰れざる以前に、直下に看取せよ。二六時中、行住坐臥、綿々密々、看來り看去り、履踐純熟し、工夫眞實にして、驀然として時節到來、一念相應せば、方に知る、當人頂門上、脚跟底、壁立萬仭、大寶光を輝すことを。正恁麼の時、從上の佛祖も下風に立在せん、大事因緣甚の破草鞋にか當らん。然も是の如くなりと雖も、更に須らく旃を勉め旃を勉むべし。何が故ぞ、㋘禹力到らざる處、河聲流れて西に向ふ。源朝道人、宋に渡りて歸來、帋を携へ來つて一語を求む、崇福免れず、筆に信せて之を書す。

玄與禪人に示す

玄與上人、久しく叢林にあり、江湖を歷盡し、崇山に來遊し、相聚ること三載、他を看るに、正に是れ本色の道流、尋常亂走の輩に同じからず。初秋夏末、他山の興動き、紙を携へ來つて一語を求む。㋫崇福未だ口を開かずして言天下に滿つ、何ぞ特地に語を求むることを須ひん。然も是の如くなりと雖も、若し喚んで語ありと作さば、畢竟箇の什麼をか道ふ。上人今故都に歸る、前路人に逢はゞ、錯つて擧することを得ざれ。

㋘禹力不到。夏の禹王は日本の角倉了以の樣な土木の名人であつたが、其れでも黃河は云ふことを聞かなかつた、東へ落す河が逆に西にそれた、こんなところがあるかいな。

㋫この一句、如何に國師の面目の躍動するかを見るべし。

眞證禪人に示す

眞證禪人、道聚すること久し、今故都に歸る、行に臨み、香を懷にし來つて一語を求む。吾が宗に語句なく、一法の人に與ふる無し、須らく知るべし、當人分上、壁立萬仞、大寶光を輝すことを。所以に從上の佛祖、世に出興し、只だ諸人の爲に此の事を證明し、一點の外料を加へず。崇福更に是れ口を開くの分なし、只だ貴ぶらくは、天然の氣槩を具し、壁立萬仞の處に向つて、直下に全機受用して、更に第二人無きことを。然も是の如くなりと雖も、行いて㊁葦屋渡頭に到つて、忽然として古帆未だ掛けざる一句子に撞著せば、切に忌む、錯つて名言を下すことを。眞證禪人、記取せよ記取せよ。

㊁葦屋渡頭。筑後の葦屋の渡し場で、浮かどふりむくな。

法語　終

佛祖賛

觀音 六首

(イ)圓通の境處々に明かなり、瓶水活して柳眼靑し、更に寒巖翠竹のあるあり、時人何事ぞ(ロ)太忙生。

(ハ)巖峋々たり水潾々たり、圓通の境觸處に新なり、覿面相逢ふて人識らず、衆生何の日か迷津を脫せん。

蓮華常に手に携へ、獨り自ら立つて巍々、童子來つて相訪ふ、無言眼眉に似たり、須らく知るべし合掌低頭の外、箇の事如何が伊に說向せん。

瀑泉聲冷淡、山嶽色幽奇、刹々圓通の境、善財(ニ)那ぞ知ることを得ん。

幽巖勢嶮巇、懸水淸機を發す、刹々圓通の境、當頭入るもの稀なり。

雲淡々水漫々、普門現じて相謾せず、童子に咨詢すれば未だ有ることを知らず、空しく走る(ホ)百城煙浪の寒きに。

(ヘ)文殊

(イ)圓通の境。圓通大師はどこにもかしこにも滿ちて居る、即ち下句の如し。

(ロ)太忙生。外に有相の佛を求めば、汝と相似ずなり。

(ハ)峋々は山の嶮危なり。潾々は水の激する貌。

(ニ)那ぞ知ることを得ん。合點はならぬ。

(ホ)百城烟浪。四國西國京江戶と尋ねまはる。

(ヘ)文殊。是れは稚兒の文殊の像、露刄劍を握つて獅子王に跨るはいかめしい。

(ト)七佛以前底。七佛の師なる文殊は一寸ちがふ。

(チ)風波。不識とか無功德とか波浪沸騰す。

師子騎り來つて伎倆を呈す、端なく現出す小孩童、爭か如かん㋣七佛以前底、明月清風類して同じからず。

達磨　五首

梁王殿上人の識るなく、揚子江頭葦を折つて航す、限りなきの㋠風波後に隨つて起り、今に至るまで東土沸くこと湯の如し。

萬里西來、九年面壁、雪冷じく氷寒く、山青く水碧なり、少林の消息尙ほ㋷依然、今古知らず誰か的を辨ぜん。

西來の消息、會するもの大難、蘆葉風冷かに、江波月寒し。

㋦鳳凰臺上月魂沈み、少室峰前四隣を絕す、雪冷じく冰寒く風颯々、知音は是れ㋸立庭の人にあらず。

西天大いに六宗の異を破り、東土却り來つて一心を示す、蘆葦㋾悽々として江水冷かなり、今に至るまで千古知音少なり。

㋻西山亮座主

分明に指示する處、覿面相謾せず、雨西山を過ぎて後、嵐光眼を潑して寒し。

㋷依然。昔の儘なり。
㋦鳳凰臺は江南にあり、少室峰は河南にあり。
㋸立庭。二祖の慧可大師をいふ。
㋾悽々は悽々と同意ならん。
㋻西山亮。亮首座、西山に隱れて火種刀耕、終る處を知らず、大慧武庫に「宋の政和の間、熊秀才なるものあり、西山に遊んで偶々一僧を見る、貌古神淸、龐眉雪頂なり、葉を編んで衣となし、磐石に坐す、熊自ら思へらく、今時斯くの如きの僧なし、嘗て聞く、唐の亮首座、此の山に隱ると、疑らくは是れ其の人かと、輿を出でて鞠躬として問うて曰く、是れ亮座主なるやなきや、僧手を以て東に向つて指す、熊乃ち方に手に隨つて見る、回顧すれば僧の所在を失す、時に小雨初めて歇

(カ)李源、圓澤を訪ふ

相別れて又相見る、情懷自ら惘然たり、風高うして月色冷かに、舊因縁を寫し難し。

(ヨ)水上快和尚

一點の靈光、天に輝き地を鑑み、左之右之、是と不是となし。黑漆の竹篦劈面に揮へば、凛々たる清風偏界に起る。

興聖の(タ)月谷長老

頭髮(レ)鬈鬆として雙眼青し、全提の一句人の憎を得たり、龜毛の拂子未だ曾て動ぜざるに、凛々たる清風匝地に生ず。

む、熊自ら石に登つて覗れば、坐する處猶ほ乾く云々」此の故事を知れば、頌意自ら分明ならん。

(カ)李源圓澤。李源は居士、圓澤は和尚、圓澤死して牧童に生れかはる、李源之に逢ふて知らず。

(ヨ)水上。肥前水上山萬壽寺ならん。

(タ)月谷。諱は宗忠、關山慧玄大師の縁者、大應國師の法嗣。

(レ)鬈鬆。此の和尚有髮で居られしと見え、あたまの毛がもじやもじやなり。

眞贊

遠州の太守の頂相

本光靈徹、凡聖同歸、不生不滅、絶離(イ)絶微、袈裟の形相些々あり、恰も(ロ)丹霞選佛の機に似たり。

修理亮殿の形質

浮生二十八年の事、夢は破る南柯(ハ)一夜の秋、雲淨く月明かにして風露冷かなり、人をして特地に恨休むことなからしむ。

尼妙雲の頂相

靈源不昧、觸處全眞、男にあらず女にあらず、類を絶し倫を離る、一段の光明畫けども就らず、從敎あれ喚んで(ニ)末山人と作すことを。

(イ)離微。言語道斷の處を言ふ。

(ロ)丹霞選佛。俗かと見れば袈裟を掛けて居る、僧かと見れば俗人なり、丸で俄か坊主の丹霞そつくり。

(ハ)一夜の秋。此の人秋に死す、故に斯く押めるならん。

(ニ)末山。末山の了然禪師は高安大愚の法嗣にして恐ろしき尼なり、灌溪の閑和尚も遣り込められて、三年も園頭となつた程である。

自贊

觀空禪人の請

㋑百無能人の憎を得たり、描すれども就らず畫けども成らず、知らず這般の面目、當頭誰か敢て辨明せん。咄。

㋺空證禪人の請

口佛祖を吞み、眼乾坤を蓋ふ、水月比することなく、㋩松柏論じ難し。咦、一段の光明畫けども就らず、㋥寥々たる千古鎮長に存す。

玄與禪人の請

龜毛の拂子、㋭覿面全提、凜々たる神威、佛眼も窺ひがたし。世間限りなき丹青の手、五彩如何が伊を畫き得ん。

鏡圓上人の請

㋬此の用に卽するか此の用を離するか、馬祖一喝百丈耳聾、老僧拂を取つて口を開かず、公案圓成徧界通ず。

㋑百無能。何をさしても鈍突くなり、此の無調法者をどう描くか。

㋺空證。此の自贊は現今紫野大徳寺に藏す「終に空證禪人予が陋質を繪いて贊を請ふ、時に正應改元戊子解夏の後三日、住勅賜萬年崇福禪寺南浦紹明」とあり。

㋩松柏。論語に「歲寒うして松柏の後凋を知る」と。あり。

㋥寥々千古。さてもさみしや千年萬年。

㋭覿面。まつかうと云ふが如し。

㋬此の用云々。百丈再參の因緣。

㋣宗意。柏庵宗意禪師、滅宗興の師なり。

❶宗意禪人の請

明歴々露堂々、沒巴鼻來由あり、乾坤收不得、突出す㊉一毫頭。

佛祖贊終

㊉一毫頭。一本の毛先から出現した。

小佛事

己上座の起龕

㋑己靈を重せず、內に於て無心、千聖を求めず、外に於て何ぞ尋ねん。生死に遊戯し、可不可なく、高く象外に超え、逈に古今を絶す。然も是の如くなりと雖も、未だ親切となさず、更に須らく轉身の時節あるを知るべし。一番雨過ぎて一番涼し、八月秋光何の處か㋺熱す。

㋩觀上座の起龕

正見あるを正となす、觀を觀じて無觀に至る。我が全身あるに非ずんば、生死の關を跳出す。且く道へ、跳出して後如何、手を撒して那邊にか去る、寥々として天地寬し。

光書記の鎖龕

㋥光境倶に忘じ、聖凡路絶す。照と照者と、同時に寂滅、便ち恁麽に去るも、只だ一橛と得たり。更に須らく上頭の關あることを知るべし、把定放行汝が爲に決す。光書記、還つて知るや、門背に㋭鐶を着け、鎖子に鐵を添ふ。

㋑己靈千聖。石頭と南嶽との問答なり、己上座の己の字を拈じてあり。
㋺荼毘の起龕故に熱を用ふ。
㋩觀上座。蓋し正觀と云ふ人ならん。
㋥光、境。自心を光と云ひ、萬物を境と云ふ。
㋭鐶、鎖子。此の鐶やら鎖子は鎖龕の佛事に切なり。

元上座の起龕

「混元未だ辨ぜざる時、生も無く亦死も無し。直下に便ち歸を知らば、迥然として依倚を絶す。然も是の如くなりと雖も、切に忌む、這裡に坐在することを。」彈指一聲して云く、「元上座、彈指の聲を聞いて(へ)三昧より起つ。」

尊監寺の秉火

佛の尊ぶべきなく、道の學すべきなし。鹽味は本鹹く、薑性は元辣し。這裡に會し去らば、死中に活と得ん。且く道へ、活と得るの後作麼生。倒に(ト)楊岐三脚の驢に跨つて、烈焔堆中蹄を弄して行く。

太宰府の都督少卿禪門の秉火

火把を竪起して云く、「只だ這箇變易なし、古に亘り今に亘り、天に輝き地を鑑む。所以に太宰少卿禪門、國家に柱石として、常に關東を佐くるは、全く這箇の恩力に憑る。名九州に播き、徳四海に傳ふるは、全く這箇の恩力に憑る。萬民を撫育し、子孫を覆陰するは、全く這箇の恩力に憑る。時節到來し、生を出でて死に入るは、全く這箇の恩力に憑る。且く道へ、這箇は是れ什麼ぞ、山僧今日分明に説破せん。」火把を擲下して云く、「會すや、大地炎々たり一團の火。」

(へ)三昧より起つ。それ動き出した、國師の佛事の語は目の付け處尋常と別調、是れ國師の家風なり。

(ト)楊岐三脚の驢。會元の十九に、僧問ふ、「如何なるか是れ佛、」岐曰く、「三脚の驢子蹄を弄して往く。」三脚の驢馬は進むには前の一本が邪魔になる、退くには後の二本が邪魔になる。

妙慧禪尼の下火

「眞如の慧光、徧界圓明、本來の面目、觸處現成、松風颯々たり、磵水冷々たり。非男非女、非心非佛、若し這裡に向つて會し去らば、生死の苦源を拔出し、涅槃の樂果を證得せん。且く道へ、何を以てか驗となす。」火把を擲下して云く、「㋠丙丁童子來求火。」

左金吾禪門法心の秉火

「春山點埃を絕し、春水虛碧を漾はす。左金吾禪門法心、若し這裡に向つて領畧し得去らば、去來㋨象を以てせず、動靜心を以てせず。心を以てせざれば、則ち昔日の生や未だ嘗て生せず、象を以てせざれば、卽ち今時の死や未だ嘗て死せず。驀忽に象心兩忘し、瞥爾として死生共に泯せば、直に得たり、鬱々たる青松、本有の光輝を發し、森々たる翠竹、自受用の三昧を顯す。歩々是れ道場、處々皆淨邦、縱橫妙を得、卷舒自由、便ち恁麽に去るとき如何。」火把を擲下して云く、「㋦嗅烟蓬悖の中、優曇香馥郁たり。」

明靜大師の下火

㋠丙丁童子來求火。 [illegible]恩院の玄則禪師、靑峰に問ふ、「如何なるか是れ學人の自己、」峰云く、「丙丁童子來求火、」玄則後に法眼に參ず、法眼云く、「靑峰に何の言句かある、」則、前話を擧す、法眼云く、「上座作麽生か會す、」則曰く、「丙丁は火なり、更に火を求む、是れ自己を以て自己を求むるが如し、」法眼云く、「恁麽に會せば爭か得たりとせんや、」則曰く、「某は只だ與麽、いぶかし和尙は如何、」法眼云く、「儞問へ、」則問ふ、「如何なるか是れ學人の自己、」眼云く、「丙丁童子來求火、」玄則言下に大悟す。

㋨象は形像、心は一心、

「明中に暗あり、暗中に明あり、明暗兩忘し、動靜俱に泯し、生死夢破れ、凡聖路絕し、男女の相にあらず、㊁尼總持に越ゆ。便ち懸空に去らば、一點の靈光、天に輝き地を鑑む。然も是の如くなりと雖も、末後の一句重ねて提撥せん。」火把を擲下して云く、「火裡の紅蓮香拂々。」

欽上座の下火

「諸方の善知識を欽敬し、多年茫々として外に向つて走る。頭を回して踏着す鄕關の路、平生の㋠偸心を死却し去る。然も是の如くなりと雖も、死中に活を得るとき如何。」火把を擲下して云く、「大地炎炎として火發す、須彌も也た須らく粉碎すべし。」

懸空。懸々として煙をあぐる形、娑婆世界に離れ寂光淨土。

㊁尼總持。達磨に嗣法の尼の名。

㋠偸心。取らう取らうとする盜人根性。

小佛事 終

偈頌

泥塑の達磨

身々一片(イ)墻壁の如く、假を弄して分明に却つて眞に像たり。更に問ふ西來底事にか緣る、(ロ)普通年遠幾たびか春を經。

月巖

(ハ)靈山の指出曹溪の話、只麽に傳へ來つて知んぬ幾年ぞ、今日頭を天外に囘して看れば、淸光冷かに照す斷崖の前。

空首座の柑子を送るに謝す　東福に住する(ニ)藏山和尙なり、書中に洞庭の柑と云ふ

(ホ)酸者は酸に甘者は甘、未だ嘗て口を下さゞるに齒先づ寒し、舌頭若し具眼のものにあらずんば、只だ(ヘ)洞庭一樣の看を作さん。

靜齋　二首

(ト)肯諾俱に忘じて津を問ふことを罷む、寥々として四顧知音少なり、無言にして獨坐す蘿窓の下、却つて維摩一室の深きに勝れり。

(イ)墻壁。達磨、二祖に示して曰く、「外諸緣をやめ、內心喘ぐなく、心墻壁の如くにして以て道に入るべし、」又或居士は「學道は須らく是れこの鐵漢なるべし」とも云へり。

(ロ)普通年遠。梁の年號、普通から今迄何遍春を經過した。

(ハ)靈山の指出云々。靈山の拈花は月を指すが如く、曹溪の端的は月を話するが如し、古人の語を以て月巖の月を指す、號頌なり。

(ニ)藏山順空の傳は延寶傳燈に詳なり。

(ホ)同じく物を詠するにしても、宗師家の眼のつけ樣は別なものなり。

終日蕭然として人到らず、苔は古砌を封じて草離々たり、這般冷淡の閑門戶、千聖如何が眼を着けて窺はん。

宏　峰

巍々獨立して更に㋠齊しきなし、㋷雨洗ひ風磨して勢嶮巇、若し天外に出頭して看るにあらずんば、㋦玄微鳥道誰か知ることを許さん。

竹　亭　蘭溪和尙の韻に和す

高節虛心㋸萬方を壓す、淸風戛玉滿軒凉し、香嚴昔日㋾有ることを知らず、擊着端なく㋻錯一場。

㋕蘸碧池

一片虛凝徹底淸し、冷かに山影を涵して寒靑を鬪はしむ、當頭此の深々の意を領せば、萬頃の滄波㋵眼を潑して明かなり。

晏　如

宇宙空じ來つて一物なし、安然として獨坐眼眉の如し、茫々たる塵世誰か我れを辨せん、㋟冷淡の生涯只だ自知す。

濟　翁

㋬洞庭一樣の看。「波陵一望洞庭の秋」の句あり。

㋣肯諾。能所と云ふが如し、會元の十三に、疎山曰く、「肯は他の千聖を肯ひ、諾は卽ち己靈を諾す」と云ふ。

㋠齊しきなし。肩を並ぶるものなきなり。

㋷雨洗風磨。骨折つて身を碁石にすりみがく。

㋦玄微鳥道。洞門に鳥道玄路あり、千岩萬岳の奧、只だ一條の鳥道あるのみ、玄微は幽玄微妙なり。

㋸萬方を壓す。獨立挺々のところ。

㋾有ること。言句の境界。

㋻錯一場。しまつた。

㋕蘸碧池。建長寺の佛殿の前にあり。

㋵眼を潑。塵まみれの目玉も一拭で明歷々。

㋟冷淡の生涯。一箪の食一瓢の

㋹苦海中流人を度せんと要す、海の深きは何ぞ此の心の深きに似かん、年々老大休歇なし、棹を皷して高歌自ら賞音す。

鐵關病中の韻に和す

衆生の㋞毛病幾多般ぞ、是れ鐵關常に不安なるによる、㋡縦ひ文殊來つて相訪ふことあるも、容易に心肝を露はさしむること莫れ。

㋧上元後の雪　二首、蘭溪和尙の韻に和す

三夜の明燈佛庭を照す、天龍瑞を呈して卒に停ることなし。鹽花地に滿つ千重の玉、銀屑空に飜る萬點の星、皓色人に逼つて眼を着けがたく、寒聲粟を起して聽くに堪へず。須らく知るべし此は是れ豐年の事、定めて寰中分外に寧かるべし。

萬點の金燈殿庭を照す、晨に臨む瑞應曾て停らず。㋤飄零玉碎冷かに月を修し、暗に㋶氷花を剪つて飛んで星に似たり。少室の家風今尙ほ在り、嵩山の公案又重ねて聽く。老師の高德感是の如し、天下の蒼生太寧を賀す。

巨源　二首

滔々たる㋰萬派天下に遍し、流遠うして方に知る潤うして又深きことを、

飮、回や其の樂を改めず、晏如の處。

㋹苦海中流。六道輪廻、四苦八界、三毒の酒に醉ふ。

㋞毛病。「けじらみ」の事なり、「むしやく」と多き罪業を云ふ、毛病の二字巧なり。

㋡縦ひ文殊云々二句。此の道理あの道理と、智見解會の繫縛に遇ふも、うかと戴せられて、鐵の關門を開くなと。

㋧正月十五日上元の燈を燃す。此の獻燈がすむ頃から、雪霏々として降りしなり。

㋤飄零玉碎云々。此の首中解しがたき句なり、是れは珠玉のくづがばらりくと落ちて來るのは、月の修繕のかんな屑ならんと云ふ意、酉陽雜俎に、「月は七寶より成る、凹める處に八萬三千戶あり、一人あり、其の敗を修す」と。

㋶氷花。雪のことなり、少室は

容易に窮めがたし ㋒雲の起る處、㋖桃花浪は湧く武陵の春。

天に連り地に遍く潤うして窮りなし、正に是れ曹溪一脈通ず、流遠うして方に知る深うして底沒きことを、千波萬浪盡く朝宗す。

山上に亭あり　韻に次す

路は遶る幽巖の腹、雲は飛ぶ四面の山。時に丘壑の味を增し、逈に世塵の艱を洗ふ。白鳥花を啣んで去り、遊人徑を尋ねて還る。誰か知る絕頂を拔いて、更に㋨上頭の關あることを。

竹林鐵關庵

㋔斜曲分明に人に指示す、也た知る多福の老婆心、若し還つて牢關を把定し去らば、百鳥花を啣むも尋ぬるに處なし。

了如居士、僧と做る　大韻三首

㋗心空及第するも機猶は鈍、碓觜花を生ずるも未だ作家ならず、爭か似かん如翁今剃髮して、僧と同じく一甌の茶を喫するに。

此の回裏まず ㋳龐公の帽、肩に伽梨を擔つて我が家を共にす、直饒ひ頂門に活眼を開くも、更に趙州の茶を喫するを要須す。

慧可、達磨に參じて雪中に立つ。鼇山は雪峰、鼇山の雪中に見性す。老師は曹溪を指す、太寧は太平安寧なり。

㋰萬派天下に遍し。あちの水もこちの水も四方八方から一道に歸し、故に派脈天下に遍しと云ふ。

㋒雲の起る處。雲の起るあたりは流の根源。

㋖桃花浪は湧く武陵の春。三級浪高きの激流は、武陵桃源の春を流し來る。

㋨上頭の關。是れ則ち山上の亭。

㋔斜曲分明に人に指示す。會元四に多福和尙、因に僧問ふ、「如何なるか是れ多福一叢の竹、」福曰く、「一莖兩莖は斜なり、」僧云く、「學人不會、」福曰く、「三莖四莖は曲れり。」

㋗心空及第。龐居士の偈に、「十方同聚會、箇々學無爲、此は

㋮殿前の草を剗却してより、一段の風流作家に屬す、人衲衣底下の事を問はゞ、當機只だ一杯の茶を點ぜよ。

斷　雲

卷き去り舒べ來つて片々奇なり、起は何の處よりし滅は何にか歸す、看よ他の兩段元無間、只だ太淸一點の時にあり。

看山軒

獨り危欄に倚つて夕陰に到る、千峯具に一微塵にあり、煙迷霧鎖濛朧の處、㋘見得て分明なるは幾人かある。

㋫寂庵藏主を賀す

瞿曇四十九年の說、㋙以字非なり八不成、今日寂庵㋓重ねて點出す、百千の妙義一時に明かなり。

蒙古國の信使㋢趙宣撫が韻に和す　東林遠の語あり　二首

遠公㋫虎溪を出でざるの意、是れ淵明にあらずんば誰か賞音せん、箇の中の消息子を話せんと欲す、蒲輪何の日か雲林に到らん。

外國の高人日本に來る、相逢ふて談笑眞機を露す、殊方異域差路なく、

是れ選佛場、心空及第して歸る。」心空を得ば頭に毛があつても、學校卒業なりと云ふも、鈍つくよ、六祖の唐うすに花が咲いても、矢張り俗漢は俗漢なり。

㋳龐公帽。虛堂和尚に「山僧裹まず龐公帽」の句あり。

㋮殿前の草を剗却。出家得度と同じ、會元五に、石頭一日衆に告げて曰く、「來日佛殿前の草を剗れ」と、來日に到つて大衆諸童行各〻鍬鑁を採つて草を剗る、獨り丹霞盆に水を盛り、頭を沐して石頭和尙の前に前んで胡跪す、頭見て之を笑ふ、便ち爲に剃髮す、又爲に說戒すれば、丹霞耳を掩ふて出づ、此の故事を用ふるなり。

㋘見得て分明。くもり切つた處で、山を見るでなければ、ほんものでない。

(サ)目擊道存す更に誰かある。

宗簡侍者の遊方を送る

三呼三應(キ)險關の外、向上須らく知るべし活機あることを、若し諸方に到つて參得徹せば、歸來急々に巖扉を扣け。

心侍者が豐州に之くを送る

老來頻に三喚するに力なし、(コ)秋風の助けて機を發するに一任す、此去つて豐城溪畔に看よ、空に飜る黃葉誰が爲にか飛ぶ。

(メ)悟藏主が韻に和す　圓覺に住する桃溪和尚なり

道伴に相逢ふて肩を交へて過ぐ、山は自ら青く水は自ら淸し、後夜人の此の意を知るなし、屋頭唯だ聽く野猿の驚くを。

義侍者を送る

國師三喚すれば便ち三應す、已に墮す拈花微笑の機、口未だ開かざる時先づ薦得せば、家鄕は元洛陽の西にあり。

(ミ)賓緒卿の韻に次す

常に思ふ詩人錦繡の腸、氣は虹色の朝陽に映ずるが如し、(シ)此の文未だ

(フ)寂庵が藏主職になつた賀頌なり。

(コ)以字非なり八不成。五千四十八卷、四十九年の說はひきかからげて以字でもなく、八の字迄ゆかぬ、是れは經卷の上に〆の梵字あり、以字でも無く八字でもなし、只だ此の一字に歸すと。

(エ)重れて點出。この處を明らめた。

(テ)趙宣武。文永八年十月、蒙古の牒使趙良弼、書狀官張鐸等、高麗の康允紹を先導として筑前今津に至り、直に京師に入りて國書を奉らんとす、太宰府之を許さず、問難すること數日、良弼竟に副本を進め、十一月を期して答書せんことを乞ふ、太宰府之を鎌倉に呈す、幕府之を朝廷に献ず、廷議之に答へんとす、幕府抑へて報ぜず、終に良弼等

喪せず今猶ほ在り、目擊道存して意自ら長ず。

竺　翁

西天此土風光別なり、箇の事如何が人に説向せん、口未だ開かざるとき鬢已に雪、拈花の消息幾か春を經。

石　牛

頭尾全く彰る空劫の前、群隊に隨つて自ら安眠せず、古今徧界藏しがたき處、兩角崢嶸鼻遼天。

隱　溪

世上人の來つて我れを問ふなし、山深うして唯だ聽く磵泉の聲、一たび這裡より挨得入して、獨り自ら流に枕んで月明を看る。

空　庵　二首

四面寥々として一物なし、纔かに毫髮を存すれば路通じがたし、鳥啼き花笑ふ樹梢の外、只だ見る三更月窓に到ることを。

威音那畔家風別なり、門庭を立せず誰か敢て通ぜん、百鳥花を啣んで覓むる處なし、月明只だ在り綠蘿の中。

を放逐す、翌々十年六月蒙古再び良弼を日本に使す、幕府又之を卻く、蓋し良弼兩度の使節中、國師との應酬は崇福住持中の事ならん、然らば第二次使節の時なり。

㋐廬山の遠法師、陶淵明を送つて覺えず虎溪を過ぐ。

㋚目擊道存。ちらりと眼光相對すれば既に足れりの意、莊子田子方篇に出づ。

㋖險關。三呼三應は險關なり。

㋒秋風云々。吾れは年寄つて高聲に三喚するに力なし、秋風の汝行脚の機を發轉するに一任すと。

㋱悟藏主。延傳十六に出づ、隱溪の法嗣、入宋して頑極に育王に參ず、筑州の聖福寺にも住す。

㋯三條著諸卿、系圖に見えず。

㋛未喪せず。論語に出づ。

㋾此の首、大意は此處の門庭を

古山

巍々峭峻頂を窮めがたし、雨洗ひ風磨して年を記せず、謂ふなかれ空消息斷ゆと、春來れば花鳥尚ほ依然。

玄悟禪人を送る

㋽門庭を敲磕して言未だ盡きず、烏藤拈却して春風を問ふ、衲僧の活計又是の如し、天外知らず誰と與にか同じき。

桂堂

秋來群木蕭索を添ふ、㋪獨り丹根の花正に開くことあり、限りなき清香收不得、夜深けて月に和して空堦に滿つ。

㋲花翁

曾て桃源に在つて上色に誇る、風光漏泄して人間に到る、老來改めず紅粉の面、誰か識らん心肝鐵山の如きことを。

敬叟

叉手低頭賓主分る、從來非禮未だ曾て聞かず、而今老大猶ほ是の如し、限りなきの幽懷誰と與にか論ぜん。

商量して、充分肝膽を傾けざるに、烏藤を擔つて、又他方の知音を訪問す、雲衲の世渡りは、先づ斯うしたものである、さて〳〵萬里の天外に誰人と山雲海月を話するかと。

㋪叢林凋落の時桂堂扶起す。

㋲蓋し婦人の號。

小池に題す

磵泉湛々として色藍の如し、山影水光眼を潑して寒し、此に到つて若し能く底を親見せば、風なきに颯々として波瀾を起さん。

化浴　四首

木杓を拈じ來つて驀頭に澆ぐ、體をも洗はず塵をも洗はず、只だ要す㊆惺々歷々にし去らんことを、諸方自ら賞音の人あり。

一滴性空の清淨水、宣明妙觸十成の身、而今猶ほ要す從頭に洗つて、本地の風光轉た新を見ることを。

本來眞の面目を見んと要せば、大家力を着けて洗ひ將ち來れ、諸方自ら知音のある在り、聽き得ば一時に笑眼開かん。

無位の眞人汗雨に似たり、好し涓滴を將つて一時に澆ぐに、敎他あれ歷々惺々にし去れ、聽き得て知音笑つて點頭。

柏樹下の雪達磨

通身一片銀山に似たり、風彩人に逼つて毛骨寒し、西來端的の意を問はんと欲すれば、庭前の柏樹心肝を露す。

㊆惺々歷々。光風霽月常惺々、川河大地明歷々。

㋦引清軒

三更月は照す幽窓の外、松竹青々として碧流れんと欲す、因つて思ふ祖翁敗闕の處、今に至るまで千古卒に收めがたし。

牛　溪

昔時㋑巢父流に臨む處、草は自ら青く水は自ら清し、㋺劈箭機前の一句子、今に至るまで千古轉た分明。

雪師子

㋩百億毛頭同一色、毛前毛後白漫々、當陽に突出して辨じがたき處、凜凜たる威風匝地に寒し。

諾　庵

一たび㋥肯心を辨じてより後、諸方を驗盡して眼底空ず、雲は蘿窓を鎖して過客少に、幾回か獨り喚ぶ主人公。

泥　牛

頭角崢嶸鼻遼天、春風影裡自ら安眠、直饒ひ㋭潙老牧しがたき處も、㋬鬪つて入る海門明月の前。

㋦引清。五祖演の頌に本く、頌に曰く、「山前一片の閑田地、叉手叮嚀に祖翁に問ふ、幾度か賣り來つて還た自ら買ふ、爲に憐む松竹清風を引く。」

㋑巢父。許由耳を洗ふ處、巢父牛を引き去る。

㋺劈箭。飛び出す箭、灌溪の閑禪師、僧問ふ「久しく灌溪と響く、到來すれば只だ漚麻池を見る、」溪云く「汝只だ漚麻池を見て、要且つ未だ灌溪を見ず、」僧云く「如何なるか是れ灌溪、」溪曰く「劈箭急、」牛溪の頌、故に此の意を襲用す。

㋩百億毛頭。仰山の故事を用ふ、會元の九に、仰山、潙山に在つて牛を牧ふ、時に泰上座問うて云く「一毛頭上に獅子現ずることは即ち問はず、百億毛頭に百億の獅子現ずる

ト西疇

チ初祖當年曾て踏着す、分明に脚下草離々たり、憐むべし只だ這の片田地、萬古千秋耕す者稀なり。

雪

看よ看よ變じて銀世界と成ることを、リ文殊の蹤跡卒に尋ねがたし、趙州在らず明白裡に、誰か解せん此の時一片の心。

泉石の韻に和す

水は ヌ雲根に漱いで來處異なり、分明に源脈蓬壺より出づ。磷々たる岸石台嶺を壓し、湛々たる金池太湖に勝れり。松竹影斜にして碧玉を浸し、瀑泉聲碎けて眞珠を散ず。遊人此に到つて歸路を忘ず、覺えず頭を擧ぐれば日晡ならんと欲す。

流泉岸に瀉いで聲歇むことなし、一滴の曹源知んぬ幾か深き、ル波浪如し相似たりと言ふことなかれ、當頭に鷹取すれば月光沈む。

偈頌終

こと作麼生、」山云く、「正當現ずる時、毛前に現ずるか毛後に現ずるか。」

ニ肯心。肯諾の心なり、瑞岩日に主人公と呼び、又自ら應諾す。

ホ潙老。此の泥牛は潙山も牧し得まい。

ヘ鬪つて云々。古句に「兩個の泥牛鬪つて海に入り、直に今に到るまで跡を見ず。」

ト西疇。歸去來辭に、「農人來つ告ぐ、春の將に至るを以て、將に西疇に事あらんとす」と、文字是れより來る。

チ初祖云々。西來の端的は達磨にして正に識る。

リ文殊蹤跡。是れは普賢と用ふべき處、文殊は黃金世界、普賢は白銀世界なり。

ヌ雲根は石の異名、蓬壺は仙山の名。

ル波浪云々。古句に「曹溪の波浪若し相似ば、限りなき平人も陸沈せられん」と、此處似るの似ぬのと、枝葉を追ふな、眞向に鷹得すれば黒漫々なりと。

圓通大應國師塔銘

杭州路中天竺天曆萬壽永祚禪寺住持㋑廷俊撰す

圓悟の道、支れて二となる、一は㋺大慧の杲となり、一は虎丘の隆となる。隆三傳して松源の岳となる、岳一傳して運庵の巖となり、再傳して㋩虚堂の愚となる。虚堂の傳を得て日東に在る者は、建長禪寺圓通大應國師なり。國師諱は紹明、字は南浦、駿州安部縣の人、藤氏に出づ。幼にして本州建穗寺の淨辯師に事へて、出世の法を學ぶ。年十五、髮を薙り具戒を受く。往いて建長の蘭溪隆公に依る。㋥正元の間、海に航して宋に至り、偏く知識に參ず。虚堂の愚公、淨慈に主たり、門庭高峻にして、學者㋭崖を望んで却く、師往いて禮謁す。堂曰く、「古帆未だ掛けざる時如何。」師云く、「㋬蟭螟眼裡の五須彌。」堂云く、「掛けて後如何。」師云く、「黄河北に向つて流る。」堂云く、「㋣未在、更に道へ。」師云く、「某甲は恁麽、和尚又作麽生。」堂云く、「黄河北に向つて流る。」師云く、「和尙人を謾ずることなくんば好

㋑廷俊。增集續傳燈第五に傳あり、笑隱訢の法嗣、明の洪武元年に寂す。

㋺大慧は杲罵大、虎丘は睡虎、松源は瞶翁。

㋩虚堂。白隱和尙云く、「虚堂は大唐の中興じや、歷代の中にも、水晶の珠數の如くでない、優劣がある、唯だ大菩薩のみ此の義を解すと云ふ、祖祖相傳底の大事じや」と。

㋥正元。大應國師二十五歲の時なり。

㋭崖を望んで却く。險しき巖崖を望んで逡巡退却するなり。

㋬蟭螟。かまきりむし、ばつ

し。」堂云く、「叅堂し去れ。」久しうして賓客を典らしむ、日夕咨扣す。一日美く畫く者をして堂の壽像を寫さしめて賛を請ふ、堂、筆を援つて書して曰く、「㋠紹既に明白、語宗を失はず、手頭簸弄す、金圈栗蓬。」大唐國裡、人の會するなし、又却つて流に乘じて海東に過ぐ、時に㋷咸淳改元の夏六月なり。是の年秋八月、堂詔を奉じて徑山に遷る、師をして與に倶にせしむ、師益〻策勵す。一夕靜定中に於て起つて大悟す、偈を呈して曰く、「忽然として心境倶に忘ずる時、大地山河機を㋦透脫す、法王の法身全體現ず、時人相對して相知らず。」堂、巡寮して衆に報じて曰く、「這の漢、叅禪大徹せり」と、是れより一衆觀を改む。㋸咸淳三年の秋、師辭して日本に歸る、堂、贈るに偈を以てして曰く、「㋾門庭を敲磕して㋻細かに揣摩す、㋕路頭盡くるところ再び經過す、明々に說與す虛堂叟、㋵東海の兒孫日に轉た多し」と。復た其の後に書して曰く、「明知客、發明してより後、告げて日本に歸らんと欲す、尋いで㋟照知客・通首座・源長老、頭を聚めて龍峯會裡の家私を語る。紙を袖にして法語を求む、老僧今年八十三、思索するに力なし、一偈、行に贐す。萬里の水程、㋹道を以て珍衞せよ」と。既に歸る、

た。

㋣未在。屆かぬ。

㋠紹既明白云々。古人印證の語、往々に其の名を頌す、此處紹明の二字なり、語宗を失はずとは一句語を吐き、一寐語をなすも、宗旨を失はず。簸弄はもてあそぶとなり、金圈は鐵の牢屋、栗蓬は栗のいが、手にも齒にも合はないものを、自由自在にとりまはすこと。

㋷咸淳改元は日本の文永二年にて、國師三十一歳の時なり、入宋の七年目。

㋦透脫。桶の底のぬける樣なり、一機の足もとを踏みはづすなり。

㋸咸淳三年。師三十三歳、入宋の九年目なり。

㋾門庭云々。大宋諸方師家の門庭を叅じまはるなり、敲はたたく、磕は石の相擊つ聲。

本國の文永四年に當れり。建長の蘭溪、卽ち命じて藏教を典らしむ。秉拂の提唱に、「十載中華に歴偏して歸る、未だ佛法を將つて唇皮に掛けず、端なく今夜始めて口を開く、(ソ)鐵樹花を生ず正に是の時」の語あり。(ツ)文永七年の秋、西都に徙り、筑州の興德禪寺に出世す。遂に嗣法の書幷に入院の語を以て、(ネ)曇侍者に因つて徑山に呈す。堂之を得て大いに喜び、衆に謂つて曰く、「吾が道東せり矣」と。其の堂の爲に器重せらるゝこと此の如し。又明年太宰府の崇福に(ナ)移る、居ること三十三年、參徒日に(ラ)盛なり。(ム)嘉元甲辰、詔を奉じて京師に入る、太上皇、宮掖に召對す、問答旨に稱ふ。特に差して輦下の(ウ)萬壽禪寺に住持せしむ。貴游道を問ふもの、車馬日に駢集す。又東山の故址を以て(ヰ)嘉元禪

(ワ)細かに揣摩。宗旨の微細を究むるなり、揣摩は史記蘇秦傳に出づ、揣は「はかる」なり、摩は撫摩なり、人の情をはかり、摩でゝ之に近づくとあり、此處は吟味すと云ふが如し。

(カ)路頭盡くる云々。極め極めて、窮極に至るなり、再び經過すは、又凡夫地へ立ち歸つて、足を踏み出すなり、此處十萬の波濤を越えて宋に入り、往き行きて路窮まり、再び十萬の波濤を經過して日本に歸ると。

(ヨ)東海の兒孫。大應下の兒孫を東海日多の孫と云ふは、之れに基づく。

(タ)照知客、通首座、源長老。三師の傳未詳、或曰く、通は大川の法嗣、鐵壁通禪師、源は虛堂下寶葉の道源禪師なり」と、蓋し三師大應國師を送別せしなり。

(レ)道を以て珍衛。道の大道の爲に其の身を珍重護衞せよとの意。

(ソ)鐵樹花を生ず。すりこぎに櫻の花が咲いた。

(ツ)文永七年。建長にあること足掛け四年、此の時分蒙古との國際關係を生じ、頻々使節の往來あり、師を西筑に住持せしめしは、一種の使命ありしならん、冬十月廿八日興德に入寺す。

(ネ)曇侍者。按ずるに、曇は古來西澗の子曇となす。子曇は國師より少きこと十四歳、當時本國にあり、故に曇をして嗣書を呈せしめしなり、而して曇は翌八年に趙良弼と日本に來れり。

(ナ)國師の興德住持は壹年と二ケ月なり。

(ラ)晩年には每夏八十餘員の雲衲あり。

剎を興造し、師を延いて第一祖となす。㋨德治丁未、旨を奉じて關東に赴き、㋔正觀寺に留まる。而して相州の太守平㋗崇演、師を請じて署所に卽いて法を演せしめ、復た敷奏して請じて巨福山建長興國禪寺を主らしむ。明年の春、太上皇、手詔を降して存問す、恩禮優至なり。入寺の夕に當つて、小參に曰へることあり、「今年臘月二十九日、來に所來なく、明年臘月二十九日、去に所去なし」と、衆驚訝して其の意を諭るなし。明年延慶戊申臘月二十九日に當つて、㋳忽ち微疾を示す、二鼓に至つて、手づから偈を書して曰く、「風を訶し雨を罵る、㋮佛祖知らず、一機瞥轉して、閃電猶ほ遲し」と、書し畢つて跏趺して逝く。世壽七十有四、坐六十夏、度する處の弟子㋘宗雲・宗意等千有餘人、

㋰嘉元甲辰。甲辰は二年なり、國師年七十歲、[illegible]の歸朝者も時に遭はずして西陲に沈埋すること三十五年、埋翳[illegible]發光、隱々として花洛を動かし、茲に後宇多院の請招を見るに至れり、然れども國師の道の盛大流行は、此の三十五年の沈埋より十八哲七十二員を敲出せるにあり。

㋒萬壽禪寺に住持。是れは嘉元三年の七月廿日なり、翌年の二月迄は萬壽に住持せられしなり。

㋼嘉元禪剎。是れは天台宗の強訴により、中途に廢す、此の間に龜山院大祥忌の陞座あり。

㋨德治丁未。國師入京の四年目、蓋し國師の鎌倉に赴かれしは、京都には台徒の紛爭を生じ、鎌倉には圓覺住持西澗の命、旦夕に迫りしより、此の擧を生ぜしならん。

㋔正觀寺。是れは國師の親友なる西澗子曇の住せし寺なり、子曇はその前年の十月に寂せり。

㋗崇演。最勝寺殿北條貞時なり、臘八の上堂あり。

㋳忽ち微疾。月の初めの臘八上堂も、其の後の位牌堂新築の陞座も、健在で勤められしなり。

㋮佛祖知らず。佛祖もあなのぞき出來ぬ。

㋘宗雲、宗意。宗雲は未だ詳かにせず、宗意は鎌倉天源の開基、柏庵宗意禪師なり。

㋫興聖の忠。日谷宗忠、妙心の關山國師の緣者にして、大應國師に相見せしことあり、弟子に滅宗を出す。

㋙崇福の運。卽山と號す、嘉曆二年正月寂す。

其の法を嗣いで列刹に分居するもの、㋻興聖の忠、㋙崇福の運、㋓南禪の卓、㋢南禪の圓、㋐萬壽の禪、㋚建仁の然、㋖崇福の一、萬壽の心、㋴大德の超、㋱崇福の津、㋯聖福の胤、㋛建長の什、㋽崇福の龍、㋪龍翔の友等若干人、龕を奉じて闍維す、設利を獲ること無算なり。事聞す、皇上哀慕して已まず、勅して圓通大應國師と謚し、仍つて勅して寺を西京に建て、額を龍翔と曰ひ、骨石舍利を寺の後山に塔す。塔を普光と云ひ、庵を祥雲と云ふ。弟子建長に在るもの、舍利を奉じて之を瘞む、塔を㋲天源と云ふ。弟子崇福に在るもの、舍利を奉じて塔を建つ、庵を瑞雲と曰ふ。他日瑞雲火あり、牟天に及んで忽ち雪を雨らし、火遂に滅す、藏する所の舍利塔を求むるに所在を失す、門人方に

㋓南禪の卓。絕崖と號す、建武元年六月寂し、龍翔を建つ。

㋢南禪の圓。通翁と號す、元亨宗論の主將。

㋐萬壽の禪。雪庭と號す、貞和三年四月寂す。

㋚建仁の然。可翁と號す、畫を能くす、貞和元年四月寂す。

㋖崇福の一。峰翁と號す、延文二年三月寂す。

㋴大德の超。是れは大德寺開山なり。

㋱崇福の津。濟川と號す、貞治六年五月寂す。

㋯聖福の胤。秀崖と號す、貞治五年八月寂す。

㋛建長の什。物外と號す、沒年不詳、笠仙と甚だ親し。

㋽崇福の龍。雲川と號す、文和四年二月寂す。

㋪龍翔の友。松岳と號す。

㋲天源。笠仙梵仙の集に、天源庵の記あり、創立の由緒、舊寺の位置を詳記せり、柏庵宗意の獨力經營に成る、今大德寺に存する運庵虛堂大應三祖自贊の畫像は、天正年中、天源より大德寺に移れるものなり。

㋝至正二十五年。南朝の正平二十年、北朝の貞治四年、無我再度の入元は貞治二年なり。

㋜省吾。無我と號す、日本永德元年二月支那の牛頭に寂す。

㋑宗規。月堂と號す、康安元年九月寂す、月堂錄あり。

㋺海の內外。支那日本の隔てなし。

㋩大荒。山海經に出づ、世界と云ふが如し。

㋥鯨濤云々。支那より日本を見れば、鯨波は天の川に引續いて居る。

㋭濛濛は淮南子に出づ。東方日の出づる地とあり、又元氣なりと注す、一箇の別天地あり

憂駭す。夜半に至つて、巖阿に光を發す、之を迹ねて焉を得たり、遠近尤も之を異とす。㋝至正二十五年の夏四月、比丘㋦省吾、其の師筑州安國山聖福禪寺に住する國師の門人㋑宗規の撰する所の行狀を持し來つて、言を徵し、師の塔に銘せしむ。惟みるに、法道の天下にあること、㋺海の內外を間つることなきなり、日東の諸國、佛僧尤も蕃盛たり。圓通大應國師の名、海國に震ひ、道は主上に契ひ、衆の歸を致すこと、水の壑に赴くが如し。既に寂して、尤も靈異を著すが若きは、殆んど古佛の願轂を馳せて、來つて其の化を昭かにするものなり。是れ宜しく銘すべし。銘に曰く、

㋩大荒の內東海の東、
㋥鯨濤の上銀漢と通ず。
別に天地あつて㋭鴻蒙を開く、
君臣の禮樂諸夏に同じ。
㋬世代綿歷として終窮なく、
故宋の㋣太宗淳風を歆む。
尤も能く誠を傾けて覺雄に事へ、

て、一大元氣を啓開す、豐葦原の瑞穗の國是なり。

㋬世代綿歷。萬世一系の天皇を戴く。

㋣太宗淳風を歆む。裔然和尚の入宋したとき、日本の國體を聽いて、王姓緒を繼ぎ、臣下官を世にするは古の道なりと美歎せられた。

㋠金銀高く張る。金銀を惜まず、堂塔伽藍を張大にする。

㋷宜なり謂く云々。さて〳〵此の樣にとつかけ、ひきかけ、豪傑の士を支那へ差向けるも尤もじや、韻字の都合にて龍象を倒用す。

㋦宗工。佛法の棟梁。

㋸毗盧の印。毗盧遮那王の印綬なり、白隱和尚は隻手の聲なりと解せり。

㋾卓行懿德云々。論語に「簡ぶ帝心にあり」と出づ、大應國師の卓行美德は九重に達して

ヌ金銀高く張る釋梵宮。
抑耆碩あつて其の中に居る、
リ宜なり爾く雜遝象龍を來すこと。
圓通大應は國の ヌ宗工、
ル毗盧の印を佩びて盲聾を開く。
ヲ卓行懿德淵衷に簡ぶ、
ワ寵錫異數禮益隆なり。
至る處に鼓を擊ち横に鐘を撞く、
天人圍繞して華雨濛たり、
カ龍伯贔屭して蛟鼉充つ。
茫蠢を啓覺して ヨ凡庸を超え、
タ造化を剋期して有終を示す。
レ躑躅して涕無從、
火餘の設利は光 ソ曈々たり。
ツ海天不夜長虹を貫き、

後宇多院の簡拔に逢へりと、淵衷は深きみこゝろと云ふが如し。
ワ寵錫異數。錫は賜なり、異數は異常と同じ。
カ龍伯贔屭。龍伯蛟鼉は皆叢林の守護神、贔屭は作力の貌とありて、今の盡力と同じ、文選西都の賦に出づ、今は依怙、ひいきと用ふ、稍轉す。
ヨ凡庸を超え。凡庸の境を超絶す。
タ造化。造は忽なり、臘月二十九日の死を前年に知る。
レ躑躅。跡ずさりすることなれど、玆は躑躅の意に用ふ、群生の佛涅槃に遺へるが如し、涕無從は涙縱横の意か。
ソ曈々。朝日の出づる時の盛なるかゞやきを云ふ、舍利の光は旭日の如し。
ツ海天不夜長虹を貫く。燕個の殺氣は白虹を貫くとあり、今此の舍利不夜城を現じて、光り長虹を貫くと。
ネ窣堵鼎峙。三處に塔を建つるを云ふ、支那人が想像すると斯の様の語が出る。
ナ堂封。大に保護するの意ならん。
ラ亶に惟れ國師厥の躬を勛めしむ。西堙三十五年の横說竪說は、父や母や、我を生んで勛勞するなりと、兒孫は是れを忘れては不幸よ。
ム南山峩々。此の句は上に附くれば峩々たる南山もすりつぶすと、勞苦に覩す、下に附くれば、峨々たる南山惟れ石巖巖たり、取つて以て銘を刻すべしとなる、然れども上に付けて見るべし。
ウ勒。刻なり、玄功は大功なり。肅恭は肅然恭敬なり。

(ネ)窣堵鼎峙す海上の峯。
山君川后謹んで(ナ)堂封、
虚堂の道禪叢を光す。
(ラ)亶に惟れ國師厥の躬を勖めしむ、
(ム)南山峩々として石攻くべし。
之を(ウ)勒して以て玄功を昭かにす、
百世過ぐるもの宜しく肅恭すべし。

圓通大應國師塔銘 終

時に㋑應安五年歳次壬子冬十二月十五日、西京龍翔禪寺住持法孫比丘㋺宗興、工に命じて入梓。

前妙興禪寺住持法孫比丘㋩性守助緣。

前眞如禪寺住持法孫比丘㋥宗任同助。

州聖福禪寺住持法孫比丘宗越同助。

前崇福禪寺住持法孫比丘㋭宗璨同助。

㋑應安五年。國師示寂の延慶元年を去ること六十四年目、大應錄の初版なり、原版本往々世に存す。

㋺宗興。尾張の妙興寺滅宗宗興和尙なり、柏庵宗意より國師の像を受けて、妙興を創す。(延傳別に詳傳あり)

㋩性守。峰翁祖一禪師の法嗣、後に因州の大興寺に住す、心王性守禪師。(延傳)

㋥宗任。可翁然禪師の法嗣、六用と號す、後建仁に住す、辭世の偈に「業風吹轉、月行萬里」の句あり。(延傳)

㋭宗璨。峰翁和尙の法嗣、玉林と號す。(延傳)

大應錄版、譯者見る處四種あり、第一應安版、第二寬永版、第三延寶二年の刻本、第四書林友松堂出版と奥書せるもの、今は寬永版に據る、跋の前へ刻年を出せしは原版此處に空處ありて挿入せしなり。

㋑跋

殺人刀を提げ活人劍を秉ることは、須らく作家の手段に還して、㋺方に任用するに堪へたるべし。苟も其の正を失すれば、㋩唯だ指に血ぬり身に及するのみにあらず、㋥益且に魂驚き膽落ち、㋭柄欛何似といふことを知ることなけん。今㋬興德堂頭南浦法兄禪師の綱要を擧揚するを覽るに、㋣長劍快馬の㋠運轉して風の如くなるあり。罣縫罅の㋷窺測を容るべきなし。若し其れ㋦眨眼の流ならば、豈に止に橫死萬里のみならんや。余意ふに、虛堂老伯も、未だ必ずしも此の㋸作あらざるなり。所謂智、師に過ぎて、方に傳受するに堪へたるものは、斯に於て盡せり。因つて爲に卷末に書す。時に㋾文永壬申の季春、大宋國屬末比丘、西澗子曇。

楊岐の道、四葉にして圓悟を得て、其の門を大いにし、其の宗を起す。六

㋑按ずるに、此の跋は四會錄中最初の興德語錄の成りし時、其に附せしなり、西澗は國師に先つて死せし人なり。
㋺方に任用。此の手段を具して方に宗師家として任用するに足れり。
㋩唯だ指に血ぬり云々。生兵法は大けがの本。
㋥益且に魂驚き云々。後に長老になつて、膽のつぶれることがある、益の字疑ふべし、蓋の字か。
㋭柄欛。つかまへどころ。
㋬興德。筑前興德寺。
㋣長劍快馬。天に倚るの長劍、千里の神駿。

葉にして㋻應庵を得て、法益光に、道益盛なり。密庵の道も、亦四葉にして虚堂を得たり、虚堂の道、㋕大霆の浮世に震ふが如く、碧潭の秋月に瑩するが如し。堂の下、葉々光あり、㋵寶葉の源公、竹窓の喜公、閑極の雲公、葛廬の曇公、靈石の芝公の如き、皆語あり、世に行はるゝもの。日本の南浦明公禪師、巨宋の大叢林に遊歷して、虚堂に參じて正傳を得、本國に歸つて道を行ふ。今其の四會の語、上堂、小參、拈古、頌古、法語及び貽贈の作を觀るに、旃檀を折つて片々皆香しきが如し。伏して讀んで手を去るに忍びず、信に知んぬ、的旨を得るものは、逈然殊別なり。余日本に於て、宿に緣起あり、故に來る。此の錄を觀るを獲て、亦東海の一行㋟枉げざるなり。時に元德庚午孟夏結制の前五日、建長住山　法姪比丘楚俊敬んで跋す。

㋹蟭螟眼裡の五須彌、靠倒す虚堂の老古錐、㋡四會搏桑熾然の說、曾て一字の唇皮に掛くるなし。

㋠運轉風の如く。右往左往に振りましてなり。

㋷窺測を容るべきなし。佛も衆生も煩惱も菩提も入るべきひびきなし。

㋦眨眼。さがり目の阿房づら。

㋸作。作用抑揚なり。

㋾文永壬申は九年なり、國師は三十八歲、西澗は二十四歲なり、石帆衍の法嗣、建長に住し、大通禪師と諡す。

㋻應庵。大慧と肩を並べて化を盛にす、此の時代を端嘉の道と云ふ。

㋕大霆、碧潭は動靜に分ちて云ふ。

㋵源公、喜公、曇、芝の諸公は、續傳燈に傳あり。

㋟枉げざるなり。むだ足でなかつた。

㋹蟭螟云々。須彌山が、あたまのちびつた錐へ、もたれかゝつた。

洪武三年歳庚戌にある佛制日

雙徑山主　智及　拜題

圓通大應國師、四會の録、其の板強半存すと雖も、多年庫底に沈んで、蒙塵して出すこと能はず、其の餘は、彼に散じ、此に失して、覓むるに處なし。偶々あるも、亦（ツ）蚪書の上に蟲文を加ふ、則ち（ネ）有義は還つて無義に同じ。直歳集めて以て燒いて、（ナ）爨下の火を助く。粤に國師の下十三世、（ラ）江月玩和尚、工に命じて之を刀し、（ム）之を繼いで全部ならしめ、以て之を普光の塔に置く。易に曰く、「一陰一陽、之を道と云ふ、之に繼ぐものは善なり」と。此に知んぬ、之を繼ぐものは之れ天地の大善たることを矣。

寛永辛巳孟秋日　遠孫比丘　（ヲ）澤庵宗彭

國譯圓通大應國師語錄　終

（ソ）四會云々。四十餘年、一字不謬なり。

（ツ）蚪書。科蚪の書なり、科蚪はおたまじやくしにて、支那上古の書は蚪の形を爲す、蟲文は印章などに用ふる文字の名、板木を縦横に蟲のくひしこと。

（ネ）有義は還つて云々。有つても無きに同じの意。

（ナ）爨は爨と同じ、竈の下と云ふ程のこと。

（ラ）江月玩和尚。諱は宗玩、春屋宗園の法嗣、大燈録亦師の再板に係る。

（ム）之を繼いで云々。板木の不足を繼ぎ足しせるなり。

（ヲ）澤庵。諱は宗彭、但馬の人、一凍紹滴の法嗣、德川氏三百年中大德寺門中、第一流の人、江月の友人なり。

日本國建長寺明禪師語錄敘

吾佛以教外別傳之旨付大迦葉、二十八傳至菩提達磨、當梁武帝時來中國、以無上心印授可大師、而中國始有禪宗、自後派別支分、彌布華夏、唐宋之間、號爲極盛、日本國遠在大海之東、雖自唐以來、若空海・最澄・奝然・寂照之流、但來中國傳教乘而已、至宋南度、千光禪師榮西者、來參天童虛庵敞公、得禪學以歸、日本之有禪宗、則自西公始、而覺阿來、參靈隱瞎堂遠公、妙悟心要、亦言彼國未有禪學、由是而言、則西與阿蓋同時云、厥後學禪自中國而歸者不可勝計、至今彼國禪宗大盛、凡叢林典禮、一放中國之制、茲讀建長寺圓通大應國師明公語錄、信然、公得徑山虛堂愚公之道、歸化其國、四遷名刹、大敷玄旨、學徒駢集、而王公貴人入室問道者甚衆、蓋其履踐眞實、開示學者之語、簡古嚴整、無毫髮虛僞、眞一代宗師也、嗟乎中國之於日本、同在閻浮提之內、同一天地、同一日月、雖有山海之限、而人物性情與夫所得道德之懿、其有不同者乎、觀公之言行、卓異如此、古人所謂何地無才良、有徵矣、三復感歎、乃叙其錄之首、洪武八年倉龍乙卯五月十有九日戊寅、天界善世禪寺住持天台釋宗泐敘。

圓通大應國師語錄

初住筑州早良縣興德禪寺語錄

侍者　祖照等編

師文永七年十月二十八日入寺。

山門、無門之門、了無遮護、若是眞正道流、這裏便進一步、彈指一下。

佛殿、德嶠・韶陽、只見錐頭利、不見鑿頭方、新興德別有條章、山門頭合掌、佛殿裏燒香。

據室、百千諸佛、不出這裏、且道、這裏是什麼所在、卓拄杖一下。

拈衣、佛佛授手、祖祖相傳、畢竟傳底是什麼、擧衣云、看看、歡喜受之、頂戴披之。

法座、八面四方、通霄活路、要行便行、要坐便坐、須彌燈王也須退墮。

師陞座、拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲祝延

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭願、堯天等覆、舜日普臨、四海歸仁、萬邦拜手。

此香曾在凌霄峰頂、無心之中、忽然拾得、今日人天普會、不敢囊藏、爇向爐中、供養前住大宋

徑山興聖萬壽禪寺虗堂和尚大禪師、用酬法乳。

師歛衣就座乃云、望刹竿便囘、正在半途見招手横趨、猶隔江在、何況棒頭領旨、喝下承當、萬里崖州、未為遠在、所以道、向上一路、千聖不傳、未曾親近、早隔大千、與麼告報、盡法無民、退身三步、如何相見、乃竪拂子云、還見麼、霜花和月冷、梅雪帶煙寒、若向這裏見得徹去、皇恩佛恩一時報畢、其或未然、切忌喚鐘作甕、叙謝不錄。

復舉保壽開堂公案、師拈云、大衆要知二大老落處麼、象王囘顧、師子嚬呻、凜凜神威、誰敢近傍、雖然如是、點檢將來、總被這僧勘破、且道、那裏是他勘破處、具眼者辨取。

當晚小參、德山小參不答話、寰中天子勅、趙州小參要答話、塞外將軍令、二老漢等閑一撥一捩、自然風行草偃、太平得路、然雖如是、不可重行此令、今夜只據自家有一條活路子、共汝諸人同行一步、卓拄杖一下。

復舉、僧問香嚴、如何是直截根源處、嚴擲下拄杖歸方丈、師云、若論直截、早是紆曲了也、古人即且置、而今合作麼生、云、天寒久立珍重。

次日謝兩班上堂、衲僧家一動一靜、無非活路、退一步踏着瞿曇眼睛、進一步築着達磨鼻孔、只如不退不進、又且如何、良久云、吹毛元不動、徧界髑髏寒。

冬至小參、法法本來法、日日杲日麗天、心心無別心、處處清風匝地、便恁麼會去、釋迦不用出世、達磨不必西來、人人分上、壁立萬仭、箇箇面前、飛大寶光、一念萬年、萬年一念、飢來喫飯、困來卽眠、誰管陰陽代謝、四序變遷、說甚滴水氷生、天寒人寒、雖然恁麼去、猶是尋常行履、畢竟向上如何顯露、擊拂子云、冬不寒臘後看。

復舉、古德云、要識佛性義、當觀時節因緣、時節既至、其理自彰、今當書雲令節、且道、彰底理、又作麼生、擊拂子云、一陽生萬彙生。

次日上堂、一言道盡、崖崩石裂、一着當機、頭頭漏泄、洞山菓子、潙仰家風、陳年滯貨、不用施設、畢竟今朝如何可說、卓拄杖云、時哉時哉、一陽復來、家家鬧熱。

上堂、舉、趙州臥雪中云、相救相救、時有僧、便來趙州身邊臥、州便起去、師云、這僧雖然救得趙州、爭奈得便宜處落便宜、且道、那裏是他落便宜處、具眼者辨。

上堂、舉、僧問趙州、如何是道、州云、墻外底、僧云、不問這箇道、州云、儞問那箇道、僧云、大道、州云、大道透長安、師頌曰、分明指示處、覿面不相謾、大道如弦直、行人自作難。

上堂、舉、僧問鏡清、如何是佛法之源、清云、從這裏流出、師云、大衆流出則不問、且道、這裏是什麼所在、擊拂子云、諸人若也會得、四海浪平、百川潮落。

上堂、山僧在早良縣裏、開箇小小茆香皂角鋪子、爭酬競買者、不道全無、只是罕有價數相當者、今朝臘月十五、未免折本賣與諸人去也、卓拄杖云、有利無利、不離行市。

臘月二十五日上堂、雲門有一曲、臘月二十五、流落幾多年、今日重新舉、重新舉、巢知風、穴知雨。

歲夜小參、高懸寶鑑、列萬象於目前、橫按鏌鋣、截群機於量外、蓋天蓋地、透色透聲、卷舒在我、殺活臨時、把定放行、全歸掌握、所以衲僧家、說到行不到處、行到說不到處、千變萬化、七縱八橫、亂却六十甲子、抹過七十二候、不爲分外、雖然如此、今夜且放過一着、臘盡依舊、還他春回、

何故、也要諸人順時保愛。

復擧、北禪烹露地白牛公案、師拈云、北禪老師、恁麼按排、可謂是富貴、興德家貧無許多按排、只據現定與諸人分歲、雖然敎汝諸人快活不徹、何故、卓拄杖云、獻佛不用香多。

歲旦上堂、卓拄杖云、一處透而處處透、一處眞而處處眞、畢竟如何見得、又卓拄杖一下云、元正啓祚、萬物咸新。

元宵上堂、以拂子打圓相云、點這一燈、燈燈卽明、森羅萬象、無處逃形、若也覆盆之下、爭恠得山僧、良久云、且道、那一燈。

上堂、馬祖陞堂、百丈卷席、風塵草動、便知來由、好大衆、衲僧家須是恁麼始得、一等是箇般時節、切忌開眼瞌睡、便下座。

佛涅槃上堂、不住涅槃一片心、無端賣弄紫金身、至今醜惡難遮掩、狼藉年年桃李春。

三月旦上堂、說禪說道、談妙談玄、好肉剜瘡、畢竟如何、常憶江南三月裏、鷓鴣啼處百花香。

上堂、春日晴黃鶯鳴、春風浩浩、春水冷冷、妙德空生都不會、善財走得太忙生。

上堂、擧、眞淨和尙示衆云、頭陀石被莓苔裹、擲筆峰遭薜荔纏、羅漢院裏一年度三箇行者、歸宗寺裏參退喫茶、師拈云、眞語者實語者不妄語者、所以興德依而行之、大衆下座、巡堂喫茶。

浴佛上堂、衲僧家尋常高揖釋迦、不拜彌勒、因甚今日、特地調和香湯、灌沐金軀、三尺一丈六、且同携手歸。

結夏小參、雲山蒼蒼、成見圓覺伽藍、海水泱泱、全彰平等性智、燈籠露柱、狸奴白牯、若凡若聖、

情與無情同此結制安居、無有平等無平等者、一夏九十日內、經行及坐臥、常在於其中、然後山僧不入這保社、行是自行、坐則自坐、何故、不是時人難共住、大都緇素要分明。

復擧、古德云、若是全擧宗乘、汝等諸人向甚處領會、所以古今獨露、隱顯無方、拈云、依稀似曲纔堪聽、又被風吹別調中。

次日上堂、與德一衆、雖是不多、箇箇頂天履地、人人鼻直眼橫、說甚三月安居、九旬禁足、畢竟如何、南地竹、北地木。

上堂、乾峯和尙示衆云、法身有三種病二種光、一一透得、始是穩坐、雲門大師出衆云、庵內人因甚不見庵外事、師拈云、韶陽老人、也是隨邪逐惡、當時只是冷笑一管、管取乾峯隱身無路。

端午上堂、諸方今日不說善財採藥、便說東山神符、以爲佛事、只是與德門下渾無可說、何故、家無白澤之圖、妖恠自然消滅、滅滅、長安夜夜家家月。

上堂、結夏已經一月、山僧日日業識茫茫、無本可據、未曾與兄弟說着本分事、且道、本分事作麼生說、良久云、今日大熱、且待別時。

中夏上堂、九旬已過半、也諸人自合知時、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨、切忌當面諱却、空度光陰、更恨阿誰。

七月旦上堂、一葉落天下秋、一塵起大地收、未言先知、猶是鈍漢、未擧先領、不是俊流、何故、定光招手、智者點頭。

解夏小參、一結結定針箚不入、一解解開處處通方、東去也得、西去也得、說甚萬里無寸草、淨

地却迷人、誰管出門便是草、眼睛流出血、恁麼恁麼、大地踏翻信脚行、不恁麼不恁麼、横擔楖栗舞秋風、雖然如是、與德拄杖子、猶未放過在、何故、吾王庫內、無如是刀。

復擧臨濟無位眞人話、雪峰語擧了、師拈云、白拈未白拈卽且置、若是無位眞人、非但面門出入、要見麼、擲下拄杖、喝云、元來只是拄杖子。

次日上堂、布袋口打開、徧界有路通、露柱燈籠、一一眼活、狸奴白牯、各各心空、汝等諸人、因甚更來這裏、低頭接耳、叉手當胷、可煞不知向背、不辨西東、忽有箇出來道、長老不可壓良爲賤、也恠他不得何也、西風一陣來、落葉兩三片。

中秋上堂、秋聲日高、秋水澄清、秋風颯颯、秋月圓明、畫又畫不就、描又描不成、不是王老師、誰能拂袖行。

上堂、秋風吹八極、木落露千山、見成公案、達磨不識、六祖不會、大難大難、便下座。

開爐上堂、火焰爲三世諸佛說法、人貧智短、三世諸佛立地聽、馬瘦毛長、更有一句子、且去暖處商量。

虛堂和尙忌日拈香、以香打圓相云、只這箇是什麼、沒巴鼻有來由、楊岐頂上拳、鎭州蘿蔔頭、便揷香。

上堂、南來者三十棒、北來者三十棒、梁山徹骨貧窮、亦能濟人、與德雖然有棒、不曾動着、何故、黃金自有黃金價、終不和沙賣與人。

十一月旦上堂、明招風頭稍硬公案、師拈云、明招老漢、欲以斯道覺斯民、囑之又囑、是則是矣、

興德則不然、者裏風頭稍硬、切忌商量。
冬至小參、璿璣未動時、道得一句、鐵樹開花、朕兆纔分處、轉得一機、氷河發焰、直得嘉州大象、滿面生光、陝府鐵牛、通身汗出、洞山菓子、又見一番新、皓老布裩、依舊赫赤、雖然如是、若也向上全提、冬至到寒食、更有一百五在、何故、當頭霜夜月、任運落前溪。
次日上堂、一冬二冬、叉手當胷、達磨不會、隻履忽忽、寒山撫掌、呵呵大笑、何故、海水知天寒、枯桑知天風。
除夜小參、古往今來、日上月下、一年十二月、月月一般、一日十二時、時時相似、見成公案、逈絕按排、德山有棒無下手處、臨濟有喝無開口分、山僧與麼告報、別也無他、只要諸人知時知節、不涉化機自行一條活路子、然後與之把手共行、其或未然、明年更有新條在、惱亂春風卒未休。
復舉東村王老夜燒錢公案、頌云、東村王老夜燒錢、歲晚年年事不遷、若向箇中求指的、新羅鷂子過天邊。
上堂、舉、僧問香林、如何是祖師西來意、林云、坐久成勞、師拈云、大衆切忌動着、動着則禍生、何故、白玉無瑕、彫文喪德。
上堂、臨濟因問院主、曰、什麼處來、云、州中糶黃米來、濟以拄杖劃一劃云、還糶得這箇麼、主便喝、濟便打、須臾典座來、濟舉前話、座云、院主不會和尚意、濟云、儞作麼生會、座作禮、濟亦打、頌云、桃李無言相映開、紅紅白白自何來、忽然一陣春風惡、狼藉園林點綠苔。

拽佛殿上堂、雲門大師示衆云、和尚子莫妄想、山是山水是水、時有僧出云、某見山是山水是水時如何、門云、佛殿因甚從這裏過、僧云、恁麼則不妄想去、門云、還我話頭來、師拈云、然則易開始終口、難保歲寒心、這僧當時才聞他雲門道佛殿因甚從這裏過、但云應當如是、不唯表顯自己光明、亦乃覷破雲門脚跟。

佛涅槃上堂、佛身充滿於法界、普現一切群生前、竪起拂子云、這箇是拂子、佛身在什麼處、諸人若向這裏着得一隻眼、便見靈山一會儼然未散、其或遲疑、古佛過去久矣。

三月半上堂、正法眼、涅槃心、頭頭顯露、不用追尋、陌上桃花都落盡、黃鶯啼在綠楊陰。

法堂前剗除青草、布白沙上堂、若是一向擧揚宗乘、固是法堂前青草離離、未免咬定牙關、放一線道去也、卓拄杖云、只這些兒得人憎、亘古亘今、無變易、噁、無端撒沙撒土了、靠拄杖下座

浴佛上堂、未離都率、已降閻浮、天高東南、未出母胎、度人已畢、地傾西北、恁麼會得、黃面老子登但今日始降生、如其未然、興德又費一杓惡水去、以拂子作潑水勢云、看看、我今灌沐諸如來。

結夏小參、以大圓覺、爲我伽藍、天網恢恢、疎而不漏、身心安居、平等性智、十方刹海、包括無遺、衲僧做盡伎倆、自謂有多少奇特、殊不知、總跳這二千年前影子不得、興德恁麼道、莫有放不過底麼、出來掀倒禪床、喝散大衆、如無高掛鉢囊、拗折拄杖、長夏之中、不得向外打之遶、何故、擧拂子云、趙州東壁掛胡蘆。

復擧、天平到西院、公案、師拈云、天平當時、才聞西院道上座錯西院錯、但云錯、待西院擬開口、

拂袖便行、不㆑惟塞㆓斷西院口頭㆒、亦乃免㆑見㆓諸方檢責㆒。

結夏上堂、雲門示㆑衆云、聞聲悟道、見色明心、師云、築着磕着、無㆑處㆓回避㆒、觀音菩薩買㆓胡餅㆒、放㆓下手㆒元來是饅頭、師云、只這些子說話、多少人妄生㆓卜度㆒、殊不㆑知、兎馬有㆑角、牛羊無㆑角、會得展㆑眸終㆓一夏㆒、不㆑然更有㆓九旬禁足㆒在。

上堂、古者道、結夏已十日也、水牯牛作麽生、又云、結夏已十日也、寒山子作麽生、抑㆓逼人㆒作麽、興德則不㆑然、結夏已十日也、但是飢喫㆑飯、熱乘㆑涼、且恁麽過㆑時、何故、智者見㆑之謂㆓之智㆒、仁者見㆑之謂㆓之仁㆒。

端午上堂、今朝五月端午、不㆑用㆓桃符艾虎㆒、兎角拄杖、龜毛拂子、覿面全提、佛病祖病倶拈却、魔孽妖怪都掃盡、正恁麽時、畢竟如何、出㆓頭天外㆒看、誰是我般人。

上堂、擧、僧問㆓六祖㆒、黃梅意旨什麽人得、祖云、會㆓佛法㆒人得、和尙還得否、不㆑得、因㆑甚麽不㆑得、我不㆑會㆓佛法㆒、師拈云、既是不㆑會㆓佛法㆒、因㆑甚作㆓祖師㆒會麽、此地無㆓金二兩㆒、俗人沽㆓酒三升㆒。

上堂、今朝六月一、那事本見成、水上青青綠、元來是浮萍。

興德寺語錄終

太宰府萬年崇福禪寺語錄上

侍者　慈禪等編

師於文永九年臘月二十五日入院。

山門、山横翠壁、水出高源、解脱門開、大衆歸去來、歸去來。

佛殿、麻三斤、殿裏底、狹路相逢卒難回避、插香云、還見麼、若也遲疑、古佛過去久矣。

方丈、德山棒、臨濟喝、這裏一時倚閣、靠拄杖云、大坐當軒、壁立萬仞、爾等諸人、擬向甚麼處相見、吽吽、且居門外。

法座、向上一路滑、壁立萬仞嶮、且道、如何進歩、擧脚云、看看、因行不妨掉臂。

拈香云、此一瓣香、根盤在空劫以前、葉生於威音那畔、曾在早良縣裏興德禪寺、拈出一番、熏天炙地、今日人天普會、未免重新拈出、供養前住大宋徑山虚堂和尚大禪師、用酬法乳之恩。

師趺座乃云、道遠乎哉、嶺頭雲淡淡、聖遠乎哉、磵下水冷冷、須知、瞿曇日日出現、達磨時時西來、靈山一會何異今日、少室家風正在此時、便見、佛日增輝、堯風永扇、世出世間能事云畢、然雖如是、與麼告報、也是應箇時機、若是向上全提、遠之遠矣、何故、青山不鎖長飛勢、滄海合知來處高。

復擧、張無盡相公、請玉泉皓老開堂陞座云、君不見君不見、無盡云、見、皓老便下座、師拈云、恁

麼事遇恁麼人拈出故是。且道。無盡相公云見。畢竟見箇甚麼。若也會得。明上座今日開堂。功不浪施。其如未然。切忌妄通消息。

當晚小參。法無定相。遇緣卽宗。立處皆眞。隨方作主。離與德到崇福。莫非其緣。建法幢立宗旨。不擇其處。直得風淸六合。月明四海。頭頭合轍。應用無虧。所以道。要知佛性義。當觀時節因緣。時節既至。其理自彰。時節則諸人共知。且道。彰底理又作麼生。良久云。吾無隱乎爾。

復擧。僧問雲門。如何是雲門一曲。門云。臘月二十五。師拈云。黃鐘大呂。陽春白雪。固是古今絕唱。明上座今夜試唱一曲看。拈拄杖卓一下云。意隨流水遠。聲遏暮雲寒。且道。與故人相去多少。

上堂。崇山家風別無奇特。黃葉滿庭際。野鹿叫林坳。雖然如是祖意敎意。鬪揍得恰好。且道。以何見得。具眼者辨取。

上堂。三九二十七。雞頭吹篳篥。三世諸佛不知有。狸奴白牯却知有。阿呵呵。會也麼。這裏風頭稍硬。且歸暖處。

除夜小參。年窮歲盡。瞿曇眼睛突出。臘盡春回。達磨鼻孔崢嶸。開眼也着。合眼也着。擧步踏着。伸手觸着。築着磕着。塡溝塞壑。頭頭顯露。處處逢渠。恁麼也得。不恁麼也得。恁麼不恁麼總得。山僧與麼告報。忽有人聽得出來道。我會也我會也。崇福低低地向他道。謝三娘秤金。

復擧。僧問古德。如何是不遷義。德云。城上已吹新歲角。窓前猶點舊年燈。師拈云。古德恁麼道。放行處把定。把定處放行。猶未得勦絕在。崇福卽不然。如何是不遷義。只向他道。舊歲今宵盡。

新年明日來。

歲旦上堂、僧問、五葉花開瑞色新、挽回千古少林春、正與麼時、願聽提唱、師云、雲淨日月正、雪消天地春、進云、恁麼則一氣不言含有象、萬靈何處謝無私、師云、好箇消息、進云、記得、僧問鏡清、新年頭還有佛法也無、清云、有、意旨如何、師云、山青水綠、進云、如何是新年頭佛法、清云、元正啓祚、萬物咸新、如何委悉、師云、現成公案、進云、僧又問明敎、新年頭還有佛法也無、敎云、無、有何道理、師云、天高萬象正、進云、僧云、年年是好年、日日是好日、爲甚麼無、敎云、張公喫酒李公醉、又作麼生、師云、東山拍手西山舞、進云、鏡清道有、明敎道無、莫有優劣麼、師云、一有多種二無兩般、進云、若有人問和尙新年頭有佛法也無、未審和尙如何祇對、師云、借婆子裙子拜婆年、進云、上來已蒙師指示、向上宗乘又若何、師云、須彌頂上擊金鐘、僧便禮拜。

師乃云、斬新日月、特地乾坤、佛祖大機、衲僧巴鼻、恒沙福智、無量妙用、從者裏頓發、何故、卓拄杖一下云、元正啓祚、萬物咸新。

元宵因講經上堂、僧問、心徑苔生、坐在迷魂之地、燈影裏行、朝打暮打離却二途、請師相見、師云、出頭天外看、僧云、只如終日道火不燒口、莫是名實不相當麼、師云、指桑罵柳、僧云、恁麼則樓臺上下火照火、車馬往來人看人、師云、只道得一橛、僧云、記得、古德云、火焰爲三世諸佛說法、三世諸佛立地聽、未審火焰說甚麼法、師云、明皎皎暗昏昏、僧云、三世諸佛如何聽、師云、聽者方知、僧云、學人還得聽麼、師云、爾無分、僧云、誰得聽、師云、露柱燈籠、僧禮拜、又僧問、梅花銜雪發、黃鶯囀柳梢、箇是現前三昧、請師別舉揚、師云、向上會取、進云、記得、僧問趙州、如何是祖

師西來意、州云、庭前柏樹子、此意如何、師云、松直棘曲、進云、僧云、和尚莫將境示人、州云、老僧不將境示人、僧云、如何是祖師西來意、州云、庭前柏樹子、又如何、師云、不是苦心人不知、進云、西來意且置、如何是柏樹子、師云、青青不入時人意、僧禮拜。

師乃云、以燈傳燈、燈燈相續、放光動地、動地放光、所以道、今佛放光明助發實相義、放光明則且置、如何是實相義、卓拄杖一下、花開不假栽培力、自有春風管待伊。

上堂、佛祖大機全歸掌握、人天性命總在這裏、把定則乾坤失色、放行則瓦礫生光、把定放行則且置、如何是佛祖大機、人天命脈、竪起拂子云、見麼見麼、認着依前還不是、參。

佛涅槃上堂、以手摩胸弄精魂、雙趺示出累子孫、西天此土二千載、撼得毗盧海岳昏。

三月半上堂、春山青、春光美、春鳥啼春風、春魚弄春水、左顧右眄、無可不可、東行西行、無是不是、雖然如是、卓拄杖一下云、莫過於此。

浴佛上堂、僧問、鐵壁鐵壁、號之曰佛、常在苦海中立、只如今日、降生底是、苦海中立底是、師云、二俱不是、僧云、天上天下唯我獨尊、聻、師云、也是草裏漢、僧云、雲門棒頭短、藥山杓柄長、還有報恩分麼、師云、知恩方解報恩、僧云、遵布衲浴佛、水浸江石卵、此意如何、師云、未曾浴得他、僧云、佛未出世時如何、師云、天高日月正、僧云、出世後如何、師云、清風匝地、僧云、出世不出世則且置、即今佛在什麼處、師云、看脚下、僧禮拜、又僧問、世尊初生下、指天指地、周行七步、云、天上天下唯我獨尊、此意如何、師云、爲衆竭力、僧云、雲門云、我當初若見、一棒打殺與狗子喫、貴圖天下太平、意在什麼處、師云、未曾打着他影子、僧云、雪竇云、我當初若見、便與掀倒禪床、又如

何、師云、劒去久矣、僧云、二大老用處、是同耶是別耶、師云、倶出雙手扶竪門戶、僧云、上來一一蒙指示、向上宗乘又如何、師云、金烏急玉兎速、僧禮拜。

師乃云、佛身充滿於法界、普現一切群生前、諸人要見釋迦老子麼、開眼也着、合眼也着、尙自遲疑少間、詣大佛殿、一杓惡水向什麼處着。

結夏小參、崇福山高、到得頂顙、猶涉途在、磵泉水急、探得淵源、猶隔脈在、若是眼蓋乾坤、皮下有血、見山不是山、見水不是水、掀翻圓覺伽藍、不住平等性智、不與千聖同途、自行一條活路子、方乃見山是山、見水是水、頭頭是圓覺伽藍、物物卽平等性智、狸奴白牯、露柱燈籠、若聖若凡、情與無情、同此結制安居、不爲分外、其或未然、雲在嶺頭閑不徹、水流磵下太忙生。

復舉梁山和尙示衆云、南來者三十棒、北來者三十棒公案、師拈云、梁山老漢恁麼垂示、也是費力不少、崇福卽不然、南來者北來者、一等敎他明窓下按排、何故、彼此出家兒。

五月旦上堂、舉一不得舉二、放過一着落在第二公案、師拈云、氈拍板、無孔笛、狹路相逢、而今諸方隨語作解者、只管論一二、豈曾夢見二大老落處、今五月初一、不妨山前山後、三三兩兩、看山翫水、且道、放過耶不放過耶。

端午上堂、今朝五月五、不用呪土書壁、崇福有一道眞言、纔舉一返、吉無不利、驀拈拄杖卓一下云、且道、華言梵語、劈箭機前急薦取。

舉、慧山智炬和尙看經次、有僧問、不掛元字脚、何得多學、炬云、文字性異、法性體空、迷則句句瘡疣、悟則文文般若、若無取捨何害圓伊、師拈云、慧山和尙也是取捨之心未忘、崇福則不然、

或有人問、不掛元字脚、何得多學、只向他道、句句眞如、文文般若、敎他別有生涯。
半夏上堂、九夏過半、無事不辨、開單展鉢、喫粥喫飯、收得北番、東西自安、且道、以何爲驗、良久云、後五日看。

六月十五日、兵火後上堂、馬祖喝下聾百丈、黃檗棒頭活臨濟、以德服人者王、以力假人者覇、崇福者裏不屬這兩邊、何故、良久云、鵰弓已掛狼煙息、萬里歌謠賀太平。

七月旦上堂、凉飇乍起葉初墮、時節因緣不相饒、若是當陽薦得去、何妨分外任逍遙、或有人、出來道、時節因緣卽且置、如何是佛法大意、只向他道、覓火和煙得、擔泉帶月歸。

解夏小參、二千年前風淸月白、二千年後月白風淸、幸自無瘡、莫傷之也、若論結制解制、隨邪逐惡、禁足護生無繩自縛、所以崇福這裏、四月十五也與麼、不敢錯誤諸人一絲毫許、七月十五也與麼、亦不動諸人一絲毫許、諸人若向佛祖未生以前會得、又何妨晝兜率夜閻浮、脚頭到處是生涯、其如未然、迦葉門前有刹竿。

復舉、僧問雲門、樹凋葉落時如何、門云、體露金風、師頌云、體露金風處處同、時人空自走西東、可憐只見蘆花色、不見白蘋對蓼紅。

八月旦上堂、僧問、參須實參、悟須實悟、如何是實參、師云、參可始得、僧云、如何是實悟、師云、悟可始得、僧云、轉凡夫作賢聖、抑賢聖作凡夫、則不無和尙、師云、更有一着在、僧云、記得、仰山謂香嚴云、如來禪許師兄會、祖師禪未夢見在、此意如何、師云、言中有響、僧云、如何是如來禪、師云、鷄足山前風悄然、僧云、如何是祖師禪、師云、少室峰下雪猶寒、僧云、如何是和尙禪、師云、還

覺腦門重麼、僧禮拜。

師乃云、蟬鳴高樹、蛩吟草底、槿花凝煙、白露垂珠、從來無法商量、只要現成受用、大衆還委悉麼、良久云、種田搏飯喫、伸脚牀上睡。

浴佛上堂、僧問、佛未出世時、爲甚靈山有密旨、師云、天是天、地是地、僧云、佛已出世後、爲甚杳無消息、師云、指天指地、狼藉不少、僧云、出世不出世則且置、即今佛在甚處、師云、高着眼看、僧云、爭奈金屑雖貴、落眼成翳、師云、莫將眼看、僧云、只如雲門道、一棒打殺與狗子喫、是何心行、師云、家富小兒嬌、僧云、今朝大家出手灌沐金軀、爲復是報恩、爲復是酬怨、師云、不是怨家不聚頭、僧便禮拜。

師乃云、降下閻浮、誕生王宮、九龍吐水、灌沐金軀、至今千古、雨洗風磨、金容妙相增光輝、照天鑑地有何極、命根落在崇福手、一杓惡水驀頭澆、何故、齊之以禮。

結夏小參、南贍部洲、大日本國筑州太宰府裏橫岳山中、有一座清淨伽藍、大包刹海、細入隣虛、若聖若凡、有情無情盡在裏許、結制安居九十日內、要行便行、須彌那畔大洋海底一時走徧、二六時中、要坐即坐、東弗于提、西瞿耶尼、盡十方世界、直下坐斷、正恁麼時、汝等諸人、向甚麼處出氣、雖然如是、有時把定、有時放行、卷舒在我、殺活臨時、今夜教儞一一出氣去也、拈拄杖卓兩下云、會麼、頂門眼、通天竅。

復擧、東京法雲杲和尚示衆云、老僧熙寧三年文帳、在鳳翔府供申、當年崩了華山四十里、壓倒八十村人家、汝輩後生茄子瓠子、幾時知得、師拈云、高山流水只貴知音、可惜當時一衆、無

人賞音、若是明上座、才聞恁麼道、拍手呵呵大笑、何故、詩向會人吟。

次日上堂、十五日以前、天高東南、十五日以後、地傾西北、正當十五日、天是天、地是地、僧是僧、俗是俗、說甚三月安居九旬禁足、向這裏畢竟如何通箇消息、擊拂子云、薰風自南來、微涼生殿閣。

上堂、擧、僧問智門、蓮華未出水時如何、門云、蓮華、僧云、出水後如何、門云、荷葉、師拈云、崇福卽不然、蓮花未出水時如何、水是水、出水後如何、蓮華是蓮華、崇福恁麼道、還知落處麼、無風荷葉動、決定有魚行。

七月旦上堂、僧問、擧一明三、尋常茶飯、只如聲前一句、如何分緇素、師云、一葉落天下秋、僧云、恁麼則不勞懸石鏡、天曉自分明、師云、只道得一半、僧云、記得、長生問靈雲、混沌未分時如何、雲云、露柱懷胎、意旨如何、師云、無孔鐵鎚當面擲、僧云、生云、分後如何、雲云、如片雲點太清、又如何、師云、一賽兩彩、僧云、生云、太清還受點也無、雲不答、有何道理、師云、毒龍行處草不生、僧云、生云、與麼則含生不來、雲又不答、如何委悉、師云、坐斷要津、僧云、生云、直得純清絕點時如何、雲云、尙是眞常流注、意在何處、師云、痛處下針錐、僧云、生云、如何是眞常流注、雲云、似鏡長明、如何理會、師云、山河不在鏡中觀、僧云、生云、向上還有事也無、雲云、有、生云、如何是向上事、雲云、打破鏡來、與儞相見、還端的也無、師云、破鏡不重照、僧云、古人誵訛處、和尙已討露、和尙誵訛處、未審何人點檢、師云、衆眼難瞞、僧云、恁麼則此話大行天下去、師云、一任擧似諸方、僧云、作家宗師、天然有在、便禮拜。

師乃云、葉落知秋、動絃別曲、未當衲僧本分事、且道、如何是衲僧本分事、崇福直得無開口處、雖然如是、不見雲中鴈、爭知沙塞寒。

解夏小參、暑退涼生、樹彫葉落、全彰古佛家風、成現衲僧巴鼻、蹉過者千千萬萬、錯會者萬萬千千、若是未言先領、未擧先知、方始有少分相應、猶未是全機作略、有般漢以十二時作一日、以九十日作一期、坐守安居、大似緣木求魚、刻舟尋劍、崇福今夜忍俊不禁、別通一條活路子、良久云、住住、若教頻下涙、滄海也須乾。

復擧、雲門示衆云、乾坤之內、宇宙之間、有一寶、秘在形山、師拈云、此寶非但在形山、崇福今夜盡情拈出、普施大衆、九夏賞勞、驀拈拄杖擲下云、大家平分。

次日上堂、烏兎不停、時臨自恣、九十日內、不曾說着底一句子、分明與諸人說破去也、卓拄杖云、勸君盡此一盃酒、西出陽關無故人。

中秋上堂、僧問、天上月圓、人間月半、是人知有、未審中間樹子屬何人、師云、從來有主人在、僧云、恁麼則天香桂子落紛紛、師云、見者還稀、僧云、馬祖翫月次、問西堂云、正與麼時如何、堂云、正好供養、意旨如何、師云、早隨光影、僧云、祖問百丈、丈曰、正好修行、又如何、師云、簷前捧月、僧云、祖又問南泉、泉拂袖便行、意在那裏、師云、因行掉臂、僧云、祖曰、經歸藏禪歸海、只有普願獨超物外、畢竟如何、師云、年老心孤、僧云、當時若見馬祖云正與麼時如何、和尚如何祇對、師云、便與一掌、僧禮拜。

師乃云、南泉驟步便行、鼓山拂袖歸衆、寒山子馬駒兒總未出光影裏、且道、畢竟月、聻、咦、泊乎

錯下名言。

上堂、崇福門下百事隨宜、遇飯喫飯、遇茶喫茶、寒卽向火、困卽打眠、左之右之、無可不可、德山臨濟不出常流、却憶寒山子、無言笑點頭。

達磨忌上堂、少室山下、雪寒水苦、熊耳峯前、月冷風高、因憶普通年遠事、鐵作心肝也斷腸。

虛堂忌日拈香、世界未分、生佛未具、早有這箇、熏天炙地、從上佛祖、得這些子、競頭出來、貴買賤賣、大驚小怪、崇福一年一度、每臨諱日、特地拈出、熏這老和尚鼻孔、鈍置一上、何故、行拳須有喫拳時。

冬至小參、崇福山前、戒岸寺後、有一物、杲杲明如日、漫漫黑似漆、上拄天下拄地、不離目前、全超象外、不逐陰陽消長、豈同寒暑變遷、所以道、萬象之中獨露身、唯人自肯乃方親、諸禪德朝朝暮暮、來來往往、幾般看見、幾廻撞着、滿眼滿耳、無處廻避、因甚不知落處、良久云、吾常於此切。

復擧、慈明和尚、冬日牓示僧堂前、作此相 ○○○ ☰ ☱ ☰ ⚊ 八埤拙、若人識得、不離四威儀中、首座一見乃謂衆云、和尚今日放參、師拈云、天神一見歸天、地神一見歸地、者箇則且置、首座一見云和尚今晚放參、又作麼生、良久、一百單五近淸明、淸明定在寒食後。

次日上堂、晷運推移、日南長至、石笋抽條、鐵樹生花、老胡不合過流沙。

上堂、擧、五臺山下有一婆子接待、凡有僧問臺山路甚麼去、婆云、驀直去、僧才去、婆云、好箇師僧又與麼去、如是旣久、游僧傳到趙州、和尚聞得乃云、待老僧爲汝去勘破、州往便問臺山路

向甚麼處去、婆云、驀直去、州才行、又云、好箇師僧又與麼去、州回陞座云、婆子已爲諸人勘破了也、師頌云、發動煙塵箇老婆、趙州一語定干戈、從茲四海淸如鏡、贏得將軍奏凱歌。

上堂、僧問、雲門有三句、還許咨參也無、師云、大海不讓細流、僧云、如何是函蓋乾坤句、師云、天高蓋不盡、僧云、如何是隨波逐浪句、師云、十字街頭破草鞋、僧云、如何是截斷衆流句、師云、水中江石卵、僧云、恩大都無語、懷抱自分明、師云、分明記取、僧便禮拜。

師乃云、嶺上多白雲、澗下足流水、寒月照虛庭、霜風動林底、一切成現、更無缺少、崇福恁麼道、開口不在舌頭上、因甚如是、虎體元斑。

上堂、僧問、三通鼓罷、四衆臨筵、學人上來、請師提唱、師云、秋雲秋水共悠悠、僧云、恁麼則群生霑恩去、師云、何人不恁麼、僧云、趙州訪一庵主云、有麼有麼、主竪起拳頭、州云、水淺不是泊舟處、意旨如何、師云、鵝王擇乳、元非鴨類、僧云、州又訪一庵主云、有麼有麼、主竪起拳頭、州便禮拜讚歎、如何委悉、師云、一手擡一手搦、僧云、問答已一般、爲甚肯一人不肯一人、師云、離却兩頭會取、僧云、若有人問、有麼有麼、未審和尚如何祇對、師云、劈脊便打、僧便禮拜。

師乃擧、僧問百丈、如何是奇特事、丈云、獨坐大雄峯、百丈和尚善應來機、是則是矣、崇福卽不然、若有人問如何是奇特事、只向他道、主山高案山低。

上堂、鐘作鐘鳴、鼓作鼓響、十分現成處、還我衲僧家、雖然如是、因甚鉢盂口向天、若也知得分曉、一任長連牀上喫粥喫飯。

東福開山聖一和尙忌日陞座、掩關於摩竭、藏身露影、杜口於毗耶、掩耳偸鈴、自爾西天四七、

東土二三、承虚接響、一人傳一人、濫觴不止、至於滔天、因玆我日本國洛陽東山東福開山聖一和尚、事不獲已、出來播揚宗乘四十餘年、正按傍提、横該竪抹、千變萬化、七縱八横、頭頭合轍、應用無虧、度盡一切有情無情、驀忽時節到來翻身而去、電影難追、佛祖不知、雖然如是、未是東福老漢、眞實行履處、且道、如何是眞實行履處、良久云、日面佛月面佛。

復擧、巖頭問德山、從上諸聖向甚麼處去、山云、作麼作麼、覿面當機疾、當機覿面提、頭便禮拜、燒磚打着連底凍、只如東福開山老師、遷化之後四十九日、畢竟向甚處去、擊拂子云、紅輪決定沈西去、白雲依舊覆青山。

上堂、衲僧用處、如水行地、東行西流、無可不可、七穿八穴、無是不是、諸天尋覓無路、魔外潛覷不見、何故如是、達磨不識、六祖不會。

三月旦上堂、僧問、三月初一、花紅柳綠、現成公案、如何商確、師云、春日遲遲春光美、僧云、靈雲曾道、自從一見桃花後、直至而今更不疑、那裏是他不疑處、師云、桃花依舊笑春風、僧云、已是不疑、玄沙因甚道、敢保老兄未徹在、師云、一家有事百家忙、僧便禮拜。

師乃云、一莖草上現瓊樓玉殿、一微塵裏轉大法輪、法法皆宗、頭頭是令、一切處成就、一切處建立、只憑者箇力、且道、者箇是甚麼、拈拄杖卓一下、噁、幾乎觸諱。

解夏小參、結則盡大地一時結、針劄不入、水瀉不着、解則偏法界一時解、任他風吹又日炙、翠巖眉毛在不在、雲門關字常現前、蠟人氷、鵝護雪、總是拈放一邊、黑色拄杖又摩挲、鉢囊鞋袋重挑起、一家不管一家事、各自守疆保界、雖然如是、九十日中、且道、明甚麼邊事、前三三後三

三。

復擧洞山和尚示衆云、兄弟家初秋夏末公案、拈云、洞山老漢豁開一條大路、只要盡大地人共行、雖然如是、且道、路頭在什麼處、看脚下。

上堂、大野凉風颯颯、長天踈雨濛濛、祖師心印、衲僧巴鼻、一時漏泄、自古自今無人遮藏、崇福雖是不肖、試爲遮藏看、以袖掩拂子云、噫、千眼大悲覷不見、三賢十聖那能知。

佛殿釋迦安座上堂、一會靈山儼然未散、凌跨今古、逼塞虛空、盡大地人、仰望不及、森羅萬象總在下風、而今面目現在、坐鎭寰中、仰冀法輪常轉、應用無窮。

上堂、俱胝竪起指頭、魯祖見人面壁、冷地看來、早是不着便、所以崇福遇縁觸境、隨分知羞。

冬至小參、天平地平、日上月下、陰剝陽主、否極泰來、自然有時有節、無端從上沒般次漢、羅列陳年菓卓、提起爛臭布裩、一錯百錯、錯到而今、未免一年一度掛人唇齒、崇福今夜忍俊不禁、別開一條活路子、敎汝諸人管取太平無象、拈拄杖卓一下云、直得崇福山頂枯木開花、太宰府裏和氣藹然、君子小人各得其宜、正恁麼時、親切一句作麼生、良久云、一氣不言含有象、萬靈何處謝無私。

復擧潙山問仰山、仲冬嚴寒公案、師拈云、潙仰父子互相熱謾、爭奈藏身露影、且道、那裏是他露影處、具眼者辨取。

次日上堂、光陰似箭、日月如流、事從眼前過、不覺老臨頭、不干寒暑、不涉世縁、如何通信、一冬二冬、叉手當胸。

上堂、僧問、欲識佛性義、當觀時節因緣、未審是何時節、師云、一等是恁麼時節、進云、如何是佛性義、師云、頭頭上明、物物上現、進云、趙州云、有佛處不得住、無佛處急走過、三千里外逢人莫錯擧、此意如何、師云、早是錯擧了也、進云、僧云、恁麼則不去也、又如何、師云、也是伶利漢、進云、州云、摘楊花摘楊花、如何委悉、師云、蘇魯蘇魯、進云、恁麼則昔日趙州、今日和尚、師云、還知東壁掛胡蘆麼、僧無語、便禮拜。

師乃云、山是山、水是水、草本天下同、山不是山、水不是水、指桑罵柳、也是尋常、也是尋常、只如一塵未起、一漚未發以前消息、向甚麼處得來、擊拂子一下云、諸人若會得、晝錦還鄉、其如未然、鳳林叱之。

謝維那・知客・典座上堂、鳴槌展鉢、擊鼓上堂、有照有用、有賓有主、有漏笊籬、無漏木杓、頭頭合轍、應用無虧、雖然如是、柄欛在我手裏、驀拈拄杖卓一下云、要且大家着力。

臘八上堂、全提正令、佛祖乞命、直饒釋迦老子、端坐雪山六載、逗到臘月八夜、明星現時、忽然悟去、猶未放過在、何故、擊拂子云、我王庫內無如是刀。

歲節小參、年窮歲盡、牛頭沒馬頭回、臘盡春來、驢覷井、井覷驢、文殊維摩撒手歸去、拾得寒山撫掌大笑、不是新年頭佛法、亦非舊歲因緣、到這裏銅頭鐵額漢、也無插觜之處、畢竟如何通信、拍禪牀云、東村王老夜燒錢。

歲旦上堂、昨夜送舊年、今朝迎新歲、現量法門、活祖師意、若也橫身擔荷得去、自然春風和氣、不然、擊拂子云、又是從頭起。

元宵因雪上堂、開瑞三五節屆上元、在處燒燈、以享上帝、崇福隨例也點一燈、所以道、一燈點出百千燈、燈燈相續、忽有人出來道、燈燈相續卽且置、雪覆千山、因甚麼孤峯不白、只向他道、我見燈明佛、本光瑞如此。

三月半上堂、僧問、祖令當行、十方坐斷、正恁麼時、請師祝　聖、師云、雲淨日月正、僧云、雪峯示衆云、盡大地是解脫門、把手拽不入、此意如何、師云、在甚麼處、僧云、爭奈在門外、師云、喚甚麼作門、僧云、爲甚不肯入、師云、爾獨不得入、僧無語、師云、果然果然、又有僧問、臨濟一日示衆云、有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境兩俱奪、有時人境俱不奪、是何章句、師云、離却四句會取、僧云、如何是奪人不奪境、師云、目前無闍梨、僧云、如何是奪境不奪人、師云、仰面不見天、低頭不見地、僧云、如何是人境兩俱奪、師云、花散鳥不來、僧云、如何是人境俱不奪、師云、天是天、人是人、僧云、畢竟如何、師云、天高蓋不盡、僧云、猿抱子歸青嶂後、鳥啣花落碧巖前、者箇是夾山境、如何是崇福境、師云、雲山蒼蒼、澗水潺潺、僧云、如何是境中人、師云、出頭天外看、僧禮拜。

乃云、日暖風和、春色向晚、處處桃花開似錦、靈雲見處今猶在、不知諸人疑不疑、徹不徹、相識滿天下、知心能幾人。

四月旦上堂、僧問、猿抱子歸青嶂後、鳥啣花落碧巖前、者箇是夾山境、如何是橫嶽境、師云、雲在嶺頭閑不徹、水流澗下太忙生、僧云、如何是境中人、師云、屋頭青山青更青、僧云、未審人與境相去多少、師云、高着眼看、僧云、只如趙州曾到曾不到、一等敎他喫茶去、意在甚處、師云、喫

茶者方知、僧云、學人卽今到此間、和尙有何施設、師云、齋時喫飯去、僧云、成人者少、敗人者多、師云、知恩方解報恩、僧便禮拜。

乃云、一言道盡與佛祖爲師、一言道不盡與人天爲師、且道、那一言、滿地殘紅春色去、潑天張綠夏初來、

端午上堂、五月五天中節、時淸道泰、門安戶靜、不要張天師李道士、呪土書符、何必更學善財採藥、文殊用藥、崇福門下、自然太平得路、何故如是、良久、皇天無親、惟德是輔。

中夏上堂、九夏過半、見成公案、諸人若會得、無事不辨、不妨長連牀上喫粥喫飯、其脫未然、更有那一半在。

解夏小參、金風拂拂、秋色澄澄、蛩吟幽砌、蟬鳴高樹、全彰靈山家風、潛通少林密旨、若是眼裏有珠、皮下有血、朝遊夕處、只領現成、左之右之、了無異解、一念萬年、萬年一念、日日是九夏、時時是三秋、更說甚克期取證、法制周圓、總是生風起草、正恁麼時、親切一句作麼生道、良久云、雕弓已掛狼煙息、萬里歌謠賀太平。

次日上堂、祖師意百草頭、衲僧眼拄杖頭、爭如崇福這裏、打開布袋結頭、東去也得、西去也得、不風流處也風流。

中秋上堂、見成公案、更無他說、八月十五、中秋令節、寒山子太饒舌、休饒舌、長安夜夜家家月。

重陽上堂、重陽只是九月九、若說佛法要妙、特地干戈、或賞黃花白醪、俗氣不除、何況茫茫涉嶮登高、何曾踏着自家活路、且道、如何是自家活路、莫是佛殿前僧堂後麼、良久云、不識。

上堂、我本無心有此希求、從天降下、從地湧出、風從虎雲從龍、因甚如此、卓拄杖云、物歸有主。

上堂、見成公案、逈絕商量、渾崙句子、未擧全彰、直得崇福無開口處、諸人合作麼生、噁、切忌妄通消息。

爲聖一和尚第三年陞座、威音那畔一着子、亘古亘今、輝天鑑地、若向這裏承當得去、堪報不報之恩、其如未然、更向第二義門、露箇消息去也、拈拄杖卓一下云、二千年前、於摩竭陀國、親行此令、又卓一下云、二千年後、於日本國中、全提此令、不移一絲毫許、崇福久默此要、不務速說、今當東福開山聖一和尚遷化之後、第三年忌辰、此臨嗣法小師龍華長老、令崇福擧揚宗乘、不敢囊藏被蓋、直得重重說破去、拈拄杖又卓一下云、正當恁麼時、聖一老師、在甚麼處、證明此事、靠拄杖云、紅日當門照、清風匝地寒。

復擧、神鼎諲和尚、因首山忌日上堂云、山僧自離先師來、有所願未滿、離先師較早、始終不相隨、今日更欲哭一聲、不知大衆許容否、若哭不異俗、若不哭者敬何在、且道、哭即是、不哭即是、衆無對、乃云、蒼天蒼天、師拈云、神鼎和尚、可謂是知恩方解報恩、衆無對、蒼天之中更加寃苦、今日龍華長老、於先師忌日、設大齋會、作大佛事、報恩已畢、且道、與古人是同是別、良久云、九九元來八十一。

三月半上堂、僧問、摩尼珠人不識、如來藏裏親收得、如來藏則不問、如何是摩尼珠、師云、照天照地光熘熘、僧云、學人只索一顆珠、和尚傾出一栲栳、師云、一肩擔取去、僧云、只如牛頭未見四祖時、百鳥爲甚啣花獻、師云、彩奔齯家、僧云、見後爲甚不啣花獻、師云、落花不上枝、僧云、見

與未見則且置、牛頭即今在甚麼處、師云、當面薦取、僧云、不因楊德意、爭識馬相如、師云、更須子細始得、僧便禮拜。

師乃云、春色向晚、綠暗紅稀、滿地落花風掃盡、黃鶯啼在綠楊陰、衲僧門下不用切切。

結夏小參、山青水綠、花笑鳥啼、一一覿體全眞、箇箇當陽漏泄、所以崇福尋常、不欲向聲前句後、鼓弄人家男女、何況三月安居、九旬禁足、不異網底遊魚、有什麼快活處、當頭坐斷別立生涯、也是生風起草、總不與麼、未出常情、且道、畢竟如何即是、擊拂子云、衝開碧落松千尺、截斷紅塵水一溪。

復擧、僧問睦州、一言道盡時如何、州云、老僧在汝鉢囊裏、師拈云、睦州老兒被這僧一問、直得露出心肝、崇福則不然、忽有人問一言道盡時如何、低低地向他道、且緩緩。

次日上堂、拈拄杖卓一下云、諸佛於此轉大法輪、又卓一下云、諸佛於此結制安居、克期取證、且道、取證什麼法、又卓一下云、莫是這箇法麼、良久云、不是不是。

結夏小參、僧問、烏兎如馳、聖制已臨、應節一句、願聽擧揚、師云、薰風自南來、殿閣生微涼、僧云、如何是圓覺伽藍、師云、青山流水、僧云、如何是平等性智、師云、鵲噪鴉鳴、僧云、畢竟如何安居、師云、頭上漫漫、脚下漫漫、僧便禮拜。

師乃云、世界未分、形名未兆、誰是釋迦、誰是彌勒、如何安居、如何禁足、一向恁麼去、土曠人稀、相逢者少、世界纔分、形名已兆、釋迦自釋迦、彌勒自彌勒、青山流水、明月白雲、頂門上、脚跟底、總是圓覺伽藍、無非平等性智、與麼告報、未出常情、向上全提一句、如何委悉、卓拄杖一下、千

峯勢到嶽邊止、萬派聲歸海上消。

學、僧問、潙山、如何是道、潙云、無心是道、僧云、學人不會、潙云、會取不會底、僧云、如何是不會底、潙云、只是儞不是別人、師拈云、潙山恁麼老婆心切、爭奈者僧不肯承當、今夜還有承當得底麽、崇福猶有說在、何故、無心猶隔一重關。

次日上堂、僧問、一峯雲片片、雙澗水潺潺、莫是二千年前消息麽、師云、認着依前還不是、僧云、衲僧家尋常氣宇如王、因甚今朝坐在者裏、無繩自縛、師云、覓火和煙得、僧云、與麽則龍得水時添意氣、虎逢山處長威獰、師云、靈利漢、僧云、記得、古者道、護生須是殺、殺盡始安居、會得箇中意、鐵船水上浮、還端的也無、師云、恁麽人方知恁麽事、僧云、如何是護生須是殺、師云、上無佛祖下絕己躬、僧云、如何是殺盡始安居、師云、外不見有一物、僧云、如何是箇中意、師云、佛祖不知、僧云、鐵船水上浮、又如何、師云、輕如鴻毛重如山、僧云、者箇則且置、和尙莫別有結制底一句麽、師云、西天令嚴、僧禮拜、又僧問、四月江天雨霽晴、青山萬朶上雙眉、衲僧眼裏重添屑、九旬禁足事如何、師云、處處逢原、僧云、只如總大千爲一伽藍、促古今爲一期限、驅四聖六凡入此網子、還有漏網底麽、師云、無漏網底、僧云、西天以蠟人爲驗則不問、東土以鐵彈爲驗意旨如何、師云、團圝無縫罅、僧云、蠟人鐵彈相去多少、師云、西天東土路迢迢、僧便禮拜。師乃云、衲僧家三月安居、九旬禁足、如虎靠山、似龍得水、因甚如是、擊拂子云、水自竹邊流出冷、風從花裏過來香。

謝書記秉拂上堂、僧問、諸佛行不到處如何說、師云、一步是一步、僧云、行說俱到是何人分上

事、師云、出頭天外看、僧云、記得、乾峯示衆云、舉一不得舉二、放過一着、落在第二、意旨如何、師云、松本直棘本曲、僧云、雲門出衆云、昨日有人、從天台來、又行南嶽去、如何委悉、師云、知音知後更誰知、僧云、峯云、典座來日不得普請、畢竟如何、師云、有問有答、僧云、恁麼則碑文刊白字、當道種青松、師云、好箇一句、又有僧問、時節因緣則不問、如何是向上宗乘事、師云、須彌山、僧云、恁麼則佛祖退身有分、師云、非但佛祖、僧云、記得、龐居士問馬祖、不昧本來人、請師高着眼、祖直上覷、此意如何、師云、目前分明、僧云、士云、一種沒絃琴、唯師彈得妙、祖直下覷、又如何、師云、讃歎有分、僧云、士禮拜、祖便歸方丈、意在何處、師云、路入桃源深更深、僧云、者箇則且置、如何是和尚爲人處、師云、還覺腦門重麼、僧便禮拜。

師乃云、通天有路、不許夜行、大道無人、投明須到、且道、因甚如是、一字不着劃、八字無兩ノ。

解夏小參、橫岳一峯青、黯黯以長時現前、雙磵泉水聲、潺潺而日夜常流、諸人於此結制安居、朝遊夕處、足觀飽味、意不停玄、眼不掛戶、今則三期告滿、聖制周圓、箇箇頂天履地、人人鼻直眼橫、內無所修、外無所證、然則只知開田種粟、晝飡夜寢、且道、文殊三處度夏、又作麼生、良久云、有意氣時添意氣、不風流處却風流。

復舉、洞山萬里無寸草處去公案、師拈云、洞山恁麼指示人、不覺全身入草、石霜只要相見洞山、未免同在草裡、崇福則不然、初秋夏末、兄弟東去西去、各自途中善爲。

次日上堂、布袋頭結、大地絕行蹤、布袋頭開、徧界通活路、且道、結底是開底是、拈拄杖卓一下云、西風一陣來、落葉兩三片。

重陽上堂、拈起拄杖云、我若拈起、汝向未拈起時作道理、我若未拈起、汝向拈起處作主宰、大衆還會麼、卓拄杖云、採菊東籬下、悠然見南山。

開爐上堂、堆堆坐擁寒爐、片片頻燒落葉、誰管無賓主話、說甚三界唯心、但得些子火種在、自然暖氣勝於春。

上堂、要得現前、莫存順逆、祖師恁麼道、無途轍中翻成途轍、且道、順時逆時、寒時熱時、何時不現前、雖然如是、如何是現前底道理、良久云、開眼也着、合眼也着。

浴佛上堂、淨法界身、本無出沒、不知今日更浴那箇佛、諸人若也會得、親見釋迦老子、其脫未然、崇福下座、頂門上潑一杓惡水去也、諸人急着眼看。

結夏小參、岳峰峭峻難窮其頂、戒岸池深莫測其源、若也測得其源、四大海水只在一滴、若是窮得其頂、百億須彌只在一塵、所以道、一毫頭上識得根源、十世古今、始終不離當念、一念萬年、萬年一念、塵劫來事、只在而今、等是恁麼時節、何不便領取去、那堪更說三月安居九旬禁足、然雖如是、見煙便知火處會去、飯熟已多時、其脫未然、擊拂子云、西天令嚴。

復擧、臨濟侍德山次、山云、老僧今日困、濟云、寐語作什麼、山擬拈棒、濟掀倒禪牀、師拈云、若是崇福、當時纔聞道老僧今日困便云、請和尚喫茶、免見彼此干戈相待、何故、老不以筋力爲能。

次日上堂、三月安居、布袋頭結、坐斷要津、聖凡路絕、正當恁麼時、汝等諸人向甚麼處出氣、卓拄杖一下。

謝書記秉拂上堂、碧雲流水、明月淸風、不是禪、不是道、不是物、且道、是何章句、文彩已彰。

端午上堂、崇福從來、收得些子靈藥、囊藏被蓋久矣、今朝端午節、信手拈來布施大衆、驀拈拄杖示衆云、不唯點鐵成金、亦乃轉凡成聖、佛病祖病、身病意病、一切之病、悉皆除之、且道、是什麽藥、得恁麽奇特、良久云、神仙秘訣、父子不傳。

上堂、十五日以前、白雲不敢白、十五日以後、青山未爲青、正當十五日、白雲自白雲、青山自青山、崇福恁麽道、還有爲人處也無、良久云、仁者見之謂之仁、智者見之謂之智。

解夏小參、天是天、地是地、山是山、水是水、四月十五日也與麽、七月十五日也與麽、不移易一絲毫許、雖然如是、纔擬與麽便不與麽、窮卽變、變卽通、看看、拂子呑却乾坤大地、正恁麽時天不是天、地不是地、山不是山、水不是水、若向這裡轉得身吐得氣、不妨依舊天是天地是地、山是山水是水、拂子是拂子、所以道、佛法二千年、不移一絲毫許、這箇卽且置、只如解制自恣底一句、作麽生道、良久云、四海而今淸似鏡、行人莫與路爲讎。

復擧、僧問雲門大師、初秋夏末、東去西去、前程忽有人問、未審如何祇對、門云、大衆退後、僧云、某甲有什麽過、門云、還我九十日飯錢來、拈云、雲門大師放去收來、如風如電、雖然如是、且無大人相、若有人問崇福、向他道、前三三後三三、待擬如何、驀口便打。

次日上堂、爲宗師者、只貴以本分事接人、崇福一夏九旬之內、咬定牙關、不曾與兄弟說著本分事、何故如此、逢人且說三分話、未可全抛一片心。

上堂、擧、乳源和尙示衆云、西來的的大意、不易擧唱、時有僧出、源云、什麽時節出頭來、便打、師拈云、乳源老漢、覿面當機、可惜這僧不肯承當、且道、崇福者裡還有人承當得麽、良久云、有郎

有、只是無人知。

開爐上堂、崇福開爐諸方不同、寒時不向火、自然暖氣相洽、熱時不乘涼、自有淸風徹骨、何故如是、卓拄杖云、百丈道底。

冬至小參、群陰剝盡、屋頭山色靜悄悄、一陽復生、門外水聲鬧浩浩、鬧浩浩處靜悄悄、靜悄悄處鬧浩浩、有來由沒巴鼻、石筍抽條三兩枝、鐵樹花開數朶秀、要且不是佛法道理也、只是時節因緣、且道、是什麼時節、有甚麼因緣、喝一喝云、曹溪門下切忌俗談

復擧、僧問多福、如何是多福一叢竹、福云、一莖兩莖斜、三莖四莖曲、虛堂先師拈云、往往知多福不知竹、往往知竹不知多福、師拈云、大凡衲僧家、見煙處便知火、虛堂和尙因甚恁麼道、還委悉麼、鶴有九皐難翥翼、馬無千里謾追風。

次日上堂、一冬二冬、叉手當胸、二十一二十二、兩手摸鼻、諸人若也會得、恰如白衣拜相、慶快平生、其或未然、冬至到寒食一百單五。

崇福寺語錄上　終

太宰府萬年崇福禪寺語錄下

侍者　慈禪等編

臘月旦上堂、擧、金峯有僧參、峯云、吾有一則因緣、擧似儞、切忌錯會、僧作聽勢、峯云、早錯了也、僧拂袖便出、峯云、雪上更加霜、師拈云、高山流水、子期能聽之、是則是、且道、峰云雪上更加霜、又作麼生、無限清風來未休。

上堂、言而足、終日言而盡道、言而不足、終日言而盡物、且道、道與物、是一是二、良久云、一冬二冬、叉手當胸。

除夜小參、崇福山前、戒岸寺畔、有一片田地、自古自今、不曾變易、來來往往、千千萬萬、未曾踏着、若有人曾踏着得、脚跟下硬糾糾地、要行則三世諸佛、把手共行、要住則歷代祖師、眉毛厮結、森羅萬象、總在裏許、清風浩浩、明月凜凜、逗到臘月三十日、也只是恁麼、臘盡春囘、依舊如前、且道、是什麼田地、卓拄杖云、契劵分明。

復擧、僧問谷隱慈照禪師、如何是道、照云、臘月三十日、師拈云、古人恁麼道、如蟲禦木偶爾成文、忽有人問崇福如何是道、卽向他道、角奏舊年曲、花開新歲枝。

元宵上堂、風蕭蕭、雪漫漫、古佛心只而今、且道、以何爲驗、良久云、過去燈明佛、本光瑞如此。

佛涅槃上堂、僧問、雨洗淡紅桃蕚嫩、風動淺碧柳絲輕、如何是瞿曇面目、師云、慈顏已露、僧云、

奈何露柱横點頭、師云、將謂、無人證明、僧云、記得、世尊臨入涅槃、文殊請佛再轉法輪、世尊咄云、文殊、吾四十九年住世、未曾說一字、汝請吾再轉法輪、是吾曾轉法輪乎、此意如何、師云、平生肝膽向人傾、僧云、畢竟轉法輪不轉法輪、師云、離却兩頭看、僧禮拜。

師乃云、百花競發、萬物敷榮、瞿曇示滅、迦葉攢眉、引得波旬失笑、一片涅槃身、頭頭都漏泄、至今千古難遮掩、狼藉年年二月春。

三月旦上堂、春色向晩、落花滿地、靈山一會、儼然未散、拈花微笑、萬古現成、更有何人眼如流星、喝一喝云、大家在這裏。

三月半上堂、春風浩浩、春雨微微、水滿溪澗、風掃落花、好箇衲僧巴鼻、沒巴鼻有來由、貶得眼來三千里。

擧、僧問雲門、如何是清淨法身、門云、山花開似錦、澗水湛如藍、師拈云、韶陽老人恁麼道、是卽是矣、諸人恁麼會、卽未可在、且道、利害在什麼處、具眼者試辨看。

浴佛上堂、聲前一路、佛未出世時、早是漏逗、末後一機、佛出世後、處處成現、直饒恁麼會得去、要見釋迦老子、太遠在、何故、豈不見道、天上天下唯我獨尊。

上堂、僧問、一機一境、盡落今時、不涉化門、如何通信、師云、南地竹、北地木、僧云、露柱暗中横點頭、聻、師云、更有知音在、僧云、只如馬祖陞堂、百丈捲席、意在何處、師云、燒塼打着連底凍、僧云、祖便下座、歸方丈、又如何、師云、他家自有通霄路、僧云、恁麼則鯨呑海水盡、露出珊瑚枝、師云、更進一步看、僧云、稛載而往、垂橐而歸、便禮拜。

師乃云、渾崙句子、現成公案、從上佛祖、提掇不起、天下衲僧、名狀不出、纔涉思惟、白雲萬里、崇福今朝快便難逢、分明說破去、山前麥熟也未。

結夏小參、徧法界卽圓覺伽藍、何處不安居、盡大地是衲僧自己、阿誰不平等、況是鳥啼山林、顯揚世尊密語、水流磵下、潛通古佛心宗、頭頭合轍、處處逢原、恁麼會得、劍樹刀山任意遊戲、鑊湯爐炭、要入便入、如是護生、如是禁足、方始爲沙門行履處、其如未然、長連牀上有粥有飯。

復擧、僧問雲門大師、如何是直截處、門云、主山後、僧云、謝師指示、門云、合取皮袋、師拈云、雲門大師是卽是、崇福卽不然、忽有人問如何是直截一路、便云、法堂前、待他道謝師指示、只向他道、禮拜了退。

次日上堂、擧、五祖云、今日結夏、無可供養大衆、作一家宴、管待諸人、遂擧手云、羅囉招、邏囉遙、邏囉送、莫怪空疎、伏惟珍重、師拈云、五祖老人好箇家宴、只是節拍全無、崇福今日結夏、也是與大衆作箇家宴、德山歌、雲門曲、氈拍板、無孔笛、一時吹唱鬧熱叢林、教諸禪德拔貧作富、拈拄杖卓一下云、一曲兩曲無人會、雨過青山溪水深。

上堂、五月初一、不擧舊時話頭、只據現成公案、與諸人相見、驀拈拄杖卓一下云、山前麥熟也未。

端午上堂、崇福尋常、不說禪不說道、麁食淡飯、隨分過時、今朝五月五天中節、却請拄杖子通箇消息、拈拄杖卓一下云、天行已過、使者須知。

五月半上堂、人人自有一片田地、四至界畔、曉然明白、諸人若也一踏踏著、行住坐臥、常在其

中、左之右之、無是不是、飽食安眠未爲分外、雖然如是、且道、其中事又作麼生、擊拂子云、薰風自南來、微涼生殿閣。

中夏上堂、擧、梁山因眞園頭問、家賊難防時如何、山云、識破不爲冤、眞云、識破後如何、山云、貶向無生國裏、眞云、莫是他安身立命處、山云、死水不藏龍、眞云、如何是活水龍、山云、興波不作浪、眞云、忽然傾湫倒嶽時如何、山下座、扭住云、不得濕却老僧袈裟角、若有人問崇福家賊難防時如何、只向他道、和贓敗闕、敗闕後如何、藏身無路。

七月旦上堂、暑退涼生、樹凋葉落、時節因緣不相慢、林下衲僧機用活、崇福門庭從此昌盛、且道、以何爲驗、擊拂子云、秋至鴈含蘆。

解夏小參、僧問、九夏賞勞、請師言薦、師云、淸風動徧野、塞鴈鳴長天、僧云、便恁麼去時如何、師云、更須子細、僧云、臨濟有三句、如何是第一句、師云、黃葉落虛庭、僧云、如何是第二句、師云、崑崙嚼生鐵、僧云、如何是第三句、師云、無孔鐵鎚當面擲、僧云、三句分明蒙指示、向上宗乘又如何、師云、天高蓋不盡、僧便禮拜、又有僧問、聖制已圓、秋風滿面、正與麼時、願聽提唱、師云、秋林葉落、秋月當戶、僧云、恁麼則有意氣時添意氣、不風流處又風流、師云、更有奇特在、僧云、記得、翠岩示衆云、一夏爲兄弟東語西話、看翠岩眉毛在麼、意在何處、師云、爛泥裏有刺、僧云、保福云、作賊人心虛、如何委悉、師云、賊知賊、僧云、長慶云、生也、又如何、師云、兩重公案、僧云、雲門云、關、畢竟如何、師云、突出難辨、僧云、只如三古德扶起翠岩門風、還有優劣也無、師云、同途不同轍、僧云、當時若見翠岩道看眉毛在麼、未審和尙如何祇對、師云、覿面相瞞、僧云、學人今夜小

出大遇、便禮拜。

師乃云、九旬制內、崇福一衆、眼不掛戶、意不停玄、水邊林下、忘懷絕照、石上松根、嘯月眠雲、今則法歲周圓、三期告滿、要行便行、要坐則坐、不離當處、逍遙物外、拄杖頭邊起淸風、草鞋跟底乾坤闊、說甚萬里無寸草、彩奔飜家、堪笑出門是草、隨婁搜漢、秤粟開倉、晝飡夜寢、又是靈龜拽尾、崇福門下總不與麼、畢竟如何行履、卓拄杖一下、大鵬一擧九萬里。

擧、雲門問僧、何處來、僧云、岳山來、門云、吾不曾與人葛藤、乃云來、僧近前、門云、去、師拈云、雲門大師敎人近前退後、早是葛藤了也、崇福卽不然、問僧、何處來、待僧云岳山來、劈脊便打、何故、吾不曾與人葛藤。

次日上堂、僧問、禁足安居、困魚止濼、尅期取證、鈍鳥栖蘆、今朝解制如何轉身、師云、偏界活路通、僧云、恁麼則青山綠水草鞋底、明月淸風拄杖頭、師云、前面逢着虎、莫道翁翁不道來、僧云、記得、洞山示衆云、兄弟初秋夏末、直須向萬里無寸草處去、意旨如何、師云、也是草裏漢、僧云、石霜云、何不道出門便草、又如何、師云、不知脚下草還生、僧云、山聞云、大唐國裏能有幾人、如何理會、師云、千里同風、僧云、只如萬里無寸草處、如何去、師云、急走過、僧云、前程忽有人問着和尙今夏事、未審如何祗對、師云、前三三後三三、僧便禮拜、又有僧問、袖頭打領腋下剜襟則不問、獨脫底句願聽擧揚、師云、脚頭脚底起淸風、僧云、尙涉廉纖在、師云、韓獹逐塊、僧云、只如自忝斯臨、法堂新開、還有新底佛法也無、師云、燈籠掛露柱、僧云、記得、臨濟示衆云、赤肉團上有一無位眞人、常在諸人面門出入、未證據者看看、此意如何、師云、覿面當機更無回互、僧云、

時有僧出問、如何是無位眞人、濟擒住云、道道、如何領略、師云、迅雷不及掩耳、僧云、僧擬議、濟托開云、無位眞人、是何乾屎橛、又如何、師云、曲不藏直、僧云、岩頭聞得不覺吐舌、是何心行、師云、知音知後更誰知、僧云、雪峯云、臨濟大似白拈賊、還識得臨濟也未、師云、早被雪峯覰破、僧云、畢竟如何是無位眞人、師云、高著眼看、僧云、與麼則粉骨碎身未足酬、師云、知恩方解報恩、僧便禮拜。

師乃云、暑退涼生、樹凋葉落、林下衲僧、全機獨脫、露柱燈籠、箇箇心空、狸奴白牯、一一眼活、雖然如是、崇福拄杖子、猶未點頭在、何故、楚鷄不是丹山鳳。

八月旦大風後上堂、顯大機發大用、入門便棒、入門便喝、恰如疾風卒雨傾湫倒嶽、雖然如是、冷地看來、費力不少、所以崇福順時保愛、坐致太平、且道、因甚麼如是、良久云、豈不見道、萬般施設不如常。

中秋上堂、靈山指月、曹溪話月、當頭未出光影、南泉拂袖歸去、猶落第二、長沙一踏踏倒、用得一半、且道、如何是那一半、以拂子打圓相云、團團離海嶠、漸漸出雲衢。

九月旦上堂、風颯颯雨濛濛、黃葉滿地、塞鴈橫空、不是佛法要妙、也只是時節因緣、且道、今日是什麼時節、有什麼因緣、大衆若也會得、不妨途中受用、其如不然、一任世諦流布。

開爐上堂、大地爲爐、須彌爲炭、崇福家風、未是寂寥、且去火邊坐、切忌更商量、喝一喝。

冬至小參、僧問、葭管飛灰、繡紋添線、不涉時節、請師提唱、師云、天高東南、地傾西北、僧云、潙山問仰山、仲冬嚴寒年年事、晷運推移事若何、仰山叉手進前而立、意旨如何、師云、亂呈懞袋、僧

云、潙云、情知汝答此話不得、又如何、師云、爛泥裏有刺、僧云、潙山又以此話問香嚴、嚴云、某偏答得此話、潙云、汝如何、嚴叉手進前而立、如何領略、師云、同坑無異土、僧云、潙云、幸遇寂子不會、畢竟如何、師云、眼觀東南、意在西北、僧云、和尚今夜徹底老婆、師云、更進一步看、僧便禮拜。

師乃云、群陰消盡、葭灰未飛、戢玄機於未兆以前、一氣潛通、律管先知、藏冥運於卽化之際、洞山撥退菓卓、皓老布裩不洗、潙仰父子、進前退後、總不出這裏、所以崇福只據現定、應時納祐、還他否極泰來、自然有時有節、何故如是、良久、皇天無親、惟德是輔。

擧、荷澤到思和尚處、思問云、何處來、澤云、曹溪、思云、曹溪意旨如何、澤振身而立、思云、猶帶瓦礫在、澤云、此間莫有黃金麼、思云、縱有向甚處著、師拈云、二老相見賓主歷然、雖然未得勦絕在、若是崇福、待他問此間莫有黃金麼、便與一拳、何故、黃金自有黃金價、終不和沙賣與人。

次日上堂、僧問、朔風拂地捲黃葉、門外千峯凜寒色、正與麼時、願聽擧揚、師云、冬日熙熙當門照、僧云、恁麼則岸柳未開眼、庭梅先發花、師云、劫外春風動、僧云、佛眼遠禪師、寒夜孤坐、撥爐見火一豆許、云、深深撥有些子、遂閱几上傳燈錄、到破竈墮因緣、忽然大悟、還端的也無、師云、如貧兒得寶、僧云、圓悟因以青林搬土話驗之、乃云、且喜遠兄便有活人之句、又如何、師云、知音知後更誰知、僧禮拜。

師乃云、天寒人寒、大家在者裏、便與麼去、都無縫罅、崇福今朝略通一線路去、管取普天和氣、擊拂子云、直得一陽來復、人人東過西、西過東、箇箇拜底拜、賀底賀、何故如是、一氣不言含有象、萬靈何處謝無私。

上堂、乾峯示衆、擧一不得擧二、放過一着落在第二、雲門出衆云、昨日有人從天台來、今日却往南嶽去、峯云、典座來日不得普請、師拈云、氈拍板無孔笛、狹路相逢音徹青霄、崇福也是擧一去也、今朝臘月初一日、諸人切忌道着、來日初二日。

除夜小參、只這一枝拂、眞椶櫚鐵作骨、自古至今、未嘗變易、年窮歲盡、也是鳥散散地、臘去春廻、依舊如前、然雖如是、拈起也天廻地轉、放下也風行草偃、不拈不放、應時納祐、坐致太平、且道、這一枝拂子、憑箇什麼得恁麼奇特、良久云、只許老胡知、不許老胡會。

復擧、僧問谷隱慈照禪師、如何是道、照云、臘月三十日、師拈云、好大衆、一片皓玉無瑕、切忌動著、何故、雕文喪德。

正旦上堂、大機圓應、大用無方、如天普蓋、似地普擎、風從虎雲從龍、且道、因甚麼如是、拈拄杖一下云、彩奔齪家。

上堂、古者道、法輪未轉、食輪先轉、崇福這裏、法輪常轉、食輪未轉、忽若兩輪共轉時如何、驀拈拄杖連卓兩下云、三世諸佛立地聽、森羅萬象齊鼓舞。

三月旦上堂、孟春猶寒、孟夏漸熱、諸人自合知時節、莫待山僧開口說黃鶯枝上分明說、且道、說箇什麼、喝一喝。

三月半上堂、桃花紅梨花白、靈雲悟處尙依然、玄沙未徹無人識、無人識、令吾特地憶南泉。

結夏小參、天際日上月下、檻前山青水綠、南斗七北斗八、牛頭沒馬頭回、幸自恬然無一事、二千年前大覺世尊、事不獲已起模畫樣、喚作圓覺伽藍平等性智、若聖若凡、情與無情總在裏

許、據菩薩乘修寂滅行、從茲致令後代兒孫、箇箇望梅林止渴、不見有一人獨脫底漢、崇福拂子、今夜忍俊不禁、出來一擊擊碎靈山多年窠窟、以拂子擊一擊云、一擊擊碎了也、又向甚麼處禁足護生、良久云、切忌停囚長智。

復舉、藥山和尚坐次、有僧來參、問云、和尚兀兀地、思量箇什麼、山云、思量不思量底、僧云、不思量底如何思量、山云、非思量、師拈云、藥山老漢一等是老婆心切、雖然如是、大衆還知不思量底麼、良久云、分明記取。

次日上堂、靈源不昧、舉萬法而全彰、妙用繁興、稱法界而齊起、行一步踏著瞿曇眼睛、舉一指築著達磨鼻孔、恁麼禁足、恁麼安居、貶眼便過一夏、其或未然、西天令嚴。

謝藏主秉拂並齋上堂、有一句子、百味具足、從上佛祖提持不到、一大藏教該載不及、今日快便難逢、崇福信手拈出供養諸人、驀拈拄杖擲下云、麁飡易飽、細嚼難飢。

解夏小參、橫岳峯頂、峭峻巍巍、千古萬古、到者還稀、霧擁雲屯、日炙風吹、歷代祖師、仰望不及、天下衲僧、著脚不得、今夏九十日內、八十餘員禪和、同此結制安居、各自尅期取證、風前月下、兩兩三三、林邊水際、任意遊戲、今則法歲周圓、且道、還有一箇半箇親到頂𩕳底麼、其或未然、擊拂子云、千峯勢到岳邊止、萬派聲歸海上消。

復舉、有僧到仰山、云、從甚麼處來、僧云、廬山來、山云、曾到五老峯麼、僧云、不曾到、山云、闍梨不曾遊山、雲門大師云、仰山此語、慈悲之故有落草之譚、師拈云、仰山恁麼道、當時大唐國裏能有幾人知、雲門著得此一語、殊不知落草之譚愈甚、具眼者辨取。

次日上堂、結是誰結、虛空釘橛、解是誰解、虛空剎烈、解結以前見得親、千里萬里一條鐵。

重九上堂、僧問、汾陽云、重陽九日菊花新、意旨如何、師云、現成公案、僧云、臨濟會下、兩堂首座、相見齊下喝時如何、師云、也有照、也有用、僧云、有僧問、這兩喝還有賓主也無、濟云、賓主歷然、又如何、師云、文彩已彰、僧云、人天衆前、蓋覆伊得麼也無、師云、無處蓋覆、僧云、爲甚無處蓋覆、師云、賓主歷然、僧便禮拜、又僧問、重陽九日風光別、處處樓臺醉倒人、不入這般保社、和尚如何施設、師云、天高萬象正、僧云、只如步步登高底人、還踏著向上一路也無、師云、蹉過也不知、僧云、記得、僧問古德、如何是祖師西來意、德云、東籬黃菊、意旨如何、師云、突出難辨、僧云、請師拈起一枝看、師云、未拈起時全機顯露、僧禮拜。

師乃云、黃花發舊叢、茱萸凝煙紫、塞雁鳴長天、蟋蟀吟草底、古佛心祖師意、一時漏泄、因甚如是、良久云、時節既至。

虛堂和尚忌、拈香、大宋淩霄峯頂收得、多年囊藏被蓋、日本崇福山中拈來、幾廻薰天炙地、斤兩無多、根苗有異、休說巴陵三轉語、只要偏界香風起。

十月半上堂、擧、明招謙和尚示衆云、這裏風頭稍硬、且歸煖處商量、衆隨後到、招云、纔到煖處便見瞌睡、便趂散、師拈云、明招老漢、和盤撥出夜明珠、可惜當時一衆眼裏無筋、隨人上下、大衆若也會得、一場富貴、其或未然、切忌商量。

冬至小參、六陰剝盡、戢群機於未兆、一陽來復、含萬象於不言、直得鐵樹開花、石筍抽條、君子小人、各得其宜、情與無情同展欣顏、太宰府裏崇福山頭、和氣藹然、雖然如是、仲冬嚴寒、晷運

推移、日南長至、皓老布裩、依然赫赤、又作麼生、陰陽不到處、分外好風光。
復擧、潙山問仰山、不問即今事、自古事如何、仰山叉手進前、潙云、猶是即今事、仰山叉手退後、潙云、我屈汝汝屈我、師拈云、仰山進前退後、步步踏着古今一路、還知潙山年老心孤麼、汝屈我我屈汝。
次日上堂、璿璣未動、全機獨脫、一氣不言、萬象歷然、一切見成、了無欠少、所以崇福、順時保愛、坐致太平、何故、擊拂子云、陽氣發時無硬地。
元宵上堂、僧問、昔日瞿曇以無所得、受燃燈之記、還端的也無、師云、承虛接響、僧云、西天迦葉初傳燈、如何是傳底燈、師云、輝天鑑地、僧云、迦葉已傳、龍潭爲甚吹滅、師云、只要大家暗中行、僧云、後來僧問香林、如何是室內一盞燈、林云、三人證龜成鼈、意旨如何、師云、千聞不如一見、僧云、忽有人問如何是室內一盞燈、師云、露柱放光、僧云、恁麼則處處發光輝去也、師云、果然果然、僧禮拜。
師乃云、春日晴、春光美、春蝶舞春風、春魚弄春水、黃鶯枝上語、錦雉溪畔啼、無限好風景、一時都漏泄、且道、是甚祥瑞、過去燈明佛、本光瑞如此。
二月旦上堂、僧問、向上全提、鐵壁銀山、放開線路、如何相看、師云、十分春色滿江湖、僧云、莫便是和尚爲人處麼、師云、儞耳朶無聽、僧云、世尊昔日、向百萬衆前拈起一枝花、意在那裏、師云、突出難辨、僧云、只有迦葉破顏微笑、未審見何道理、師云、赤眼撞着火柴頭、僧云、世尊乃云、吾有正法眼藏、付囑摩訶迦葉、如何是正法眼藏、師云、桃花紅李花白、僧云、畢竟有分付耶無分

付耶、師云、承虛接響、僧云、只如卽今日暖風和、百花競開、向甚麼見世尊、師云、當面蹉過、僧云、靈山一會、儼然未散、聻、師云、只見得一半、僧禮拜、又有僧問、談玄說妙、好肉剜瘡、豎拳下喝、平地波瀾、如何是直截一路、師云、天高群象正、僧云、爭奈尙涉迂曲、師云、韓獹逐塊、僧云、恁麼則家家門首透長安、師云、看脚下、僧云、記得、僧問雲門、如何是清淨法身、門云、花藥欄、意旨如何、師云、劈腹剜心、僧云、僧問、便恁麼去時如何、門云、金毛獅子、又作麼生、師云、未敢相許、僧云、今日問和尙、如何是清淨法身、師云、雲在嶺頭閑不徹、僧云、便恁麼去時如何、師云、邯鄲學唐步、僧云、者箇則且置、如何是法身向上事、師云、水流澗下太忙生、僧禮拜。

師乃云、教中道、十方佛土中、唯有一乘法、一花開天下春、一塵起大地收、大衆會麼、若也遲疑、拄杖子重說偈言去、卓拄杖一下云、但願春風齊着力、一時吹入我門來。

上堂、結夏後過半月、不問寒山子、不論水牯牛、諸人上來問訊、山僧合掌低頭、有照有用、有賓有主、且道、因甚如是、良久云、風從虎雲從龍。

端午上堂、今朝端午節、崇福不說禪、提起一枝拂子、自然應時、門安戶靜、且道、因甚如是、擊拂子云、東山下左邊底。

解夏小參、卽心卽佛、山青水綠、非心非佛、樹凋葉落、不是心不是佛、風颯颯水泠泠、等是恁麼時節、其奈土曠人稀、今則法歲周圓、三期告滿、崇福未免言薦賞勞去也、拈拄杖卓一下。

復擧、仰山問訊潙山、山云、一夏不上來、在下面何所務、公案、師拈云、潙仰父子、當時一夏不空過、崇福門下一衆、一夏都無所務、山僧亦無所作、且道、空過耶不空過耶、具眼者試辨看。

上堂、九旬安居今已滿、林下衲僧活路通、踏大地無寸土、横擔榔栗舞秋風、然雖如是、崇福猶有説在、拈拄杖一畫云、莫過於此。

中秋上堂、十五日以前、風清月白、十五日以後、月白風淸、正當十五日、此夜一輪滿、淸光何處無。

九月旦上堂、頭頭是、物物是、塞鴈過長空、野鹿叫林底、屋頭山門前水、一一非他物、箇箇歸自己、且道、如何是自己、良久云、吾無隱乎爾。

上堂、如來禪祖師意、嶺上白雲、澗下流水、百草頭邊、十字街裏、頭頭是物物是、何故如是、卓拄杖云、萬物非無主。

謝衆客上堂、趙州和尚云、宗師者須是以本分事接人始得、師云、諸人上來問訊、山僧低頭合掌、且道、還契得本分事也無、良久云、客是主人相師。

十月半上堂、崇福尋常、不說禪不說道、遇飯喫飯、遇茶喫茶、應時納祐、隨宜施設、諸天雨花無路、魔外潛覷無門、便恁麼去時如何、崑崙嚼生鐵。

冬至小參、僧問、陰盡陽生、碓觜開花不涉時節、願聽提唱、師云、雲淨日月正、僧云、松源有三轉語、還許學人咨參也無、師云、問將來、僧云、大力量人、因甚擡脚不起、師云、一步是一步、僧云、開口因甚不在舌頭上、師云、鴉鳴鵲噪、僧云、明眼人、因甚脚下紅絲線不斷、師云、貪程太疾、僧云、恁麼則昔日松源、今日和尚、師云、儞向甚處見松源、僧無語、師云、當面蹉過、僧禮拜、又有僧問、陰魔沮伏、陽氣發生、正與麼時、請師指示、師云、枯木生花、鐵樹抽枝、僧云、僧問巴陵、祖意敎意、

是同是別、陵云、鷄寒上樹、鴨寒下水、此意如何、師云、山青水綠、僧云、僧問、如何是吹毛劍、陵云、珊瑚枝枝撐著月、又作麼生、師云、寒光凜凜逼人寒、僧云、僧問、如何是提婆宗、陵云、銀椀裏盛雪、如何委悉、師云、明明歷歷、僧云、如何是祖意、師云、少室峰前雪未消、僧云、如何是敎意、師云、鷲峯山色靑更靑、僧云、是同是別、師云、向上着眼看、僧便禮拜。

師乃云、群陰剝盡、大地平沈、淸寥寥白的的、黃梅石女無處藏身、少室鐵牛安眠露地、一氣潛通、萬物敷榮、暖烘烘鬧浩浩、露柱燈籠、滿面光生、狸奴白牯、同展歡顏、直得崇福山中和氣熏春、佛法世法一時昌盛、以何爲驗、良久云、露。

擧、僧問趙州、如何是道、州云、墻外底、僧云、不問這箇道、州云、問那箇道、僧云、大道、州云、大道透長安、師拈云、大道沒遮障、坦然透長安、紛紛問路者、可憐自作難、大衆還知大道麼、看脚下。

次日上堂、僧問、六陰剝盡、一陽復生則不問、如何是不遷義、師云、日出東方夜落西、僧云、恁麼則一冬二冬、叉手當胸、師云、好箇一語、僧云、兜率有三句、還許咨參也無、師云、何妨問將來、僧云、參玄只圖見性、卽今上人性在什麼處、師云、徧界不曾藏、僧云、已得見性、脫生死、眼光落地時如何脫、師云、喚甚麼作生死、僧云、脫得生死、須知去處、四大分散時、向什麼處去、師云、山自山水自水、僧云、向上更有事也無、師云、有、僧云、如何是向上事、師云、向下薦取、又有僧問、冬至月頭賣被買牛、冬至月尾賣牛買被、意旨作麼生、師云、見成公案、直下會取、僧云、如何是冬來事、師云、白雪滿天、僧云、不因一番寒徹骨、爭得梅花撲鼻香、師云、好箇消息、僧便禮拜。

師乃云、仲冬嚴寒、晷運推移、枯木開花、冰河焰起、左之右之、吉無不利、何故、卓拄杖云、陽氣發

時、無硬地。

燈節上堂、一燈纔明、百千世界、無量國土、一時卽明、若佛若祖、有情無情、於此光中、各住自位、得大安樂之地、同受燃燈之記、且道、是那一燈。

浴佛上堂、我今灌沐諸如來、見麽見麽、淨智莊嚴功德聚、突出難辨、五濁衆生令離垢、泥裏洗土塊、同證如來淨法身、大家在這裏、崇福恁麽說、早是將一杓惡水潑諸人了也、雖然如是、知恩者少、負恩者多。

結夏上堂、青春已去、朱夏初臨、薰風南來、殿閣生涼、正是諸佛出身時節、說甚安居禁足、剋期取證、雖然如是、一日不作、一日不食。

興德寺佛殿、安釋迦陞座、佛身無爲、觸處全眞、等應塵刹、豁周沙界、無形而現、相相炳然、無聲而說、法法無盡、若也不落見聞、見得親切、不涉聲色、聞得分明、便知靈山一會儼然未散、其如未然、三拜起來、高着眼看。

謝書記秉拂上堂、諸佛說不到處、列祖提不起底、未開口時、文彩全彰、何也、畫前元有易、刪後更無詩。

端午上堂、青山流水、明月白雲、頭頭是活祖師意、人人莫作死法會、崇福與麽告報、意在於何、卓拄杖云、五月五端午節。

上堂、久雨不晴、衲僧皮草、向甚麽處曬曝、崇福今朝盡斷雲霧、放出日輪、照天照地去、以拄杖畫一畫云、雨過青山碧、雲淨日月正。

中夏上堂、九旬安居、今朝過半、數日已來、連綿霖雨、爛却瞿曇眼睛、滴破衲僧鼻孔、崇福今日、畫斷雲霧、向晴天白日、與諸人相見去也、以拄杖畫一畫云、相見渾無事、不來還憶君。

焙經上堂、三百餘會、收拾不上、二千年後、提掇不起、積岳堆山、風吹日炙、衲僧門下、不消一擊、擊拂子云、六月賣松風、人間恐無價。

解夏小參、雨洗炎暑、徧界清涼、現成公案、迥絕商量、若向這裏會去、開眼合眼、無非是解脫、左之右之、了無異解、卷舒在我、與奪憑誰、雖然如是、解制自恣底一句作麼生道、擊拂子云、秋風吹梧桐、落葉兩三片。

復擧臨濟和尚示衆云、有一無位眞人、汝等諸人面門出入、未證據者看看、師云、臨濟老漢未是白拈賊、說甚證據未證據、直下識取元物、何故、靑氈元是我家舊物。

中秋上堂、擧、僧問德山、靈山指月、曹溪話月、卽不問、如何是眞月、山云、昨夜三更轉向西、師云、德山恁麼答、昨夜三更大雨下、大衆作麼生會、山僧有一頌、擧示大衆、昨夜三更雨連綿、清光依舊照山川、茫茫總逐明暗底、爭識十分桂影圓。

九月旦上堂、雨蕭蕭風颯颯、黃葉滿虛庭、鴻雁鳴寥泬、子細好生觀、西來無妙訣、有妙訣、大衆分明自決、喝一喝。

上堂、一人發眞歸源、十方虛空悉皆消殞、五祖云、一人發眞歸源、十方虛空築着磕着、崇福則不然、一人發眞歸源、十方虛空只在毫端、且道、故人是同是別、大衆試辨看。

開爐上堂、崇福門庭、從來滴水冰生、今朝開爐、寒灰發焰、一時暖熱、祖意教意、趙州無賓主話、

突在面前、雖然如是、如何是無賓主話、擊拂子一下便下座。

達磨忌上堂、熊耳峯前、峭峻巍巍、日日清風匝地、夜夜明月流輝、盡言隻履西歸去、誰知千古鎭長存、且道、如何是長存底一句子、良久云、衆眼難瞞。

虛堂忌拈香、生佛未具以前、早有這箇、世界纔分、便見熏天炙地、崇福一年一度、當陽拈出、供養這老和尙、要且不是報恩酬德也、只是借水獻花。

上堂、雪上加霜、爲瑞爲祥、妙應無私、不用商量、卓拄杖一下、千古萬古只是者、何必胡僧勸擧揚。

臘月半上堂、祖師云、不是風動、不是幡動、仁者心動、巴陵拈云、不是風動、不是幡動、向什麼處著、雪竇云、是風是幡甚處著、師拈云、二大老同途不同轍、崇福不然、是風是幡、切忌動著、何故、轉喉觸諱。

謝知客上堂、古德云、一喝分賓主、照用一時行、喝一喝云、那箇是賓、那箇是主、若也未明、賓主未分、若也明得去、有賓有主、有照有用、不妨照用一時行、擲下拂子云、且道、照耶用耶。

元正上堂、日暖風和、花紅柳綠、新年佛法、一切成現、崇福與麼告報、新歲君聽得、春風影裡點頭、何故、卓拄杖云、大機圓應。

上堂、春山青春水綠、春雨未晴、春風復作、春雨春風共不惡、諸人若也會得去、雲門露、報慈隔。

佛涅槃上堂、以手摩胸、當慇懃、雙趺出示露肝心、二千年遠無人見、花笑鳥啼二月春。

二月旦上堂、日暖風和、鳥啼花笑、不是如來禪、亦非西來意、且道、畢竟如何、只許老胡知、不許

老胡會。

浴佛上堂、指天指地太無端、送語傳言泥裏輥、讃把香湯年年洗、至今千古累兒孫、今日如何爲雪屈、卓拄杖一下下座。

結夏小參、一毫頭上結制安居、十方虛空一時逼塞、若聖若凡、情與無情、總在裏許、逃出無門、墮在釋迦老師影子裏、不拘規矩、不修練行、酒肆茶坊、禁足護生、又落七佛之師舊時途轍、呼喚不廻、羅籠不住、要行便行、要住則住、活潑潑轉轆轆、正是而今衲僧用底、未敢相許、且道、畢竟如何行履、良久云、若是鳳凰兒、不向那邊討。

復擧、梁山和尙有頌、示衆云、我有一枝拂、眞椶鐵作骨、顯道嚇蚊蟲、指南不相屈、掃除佛祖病、擊破衲僧窟、若是上上人、不終喚作物、德山聞云、梁山好頌、話作兩橛、梁山後聞云、我當時少子細、師拈云、二大老恁麼道、意在於何、大衆還知落處麼、子期與伯牙、不是閑相識。

結夏謝衲班上堂、衲僧家箇箇眼蓋乾坤、人人口吞佛祖、左之右之、如龍得水、進前退後、似虎靠山、因甚麼九十日內、無繩自縛、卓拄杖云、若不入水、爭見長人。

謝藏主秉拂上堂、崇福山頭一片雲、一大藏敎說不到、戒岸池底一滴水、天下衲僧看不透、看得透說得到時如何、良久云、君子可八。

中夏上堂、一百二十日長期、今朝恰過半、崇福不擧舊公案、只據現定、爲汝諸人通箇消息、卓拄杖一下云、六月賣松風、人間恐無價。

六月半上堂、僧問、智門祚和尙、蓮華未出水時如何、祚云、蓮華、出水後如何、荷葉、師頌云、蓮華

荷葉離泥水、出未出時絕點埃、無限清香收不得、和風帶雨滿池開。

解夏小參、布袋頭結、大地無寸土、布袋打開、徧界通活路、所以衲僧家、拏拄杖抖擻鉢囊、踏翻仰山畬田、纖塵不立、擘破鹽官扇子、清風有餘、有佛處不肯住、脚下泥深三尺、無佛處急走過、平地上滑如砥、三千里外逢人莫錯擧、早已錯擧了也、這箇卽且置、且如解制自恣底一句、又作麼生、卓拄杖云、一片白雲、自西自東。

復擧、茱萸和尙、大衆侍立次、茱萸云、只恁麼平白立、無箇說處、一場氣悶、時有僧出擬問、茱萸云、爲衆竭力、便歸方丈、師拈云、當時纔聞道只恁麼平白立、無箇說處、一時散去、非但賓主諸和、亦乃免見勞他茱萸爲衆竭力。

次日上堂、竪起拂子云、只這箇是什麼、二千年前說不到、十萬里來踏不着、今朝解制自恣、分明與諸人看、擲下拂子云、見之不取、思之千里。

重陽謝直歲・知客・侍者上堂、叉手而立、賓主歷然、三喚三應、家裏有人、雖然如是、還知有汾陽老人一句子麼、卓拄杖一下云、重陽九日菊花新。

九月半上堂、秋葉落秋林脫、秋月圓明、秋風颯颯、祖意教意一時漏泄、德山棒頭短、臨濟口門窄、因甚如是、良久云、我常於此切。

開爐上堂、風頭稍硬、且歸暖處、這裏切忌商量、只要應時納祐、何故如是、擊拂子云、覓火和煙得、擔泉帶月歸。

虛堂忌拈香、世尊三昧迦葉不知、迦葉三昧阿難不知、先師三昧崇福不知、旣是彼此不相知、

因甚麼一年一度炷香作禮、嗚咿嗚咿、無人知此意、令我憶南泉。

十月半上堂、禪非意相、寒月輝輝、道絕功勳、霜風浩浩、會不會疑不疑、墮坑落塹、去道轉遠、畢竟如何、擊拂子云、當頭霜夜月、任運落前溪。

謝都寺・典座・浴主上堂、趙州一甌茶、楊岐栗棘蓬、生薑元是辣、鑊湯無冷處、喝一喝云、轉喉觸諱。

臘八上堂、明星夜夜現、白雪年年寒、宇宙茫茫人無數、不知何處見瞿曇、大衆要見瞿曇麼、良久云、吾無隱乎爾。

除夜小參、年窮歲暮、古佛家風、當陽顯露、臘盡春廻、祖師巴鼻、觸處現成、便恁麼去、釋迦不用入雪山、達磨不可渡流沙、人人鼻直眼橫、箇箇頂天履地、坐致太平、應時納祐、三十六旬、七十二候、孩汝不着、其如未然、寒梅香動舊年枝、岸柳拖金新歲葉。

復擧、僧問趙州、如何是不遷義、州以手作流水勢、其僧有省、師拈云、趙州雖是善應來機、爭奈費力不少、今夜忽有人、問崇福如何是不遷義、向他道、大盡三十日、小盡二十九。

元日上堂、昨夜送舊年、今朝迎新歲、太宰府裏藤三源四、崇福山中露柱燈籠、拜底拜賀底賀、一一漏泄我家眞機、頭頭發輝靈山密旨、山僧省得一半氣力、何故、擊拂子云、花開不假栽培力、自有春風管帶伊。

因講經上堂、世尊四十九年、橫說竪說、未曾說一字、崇福三十餘日、談玄談妙、未曾談一法、且道、如何是不談底事、卓拄杖一下云、三段不同、收歸上科。

謝進退兩班上堂。三脚驢兒、獨角麒麟、一進一退、賓主歷然、栴檀葉葉香風起、須知鑊湯無冷處。

結夏小參、綠暗紅稀、孟夏漸熱、等是恁麼時節、阿那箇是圓覺伽藍、喚什麼作平等性智、所以崇福一衆八十餘員、不守西天影子、豈墮東土時機、無一絲毫安居禁足底事、崇福也是不敢錯誤諸人一絲毫許、只要各各自行一條活路子、風前月下、山邊水際、任意遨遊自由自在、何故、卓拄杖云、但有路可上、更高人也行。

復擧、天平漪和尚行脚時、參西院、每云、莫道會佛法、覓箇擧話底也無、一日西院召云、從漪、平擧頭、院云、錯、平行兩三步、院又云、錯、平近前、院云、適來者兩錯、是西院錯、上座錯、平云、從漪錯、院云、錯、平休去、院云、且在這裏過夏、待上座商量者兩錯、平當時起去、後住院、謂衆曰、我當時被風吹過四明長老處、敎他連下兩錯、更留我商量者兩錯、不道那時錯、發足南方時、早錯了也、師拈云、天平恁麼道、轉見敗闕、若是當時待他道西院錯上座錯、喝一喝便行、不惟覷破西院肝膽、亦乃免見後人檢責、雖然如是、崇福今夏切忌商量者兩錯。

次日上堂、三百餘會、不博一笑、十萬里來、伎窮三拜、崇福今日、布袋頭一結結定、南來北來、若聖若凡、無出氣處、且道、與古人是同是別、卓拄杖一下。

中夏上堂、九夏過半、見成公案、諸人若也會得、一生參學事辦、其如未然、更有那一半在、莫道不言。

上堂、時節至其理彰、桐葉落秋風涼、古佛家風都漏泄、衲僧門下莫商量、何故、眼底那容着金

屑。

中秋上堂、八月十五、月圓當戶、人人有這箇、只是用得別、長沙踏倒仰山、用力太過、南泉拂袖歸衆、靈龜曳尾、且道、畢竟如何、大衆久立珍重、便下座。

開爐上堂、崇福開爐、元未曾開、火焰不說法、諸佛如何聽、不擧無賓主話、誰論三界唯心、然雖如是、須知冷灰裏九轉透瓶香。

上堂、擧、明招示衆、衆纔集、招云、者裏風頭稍硬、且歸暖處商量、便下座、衆隨至方丈、招便打云、纔到暖處、便見瞌睡、師拈云、明招老漢、可惜暗投明珠、當時一衆、眼裏無筋、隨人上下、崇福卽不然、者裏風頭稍硬、大衆久立珍重。

佛成道上堂、明星夜夜現、臘雪年年白、諸人若也一見便見、一得永得、不妨與釋迦老子同見同得、其如未然、天上星、地下木。

除夜小參、僧問、德山小參不答話、意在甚麼處、師云、倚天長劍逼人寒、僧云、趙州小參要答話、又作麼生、師云、無孔鐵鎚當面擲、僧云、和尙今夜小參、如何爲人、師云、儞聞也未、僧云、恁麼則三段不同、收歸上科、師云、向上著眼看、僧便禮拜、又有僧問、舊歲今宵去、向甚麼處去、師云、向臘雪堆中去、僧云、新年明日來、從甚麼處來、師云、從黃鶯聲裏來、僧云、還有不涉新舊底也無、師云、有、僧云、如何是不涉新舊底、師云、金香爐下鐵崑崙、僧云、記得、感首座問法昌、昔日北禪分歲、烹露地白牛、和尙今夜分歲、有何施設、昌云、臘雪連天白、春風逼戶寒、此意作麼生、師云、用常住物、作自己用、僧云、感云、大衆如何喫、昌云、莫嫌冷淡無滋味、一飽能消萬劫飢、如何委

悉、師云、喫著者方知、僧云、感云、是何人置辨、昌云、無慚愧漢、來處也不ㇾ知、又作麼生、師云、果然果然、僧云、古人則且置、和尚今夜分歲、有ㇾ何施設、師云、金剛圈栗棘蓬、僧云、大衆如何喫、師云、只恐呑吐不下、僧云、是何人置辨、師云、高著ㇾ眼看、僧云、和尚與麼施設、與ㇾ古人ㇾ是同是別、師云、別是一家風、僧禮拜、又僧問、歲窮年盡、禿頭笤箒、路傍作ㇾ舞、學人上來、請師提唱、師云、不ㇾ見ㇾ怪力亂神、僧云、只如ㇾ北禪道ㇾ烹ㇾ露地白牛、燒ㇾ榾柮火、唱ㇾ村田樂、還端的也無、師云、也是村裏家風、僧云、如何是露地白牛、師云、趁不ㇾ去、僧云、如何是榾柮火、師云、烈焔亘ㇾ天紅、僧云、如何是村田樂、師云、不ㇾ涉ㇾ宮商、僧便禮拜。

師乃云、天地覆載、日月照臨、陰陽代謝、四序變遷、二十四番花信、三十六旬風光、一年三百六十日、數到ㇾ臘月三十日夜、總是我家眞機、更無ㇾ絲毫他物、然雖ㇾ如ㇾ是、舊年新歲、交頭結尾、轉身一句、作麼生道、擊ㇾ拂子ㇾ云、看看春風動、寒梅徧界香。

擧、僧到ㇾ鵠林ㇾ敲ㇾ門、林云、誰、僧云、行脚僧、林云、莫ㇾ道行脚僧、佛來也不ㇾ着、僧云、既是佛來、因ㇾ甚麼ㇾ不ㇾ着、林云、無ㇾ汝棲泊處、師拈云、大小鵠林、無佛處稱ㇾ尊、崇福則不ㇾ然、既是佛來、因ㇾ甚麼ㇾ不ㇾ着、只向ㇾ他道、不ㇾ會ㇾ作ㇾ客、勞ㇾ煩ㇾ主人ㇾ。

結夏小參、青山綠水、明月白雲、滿眼滿耳、無ㇾ處ㇾ廻避、不ㇾ是格外玄機、亦非ㇾ世諦流布、所以衲僧家、意不ㇾ停ㇾ玄、眼不ㇾ掛ㇾ戶、潛行密用、佛祖不ㇾ識、東倒西擂、魔外難ㇾ測、入ㇾ林不ㇾ動ㇾ草、入ㇾ水不ㇾ動ㇾ波、終日談而不ㇾ說ㇾ一語、終日行而不ㇾ移ㇾ寸步、如ㇾ是安居、如ㇾ是禁足、始無ㇾ禁足底事、便恁麼去、未ㇾ出ㇾ常情、且道、畢竟如何行履、擊ㇾ拂子ㇾ云、不ㇾ是梧桐樹、鳳凰誓不ㇾ棲。

復擧、長慶云、惣似今日、老胡有望、家富小兒嬌、保福云、惣似今日、老胡絕望、國淸才子貴、這箇卽且置、畢竟今日事、又作麼生、良久云、分明記取。

結夏上堂、十五日以前、頭頂天脚踏地、十五日以後、仰面不見天、低頭不見地、正當十五日、天是天地是地、說甚三月安居九旬禁足、何故、良久云、猛虎不食伏肉。

重陽上堂、九月九是重陽、黃花猶未發、野草分外香、見成公案、逈絕商量、若是眼裏有筋底、不妨纔見便承當、其或未然、無事上山行一轉。

冬至小參、葭灰未動、全機顯露、六爻纔分、覿體現成、衲僧家人人口吞佛祖、箇箇眼蓋乾坤、有時無陰陽地、胡拋亂撒、有時聲色頭邊、東倒西擂、所以崇福尋常、不句聲前向後羅籠兄弟、今夜且放下一着、別通一線活路、管取普天和氣、因甚特地如是、卓拄杖云、從前汗馬無人識、只要重論蓋代功。

復擧、僧問巴稜、祖意敎意、是同是別、稜云、鴨寒下水、鷄寒上樹、師拈云、而今兄弟、十箇有五雙、只作同別會去、未曾夢見巴稜肝膽、且道、巴稜意又作麼生、鴨寒下水、鷄寒上樹、大衆會麼、繡出鴛鴦任君看、不把金針度與人。

次日上堂、群陰剝盡、嶽峯依前揷天碧、一陽來復、磵泉長時徹底淸、威音以前、盡未來際、未曾移易一絲毫許、未曾增減一絲毫許、便恁麼去、君子道長本不長、小人道消本不消、一念萬年、萬年一念、雖然如是、恁麼說話也是尋常座主底見解、且道、衲僧門下如何擧似、擊拂子云、劫外一壺春更好、優曇華綻普天香。

立庫堂上堂、飯取香積、座借燈王、維摩大士費力不少、崇福這裏廚庫已建、香飯自成、一任入人要喫便喫、一微塵裏現法王刹、不妨箇箇要坐則坐、雖然如是、承誰恩力、擊拂子云、明月照無盡、清風來未休。

上堂、岳峯峯頂寺、家風元自別、莫參祖師禪、各自知時節、霏霏黃梅雨、滴滴聲無歇、德山與臨濟、也是得一橛。

臘八上堂、夜夜明星流輝、人人頂門具眼、一見便見、一得永得、且道、與釋迦老子半夜忽覩明星、是同是別、擊拂子云、天上星、地下木。

因講經上堂、敎中道、止止、不須說、我法妙難思、崇福卽不然、要說便說、要行則行、何故如是、我法妙難思、卓拄杖一下云、三段不同、收歸上科。

三月旦上堂、聲色不到處、紅紫競芬芳、言詮不及處、黃鸝啼枝上、且道、是敎意耶是祖意耶、拈拄杖一下云、乾三連、坤六段。

上堂、三日一雨、五日一風、風不鳴條、雨不破塊、崇福直得、謳歌鼓腹致太平、何故、佛法不怕爛却。

佛生日上堂、雨洗群峯添翠色、瞿曇面目露堂堂、韶陽正令行不到、播土揚塵未肯休、崇福隨例也潑一杓惡水、喝一喝。

中秋上堂、擧、盤山云、心月孤圓、光呑萬象、光非照境、境又非存、光境倶忘、亦是何物、師拈云、盤山恁麼道、向黑山下作活計、崇福則不然、光境倶忘、只得一橛、更須知有全提時節、然雖如是、

那箇是心月、卓拄杖云、禾山打鼓、雪峯輥毬。

臘八上堂、僧問、釋迦老師、半夜逾城、雪山六年、一麻一麥、是何心行、師云、不是苦心人不知、僧云、正當明星現時、忽然悟去、還端的也無、師云、不因射鵰手、爭知李將軍、僧云、只如一人發眞歸源、大地衆生在什麼處、師云、大家在這裏、僧云、釋迦老師顚言倒語道、奇哉一切衆生、悉具如來智慧德相、既是無風起浪、如何得太平去、師云、莫謗釋迦老師好、僧云、恁麼則切忌不愼當初、師云、可知始得、僧便禮拜。

師乃云、未登雪嶺、雪山雪寒、未見明星、衆星朗然、悟與未悟時、萬里一條鐵。

臘月半上堂、光陰如箭射、今朝臘月半、氷生於水、冷於水、青出於藍、青於藍、諸人若會得、不妨順時保愛、其如未然、待得雪消去、自然春到來。

結夏小參、嶽峯絕頂、峭峻孤危、老胡仰望不及、古磵寒泉、徹底淸冷、衲僧覰視無門、若向這裏、覰得透挨得入、方知仰望不及、覰視無門底消息、轉身行活路、擺手出那邊、一切處禁足、一切處護生、不問長期短期、豈守寒岸異草、雖然如是、黑漆拄杖猶未肯在、更說甚殺盡方安居、鐵船水上浮、費力不少、不勞拈出、畢竟崇福、九夏如何行履、卓拄杖云、等閑獨超千聖外、明月淸風類不齊。

復擧、保福因僧侍立、福云、爾得恁麼麁心、僧云、甚處是某甲麁心、福將一塊土度與僧云、拋向門外着、僧拋向門外、再來却問、甚處某甲麁心、福云、我見爾築着磕着、所以道麁心、師拈云、保福一顆明珠、付與這僧、可惜這僧不能得受用、崇福門下、總是麁心底、何故、我見諸人也是築

着磕着。

次日上堂、僧問、衲僧家尋常氣宇如王、爲甚今朝無繩自縛、師云、不因一事、不長一智、僧云、只如朝到西天、暮歸東土、還有禁足底道理也無、師云、終日行而不動一步、僧云、如何是鵝護雪臘人氷、師云、着甚死急、僧云、如何是鐵彈子、師云、團圝劈不破、僧云、和尚此間以何爲驗、師云、青山流水、僧禮拜。

師乃云、四月十五、布袋頭結、盡乾坤大地、不漏一絲毫、内不放出、外不放入、正恁麼時、轉身一句作麼生道、擊拂子云、一把柳枝收不得、和風搭在玉欄干。

上堂、佛法兩字、平地波瀾、擊鼓陞堂、已傷物義、且道、崇福門下、畢竟如何行履、卓拄杖一下云、二時粥飯氣力麁、無事山邊行一轉。

因雨上堂、三日晴、一日雨、天平地平、河滿井滿、崇福只得有口喫飯、何故如是、佛法不怕爛却。

中夏上堂、荷葉團團、菱角尖尖、衲僧一見便見、一得永得、雖然如是、猶是半提、須知有全提時節、何故、行到水窮處、坐看雲起時。

解夏小參、二千年前靈山會上、怛薩阿竭與百萬聖衆、結制解制、長期短期、單明此事、二千年後、崇福山中、小僧紹明與八十餘僧、三月安居、九旬禁足、全憑此事、西天此土、毫髮不移、所以道、三十年在藥山、只明此事、今則聖制周圓、時臨自恣、試問、諸禪德那箇是此事、驀拈拄杖卓一下云、若向這裏會得去、初秋夏末、東去西去、脚頭脚底、七穿八穴、其如未然、前程逢人、不得錯擧。

復舉、地藏和尚問僧、甚麼處來、僧云、南方、藏云、南方佛法如何、僧云、商量浩浩地、藏云、爭似我這裏種田摶飯喫、僧云、爭奈三界何、藏云、喚什麼作三界、師拈云、地藏阿師、只解種田摶飯喫、佛法未夢見在、崇福恁麼道、意在於何、今夜暑氣未退、且待來日、爲汝諸人說破。

次日上堂、僧問、三月安居今已滿、九旬公用事如何、師云、冬瓜直儱侗、瓠子曲灣灣、僧云、學人恁麼去時如何、師云、且緩緩、僧云、昔日馬祖、出八十四人善知識、箇箇阿漉漉、今夏和尚、接八十餘員衲僧、有何長處、師云、人人頂天履地、僧云、未到崇福門、先知了、師云、更須子細始得、僧云、記得、仰山語香嚴云、如來禪許師兄會、祖師禪未夢見在、此意如何、師云、言中有響、僧云、如何是如來禪、師云、四十餘年說不到、僧云、如何是祖師禪、師云、九年面壁覷不破、僧云、如何是和尚禪、師云、崑崙嚼生鐵、僧便禮拜。

師乃云、杲杲明如日、漫漫黑似漆、夜半甚分明、天曉還不露、衲僧一夏、聚頭接耳、東覷西覷、覷不透、橫咬竪咬、咬不破、忽然自恣日到來、諸人合作麼生、崇福未免重下注脚去、竪起拂子云、看看、杲杲明如日、漫漫黑似漆。

崇福寺語錄下　終

洛陽萬壽禪寺語錄

侍者宗心編

師於嘉元三年七月二十日開堂。

拈香云、此香靈根生在空劫以前、瑞氣盤旋九天之上、爇向爐中、恭爲祝延
今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、
陛下恭願、金輪統御、天基永茂、四海歸仁、萬邦入貢。
次拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲
太上天皇、恭願億萬年、天清地泰、永祚皇圖、三千世時和歲豐、咸謌
睿德、次拈香云。此一瓣香、日本聞名、大宋知貴、乳竇峯前、南屏園裏、東嗅西嗅、全無氣息、逗到
雙徑那畔五髻峯頭、被人覷着、薰天炙地、歸來扶桑、一回拈出一回新、爇向爐中、奉爲前住大
宋徑山興聖萬壽禪寺先師虛堂和尙大禪師、用酬法乳之恩。
師遂就座、垂語云、動絃別曲、葉落知秋、也是尋常、莫有朕兆未分、文彩未彰以前會得底麼、僧
問、建法幢立宗旨、正在此時、祝 聖一句、請師提唱、師云、雲淨日月正、進云、恁麼則一言以祝
南山壽、萬國歌謠賀太平、師云、風行草偃、進云、記得、梁武帝請傅大士講經、士終陞座、打案一
下、便下座、此意如何、師云、未登座時、經旨既明、進云、帝愕然、又作麽生、師云、將謂武帝忘却、進

云、志公云、大士講經竟、如何理會、師云、知音知後更誰知、進云、今日　聖主請二和尚一演法、有二何祥瑞一、師云、無レ限清風來未レ休、進云、龍吟霧起、虎嘯風生、師云、誰敢近傍、僧禮拜、僧又問云、釋迦說法、多寶證明、和尙今日開堂演法、未レ審說二是甚麼法一、師云、法法本來法、進云、恁麼則大機圓應、大用無レ方、師云、一葉落天下秋、進云、記得、夾山初住院、因有レ僧問、如何是法身、山云、法身無相、此意如何、師云、錯認二定盤星一、進云、僧問、如何是法眼、山云、法眼無レ瑕、意旨如何、師云、學語之流、進云、時道吾在二座下一失笑、山請益、別レ衆參二船子一省發、未レ審夾山有二什麼見處一、師云、千聞不レ如二一見一、進云、道吾聞得、令二僧行問一、如何是法身、山云、法身無相、有二何優劣一、師云、甜瓜徹レ蔕甜、苦瓠連レ根苦、進云、僧問、如何是法眼、山云、法眼無レ瑕、意在二那裏一、師云、有二意氣一時添二意氣一、不二風流一處也風流、進云、僧還擧二似道吾一、吾曰、者漢此囘方徹、道吾具二甚麼眼目一、師云、鵝王擇レ乳、素非二鴨類一、進云、古人底且置、今日有レ人、問二如何是法身一、和尙作麼生祇對、師云、秋風吹二渭水一、落葉滿二長安一、進云、恁麼則昔日夾山、今日和尙、師云、切忌亂針錐、僧便禮拜。

師乃云、目前無レ法、門外車馬鬧浩浩、意在二目前一、屋頭松竹冷青青、不二是目前法一、非二耳目所一レ到、清家寥寥白的的、只這些兒得二八憎一、亘レ古亘レ今、不二變易一、釋迦老子、四十餘年、橫說豎說說不到、達磨祖師、十萬里來、東覰西覰覰不破、臣僧紹明、今日開堂、不レ覺擡レ眸、一覰覰着、無レ端開レ口、一句說着、說著覰著、追二囘太古之風一、純二樂無爲之化一、正恁麼時、知レ恩報レ恩一句作麼生道、卓二拄杖一一下云、四海而今清似レ鏡、三邊誰敢犯二封疆一、臣僧紹明、恭奉　聖旨一、今日開堂、擧二揚正法眼藏一、祝二延聖壽無疆一、人天大會、草木叢林、情與二無情一同蒙二光輝一、共霑　聖恩一、臣僧紹明、下情不レ勝二感激屛

營之至。

凡衲僧家、知時知節名爲靈利之漢、所以道、欲識佛性義、當觀時節因緣、一年三百六十日、一日十二時辰、無虛棄底時節、釋迦老子達磨大師、皆是應此時節、出來轉大法輪、顯大妙用、乃至自餘諸大老、情與無情、盡是隨時受用、故曰、時節既至、其理自彰、若論佛性義、人人雖具、天眼也難看、箇箇雖備、天耳也難聽、雖然如是、時節既至、其理自彰、以眼可見、以耳可聽、見聞所及、一一皆是本來消息、本地風光、今日人天普會、若知此時節因緣、轉凡成聖、同在大光明藏三昧之中遊戲。

擧、太宗皇帝因有僧、朝見賜座宣問、從何處來、僧奏曰、廬山臥雲庵、帝云、臥雲深處不朝天、爲甚麼至這裏、僧無語、師云、太宗日照天臨、無幽不燭、當時若問臣僧、臥雲深處不朝天、爲甚麼至這裏、便奏云、遠蒙聖恩、管取皇情大悅。

八月旦、謝兩班上堂、雨洗炎暑、徧界淸涼、白露垂珠、槿花凝煙、頭頭合轍、東西逢原、何故如是、擊拂云、量才補職。

九月旦上堂、頭頭是物、物物是塞、鴈過長空、蟋蟀吟草底、三賀村田井水、一一非他物、箇箇歸自己、且道、以何爲驗、卓拄杖云、公驗分明。

重陽上堂、天地同根、萬物一體、抛大千於方外、納須彌於芥子、卷舒在我、縱横得妙、左之右之、無是不是、以何爲驗、擊拂子云、重陽九日菊花新。

臘月旦上堂、今朝臘月一、那事分明極、徧界分外寒、萬里一條鐵。

二月旦上堂、春山疊亂青、春水漾虛碧、寥寥天地間、獨立望何極、山僧住此萬壽、恰似雪竇老人、東西有山有水、今日不覺撞眸、清與太遠在、何也如是、卓拄杖一下云、四海五湖皇化裏、不知何處是封疆。

龜山法皇大祥、奉　勅就嵯峨殿陞座、師拈香云、此香天地覆載、日月照臨、爲瑞爲祥、爲雲爲蓋、爇向爐中、奉爲　禪定法皇、恭願、心華長開於禪林無盡之晨、玉葉鎭芳於御園萬古之春。

師斂衣就座云、千聖靈機、全歸掌握、列祖命脈、只在目前、莫有領得此旨底麼、僧問、金鷄唱曉、玉鳳啣花、一句無私請師祝　聖、師云、天高群象正、僧云、只將一句無心法、仰祝堯天舜日明、師云、四海九州、雷動風行、僧云、昔日梵王請佛說法、雨花動地、今日　聖主請師說法、有何祥瑞、師云、杲日麗天、清風匝地、僧云、恁麼則四衆霑恩去也、師云、闔國咸知、僧云、前無釋迦、後無彌勒、正當恁麼時、　禪定法皇在何處作佛去、師云、徧界不曾藏、僧云、記得、肅宗皇帝問忠國師、如何是十身調御、師云、檀越蹈毗盧頂上行、此意如何、師云、步步清風起、僧云、帝云。寡人不會、國師云、莫認自己清淨法身、又作麼生、師云、瞥轉玄關去、僧云、今日問如何是十身調御、和尙如何祇對、師云、巍巍堂堂、煒煒煌煌、僧云、優曇花綻普天香、便禮拜、師云、時節難逢。

師乃云、聲前一句、乾坤未剖早漏逗、末後一機、世界纔分便現成、佛祖不傳之妙、觸處全彰、人天性命之道、當陽顯露、輝天鑑地、透色透聲、歷代師祖、天下衲僧、做盡千般伎倆、總不出這影子、臣僧紹明、今日恭奉　聖旨、高陞此座、未免行佛祖未行之令、用衲僧未拈之機、驀拈拄杖靠禪牀云、且道、是何宗旨、便見君臣慶會、時清道泰、堯天舜日、共樂昇平、且望　闕酬恩一句、

作麼生道、卓拄杖云、但見皇風成一片、不知何處是封疆、臣僧紹明、恭惟　太上天皇、昔日在靈山會上、親受如來記莂、今日於王舍城中、扶竪正宗、光賛祖道、使山野擧揚宗乘、人天大會、草木叢林、情與無情均蒙光輝、同霑恩澤、臣僧紹明、下情不勝感激屏營之至。

又云、從上佛祖、出興於世、只據本分一着、略露目前些子、如閃電光擊石火相似、貶得眼來、三千里外、雖然如是、若論本分、斷斷不在言語上、所以釋迦老子、摩竭掩室、思惟此事、藏身露影、如天普蓋、似地普擎、當時一衆、若向這裏一時會去、那更四十九年、三百餘會、說盡許多葛藤、又一日大衆雲集定、世尊陞座、不措一言、明如杲日、徧界不藏、一衆猶未會在、文殊白槌云、諦觀法王法法王法如是、不因樵子徑、爭到葛公家、後來雪竇明覺大師、頌曰、列聖叢中作者知、法王法令不如斯、會中若有仙陀客、何必文殊下一槌、雪竇老漢、向世尊未登座時、通箇消息、恁麼頌出、却較些子、有時外道問佛、不問有言、不問無言、世尊良久、外道悟去讃歎云、世尊大慈大悲、開吾迷雲、使吾得入、只這外道、也是鈍漢、若是世尊未良久以前悟去、免得異道之名、何況、而今多是向世尊良久處要會、劍去久矣、方乃刻舟、其如不然、又向甚麼處會去、不妨於目前高著眼、一見便見、一得永得、未爲分外、世尊既是如是、況又祖師門下、目前有一條活路、敎他一切有情無情、同入此中、共到大安樂大自在之地、何故如是、他家曾踏上頭關。

復擧、唐太宗皇帝、因僧朝見、奏曰、　陛下還記得也無、將謂、皇帝忘却、帝云、何處相見來、日照天臨、僧云、自一別靈山、直到如今、來風可辨、帝云、以何爲驗、僧無語、師拈云、皇帝天鑑無私、這僧無語、公驗甚分明、何故既是親對龍顏。

萬壽寺語錄　終

巨福山建長禪寺語錄

侍者克原編

師於德治二年臘月二十九日入院。

山門、南來北來、從東過西、歷遍諸方門戶、却向這裏知歸、且道、這裏是甚所在、喝一喝、到者方知。

佛殿、看看、古佛猶在、切忌當面諱却、便展坐具。

土地堂、我說法、儞護法、須知心同道同、大家齊着力、扶起舊家風。

祖師堂、諸祖三昧、山僧不知、山僧三昧、諸祖不知、既是不相知、因甚特地炷香作禮、彼此出家兒。

方丈、德山棒、臨濟喝、這裏一時倚閣、擬向甚麼處相見、吽吽、且居門外。

府帖、該括山川、包容天地、玉轉珠囘、爲祥爲瑞、撥揮西來的的意、從此拂拂香風起。

諸山疏、指桑罵柳、叢林風義、惡語傷人、一團和氣。

山門疏、未擧先領、未言先通、家裏人說家裏話、字字句句皆春風。

江湖疏、一言道盡、頭頭合轍、月明四海、風清六合。

法座、向上一路、嶮崖一機、擧步踏着、開口說着、須彌燈王過這邊着。

師陞座、拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲祝延
今上皇帝聖躬萬歳萬歳萬萬歳、陛下恭願、金輪統御、天基永固、四海歸仁、萬邦拜手。
次拈香云、此一瓣香、爇向爐中、奉爲
一品親王征夷大將軍家、伏願威鎭三邊、德被四海、永佐上聖、普澤下民
此一瓣香、爇向爐中、奉爲本寺大檀那最勝園寺殿、伏願、壽等南山、福深北溟、杜石皇家、金湯佛法。
此香爇向爐中、奉爲前住大宋徑山興聖萬壽禪寺虛堂和尚大禪師、用酬法乳之恩。
師斂衣、就座云、分破太華、劈開滄溟、當機覿面、誰敢辨明、有麼有麼、僧問、建大法幢、轉大法輪、四衆臨筵、請師祝　聖、師云、瑞雪滿地、祥雲徧空、僧云、只如金殿譚禪、怡悅　龍顏、與今日勝會、是同是別、師云、無限清風來未已、僧云、恁麼則寰中天子勅、塞外將軍令、師云、一句道著、僧問、記得、閩王請羅山和尚開堂、山陞座、斂僧伽梨乃曰、珍重、便下座、意旨如何、師云、龍袖拂開全體現、僧云、閩王近前把手曰、靈山一會、何異今日、又作麼生、師云、天鑑無私、僧云、山曰、將謂、是箇俗漢、意在那裏、師云、君臣道合、僧云、後來白雲端和尚頌曰、紛紛雪影耀閩天、閩王欣逢倍樂然、一旦春風吹大地、更無一點在階前、此意如何、師云、錦上添花又一重、僧云、果是人天大導師、便禮拜。
師乃云、道在目前、四面青山磨碧空、目前難覩、雙澗泉水湛如藍、向這裏會去、人人分上、壁立萬仞、箇箇面前、飛大寶光、朝遊夕處、賓主歷然、佛祖命脈、全歸掌握、衲僧巴鼻、觸目現成、直得

瑞雪滿地、祥雲徧空、正是鷲山成道底時節、巨福峯鎌倉縣、和氣靄然、鷲嶺消息正在斯時、少室家風又見重新、正恁麼時、畢竟承誰恩力、卓拄杖一下云、天上有星皆拱北、人間無水不朝東

復擧、乳源和尚示衆云、西來的的大意、不易擧唱、時有僧出、源便打云、是甚麼時節出頭來、師拈云、乳源只要諸人知時知節、如此業業、這僧犯衆而出、可惜未肯全領。

當晚小參、法無定相、遇緣卽宗、立處皆眞、隨方作主、所以山僧在帝都、建法幢、莫非其緣、來關東立宗旨、不擇其處、直得處處逢原、頭頭合轍、便見年窮歲暮、破沙盆子掛在壁上、臘盡春回、大庾嶺上古佛放光、恁麼底時節、應時納祐一句作麼生道、擊拂子云、四海淸風已駘蕩、十洲月色照人新。

復擧、潙山因僧問、如何是道、山云、無心是道、僧云、學人不會、山云、會取不會底、僧云、如何是不會底、山云、只是儞、不是別人、師拈云、潙山恁麼道、明投暗合、雖然如是、諸人切忌恁麼會、何故、靈蹤更在猿啼處。

正旦謝兩班上堂、風從虎雲從龍、左之右之、無是不是、七穿八穴、吉無不利、何故、卓拄杖、花開不假栽培力、自有春風管帶伊。

佛涅槃上堂、僧問、春日熙熙、春風浩浩、桃腮媚雨、柳眼鎖煙、如何是瞿曇眞面目、師云、遍界不曾藏、僧云、塵塵等是春光裏、雙樹因甚有榮枯、師云、向無榮枯處看、僧云、生也不道、滅也不道、不涉脣吻、願聽一句、師云、天高東南、地傾西北、僧云、只如道今日卽有、明日卽無、如何體會、師

云、桃花李花白、僧禮拜、又僧問、十方薄伽梵、一路涅槃門、未審、路頭在甚處、師云、看脚下、僧云、乾峰以拄杖畫一劃云、在這裏、聻、師云、路頭分明、僧云、記得、世尊臨入涅槃、以手摩胸、普告大衆云、汝等諦觀吾紫磨金色之身、瞻仰取足、莫令後悔、意旨如何、師云、末後慇懃、僧云、世尊又云、若謂吾滅度、非吾弟子、若謂吾不滅度、亦非吾弟子、畢竟如何委悉、師云、平生肝膽向人傾、僧云、飲光來時、更出雙趺、是何心行、師云、恩大難酬、僧云、爭奈至今骨節連皮竅、暴露春風百草頭、師云、狼藉不少、僧云、和尚如何蓋覆伊、師云、一口吞却乾坤、向甚麼處摸索、僧云、莫有別報恩底句麼、師云、報恩了也、僧便禮拜、師乃云、日暖風和、萬蘂敷榮、釋迦老子、於此時節、百花叢裏藏得渾身、雖然如是、不覺脚露、直至如今收不得、惱亂春風卒未休。

四月旦上堂、三月春已去、九夏今初來、建長只得順時保愛、諸人也是自合知節、其如未然、只見落紅風掃盡、豈知庭樹綠陰深。

浴佛上堂、母胎未出、度人畢、也是我家第二機、那更指天復指地、無端千古惹閑非、過犯彌天、如何煎雪、卓拄杖云、齊之以禮。

結夏小參、僧問、西天蠟人爲驗、建長門下以何爲驗、師云、露柱燈籠、僧問、未審意旨如何、師云、照破汝面門、僧又問、乾峰和尚示衆云、法身有三種病二種光、一一透過始穩坐、意旨如何、師云、蛇入竹筒、雲門出衆云、庵內人爲什麼不見庵外事、此意如何、師云、家裏人說家裏話、峯呵大笑、門云、猶是學人疑處、峯云、闍梨是甚麼心行、此意如何、師云、彼此要知、門云、也要和尚委悉、又如何、師云、果然果然、僧云、只如乾峯和尚云、法身有三種病二種光、一一透得初穩坐、和

尙如何祇對、師云、一二三四五、僧禮拜。

乃云、我宗無語句、無一法與人、須知當人分上、箇箇眼蓋乾坤、人人舌拄梵天、擧足下足、無非圓覺伽藍、語默動靜總是平等性智、劒樹刀山、鑊湯爐炭、一切處安居、一切處禁足、未爲分外、建長與麼告報、只要諸人自行一條活路子、其如未然、不許夜行、投明須到。

復擧、黃檗示衆云、汝等諸人、盡是噇酒糟漢、與麼行脚、何處有今日、還知大唐國裏無禪師麼公案、師拈云、這老漢敗缺不少、且道、那裏是他敗缺處、諸人若也勘辨得出、非但親見黃檗爲人處、亦乃表顯自己光明。

次日上堂、衲僧家尋常、不慕千聖、不重己靈、因甚麼、四月十五日、墮在釋迦老子二千年前、漫天網子裏、動一步子不得、擊拂子云、犀因翫月文生角、象被雷驚花入牙。

謝兩班上堂、看看、東邊底、頂門上杲日當空、看看西邊底、脚跟下淸風匝地、一進一退、頭正尾正、建長恁麼道、意在於何、良久云、量才補職。

上堂、擧、僧問鏡淸、學人未知源、請師方便、淸云、是什麼源、僧云、其源、淸云、若是其源、有何方便、師云、鏡淸與這僧相見且置、如何是其源、卓拄杖一下云、行到水窮處、坐看雲起時。

七月旦上堂、僧問、火雲散空、秋期待時、不涉萬緣、如何商量、師云、曉風吹落葉、秋信到梧桐、僧云、黃龍有三關語、還許咨參麼無、師云、問將來、僧云、我手何似佛手、意旨如何、師云、散花燒香、僧云、我脚何似驢脚、又如何、師云、渡水過橋、僧云、如何是學人生緣處、師云、趙州東院西、又僧問、蟬鳴木末、蛩吟壁根、見成公案、逈絕商量、不涉唇吻、如何通津、師云、崑崙嚼生鐵、僧云、如何

是奪人不奪境、師云、夜深月孤明、僧云、如何是奪境不奪人、師云、花散盡鳥猶來、僧云、如何是人境兩俱奪、師云、花散盡鳥不來、僧云、如何是人境俱不奪、師云、遇茶喫茶、過飯喫飯、僧又問、記得、陸亘大夫問南泉、弟子家中有一片石、有時坐有時臥、鐫作得佛麼、此意如何、師云、任儞鐫作佛、僧云、泉云、得、又如何、師云、果然果然、僧云、又問、莫不得麼、泉云、不得、又如何、師云、有時得、有時不得、僧便禮拜。

師乃擧、乾峯和尙示衆云、擧一不得擧二、放過一着、落在第二、雲門出衆云、昨日有人從天台來、今朝却往南嶽去、師拈云、一人在高高峯頂立、一人在深深海底行、驀劄相逢、話盡山雲海月意、然雖如是、誰是知音者。

解夏小參、長期短期、結制解制、靈山舊話、古佛家風、雖然如是、衲僧家不管陳年曆日、自有肘後靈符、等閑擧步、踏著瞿曇眼睛、驀然伸手、觸著老胡鼻孔、東西南北、廻避無門、四維上下、在處逢渠、頭頭總是生涯、物物無非妙用、解結不二、與奪自在、直饒與麼、建長拄杖猶未放過在、何故、卓拄杖云、日月輪邊氣象高、魚龍穴下盤根固。

擧、大隋眞和尙因僧辭、隋問、什麼處去、僧云、峨眉禮普賢去、隋竪起拂子云、文殊普賢、總在者裏、僧畫一圓相、抛向背後、隋云、侍者將一貼茶與者僧去、師拈云、大隋竪起拂子、者僧打圓相、賓主歷然、雖然如是、隋云、侍者將一貼茶與者僧去、且道、肯佗不肯他、具眼者試辨取。

次日上堂、三月安居、羚羊掛角、九夏自恣、猛虎出林、要行便行、凜凜神威、廻絕羅籠、要住則住、壁立千仞、誰敢近傍、雖然如是、以手拍禪牀云、總不出者裏。

中秋上堂、寒山子馬簸箕等是翫月、建長門下、家風自別、別別、蝦蟇呑却中秋月。

上堂、擧、雲門大師示衆云、乾坤内宇宙間、中有一寶、秘在形山、師拈云、山僧看來、此寶非但秘在形山、今朝盡情拈出、普施大衆、看看、擲下拂子云、海人知貴不知價、留與人間作夜光。

九月旦上堂、庭開金菊宿根生、來鴈新聞一兩聲、咋夜七峯牽老與、千思萬想到天明、師拈云、五祖老漢只要人知時及節、諸人還知麼、福峯今朝發淸興。

佛光忌、拈香云、提起破沙盆、滅却正法眼、踏翻眞如境、抹過圓覺海、撈到巨福峯頂、直得白浪滔天、佛祖廻避無路、衲僧卒難近傍、莫謂而今韜光晦跡、諱日斯臨、面目全露、豎起香云、見麼見麼、燒一炷香、熏他鼻孔、佛光禪師莫怪觸忤。

重陽上堂、九月九是重陽、茱萸凝紫烟、黃菊帶露香、不是禪不是道、亦非西來祖意、畢竟如何、花根本艶。

開爐上堂、豎起拂子云、只這火種、無人見得、龍淵水底收拾將來、冷灰堆中幾回發焔、擬欲近傍燎却面門、看時不見暗昏昏地、建長爲爾諸人吹起看、以拂子吹一吹云、各自照顧眉毛。

達磨忌上堂、未離西竺救迷情、東土無人知此意、空向少林覓安心、更言携履還歸去、咦、元不來今何去、家家千古淸風匝地。

大通忌拈香云、空劫以前、威音那畔、早有靈根、無人收得、三世諸佛、歷代祖師、纔得些子氣息、敢不囊藏被蓋、競頭出來、貴買賤賣、全提半提、横拈倒用、一生拈弄不出、今日大通禪師三回諱辰、大檀那令山僧燒一炷香、山僧未免分明拈出、熏他鼻孔、何故如是、同參面前、不敢自謾。

次讃五部大乘經、師乃陞座云、恁麼恁麼、三世諸佛說不到、不恁麼不恁麼、歷代祖師提不起、不恁麼中却恁麼、天下衲僧名狀不出、恁麼不恁麼總不得、盡大地人亡鋒結舌、便與麼去、土曠人稀、若向這裏轉身行活路、撒手出那邊、便見大地山河、草木叢林、一一全體發機、明暗色空、見聞覺知、頭頭無非眞宗、所以道、法法不隱藏、古今常露、大藏小藏、從這裏流出、大機大用因此頓發、如來禪祖師意、向上機末後句、又何處得來、住住、只許老胡知、不許老胡會、今日大通禪師三回諱斯臨、諸門弟子、請山僧擧揚正法眼藏、殊不知山僧未登座以前、法法全彰、報恩已畢、且道、報恩已畢底一句、又作麼生、吾無隱乎爾。

虛堂忌拈香、建長與這老和尚相隨多年、面面相覷、眼眼相照、所以一年一度、燒一炷香、點一甌茶、不作楊岐女人拜、蘿蔔從來出鎭州。

謝新舊兩班上堂、進一步則珠走盤、退一步則盤走珠、轉轆轆活鱍鱍、全賓全主、全是全非、因甚如是、良久云、彼此出家兒。

冬至小參、陰魔殂伏、陽氣未生、大地平沈、渾無縫罅、老胡名狀不出、衲僧覷覰無門、便恁麼去、土曠人稀、相逢者少、建長今夜放一線道、通一針鋒去也、卓拄杖一下云、一氣從此潛通、萬彙從此發生、便見枯木開花、石筍抽條、普天和氣、徧界如春、正恁麼時、黑漆拄杖子、又作麼生、靠拄杖云、等閑靠却禪牀角、無限風光付與誰。

擧、慈明和尚冬日榜示僧堂前公案、拈云、若不是人天眼目、難爲辨明、雖然如是、上書三圓相、下書九畫、且道、明甚什邊事、來日一陽生。

十一月半上堂、歸宗和尙時有僧辭、宗云、時寒、途中善爲、拈云、歸宗年老心孤、慇懃送行、建長即不然、若有僧辭、只向他道、去也、何故、家家門首透長安。

臘八上堂、僧問、臘雪滿寒岡、溪梅一朶香、底事現成處、請師更擧揚、答云、天是天地是地、進云、記得、孝宗問佛照云、雪山六年、所成何事、照奏云、將謂陛下忘却、意旨作麼生、答云、天鑑無私、進云、孝宗龍顏大悅、是得何道理、答云、日照天臨、進云、當時若遇孝宗問雪山六年、所成何事、未審和尙如何奏對、答云、雪山雪寒徹骨、進云、只如世尊未見明星以前、在甚處行履、答云、鷲峯山色靑更靑、僧便禮拜。

師乃云、老瞿曇老瞿曇、有來由沒巴鼻、元不降閻浮、何曾上雪嶺、若言見明星悟去、承虛接響、將錯就錯、旣然如是、因甚靈山有密旨、良久云、參。

上堂、擧、金峰有僧來參、峰云、吾有一則因緣、擧似儞、切忌錯會、僧作聽勢、峰云、早錯了也、僧拂袖便出、峰云、雪上更加霜、師拈云、高山流水、子期能聽之、是則是、且道、峰云雪上更加霜、又作麼生、無限淸風來未休。

新開昭堂陞座、乃云、乾坤未剖、大塊無象、諸佛不出世、祖師不西來、人人頂門具眼、箇箇皮下有血、純樂無爲之化、追囘太古之風、所以德山云、吾宗無語句、無一法與人、趙州云、佛之一字、我不喜聞、點檢將來、二老漢只解無佛處稱尊、建長即不然、一莖草上現法王刹、一微塵裏轉大法輪、一切處建立、一切處成就、頭頭合轍、處處逢原、正恁麼時、且道、承誰恩力、卓拄杖云、皇天無親、惟德是輔。

擧、僧問雲門、如何是諸佛出身處、門云、東山水上行、是卽是、山僧不然、梵刹已立、今日開堂、師初寓正觀寺、佛成道日、太守請就府裏拈香、云、空劫以前、威音那畔、早有這箇、熏天炙地、昔日釋迦老子、纔得些子臭氣、四十九年三百餘會、直說曲說說不盡、横拈倒用用未已、今朝臘月八日、落在山僧手裏、大檀主一覷覷着、直得供養這老子、不是報恩幷酬德、只要徧界香風起。

建長寺語錄 終

法語

示三條二品資緒卿

頂門一着、古今難為辨明、見成公案、當頭如何領略、直饒未言先領、猶是鈍漢、未擧先知、不是俊流、所以道、向上一路、千聖不傳、學者勞形、如猿捉影、到這裏如何湊泊、如何踐履、想見吾二品尊閤、別有見處、請出他一頭地、高着眼覷、若也忽然一覷覷得破、方知道末後一句始到牢關。

示玄提禪人

世尊拈花、迦葉微笑、金不博金、水不洗水、自此遞代相尋、承虛接響、一人傳與一人、便見從東過西、從西過東、禾山打鼓、祕魔擎叉、雪峰輥毬、俱胝竪指、麻三斤、柏樹子、自餘萬般施設、百千作用、一摸脫出、一串穿却、若是本分衲僧、誰管他家杓柄長短、不傾胡蘆酢越酸、只據自家見成、自作活計、提上人、向世尊未曾拈花以前、急着眼看、看來看去、工夫純熟一念相應、便見本來面目、本地風光、那時黃面老子、金色頭陀、立在下風、所以云、大丈夫先天地為心祖、提上人思之思之。

示元冲禪人

從上佛祖、出興於世、只據本分一着、略露目前些子、便見敲牀竪拂、打地擎叉、打鼓輥毬、搬土

拽石、千鈞之弩、不爲鼷鼠發機、雖然如是、冲上人偏歷江湖、久遊叢林、不管這般陳年曆日、只據自家見成活路、東行西行、如冲天鷂子、眨眼便過那邊、其如未然、生佛未具、世界未分以前、直下看取、二六時中、行住坐臥、綿綿密密、看來看去、工夫純熟、驀忽一念相應、生死心破、便見本來面目、本地風光、一一分明、恰如十日幷照相似、到這田地、更須子細、何故、末後一句始到牢關、冲上人相聚一夏、忽起他山之興、臨行求語、信筆書之、以塞其請。

示空證禪人

佛祖一大事因緣、不離日用應緣之中、不隔此土他方之間、亘古亘今、輝天鑑地、所以道、塵劫來事、只在而今、只貴當人具大丈夫氣槩、向朕兆未分之時、文彩未彰以前、猛着精彩、看來看去、工夫純熟、一念相應、生死心破、忽然明見本來面目、本地風光、一一分明、則與從上佛祖、同見同聞、同知同用、方得不負出家行脚本志、空證禪人勉之勉之。

示玄安浴主

頂門一着、末後一機、纔擬尋思、白雲萬里、直饒望刹竿便回、見招手横趨、猶是半提、未爲全機作略、安浴主遍參諸方、久在叢林、莫守古人途轍、直須自行一條活路子、東州西州、脚頭脚底直下用得去、方知頂門一着、輝天鑑地、耀古騰今、正是自家安身立命處也、崇福恁麼道、也只是借水獻花、不曾加一點外料、上人思之思之。

示玄臺比丘尼

京師玄臺大姉、慕道之志親切、常來請益此段大事因緣、予一日示渠云、百尺竿頭進歩、渠云、

百尺竿頭無進步處、予云、向無進步處、更進千百步、方得丹霄獨步、徧界全身也、渠唯唯微笑而已、雖未得領略去、不同尋常平地上踪跟底漢、今欲歸故都、袖香來覓一語、予曾做茶陵郁山主贊、仍書之云、竿頭進步尋常路、最苦溪邊喫攧時、大地山河截不起、虛空含笑滿驢腮、請禪尼時時提起看、百尺竿頭如何進步、驀忽時節到來、進得這一步子、虛空含笑定矣、記取記取。

示玄傑禪人

玄傑禪人、結夏以前、曾來相見問道、予云、我爲上座不曾覆藏、傑無語、去後夏了復來、相見云、和尙不覆藏處、學人會了、予云、如何是我不覆藏處、傑云、學人爲和尙不覆藏、予云、今日非非想天、有幾人退位、傑云、不知、予云、我不覆藏處、上座未知在、更問、麻三斤柏樹子、一切語言、予不曾覆藏、上座會否、云、不會、予故云、我不覆藏處、上座未會在、豈不見道、世尊有密語、迦葉不覆藏、上座若知迦葉不覆藏處、便知世尊密語、其如未然、船舷未跨以前、高着眼看、兩岸蘆花、一葉扁舟、爲上座覆藏耶不覆藏耶、咄、傑禪人今歸故都、若相見玄珍法兄、只恁麼擧似看、臨行袖紙求語、予不加一點外料、信筆書之、以塞其請而已。

示曇翁居士

從上佛祖出興於世、只據本分一着、事不獲已、略露目前些子、如擊石火閃電光相似、眨得眼來、三千里外、若是宿根靈利漢、宗師未開口以前、早知來由、方堪共語、其如未然、一念未起、文彩未彰之時、直下看取、一切時一切處、日用應緣之處、綿綿密密、看來看去、工夫純熟、驀忽時

節到來、一念相應、生死心破、明見本來面目、本地風光、到恁麼田地、聞見覺知、明暗色空、一一自家本來消息、更無一點外物、勉旃勉旃、豐州曇翁居士、慕道之念深切、遠來崇福、問日用工夫用心之處、予未免信筆書之、以塞其請而已。

示鏡圓上人　後住萬壽

臨濟當年辭黃檗、檗云、甚處去、濟云、不是河南、便是河北、檗便打、濟扭住棒、遂與一掌、檗呵呵大笑、喚侍者云、將百丈先師禪板拂子來、濟召侍者云、將火來、好兒終不使爺錢、檗云、汝但將去、已後坐却天下人舌頭在、這老漢憐兒不覺羞、圓上人、相聚岳峰四載、辨道志念堅確、日用不亂走作、忽起他山之興、來辭崇福、上人雖有索火之機、崇福無可分付禪板拂子、且道、與古人是同是別、若到三家村裏十字路頭逢人、不得錯擧。

示宗玄禪人

宗玄禪人、相從嶽峯一夏、辨道之念不群、常來請益大事因緣、予以本分事示之、夏末袖紙來求一語、若是大事因緣、斷斷不在言語上、三世諸佛、横說竪說、終是說不到、歷代祖師、全提半提、何曾提得起、崇福更是無開口分、禪人若是文彩未彰以前會得、當人頂門上、杲日當空、脚跟底清風匝地、崇福恁麼道、也是借水獻花、禪人思之思之。

示源朝道人

佛祖大事因緣、不離日用應緣之中、不隔此土他方之間、所以道、大唐國裏未打鼓、日本國中曾上堂、南山起雲、北山下雨、若是宿根靈利底漢、未擧早知、未言先領、不動歩而歷徧於大宋、

不開口而言滿於天下、句句朝宗、法法是令、頭頭合轍、處處逢源、源源朝道人其如未然、一念未與、文彩未彰以前、直下看取、二六時中、行住坐臥、綿綿密密、看來看去、履踐純熟、工夫眞實、驀然時節到來、一念相應、方知當人頂門上、脚跟底、壁立萬仞、輝大寶光、正恁麼時、從上佛祖立在下風、大事因緣當甚破草鞋、然雖如是、更須勉旃勉旃、何故、禹力不到處、河聲流向西、源朝道人、渡宋歸來、携卷來求一語、崇福未免、信筆書之。

示玄與禪人

玄與上人久在叢林、歷盡江湖、來遊崇山、相聚三載、看他正是本色道流、不同尋常亂走之輩、初秋夏末、他山興動、携紙來求一語、崇福未開口而言滿天下、何須特地求語、雖然如是、若喚作有語、畢竟道箇什麼、上人今歸故都、前路逢人、不得錯擧。

示眞證禪人

眞證禪人道聚久矣、今歸故都、臨行懷香、來求一語、吾宗無語句、無一法與人、須知當人分上、壁立萬仞、輝大法光、所以從上佛祖、出興於世、只爲諸人證明此事、不加一點外料、崇福更是無開口分、只貴具天然氣槩、向壁立萬仭處、直下全機受用、更無第二人也、雖然如是、行到葦屋渡頭、忽然撞著古帆未掛一句子、切忌錯下名言、眞證禪人、記取記取。

法語終

佛祖贊

觀音　六首

圓通境處處明、瓶水活柳眼青、更有寒巖翠竹在、時人何事太忙生。

巖峋峋水粼粼、圓通境觸處新、覿面相逢人不識、衆生何日脱迷津。

蓮華常携手、獨自立巍巍、童子來相訪、無言眼似眉、須知合掌低頭外、箇事如何說向伊。

瀑泉聲冷淡、山嶽色幽奇、刹刹圓通境、善財那得知。

幽巖勢嶮巇、懸水發清機、刹刹圓通境、當頭入者稀。

雲淡淡水漫漫、普門現不相謾、咨詢童子未知有、空走百城煙浪寒。

文殊

師子騎來呈伎倆、無端現出小孩童、爭如七佛以前底、明月清風類不同。

達磨　五首

梁王殿上沒人識、揚子江頭折葦航、無限風波隨後起、至今東土沸如湯。

萬里西來、九年面壁、雪冷氷寒、山青水碧、少林消息尙依然、今古不知誰辨的。

西來消息、會者大難、蘆葉風冷、江波月寒。

鳳凰臺上月魂沈、少室峰前絕四隣、雪冷冰寒風颯颯、知音不是立庭人。

西天大破六宗異、東土却來示一心、蘆葦棲棲江水冷、至今千古少知音。

西山亮座主

分明指示處、覿面不相謾、雨過西山後、嵐光潑眼寒。

李源訪圓澤

相別又相見、情懷自惘然、風高月色冷、難寫舊因緣。

水上快和尚

一點靈光、輝天鑑地、左之右之、無是不是、黑漆竹篦劈面揮、凜凜淸風徧界起。

與聖月谷長老

頭髮鬔鬆雙眼靑、全提一句得人憎、龜毛拂子未曾動、凜凜淸風匝地生。

眞贊

遠州太守頂相

本光靈徹、凡聖同歸、不生不滅、絕離絕微、袈裟形相些些有、恰似丹霞選佛機。

修理亮殿形質

浮生二十八年事、夢破南柯一夜秋、雲淨月明風露冷、令人特地恨無休。

尼妙雲頂相

靈源不昧、觸處全眞、非男非女、絕類離倫、一段光明畫不就、從敎喚作末山人。

自贊

觀空禪人請

百無能得人憎、描不就畫不成、不知這般面目、當頭誰敢辨明、咄。

空證禪人請

口吞佛祖、眼蓋乾坤、水月莫比、松柏難論、咦、一段光明畫不就、寥寥千古鎭長存。

玄與禪人請

龜毛拂子、覿面全提、凜凜神威、佛眼難窺、世間無限丹青手、五彩如何畫得伊。

鏡圓上人請

卽此用、離此用、馬祖一喝百丈耳聾、老僧取拂不開口、公案圓成徧界通。

宗意禪人請

明歷歷露堂堂、沒巴鼻有來由、乾坤收不得、突出一毫頭。

佛祖贊終

小佛事

己上座起龕

不重己靈於內無心、不求千聖於外何尋、遊戲生死無可不可、高超象外、迥出古今、雖然如是、未爲親切、更須知有轉身時節、一番雨過一番涼、八月秋光何處熱。

觀上座起龕

有正見作正、觀觀至無觀、非我有全身、跳出生死關、且道、跳出後如何、撒手那邊去、寥寥天地寬。

光書記鎖龕

光境俱忘、聖凡路絕、照與照者同時寂滅、便恁麼去、只得一橛、更須知有上頭關、把定放行爲汝決、光書記還知麼、門背着鐶鎖子添鐵。

元上座起龕

混元未辨時、無生亦無死、直下便知歸、迥然絕依倚、雖然如是、切忌坐在這裏、彈指一聲云、元上座聞彈指聲從三昧起。

尊監寺秉火

無佛可尊、無道可學、鹽味本鹹、薑性元辣、這裏會去、死中得活、且道、得活後作麼生、倒跨楊岐

三脚驢、烈焰堆中弄蹄行。

太宰府都督少卿禪門秉火

豎起火把云、只這箇無變易、亘古亘今、輝天鑑地、所以太宰少卿禪門、柱石國家、常佐關東、全憑這箇恩力、名播九州、德傳四海、全憑這箇恩力、撫育萬民、覆蔭子孫、全憑這箇恩力、時節到來、出生入死、全憑這箇恩力、且道、這箇是什麼、山僧今日分明說破、擲下火把云、會麼、大地炎炎一團火。

妙慧禪尼下火

眞如慧光、徧界圓明、本來面目、觸處現成、松風颯颯、磵水冷冷、非男非女、非心非佛、若向者裏會去、拔出生死苦源、證得涅槃樂果、且道、以何爲驗、擲下火把云、丙丁童子來求火。

左金吾禪門法心秉火

春山絕點埃、春水漾虛碧、左金吾禪門法心、若向這裏領略得去、去來不以象、動靜不以心、不以心則昔日生也未曾生、不以象卽今時死也未嘗死、驀忽象心兩忘、瞥爾死生共泯、直得鬱鬱靑松、發本有光輝、森森翠竹、顯自受用三昧、步步是道場、處處皆淨邦、縱橫得妙、卷舒自由、便恁麼去時如何、擲下火把云、嗅烟蓬焞中、優曇香馥郁。

明靜大師下火

明中有暗、暗中有明、明暗兩忘、動靜俱泯、生死夢破、凡聖路絕、非男女相、越尼總持、便恁麼去、一點靈光輝天鑑地、雖然如是、末後一句重提掇、擲下火把云、火裏紅蓮香拂拂。

欽上座下火

欽敬諸方善知識、多年茫茫向外走、回頭踏着鄉關路、死却平生偸心去、雖然如是、死中得活時如何、擲下火把云、大地炎炎火發、須彌也須粉碎。

小佛事終

偈頌

泥塑達磨

身心一片如墻壁、弄假分明却像眞、更問西來緣底事、普通年遠幾經春。

月巖

靈山指出曹溪話、只麽傳來知幾年、今日回頭天外看、清光冷照斷崖前。

謝空首座送柑子 住東福藏山和尚、書中云洞庭柑

酸者酸兮甘者甘、未嘗下口齒先寒、舌頭若不具眼者、只作洞庭一樣看。

靜齋　二首

肯諾俱忘罷問津、寥寥四顧少知音、無言獨坐蘿窓下、却勝維摩一室深。

終日蕭然人不到、苔封古砌草離離、這般冷淡閑門戶、千聖如何着眼窺。

宏峰

巍巍獨立更無齊、雨洗風磨勢嶮巇、若不出頭天外看、玄微鳥道許誰知。

竹亭　和蘭溪和尚韻

高節虛心壓萬方、淸風戛玉滿軒涼、香嚴昔日不知有、擊着無端錯一場。

鴈碧池

一片虚凝徹底清、冷涵山影鬪寒青、當頭領此深深意、萬頃滄波潑眼明。

晏如

宇宙空來無一物、安然獨坐眼如眉、茫茫塵世誰辨我、冷淡生涯只自知。

濟翁

苦海中流要度人、海深何似此心深、年來老大無休歇、鼓棹高歌自賞音。

和鐵關病中韻

衆生毛病幾多般、因是鐵關常不安、縱有文殊來相訪、莫教容易露心肝。

上元後雪　二首　和蘭溪和尚韻

三夜明燈照佛庭、天龍呈瑞卒無停、鹽花滿地千重玉、銀屑飜空萬點星、皓色逼人難着眼、寒聲起粟不堪聽、須知此是豐年事、定應寰中分外寧。

萬點金燈照殿庭、臨晨瑞應不曾停、飄零玉碎冷修月、暗剪氷花飛似星、少室家風今尚在、靈山公案又重聽、老師高德感如是、天下蒼生賀太寧。

巨源　二首

滔滔萬派逼天下、流遠方知濶又深、容易難窮雲起處、桃花浪湧武陵春。

連天遍地濶無窮、正是曹溪一脈通、流遠方知深沒底、千波萬浪盡朝宗。

山上有亭　次韻

路遠幽巖腹、雲飛四面山、時增丘壑味、迥洗世塵艱、白鳥啣花去、遊人尋徑還、誰知彼絕頂、更

有上頭關。

竹林鐵關庵

斜曲分明指示人、也知多福老婆心、若還把定牢關去、百鳥啣花無處尋。

了如居士做僧　次韻三首

心空及第機猶鈍、碓觜生花未作家、爭似如翁今剃髮、與僧同喫一甌茶。

此回不裹龐公帽、肩擔伽梨共我家、直饒頂門開活眼、要須更喫趙州茶。

自從剗却殿前草、一段風流屬作家、人問衲衣底下事、當機只點一杯茶。

斷雲

卷去舒來片片奇、起從何處滅何歸、看他兩段元無間、只在太清一點時。

看山軒

獨倚危欄到夕陰、千峯具在一微塵、煙迷霧鎖濛朧處、見得分明有幾人。

賀寂庵藏主

瞿曇四十九年說、以字非兮八不成、今日寂庵重點出、百千妙義一時明。

和蒙古國信使趙宣撫韻　有東林遠之語二首

遠公不出虎溪意、非是淵明誰賞音、欲話箇中消息子、蒲輪何日到雲林。

外國高人來日本、相逢談笑露眞機、殊方異域無差路、目擊道存更有誰。

送宗簡侍者遊方

三呼三應險關外、向上須知有活機、若到諸方參得徹、歸來急急扣巖扉。

送心侍者之豐州

老來無力頻三喚、一任秋風助發機、此去豐城溪畔看、飜空黃葉爲誰飛。

和悟藏主韻　住圓覺桃溪和尚

相逢道伴交肩過、山自青兮水自清、後夜無人知此意、屋頭唯聽野猿驚。

送義侍者

國師三喚便三應、已墮拈花微笑機、口未開時先薦得、家鄉元在洛陽西。

次資緒卿韻

常思詩人錦繡腸、氣如虹色映朝陽、此文未喪今猶在、目擊道存意自長。

竺翁

西天此土風光別、箇事如何說向人、口未開時鬢已雪、拈花消息幾經春。

石牛

頭尾全彰空劫前、不隨群隊自安眠、古今徧界難藏處、兩角崢嶸鼻遼天。

隱溪

世上無人來問我、山深唯聽磵泉聲、一從這裏挨得入、獨自枕流看月明。

空庵　二首

四面家家無一物、纔存毫髮路難通、鳥啼花笑樹梢外、只見三更月到窓。

威音那畔家風別、不立門庭誰敢通、百鳥啣花無覓處、月明只在緑蘿中

古山

巍巍峭峻難窮頂、雨洗風磨不記年、莫謂劫空消息斷、春來花鳥尚依然。

送玄悟禪人

敲磕門庭言未盡、烏藤拈却問春風、衲僧活計又如是、天外不知誰與同。

桂堂

秋來群木添蕭索、獨有丹根花正開、無限清香收不得、夜深和月滿空堦。

花翁

曾在桃源誇上色、風光漏泄到人間、老來不改紅粉面、誰識心肝如鐵山。

敬叟

叉手低頭賓主分、從來非禮未曾聞、而今老大猶如是、無限幽懷誰與論。

題小池

彌泉湛湛色如藍、山影水光潑眼寒、到此若能親見底、無風颯颯起波瀾。

化浴　四首

拈來木杓驀頭澆、不洗體兮不洗塵、只要惺惺歷歷去、諸方自有賞音人。

一滴性空清淨水、宣明妙觸十成身、而今猶要從頭洗、本地風光轉見新。

要見本來眞面目、大家着力洗將來、諸方自有知音在、聽得一時笑眼開。

無位眞人汗似雨、好將涓滴一時澆、教他歷歷惺惺去、聽得知音笑點頭。

柏樹下雪達磨

通身一片似銀山、風彩逼人毛骨寒、欲問西來端的意、庭前柏樹露心肝。

引清軒

三更月照幽窓外、松竹青青碧欲流、因思祖翁敗闕處、至今千古卒難收。

牛溪

昔時巣父臨流處、草自青兮水自清、劈箭機前一句子、至今千古轉分明。

雪師子

百億毛頭同一色、毛前毛後白漫漫、當陽突出難辨處、凜凜威風匝地寒。

諸庵

一從自辨肯心後、驗盡諸方眼底空、雲鎖蘿窓過客少、幾回獨喚主人公。

泥牛

頭角崢嶸鼻遼天、春風影裏自安眠、直饒溈老難收處、鬬入海門明月前。

西疇

初祖當年曾踏着、分明脚下草離離、可憐只這片田地、萬古千秋耕者稀。

雪

看看變成銀世界、文殊蹤跡卒難尋、趙州不在明白裏、誰解此時一片心。

和泉石韻

水漱雲根來處異、分明源脈出蓬壺、磷磷岸石壓台嶺、湛湛金池勝太湖、松竹影斜浸碧玉、瀑泉聲碎散眞珠、遊人到此忘歸路、不覺擧頭日欲晡。
流泉瀉岸聲無欲、一滴曹源知幾深、波浪莫言如相似、當頭薦取月光沈。

偈頌　終

圓通大應國師塔銘

杭州路中天竺天曆萬壽永祚禪寺住持廷俊撰

圓悟之道、支而爲二、一爲大慧杲、一爲虎丘隆、隆三傳而爲松源岳、岳一傳而爲運庵巖、再傳而爲虛堂愚、得虛堂之傳而在日東者、建長禪寺圓通大應國師也、國師諱紹明、字南浦、駿州安部縣人、出藤氏、幼事本州建穗寺淨辯師、學出世法、年十五薙髮受具戒、往依建長蘭溪隆公、正元間航海至宋、徧參知識、虛堂愚公主淨慈、門庭高峻、學者望崖而却、師往禮謁、堂曰、古帆未掛時如何、師云、蟭螟眼裏五須彌、堂云、掛後如何、師云、黃河向北流、堂云、未在、更道、師云、某甲恁麼、和尚又作麼生、堂云、黃河向北流、師云、和尚莫謾人好、堂云、參堂去、久而命典賓客、日夕咨扣、一日使善畫者寫堂壽像請贊、堂援筆書曰、紹既明白、語不失宗、手頭簸弄、金圈栗蓬、大唐國裏無人會、又却乘流過海東、時咸淳改元之夏六月也、是年秋八月、堂奉　詔遷徑山、俾師與俱、師益策勵、一夕於靜定中起大悟、呈偈曰、忽然心境共忘時、大地山河透脫機、法王法身全體現、時人相對不相知、堂巡寮報衆曰、這漢參禪大徹矣、自是一衆改觀、咸淳三年秋、師辭歸日本、堂贈以偈曰、敲磕門庭細揣摩、路頭盡處再經過、明明說與虛堂叟、東海兒孫日轉多、復書其後曰、明知客自發明後、欲告歸日本、尋照知客・通首座・源長老、聚頭語龍峯會裏家私、袖紙求法語、老僧今年八十三、無力思索、一偈贐行、萬里水程以道珍衛、既歸、當本國

文永四年也、建長蘭溪卽命典藏教、秉拂提唱、有十載中華歷徧歸、未將佛法掛脣皮、無端今夜始開口、鐵樹生花正是時之語、文永七年秋徙西都、出世筑州之興德禪寺、遂以嗣法書幷入院語、因曇侍者呈徑山、堂得之大喜、謂衆曰、吾道東矣、其爲堂器重如此、又明年移太宰府之崇福、居三十三年、參徒日盛、嘉元甲辰、奉　詔入京師、　太上皇召對宮掖、問答稱　旨、特差住持輦下萬壽禪寺、貴遊問道者、車馬日駢集、又以東山故址、與造嘉元禪刹、延師爲第一祖、德治丁未、奉　旨赴關東、留正觀寺、而相州太守平崇演、請師卽署所演法、復敷奏、請主巨福山建長興國禪寺、明年春　太上皇降手詔存問、恩禮優至、當入寺之夕、小參有曰、今年臘月二十九日、來無所來、明年臘月二十九日、去無所去、衆驚訝莫諭其意、明年當延慶戊申臘月二十九日、忽示微疾、至二鼓、手書偈曰、訶風罵雨、佛祖不知、一機瞥轉、閃電猶遲、書畢跏趺而逝、世壽七十有四、坐六十夏、所度弟子宗雲・宗意等千有餘人、嗣其法而分居列刹者、與聖忠・崇福運・南禪卓・南禪圓・萬壽禪・建仁然・崇福一・萬壽心・大德超・崇福津・聖福胤・建長什・崇福龍・龍翔友等若干人、奉龕闍維、獲設利無算、事聞、　皇上哀慕不已、勅謚圓通大應國師、仍勅建寺西京、額曰龍翔、塔骨石舍利于寺之後山、塔曰普光、庵曰祥雲、弟子在建長者奉舍利瘗之、塔曰天源、弟子在崇福者、奉舍利建塔、庵曰瑞雲、他日瑞雲火、及半天忽雨雪、火遂滅、求所藏舍利塔、失所在、門人方憂駭、至夜半、巖阿發光、迹之得焉、遠近尤異之、至正二十五年夏四月、比丘省吾、持其師住筑州安國山聖福禪寺國師之門人宗規、所撰行狀來、徵言銘師之塔、惟法道之在天下、無間乎海之內外也、日東諸國、佛僧尤爲蕃盛、若圓通大應國師之名震海

國、道契主上、致衆之歸如水赴壑、既寂尤著靈異、殆古佛馳願轂而來昭其化也、是宜銘、銘曰、

大荒之內東海東。鯨濤上與銀漢通。別有天地開鴻蒙。君臣禮樂諸夏同。
世代綿歷無終窮。故宋太宗歆淳風。尤能傾誠事覺雄。金銀高張釋梵宮。
抑有耆碩居其中。宜爾雜遝來象龍。圓通大應國宗工。佩毗盧印開盲聾。
卓行懿德簡淵衷。寵錫異數禮益隆。所至擊皷橫撞鐘。
天人圍繞華雨濛。龍伯贔屭蛟鼉充。啓覺茫蠢超凡庸。尅期遠化示有終。
獸鬼躑躅涕無從。火餘設利光曈曈。海天不夜貫長虹。窣堵鼎峙海上峯。
山君川后謹堂封。虛堂之道光禪叢。亶惟國師劭厥躬。南山峩峩石可攻。
勒之于以昭玄功。百世過者宜肅恭。

圓通大應國師塔銘終

時應安五年歲次壬子冬十二月十五日、西京龍翔禪寺住持法孫比丘宗興、命工入梓。

前妙興禪寺住持法孫比丘性守助緣。

前眞如禪寺住持法孫比丘宗任同助。

筑州聖福禪寺住持法孫比丘宗越同助。

前崇福禪寺住持法孫比丘宗璨同助。

跋

提殺人刀秉活人劍、須還作家手段、方堪任用、苟失其正、非唯血指及身、益且魂驚膽落、莫知柄欛何似、今覽 與德堂頭南浦法兄禪師、擧揚綱要、有如長劍快馬、運轉如風、畧無縫罅可容窺測、若其眨眼之流、豈止橫死萬里、余意、虛堂老伯、未必有此作也、所謂智過於師、方堪傳受者、於斯盡矣、因爲書于卷末、時文永壬申季春。

大宋國屬末比丘西澗子曇

楊岐之道、四葉而得圓悟、大其門起其宗、六葉而得應庵、法益光、道益盛、密庵之道、亦四葉而得虛堂、虛堂之道、若大霆之震浮世、如碧潭之瑩秋月、堂之下、葉葉有光、如寶葉源公・竹窓喜公・閑極雲公・葛廬曇公・靈石芝公、皆有語、行於世者、日本南浦明公禪師、遊歷巨宋大叢林、參虛堂得正傳、歸本國行道、今觀其四會語、上堂・小參・拈古・頌古・法語及貽贈之作、如折栴檀片片皆香、伏讀不忍去手、信知得的旨者迥然殊別也、余於日本宿有緣起、故來、獲觀此錄、亦不枉東海之一行也。

時元德庚午孟夏結制前五日　　建長住山法姪比丘楚俊敬跋

蟭螟眼裏五須彌、靠倒虛堂老古錐、四會搏桑熾然說、曾無一字掛唇皮。

洪武三年歳在庚戌佛制日　雙徑山主智及拜題

圓通大應國師四岃録、其板强半雖存、多年沈庫底、蒙塵不能出、其餘散彼失此、無處覓、偶有亦蚪書上加蟲文、則有義還同無義、直歳集以燒、助熶下火、粤國師之下十三世江月玩和尚、命工刀之、繼之爲全部、以置之普光之塔、易曰、一陰一陽之謂道、繼之者善也、此知繼之者、之爲天地之大善矣。

寛永辛巳孟秋日　遠孫比丘澤庵宗彭

圓通大應國師語錄終

國譯緇門寶藏集

解題

本書は丹波千ヶ畑の法常寺開山、勅賜定慧明光佛頂國師一絲和尚の撰にして、三卷二十二章より成り、始めには、學道の要は信心を決定して、生死の大事を信得すべきことを述べ、終には履踐の工夫を辨じて、大休歇の田地に到るを以て其の極致となすを說く。而して其の中間には、師友を擇び、本性を徹見し、心を明むるの理、坐禪を修得するの方、工夫を用ひるの要、及び向上末後、邪正賓主の句に到るまで部類を分ちて列記し、間々評論を加へて之を折衷せり。而も其の所說は丁寧懇切にして、寧ろ老婆親切に過ぐるの想あり。是を以て本書は、古來、參玄の徒、皆襲藏して學道の指針に供せり。

國師の傳を案ずるに、師、名は文守、字は一絲、木工頭岩倉具堯の第三子にして、母は左中將園基繼の女、後陽成天皇の慶長十三年十二月二十七日を以て京師に生る。八歲にして禁中に召され、皇太后中和門院に奉仕し、十四歲の時、相國寺の雪岑梵岑に就いて和漢の書を習ひ、日夜怠ることなし。十九歲の時、禪錄を閱して半ば疑ひ半ば信じ、乃ち泉州堺に赴きて澤庵宗彭和尚に參じて疑義を質す。爾來、誠を傾けて澤庵に歸向し、後、槇尾山に往いて賢俊律師に投じて律學を究む。寛永四年、師年二十、一

夕飄然として槇尾を去り、泉州に走つて復た澤庵に參ず。同六年の秋、偶々澤庵、幕府の意に忤ひ、羽州上の山に謫せられしかば、國師も亦九月、羽州に下りて澤庵を春雨庵に省す。翌七年の春、羽州を辭して京師に歸り、草庵を洛の西方西ケ岡に結びて閑夢と扁し、專ら禪燕を樂む。此の頃、近衛信尋、烏丸光廣等の諸公、屢々師を山庵に訪ねて禪談を試む。又、後水尾上皇、師の道價を聞き、召して法要を咨問し給ひ、大いに皇情に愜ふ。同九年秋八月、丹波の九路峯下に一庵を創し、二三の衲子と共に拈坐して古道を激稱す。時に烏丸光廣、師の消息を案じ、身を虛無僧に變じて師の庵居を尋ね、漸く相見することを得て互に相慶べり。而も其の庵室たるや僅かに方丈の茅屋のみ。是に於て光廣、翌寛永十一年桐江庵を九路山下に創し、師をして之に居らしむ。師一日、齋後、庵前の大柚樹下を過ぎり、忽然として大悟す。是れより家風益々嚴峻にして、四來の玄徒、皆崖を望んで退かざるものなく、偶々其の門に登るものあれば、是れ悉く叢林淸練の衲子ならざるはなし。時に後水尾上皇、近臣に命じて洛北西加茂村に靈源寺を創し、師をして開山第一世たらしむ。然れども師、錫を靈源に留むること僅かに一月餘、再び丹波の故棲に歸れり。故を以て上皇、又詔して桐江庵を鼎新して、大梅山法常寺と號し、同じく師をして第一世たらしむ。是れ實に寛永十八年の春にして、國師三十四歲の時なり。偶々江州永源寺の空子元普、國師の道風を仰慕し、丹山に來りて永源の法席を董さんことを請ふ。師堅く辭すれども聽かず。遂に其の請を許して、同二十年秋八月、錫を永源に進めて其の第八十代の住持となる。此の間、愚

堂、雲居の諸老と商量往來し、遂に愚堂の法嗣となる。是れ實に寛永二十年にして國師三十六歳の時なり。正保二年、師疾に罹り、醫藥効ありしも、翌年春、再び發す。上皇、叡慮を煩し給ひ、醫を遣はし、又有馬の温泉に浴せしめ、殊遇至らざるなかりしも、三月に入りて病益々重く、十六日の晡時、左右に謂つて曰く、「吾れ近日行脚せん、汝等、祖道を以て念とせよ。初志に負くこと勿れ」と。十九日に至り、案に靠つて坐し、午時に至り、右脇に臥して寂す。世壽三十九、法臘二十。全身を瑞石の後山に葬り、遺髪を法常寺に收む。塔を淵默と曰ふ。延寶六年の春、詔して定慧明光佛頂國師の謚號を賜ふ。滅後、門人其の遺稿を蒐輯して語錄五卷を編し、今猶ほ世に行はる。師の著作は此の外、東觀紀行一卷(寫本)、緇門寶藏集垂誡、大梅夜話、信心銘辨注一卷などあり。其の附法の弟子に、石鼎文頑、如雪文巖、智明淨因、了誼、光頓、中郁、其の他數輩あり。師はまた丹青の道に秀で、小堀政一、松花堂昭乘等と方外の友たり。法務の餘暇、繪筆を揮つて能く一筆畫を描く。畫は粗淡なれども頗る氣韻ありて、遺品今猶ほ世に珍重せらる。又茶道を善くせり。

國譯重刊緇門寶藏集叙

道本と言なし、言に由つて道を顯す。是の故に㋑漫錄あり、寶訓あり、筆語あり、武庫あり。伏して惟れば、一絲守和尚、初め洛の西岡に隱れ、後丹山に入りて、杳として蹤跡を絕す。然れども湖海の㋺緇徒、繭足して風に走り、樹に就いて茅を縛する者、其の幾ばくと云ふことを知らず。終に名、㋩九重に達して、法常、靈源の二刹を開榛し、特に徽號を賜ふて、定慧明光佛頂國師と曰ふ。住庵の古標を示すの暇、佛祖の遺言往行を㋥捃摭して間々㋭品藻を加へて、名けて緇門寶藏集と曰ふ。㋬軒かに知る、㋣昏衢の慧炬、病家の良藥なることを。翅だ今時を利するのみにあらず、抑々亦化を後昆に垂るゝ者歟。善、因つて加ること蔑し焉。嗚呼寶永の頃、㋠池魚の患に罹りて、板、烏有と成る。世に行はんと欲すれども、未だ由ならくのみ。邇日、一僧あり、重ねて梓に鏤めて、之が弘通を圖る。㋷其の功を傢すに臨んで、叙を予に謁ふ。確辭すれども可かず、言に㋦譾劣を忘れて、蕪語以て卷首に題す。參玄の徒、行餘力

㋑漫錄は次第種類を別たずして、次ぎ次ぎにものせる禪家の語錄、又は兼行の徒然草、鳩巣の駿臺雜話、長明の方丈記、枕の草紙の類、皆漫錄なり。
㋺緇徒は僧徒、或は僧侶なり。
㋩九重は朝廷の意なり。
㋥捃摭はひろひ採るなり。
㋭品藻は批評の言葉なり。
㋬軒かには明かになり。
㋣昏衢の慧炬は暗夜の燈に同じ。
㋠池魚の患は類燒の災なり、昔

あるときは、且つ繙き且つ閲して、拳々服膺せば、一字々々一言々々、果して國師の骨髓なることを知らん。此れ又言に由つて道を顯す者にあらずや。然るときは寶藏を豁開して、家珍を運出すること斯に在り。然りと雖も、玉匙金鑰、今何人の手裡にか歸す、道ふこと勿れ、新羅は海東に在りと。

安永第八星躔己亥孟冬日　前華嶽良哉元明謹撰

俗通に曰く、城門火災を失すれば、殃、池魚に及ぶと。
(の)其功を傑すは、「書經」にあり、傑は顯はすの意なり。
(ヌ)謭劣は淺劣なり。

國譯緇門寶藏集卷之上

桐江庵主　文守　編輯

一　學道は須らく決定信を生ずることを要すべし

佛曰く、「信は道元功徳の母たり、一切の諸善法を長養し、㋑疑網を斷除し、愛流を出でゝ、㋺無上道を開示す。」又云く、「信は能く智功徳を增長し、信は能く必ず如來地に到る。」と。經に曰く、「信は能く永く煩惱の本を斷ず。」又云く、「信は能く速かに解脫門を證す。」と。

高峯妙和尚曰く、「從上若しくは佛、若しくは祖、㋩彼岸に超登し、大法輪を轉じ、攝物利生、此の一個の信の字の中に由つて流出せずと云ふこと莫し。昔、善星比丘あり、佛に侍ること二十年、左右を離れず、蓋し謂く、此の一箇の信の字なし、聖道を成せず、生ながら㋥泥犂に陷る。」と。

華嚴觀に曰く、「信ありて解なくば、無明を增長し、解ありて信なくば、邪見を增長す。信解圓通、方に行の本たり云云。」又云く、「信ありて法界を信ぜざれば、信是れ邪なり。」

㋑疑網は疑問、或は疑惑なり。
㋺無上道は無上菩提と云ふが如く、見性悟了の意なり。
㋩彼岸は菩提、涅槃を得る事にて、大悟徹底の意なり。
㋥泥犂は耕牛を謂ふ。

大慧禪師曰く、「正信を具し、正志を立す。此れ乃ち成佛作祖の基本なり。」（ホ）舍利弗曰く、「信を以て得入す、己が智分に非ず。」

（ヘ）智度論に云く、「佛言く、『若し人信あれば、能く我が大法海の中に入りて能く沙門の果を得て、空しく剃頭染衣せず。若し信なければ、是の人、我が大法海に入ること能はず。枯樹の華實を生ぜざるが如く、沙門の果を得ず。剃頭染衣して、種々の經を讀み、難を能くし答を能くすと雖も、佛法の中に於て、空しく所得なし。』是の義を以ての故に、佛法の初に在り。」と、善は信根に依るが故に、

經に云く、「佛法の大海は、信を能入と爲す。」と。

二　學道は須らく生死の大事を信得することを要すべし

無業國師曰く、「只這の口食身衣、盡く是れ賢を欺き聖を罔して、求德將來、他心恵眼、之れを觀る、膿血を喫するが如くに、（ト）一般なり。總に須らく他に償ふて、始めて得べし、云云。」又曰く、「臨終の時、一毫も凡聖の情量盡きず、纖塵も思念未だ忘れずんば、念に隨ひ生を受けて、輕重の五陰、驢胎馬腹の裏に向つて、託質泥犂、（チ）鑊湯裏に煑煠せらるゝこと、一徧し了らん。從前の記持憶想、見

（ホ）舍利弗は梵語 Sâriputra にして、佛、十大弟子の一なり、其眼舍利鳥に似、又母を舍利と云ふ故に、舍利弗と云ふ、弗は梵語弗多羅 (Putra) にして子の意なり、佛弟子中智惠第一を以て稱せらる。

（ヘ）智度論は印度龍樹の造、姚秦の羅什三藏これを漢譯す、大品般若經九十品の註釋なれども、解說精密多面に亙り、あらゆる當時の思想傳說を網羅し、一種の百科辭典の體を爲す、一部百卷より成る。

（ト）一般なりは相似たり、或は相等しの意なり。

（チ）鑊湯裏は煮湯也。

解智慧、都盧一時に失却して、依前として再び㋾螻蟻蚊虻と爲る。」

如今、學佛の徒、日に學び月に積んで、功を爲す者、記持憶想、見解智慧の八字を出です。這箇、已に一時に失却するが如し、畢竟何を以てか佗の生死に敵せん。眞正の學人、豈に著忙せざることを得んや。

大慧禪師曰く、「某、未だ睡著せざる時の如し。佛の讃し玉ふところの者は、依つて之を行ふ、佛の訶し玉ふところの者は、敢て違犯せず。從前、師に依る、及び自ら工夫を做す、零碎たる所得の者の惺々たる時は都べて受用することを得。牀に上りて半惺半覺の時に及んでは、已に主宰と作ることを得ず。夢に金寶を得と見ては、夢中に歡喜すること限なし。夢に人に刀杖を以て相逼られ、及び諸の惡境界を見ては、則ち夢中に㋦怕怖惶恐す。自ら念ふ、此の身尚ほ存す、只是れ睡著すれば、已に㋸主宰と作ることを得ず。況んや地水火風分散して、衆苦熾然たらんに、如何が囘換せらるゝことを得ん。這裏に到つて方に始めて著忙す。」

妙喜翁、二十餘歳より三十六に甫るまで、此の大疑を懷く。一日忽ち圓悟一言の下に在りて、始めて平穩を得。蓋し他の上梢、只生死を怕るゝの心切なるが爲に、又實に生死に敵するの法を明めざるときは、自休し能はざるのみ。今の學者、初より深く生死を怕るゝの正念なく、只だ麤心淺志を

㋾螻蟻は「けらむし」なり。
㋦怕怖惶恐は怖るゝなり。
㋸主宰は我の意なり。

將て參禪學道、纔かに小見小解を得て、以て萬足と爲す。嗚呼。古今の異、是の岐に因る、宜なるかな矣哉。

人天寶鑑に云く、「湖南の雲蓋山智禪師夜丈室に坐す。忽ち焦灼の氣、枷鎖の聲を聞く。卽いて之を見れば、廼ち火枷を荷ふ者あり、火猶ほ起滅して停らず、枷尾、門閫に依る。智驚いて問うて曰く、『汝をば誰とか爲す、苦、斯の極に至るや。』枷を荷ふ者對へて曰く、『前住當山守顒也。不合に互に檀越の僧に供する物を將て、僧堂を造る故に、此の苦を受く。』智曰く、『何の方便を作してか免るべき。』顒曰く、『望むらくは、僧堂を估直して、僧供に塡設することをせば、免るべきのみ。』智、己が貲を以て、其の言の如くして、爲めに之を償ふ。一夕夢に顒、謝して曰く、『師の力に賴つて、地獄の苦を免れて、人天の中に生ずることを獲たり。三生の後、復た僧と爲るを得ん。』今に門閫燒痕猶ほ存せり。」（淸規）

㋑王荊公が子、雱、所爲不善なり、雱死して後、荊公、恍然として、雱が鐵枷を荷ひ門の側に立つを見る。是れに因つて宅を捨てて寺と爲し、雱が爲めに冥福を㋺追薦す。（名臣言行錄）

山庵恕中禪師曰く、「杭州天目山の義斷崖は、高峯に見えて旨を得たり、歸向する者甚だ多し。既に死して夢を現じて、吳興細民の家に託生す。後に僧と爲る。名は瑞應、字は寶曇、幼より壯に至りて、人の禮拜供養を受くること虛日なし。余、天界に寓居せし時、寶曇も亦在り。隣居すること頗る久し、

㋑王荊公は王安石の事なり、宋人、孟嘗君の傳を作る。
㋺追薦は追善供養なり。

其の所爲を察するに、碌々として常人と以て異なることなし。間々己躬の事を以て、之を叩く者有れば、但だ㋕慚惶するのみ。前身、實に常人に非ず、胡ぞ乃し頓に前世の所習を忘るゝこと是くの如きや。」古人の曰く、「聲聞尙ほ出胎に昧く、菩薩猶ほ隔陰に迷ふ。然るときは修行の人、愼まざる可けんや。」と。（山庵雜錄）

又曰く、「洪武庚戌の冬、奉化の田子中、余を太白に訪ふ。同居するもの久し。余偶々言ふ、『金剛般若經は、㋵閻羅王界に、稱して功德經と爲す、故に世人、亡者を薦むるに多く之を讀む。』子中誓つて身を終るまで受持す。一日、其の母の諱日に値ふて、發心して此の經を誦すること百過、以て薦む。晨に起きて松榻の上に坐して、方に誦して九遍に至る。鬼卒の一老嫗を枷杻して、榻前に跪かしむるを見る、髮㋟離披として面を覆ふ。熟々之を視れば、乃ち亡母なり。子中倉卒として爲す所を知らず、須臾に引き去る、將に枷を脫せんとするものの若し。是に於て子中、大いに泣く、恨むらくは卽時に經を輟めて、母と相勞問せざることを。余謂らく、此の經、功德の大なること、喩を云ふべからず。子中發心して持受するが若きんば、卽ち冥に陰界を感じて、母子をして兩び相見することを得せしむ、以て其の苦を釋く。嗚呼、偉なるかな。」（山庵雜錄）

㋕慚惶は愧ぢるの意なり。

㋵閻羅王界は梵語閻魔羅(yama)の略、閻浮州の南方鐵圍山の外部にある地獄に住んで、常に十八の將官と八萬の獄卒とを從へて、世界の有情の死して地獄に來るものを審判し、之れを懲罰し、以て諸種の不善業を遮止す。

㋟離披は亂れ散る貌。

玄沙備禪師曰く、「如今、若し了ぜずんば、明朝後、驢胎馬肚の裏に入つて、犂を牽き、把を拽き、鐵を銜み、鞍を負ひ、碓擣磨々せられて、水火裏に燒煮し去らん。大いに容易に受けず、大いに須らく恐懼すべし。」と。

㋑鳩摩羅多尊者曰く、「善惡の報、三時あり。凡そ人但だ仁あつて㋺夭く、暴にして壽く、逆にして吉、義あつて凶なるを見て、便ち謂へり、因果を亡じ、罪福虛なりと。殊に知らず、影響の如くに相隨ふて、毫釐も忒ふことなきことを。縱ひ百千萬劫を經るとも、亦磨滅せず。」と。

經に曰く、「假使ひ百千劫にも、所作の業亡せず、因緣會遇の時、果報還つて自ら受く」と。

無業國師曰く、「嗟乎、人身を得る者は、㋩爪甲上の土の如く、人身を失ふ者は、大地の土の如し。良に傷むべき哉。」と。

三　學道は須らく佛祖の規範を毀犯せざることを要すべし

智論に云く、「㋥外典を學習するは、刀を以て泥を割くが如し。泥所成なくして、刀自ら損す。又日光を視るが如く、人の眼をして暗からしむ。」

今時の僧侶、未だ半卷の金文、一冊の語錄を解せず、還つて詩文を習ひ外典を讀む、尤も憐むべき

㋑鳩摩羅多尊者は、釋尊より十九の法嗣なり。

㋺夭くは夭折とて若死するを云ふ。

㋩爪甲上の土は爪の上に乘るだけの土の意にして、大地の土の多に比し、甚少なるを云ふ。

㋥外典は老、莊、儒、諸子百家の佛教以外の典籍を云ふ。

なり。然りと雖も、往古の高僧、或は異學に通じ、或は篇章を善す。其の意他なし、只だ外道を摧伏し、佛化を助通せんと要するのみ。是に因つて局見の陋儒、偏頗の俗士を驅り得て、以て内外護を成ずることは、蓋し此れに由れり。夫の大顛の㊉韓愈に於ける、明教の歐陽に於けるが如き、此れ其の人なり、豈に其れ今時の庸緇、才を衒ひ、能を飾り、名を求め、利を徼むるの類に同じからんや。謹んで道流に報す、器量分あり、世齢數あり、確く泥を塗くの誡を守りて、外典詩文等の書に觸るゝ莫れ。幸に佛祖の文字あり、工夫若し餘力有るときは、請ふ指を染めよ。

智覺禪師曰く、「若し婬を去らずんば、一切清淨の種を斷せん。若し酒を去らずんば、一切智惠の種を斷せん。若し盜を去らずんば、一切福德の種を斷せん。若し肉を去らずんば、一切慈悲の種を斷せん。」而今、門下の禪侶、此の婬盜酒肉に於て、確く一生不犯の力を得ば、以て我が家の種草と爲るに足らん。其の餘の微細の過患、自然に脱し去らん。蓋し他をして常に無心の道を擧ばしむるが故に。

㊀楞嚴經に曰く、「婬心除かずんば、塵出づべからず。縱ひ多智禪定現前すること有るとも、如し婬を斷せずんば、必ず魔道に落つ。若し婬を斷せずして、禪定を修する者は、砂石を蒸して、其の飯と成らんと欲するが

㊉韓愈は韓退之、文公と云ふ、儒學の大斗、晩年佛道に歸依す、始め佛骨の表を作りて潮州に貶せらる、其の文や佛を退くるにあり。然れ共當時の佛道蕩々として邪道に趣き、遂に荒唐の說をなして佛骨を宮中に入れ、これを安置するに至る、故に此表を上りて非を論ず。世人文公を評して儒學の徒と、文公何ぞしかく偏學ならんや、大道の存する所は、先聖同一軌なり。

如く、百千劫を經るとも、祇に熱砂と名けん。汝、婬身を以て、佛の妙果を求めば、縱ひ妙悟を得るとも、皆是れ婬根なり。根本婬を成ずれば、㋰三途に輪轉して、必ず出づること能はず、必ず婬機をして、身心倶に斷じて、斷性も亦無からしめば、佛菩提に於て、斯く希冀すべし。」

功德圓滿經に曰く、「末世の比丘、婬欲熾盛にして、日夜、小童を犯す、外相は僧に似て、內心は外道の如し。各男女を別つと雖も、所念の業因一なり。」

近古以來、禪門徒、男色を犯すを以て常と爲す。時俗循習して弊を爲す。更に其の非を知る者なし。至若、知識の名字を領ずる者も、亦忌み憚ること無きに至る、何ぞ其れ狂妄、此くの如く甚だしきや。竊かに他の男色に耽著する者を觀るに、其の愛纏嫉妬、塵俗の女色に荒むよりも甚だし。夫れ沙門は、佛祖の大事を以て念と爲す。又何の暇あつてか、塵俗の嗜む所に耽著せんや。山僧が會裏、失口にも這般の俗話を打することを許さず。何ぞ況んや他の少年の沙彌等に就いて、戲言戲動を做す者をや。

四　學道は須らく慚愧を生ずるを要すべし

希顏首座の釋難文に曰く、「蓋し家を出でて僧と爲る、豈に細事ならんや。安逸を求むるに非ず、㋗

㋒楞嚴經(Sūraṅgama-Sūtra)は具には「大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」と云ひ、又略して「首楞嚴經」とも云ふ。

㋰三途は三塗とも云ふ、地獄、餓鬼、畜生の三途なり。

㋗溫飽は溫き美衣を着け、又美食に飽かんとするを云ふ。

溫飽を求むるに非ず、蝸角の利名を求むるに非ず。生死の爲めなり、衆生の爲めなり、煩惱を斷じて、㊥三界海を出で、佛の惠命を續けんが爲めなり。聖を去ること、時遙かにして佛法大いに壞す、汝敢て妄りに爾ることを爲さんや。寶梁經に云く、『比丘、比丘の法を修せず、大千唾する處なし云々』と。六尺の身あつて、智惠なきを、佛、之を痴僧と謂ふ。三寸の舌あつて、說法すること能はず、佛、之を啞羊僧と謂ふ。僧に似て僧に非ず、俗に似て俗に非ず、佛、之を鳥鼠僧と謂ふ。亦禿居士と曰ふ。」

懶庵樞和尙曰く、「楞嚴經に云く、『云何ぞ、賊人我が衣服を假りて、如來を裨販し、種々の業を造る』と。若し戒を以て心を攝めずんば、縱饒ひ佛祖に齋するも、未だ如來を裨販し、種々の業を造ることを免れず。況んや、平々の人をや。」

高庵、雲居に住す。衲子室中に其の機に契はざる者を見る毎に、卽ち其の袂を把り、色を正して之を責めて曰く、「父母汝が身を養ひ、師友汝が志を成じ、飢寒の迫なく、征役の勞なし。此に於て堅確㋑精進にして、道業を成辨せずんば、他日何の面目あつてか、父母師友に見えんや。」衲子其の語を聞き、泣涕して已まざる者あり。其の號令整嚴なること、此くの如し。（禪門寶訓）

古德の法令、人を感せしむること此くの如し。古の衲子、至誠を以て道を求むること此くの如し。

㊥三界は欲界、色界、無色界の三なり。

㋑精進は六度の一にして、奮勵努力して惡を止め善を進むるを云ふ。

今五百歳に垂んとすと雖も、若し眞實辨道の衲子有りて、之を讀まば、豈に寒心せざることを得んや。

雲峯悦和尙、小參の略に云く、「豈に見ずや、敎中に道ふ、寧ろ熱鐵を以て身に纒ふとも、信心の人の衣を受けず。寧ろ洋銅を以て、口に灌ぐとも、信心の人の食を受けず。上座若しや是にし去らば、直饒ひ大地を變じて黃金と作し、長河を攪いて㋔酥酪と爲し、上座に供養すとも、未だ分外と爲さず。若しや未だ是ならずんば、滴水寸絲に至つても、便ち須らく被毛戴角して、犁を牽き把を拽いて、他に償ふて始めて得べし。」

五　學道は須らく師を擇び友を擇ぶを要すべし

先聖曰く、「寧ろ戒を破ること、須彌山の如くすべくとも、邪師に一邪念を薰せらるること、芥子許りの如きも、情識の中に在るべからず。油の麪に入るが如く、永く出づべからず。」（大慧書）

㋔酥酪は熟酥、酪味、五味中の一、天台で云ふ五時に譬へたるものなり。

佛曰く、「若し諸の衆生、善友を求むと雖も、邪見の者に遇ふて、未だ正悟を得ず。是を名けて外道種性と爲す。邪師の過謬なり、衆生の咎に非ず。」（圓覺經）

圜悟禪師曰く、「學道は師を擇ぶことを先とす。既に眞正に頂門の眼を具する善知識を得ば、其れに依つて死生の大事を決擇せよ。」（心要）

志公曰く、「出世の明師に逢はざれば、枉げて大乘の法藥を服す。」（傳心法要）

尸迦越經に云く、「弟子、師に事ふるに五事あり。一には當に之を敬難すべし。二に當に其の恩を知るべし。三に所敎、之に隨ふ。四に恩念厭はず。五に當に後に從ふて稱譽すべし。」（釋氏要覽）

潙山祐禪師曰く、「我を生む者は父母、我を成す者は朋友。善者に親附するは霧露中に行くが如く、衣を濕さずと雖も、時々に潤あり。惡者に狎し習へば惡知見を長じ、曉夕惡を造る。卽目交々報い、歿後に沈淪す。」湛堂和尙、妙喜に謂つて曰く、「(ク)像季の比丘、外多く物に徇ひ、內心を明めず。縱ひ弘く爲すこと有るとも、皆究竟に非ず。蓋し附す所卑猥にして然らしむ。牛に搏つの蝱の飛んで數步に步むとも、若し(ヤ)驥尾に附せば、便ち追風逐日の能あるが如し。乃ち依托の勝れるなり。是の故に、學者居るには必ず處を擇ぶ。遊ぶには必ず士に就く。遂に能く邪僻を絕ち、中正に近く。正言を聞くなり。」（禪門寶訓）

因果經に云く、「朋友に三の要法あり。一には失あるを見て、輙ち相曉諫す。二に好事あるを見て、深く隨喜を生ず。三に苦厄在つて相棄捨せず。」

(マ)四分律に云く、「七法を具して方に親友を成す。一に作り難きを能く作る。二に與へ難きを能く與ふ。三に忍び難きを能く忍ぶ。四に密事相告ぐ。五に互に相覆藏す。六に苦に遭ふて捨てず。七に貧

(ク)像季は末法、或は末世の意なり。

(ヤ)驥尾に附すは、駿馬の尾に付けば風を追ひ、日を逐ふ千里の能あるが如し。

(マ)四分律は佛滅後百年、曇無德羅漢が上座部の律中より、ぬき集めたる律本なり、四度にそれを監修せるに依り、四分律の名あり、又之を所依とせる宗を四分律宗と云ふ。

窮輕しめず。」

尸迦越經に云く、「一に作惡を見て、㋘屛處に往いて曉諫呵止す。二に所有の急事、當に奔赴して救護すべし。三に所有の私語、他人に說向することを得ず。四に常に相敬難す。五に所有の好事、當に多少分、之を與ふべし。」（釋氏要覽）

善知識には遭ひ逢ふこと得難し。譬へば梵天より一の芥子を投じて、下界針鋒の上に安ずるが如きは、猶ほ易し。明師道友に値ふて、正法を聞くことを得るは、甚だ難し。西天の九十六種の外道の如き、皆出離を求め、邪師に遇ふに因つて、反つて生死に沈む。（宗鏡錄）

六　學道は須らく實の如く信受することを要すべし

㋫六祖、一日衆に謂つて曰く、「汝等自心是れ佛、更に狐疑すること莫れ。外一物として、能く建立するなし。皆是れ本心、萬種の法を生ず。故に經に曰く、『心生ずれば、種種の法生じ、心滅すれば、種々の法滅す』と。若し種智を成就せんと欲せは、須らく一相三昧、一行三昧に達すべし。若し一切處に於て、而も相に住せず、彼の相の中に於て、憎愛を生ぜず。亦取捨なし、利益成壞等の事を念ぜず、安閒恬靜、虛融澹泊なる、此を一相三昧と名く。若し一切處に於て、行住坐臥、純一眞心にして、道場を動ぜず、直に淨土を成ずる、此を一行三昧と名く。」

㋘屛處の屛は陰の意なり。
㋫六祖は慧能大鑑禪師なり。

百丈懷海禪師に僧問ふ、「如何なるか是れ大乘頓悟の法要。」師曰く、「汝等、先づ諸緣を歇め、萬事を休息して、善と不善と世出世間一切の諸法、記憶すること莫れ、緣念すること莫れ。身心を放捨して、其をして自在ならしめ、心、木石の如くにして、辨別する所なく、心所行なくして、心地若し空なれば、惠日自ら現ず。雲開いて日出づるが如くに相似たり。但だ一切の攀緣、貪瞋愛取を歇め、垢淨情盡き、五欲八風に對して動ぜず。見聞覺知に縛せらるゝことを被らず、諸境に惑さるゝことを被らずんば、自然に神通妙用を具足せん。是れ解脫の人なり。一切の境に對して、心靜亂なく、攝せず、散せず、一切の聲色を透過して、滯礙あることなきを、名けて道人と爲す云々。」又曰く、「夫れ學道の人、若し種々の苦樂、稱意不稱意の事に遇ふて、心退屈なく、名聞利養衣食を念せず、功德利益を貪らず、世間の諸法の爲に滯礙せられず、親なく愛なく、苦樂平懷にして、麤衣寒を遮り、㊀糲食命を活し、兀兀として愚の如く聾の如くにして、稍々相應の分あらん。若し心中に于て、廣く知解を學び、福を求め、智を求めば、皆是れ生死、理に于て益なし。却つて知解の境風に漂溺せらるゝことを被りて、還つて生死海裏に歸す云々。」又曰く、「但是れ三乘教は、皆貪瞋等の病を治す、祇々如今、念々若し貪瞋等の病あらば、先づ須らく之を治すべし。義句知解を求覓することを用ひざれ。知解は貪に屬す、貪變じて病と成る、祇々如今、但一切有無の諸法を離る、亦離を離れ、三句の外に透過して、自然に佛と差なし。既に自ら是れ佛、何ぞ慮ら

㊀糲食は玄米を云ふ、麁食の事を云ふ。

く、佛の語を解せざることを。祇々恐らくは、是の佛ならずして、有無の諸法に縛せられて、自由を得ざることを。理未だ立せざるを以て、先づ福智あり。福智に載り去られて、賤しきが貴を使ふが如し。如かず先づ理を立てゝ、後に福智あらんには云々。」（會元）

㊟エ馬大師曰く、「道は修することを用ひず、但々汚染すること莫れ。何をか汚染と爲す。但々生死の心、造作趣向あるは、皆是れ汚染なり。若し直に其の道を會せんと欲せば、平常心是れ道。謂ゆる平常心は是れ造作なく、是非なく、取捨なく、斷常なく、凡なく聖なし。經に云く、『凡夫の行に非ず、賢聖の行に非ず、是れ菩薩の行なり』と。只如今、行住坐臥、機に應じて物を攝す、盡く是れ道なり。」（傳燈錄）

(テ)黃檗和尚曰く、「若し成佛を得んと欲せば、一切の佛法總に學ぶことを用ひざれ、唯々無求無著を學せよ。八萬四千の法門は、八萬四千の煩惱に對す。祇々是れ敎化攝引の用なり。」又曰く、「但々緣に隨つて、舊業を消す、更に新殃を造ること莫れ。」と。

德山和尚上堂、若しや己に於て、無事ならば妄に求むること勿れ。妄に求めて得れば、亦得るには非ず。汝但々心に無事に、事に無心ならば、虛にして靈に、空にして妙ならん。若し毛端許りも之が本末を言はゞ、皆自欺と爲る。何が故ぞ、毫釐も繫念すれば三途の業因。(ア)瞥爾として情生ずれば萬劫の(サ)

(エ)馬大師は馬祖道一禪師なり。
(テ)黃檗は黃檗希運禪師なり。
(ア)瞥爾は一寸の間、一見と云ふが如し。
(サ)羈鎖は煩惱の爲に縛らるる事、牛馬の束縛せらるゝが如く、心自在ならぬ事を馬のタヅナや鎖に譬ふ。

羈鎖。聖名凡號盡く是れ虛聲。殊相劣形皆幻色と爲る。汝之を求めんと欲せば、累なきことを得んや。其の之を厭ふに及んで、又大患と成る、終に益なし。（會元）

㊉臨濟和尙曰く、「已起の者續くこと莫れ。未起の者放起することを要せざれ。便ち儞が十年の行脚に勝らん。」と。

㊉臨濟は臨濟義玄、惠照禪師なり。

圜悟禪師曰く、「一念不生、放つて玲瓏ならしめよ、纔かに是非彼我得失あらば、他に隨ひ去ること勿れ。乃ち是れ終日竟夜、親しく自家眞の善知識に參ずるなり。何ぞ此の事、辨ぜざることを憂へん、切に須らく自ら看すべし。」（心要）

雪堂行和尙曰く、「尋常、兄弟に向ひて說く、他の機境に上ることを要せざれと。如何なるか之を機境と謂ふ。佛、之を機境と謂ふ。法、之を機境と謂ふ。而も況んや文章一切の雜事をや。若し間々地を守らば、自然に虛にして靈に、寂にして妙ならん。水上の葫蘆子の如くに相似たり。蕩々地にして拘なく絆なし、撥著すれば便ち動、捺著すれば便ち轉ず。眞に大自在を得たり。」（拾遺錄）

懶庵和尙、衆に示して曰く、「汝等諸人總に來りて安に就く、甚麽をか求覓す。若し作佛を欲せば、汝自ら是れ佛、而も却つて傍家に走りて、忽々として渴鹿の陽燄を趂ふが如し。何時か相應することを得去らん。阿儞作佛を欲せば、但々如許多の顚倒攀緣妄想惡覺垢欲不淨衆生の心なきときは、汝便ち是れ初心正覺の佛、更に何處に向つてか別に討ねん。」

七　學道は須らく先言往行を識取せんことを要すべし

圜悟禪師曰く、「佛道㊀懸曠なり、久しく勤苦を受けて、乃ち成ずることを得べし。祖師門下、臂を斷ち雪に立ち、石に腰け碓を舂く、麥を擔ひ車を推す、園に事へ飯を作す、㊁田疇を開き湯茶を施す、土を般び磨を挽く、皆志を抗し俗を絶ち、自ら彊めて息はず、功業を成すことを圖る者、乃ち之を能くす。所謂未だ一法として嬾墮懈怠の中より生ずること有らず。」（心要）

圜悟禪師曰く、「衲子は當に痛く死生を以て事と爲し、務めて知見解礙を消し、佛祖の傳付する處の大因緣を徹證すべし。名聞を好むこと勿れ、歩を退き實に就いて、行解道德充實することを竢ち、愈々潛遁して愈々匿る可らず。諸聖天龍將に人を推し出さんとするのみ。」（心要）

黄龍曰く、「未だ見性せざる人、安然として手を拱いて、無作無修を傚ふ。」（冥樞會要）

㊂五祖演和尚曰く、「今時の叢林學道の士、聲名揚らず、人の爲に信ぜらるゝに匪ざることは、蓋し梵行清白ならず、人の爲に諦當ならざるが爲なり。輙ち或は苟も名聞利養を求めて、乃ち廣く其の華飾を衒はゞ、遂に識者に譏らるゝことを被らん。故に其の要妙を蔽ふ。道德、佛祖の如くなること有りと雖も、聞見疑ふて信ぜず。爾が輩、他日若し把茆、頭を蓋ふこと有らば、當に此を以て自ら勉む

㊀懸曠は大にして且廣き事なり。
㊁田疇は田畑なり。
㊂五祖演は五祖法演禪師なり。

べし。」

演祖曰く、「古人己が過を聞くことを樂しむ、善を爲すことを喜ぶ、荒を包ぬるに長し、惡を隱すに厚く、㋯謙りて以て友に交り、勤めて以て衆を濟ふ、得喪を以て其の意を貳にせず。所以に光明碩大にして、今昔に照映す。」と。嵩嶽元珪禪師曰く、「有心を以て物の爲にして、身を想ふに無心なれ。」と。(會元) 衲子日用の用心、幾ど此に過ぎず。

大覺璉和尙曰く、「禍患は隱微に藏れて、急忽にする所に發す。」と。

潙山和尙曰く、「擧措、他の上流を看て、擅に庸鄙に隨ふこと莫れ。」と。

朱世英、晦堂に問うて曰く、「君子不幸にして、小も過差あれば、聞見之を指目して暇あらず。小人終日、惡を造れども、以て然りと爲さず。其の故は何ぞや。」晦堂の曰く、「君子の德は美玉に比す、瑕、內に生ずること有れば、必ず外に見はる。故に見者異なれりと稱す、指目せざることを得ず。夫の小人の若き者の日用の所作、過惡に非ずと云ふことなし。又安ぞ用て之を言はん。」

黃龍南和尙曰く、「自ら損する者をば人益す、自ら益する者をば人損す。情の得失なり、豈に容易ならんや。」

黃龍曰く、「聖賢の學は㋓造次に成す可きに非ず、須らく積累に在るべし、積累の要は惟れ專と勤となり。嗜好を屛絕して、之を行じて倦むこと勿れ。然して後に擴めて之に充

㋯謙りては謙遜しての意。
㋓造次は一寸、或は暫くの意なり。

てば、天下の妙を盡しつ可し。」

英邵武曰く、「物暴かに長ずる者は、必ず夭折し、功速かに成す者は、必ず壞し易し、久長の計を推さずして、卒成の功を造らば、皆遠大の資に非ず。」

昔、喆侍者夜坐睡らず、圓木を以て枕と爲し、小睡すれば枕轉ず、覺めて復た起き、安坐すること故の如し、率ね以て常と爲す。或人の謂く、「用心(ヒ)太だ過ぎたり。」喆曰く、「我れ般若に於て緣分素より薄し、若し刻苦勵志せずんば、恐くは妄習の爲に牽かれん。」（禪門寶訓）

(ヒ)太だは甚だなり。

水庵一和尚曰く、「昔大愚慈明、谷泉瑯琊と伴を結んで汾陽に參ず。河東苦寒なり、衆人之を憚る。惟り慈明志道に在り、曉夕怠らず。夜坐睡らんと欲すれば、錐を引いて自ら刺す。嘆じて曰く、『古人、生死事大の爲に食せず寢ねず、我れ何人ぞや、而も荒逸を縱にせんや。生れて時に益なく、死して後に聞ゆること無くんば、是れ自ら棄つるなり。』と、一旦辭して歸る。汾陽嘆じて曰く、『楚圓今去る、吾が道東す。』」と。

靈源清和尚曰く、「先哲の言く、『學道は之を悟るを難しと爲す、既に悟りては之を守るを難しと爲す、既に守りては之を行ふを難しと爲す。今行時に當る、其の難きこと又悟と守とに過ぎたり。蓋し悟と守とは精進堅卓にして、勉むること己躬に在るのみ。惟れ行ふことは必ず心を等しうして、死するま

で誓ひて、己を損して他を益するを以て任と爲す。若し心等しからず、誓堅からざるときは、損益倒置して、便ち墮して流俗の阿師と爲る、是れ宜しく祗み畏るべし。」

靈源、圜悟に謂つて曰く、「衲子、見道の資ありと雖も、若し深く蓄へ厚く養はずんば、用を發すること必ず峻暴なり。特に敎門に補なきのみに非ず、將た恐らくは禍辱を招くこと有ることを。」

圜悟和尙曰く、「人誰れか過なからん、過ちて能く改むる、善焉より大なるは莫し。從上皆過を改むるを稱して賢と爲す、過なきを以て美と爲さず。故に人の己を行ふこと、多く過差あり、上智下愚俱に免れざる所なり。唯智者は能く過を改めて善に遷る。愚者は多く過を蔽ひ非を飾る。善に遷るときは其の德日に新なり、是を君子と稱す。過を飾るときは其の惡彌々著はる、斯を小人と謂ふ。是を以て義を聞いて能く從るは、常の情の難しとする所なり。善を見て樂み從ふことは、賢德の尙ぶ所なり、望むらくは公言外に想忘せば可なり。」

圜悟、佛鑑に謂つて曰く、「白雲師翁、動用擧措必ず往古に ㋲ 稽ふ。嘗て曰く、『事古に稽へざる、之を不法と謂ふ。』予、前言往行を識りて、遂に其の志を成す、然も特に古を好むに非ず。蓋し今人は法るに足らざればなり。」

㋝白雲端和尙曰く、「道を守りて貧を安んずるは、衲子の素分なり。窮達得喪を以て、其の守る所を移す者は、未だ道を語る可らず。」

㋲稽ふは倣ふ。
㋝白雲端は白雲守端禪師也。

佛鑑懃和尙、珣佛燈に謂つて曰く、「高上の士は名位を以て榮とせず、達理の人は抑挫の爲に困せられず、其れ恩を承けて力を効し、利を見て誠を輸すこと有るは、皆中人以下の爲す所なり。」

佛鑑曰く、「道の爲に憂へざるときは、心を操すること遠からず。身を處すること常に逸なるときは、志を用ふること大ならず。古人艱難を歷、險阻を嘗めて、然して後に終身の安を享く。蓋し事難きときは志鋭く、刻苦するときは慮深し、遂に能く禍を轉じて福と爲し、物を轉じて道と爲す。多く見るに、學者物を逐ふて道を忘れ、明に背いて暗に投ず、是に於て己が不能を飾りて、人を欺いて以て智と爲す。人の逮ばざるを彊ひて人を侮りて以て高しと爲す。此を以て人を欺いて、欺く可らざるの先覺あることを知らず。此を以て人を掩ふて、掩ふべからざるの公論あることを知らず。故に自ら智とする者をば、人之を愚とす、自ら高しとする者をば人之を下す。」

佛眼遠和尙曰く、「林下の人言を發して事を用ふ、擧措絕爲、先づ須らく籌慮して、然して後に之を行ふべし。倉卒に暴れ用ふること勿れ。或は自ら予決すること能はずんば、應に須らく者舊に諮詢し、博く先賢に問うて、以て見聞を廣くし、其の未能を補ひ、其の未曉を燭すべし。豈に虛りに氣勢を作り、專ら貢高を逞しうして、自ら其の醜を彰す可けんや。苟も一行之を前に失すれば、百善と雖も得て後を掩ふ可らず。」

者舊は者宿又は耆老に同じ、先覺の人を云ふ。

靈源和尙曰く、「凡人平居、內照多く能く曉了すれども、事に涉りて外に馳するに及んでは、便ち混

融に㋑乖いて、其の法體を喪す。必ず佛祖の任を紹ぎ、後昆を㋺啓迪せんと欲思はゞ、常に自ら檢責せずんばある可らず。」

雪堂行和尙曰く、「學者氣志に勝るときは小人と爲る、志氣に勝るときは端人正士と爲る。氣と志と齊しうして得道の賢聖と爲る。人ありて剛很にして、規諫を受けざるは、氣の然らしむるなり。端正の士は彊ひて不善を爲さしむと雖も、寧ろ死すとも不二なり、志の然らしむるなり。」

草堂淸和尙曰く、「原を燎くの火は㋩熒熒より生ず、山を壞するの水は㊁涓涓より漏る。夫れ水の微なるや、捧土塞ぐべし、其の盛なるに及んでは木石を漂し、丘陵を沒す。火の微なるや勺水滅しつべし、其の盛なるに及んでは都邑を焦し、山林を燔く。夫の愛溺の水、瞋恚の火と曷んぞ常に異ならんや。」

草堂曰く、「學者身を立つるには、須らく正當ならんことを要すべし、人をして竊議せしむる勿れ。一たび異論に渉れば、身を終るまで立つべからず。」

晦堂心和尙曰く、「稠人廣衆の中、賢不肖踵を攝す、化門廣大なるを以て、親疎を其の間に容れず。惟れ少しく精選を加ふるに在り、苟も才德人の望に合ふ者、己が怒る所を以て、之を疎にすべからず。苟も見識庸常にして、衆人惡む所の者、亦己が愛する所を以て、之を親しむ可らず。此くの如きときは賢者は自ら進み、不肖者は自ら退いて叢林安からん。」

㋑乖いては背いてなり。
㋺啓迪は啓發の意なり。
㋩熒は少しの火なり。
㊁涓々は雫の落ちる貌、少しの水なり。

自得輝和尙曰く、「大凡そ衲子誠にして正に向はゞ、愚なりと雖も亦用ふべし。佞にして邪を懷かば智なりと雖も終に害を爲さん。大率、林下の人、心を操ること正しからずんば、才能ありと雖も、終に立つべからず。」

簡堂機和尙、淸明坦夷にして、慈惠物に及ぼす。衲子稍々詿誤あれば、蔽護保惜して以て其の德を成す。嘗て言ふ、「人誰か過なからん、之を改むるを美と爲すに在り。」

大惠禪師曰く、「學道の人、日を逐ふ。但々他人を檢點する底の工夫を將て、常に自ら檢點せば、道業辨せざること有ることなし。或は喜、或は怒、或は靜、或は鬧、皆是れ檢點の時節なり。」

大惠禪師曰く、「逆境界は打し易し、順境界は打し難し。我が意に逆ふ者をば、只だ一箇の忍の字を消して、定省すれば少時に便ち過ぎ了る。順境界は直に是れ儞が回避する處なし、磁石と鐵と相遇ふが如く、彼此覺えずして合して一處と作る。」

八　學道は須らく病中の用心を辨ずることを要すべし（瞻病附）

幻住老人曰く、「身は報緣に屬す、誰か老病なからん。百丈の建立、意斯に在り、古宿延壽堂に扁して省行と爲すことは、其れをして行苦を省察して、悲智を與さしめんとなり。乃ち病人は煩惱を生ずることを得易し、健者は常に(ホ)惻隱の心を懷くといふの句あり。十方聚會、四海家を同じうす、旣に親疎貧富の殊なし。—

(ホ)惻隱は孟子に「惻隱の心は仁の端なり」とあり、即ち憐みの心なり。

彼が病は卽ち己が病なり、人の安は卽ち我が安なり。故に敎の中に謂ふ、『看病は乃ち福田の中の最勝なる者なり。』謂く、攝養其れ罔す可けんや。」又曰く、「或は㊀輪次の直病深く惻隱を懷く、密かに慈悲を運び、彼の病緣を觀る、自己に受くるが如くにして、寒溫飢飽、量に隨つて觀察し、湯藥の需むる所、時々に問候せよ。病者或は妄に異見を生じ、瞥に嗔心を起さば、徐ろに語りて應酬して其の正念を勉めよ、庶はくば自利々他ならん。」

圜悟禪師曰く、「疾苦身に在り、宜しく善く心を攝し、外境の爲に搖られず、中心亦念を起さず、常に生死事大、無常迅速を以て意と爲して、斯く須らくも恣縱にすべからず。唯々嗔の一法、㊁三業に於て大なる過患たり。儻し順違あらば切に生ぜしむる勿れ。常に己を虛にし、心を正しうして外より來り觸るゝことを觀ること、虛舟飄瓦の如きときは、物我倶に寂にして不動地に到らん。爾之を思へ、諦かに之を思へ。」(圜悟心要)

㊀輪次は次ぎ〳〵に等し。
㊁三業は身、口、意の三業なり。

古德曰く、「生也猶ほ衫を著るが如く、死や還つて袴を脫するに同じ」と。生死を以て大變と爲さざること知るべし。(圜悟心要)

諸苦の中、病苦を深と爲す、作福の中、省病を最と爲す。是の故に古人病あるを以て善知識と爲す、人に曉すに看病を以て福田と爲す。(緇門警訓、省行堂記)

瞻病人の五德、四分律に云く、「一に病人の可食不可食を知る。二に病人の便利唾吐を惡ます。三に

慈愍心あつて衣食の爲にせず。四に能く湯藥を經理す。五に能く病人の爲に法を說いて歡喜せしめて、己に善法を增長す。」瞻病人の六失、增一經に云く、「一に良藥を辨せず、二に懈怠、三に喜瞋好睡、四に但々衣食を貪る、五に法を以て供養せず、六に病人と共に言語談笑せず。」（釋氏要覽）

國譯緇門寶藏集卷之上終

國譯緇門寶藏集卷之中

九　學道は須らく邪正を辨ずることを要すべし

參禪を勸むる文に云く、「夫れ解は須らく圓解なるべし、他の明眼の宗師に還す。修は必ず圓修なるべし、㊀叢林の道伴に分付す。初心薄福にして善く親依せず、見解偏枯にして修行懶惰なり。或は高く聖境を推して、己靈に孤負す、寧ろ德相神通を知らんや。凡夫悟道することを信ぜず、或は自ら天眞を恃んで、因果を㊁撥無す、但々胸襟に向つて流出して、地位に依つて修行せず。所以に粗解の法師敎眼に通せず、虛頭の禪客行門を貴ばず、此れ偏枯の罪なり。」（緇門警訓）

百丈懷海禪師曰く、「常に衆人を勸む、須らく法塵煩惱を懼るゝこと、三塗を懼るゝが如くにして、乃ち獨立の分あるべし。假使ひ一法の涅槃に過ぎたる者あるも、亦少許りも珍重を生ずることなし。此の人歩々是れ佛、若し本淸淨、本解脫自ら是れ佛、自ら是れ禪道なりと執して、解する者は卽ち自然外道に屬す。㊂若し因緣修成と執して、證得する者は卽ち因緣外道に屬す。有を執せば卽ち常見外道に屬す。無を執せば卽ち斷見外道に屬す。

㊀叢林は檀林とも云ふ、禪家に多く用ふ、修行僧の多く集りて修道する道場なり。
㊁撥無は因果の理の歷然と存在するを、妄りに其の理を無して謬執するを云ふ。
㊂若し因緣云云以下は、外道の執する五見を斥けたるなり。

亦有亦無を執せば卽ち邊見外道に屬す。非有非無を執せば卽ち空見外道に屬す。祇だ如今、但佛見涅槃等の見を作すこと莫れ。都て一切有無等の見なく、亦無の見なきを正見と名く。一切の聞なく、亦無聞なきを正聞と名く。是れ外道を摧伏す。」（廣燈錄）

萬庵顏禪師曰く、「叢林至る所邪說熾然たり。乃ち曰く、『戒律必ずしも持せざれ、定惠必ず習はざれ、道德必ず修せざれ、嗜慾必ず去らざれ。』又維摩圓覺を引いて證と爲す、貪、瞋、痴、殺盜、婬を贊して梵行と爲す。烏乎、斯の言豈に特に叢林今日の害を起すのみならんや、眞に法門萬世の害なり。且つ博地の凡夫、貪瞋愛慾人我無明、念々攀緣して一鼎の沸くが如し、何に由つてか淸冷ならん。先聖必ず大いに此に於ける者有らんことを思うて、遂に戒定惠の三學を設けて、以て之を制す。庶はくは廻すべきことを。今、後生晚進、戒律を持せず、定惠習はず、道德修せず、專ら博學彊辨を以て、流俗を搖動す、之を牽けども返ること莫し。予因に謂ゆる斯の言乃ち萬世の害なり。」（禪門寶訓）と、所謂、萬世の害、乃ち今時の禪林に在りて見つ可し。

智覺禪師曰く、「近ごろ末世誑說の一禪、只虛頭を學び、全く實解なし。歩々に有を行じ、口々に空を談ず、自ら業力の牽るゝを責めず、更に人をして因果を撥無ならしむ。便ち說く、飮酒食肉は菩提を礙せず、行盜行淫、般若に妨げなし、生れて王法に遭ひ、死して㊀阿鼻に陷る。」

㊀阿鼻は地獄なり。

吾が國、法の(ホ)澆漓に方りて、宗風(ヘ)陵夷し、異見競ひ起る。師席を珍位し化を大方に闡く者、盛んに誑說の一禪を唱へ、後學を幻惑すること幾んど百餘年。已に虛を承け響を接し、天下に碁布するに至る。想ふに夫れ天魔の屬、我が衣服を(ト)偸み、我が法を壞するの時か。凡そ措大家の族、內酒色に荒み外畋獵を好む、其の施爲する所、多く惡業を以て樂と爲し、善をなすことを喜ばず。是れ亦富貴叢中の常分なり、是の故に常に因なく果なきの說を愛して、(チ)三世の業報を說くことを喜ばず。將に謂へり、(リ)瞿曇懲惡の方便なりと。適々大方に住持する(ヌ)厖眉長老に就いて、竊かに平日の狂解を呈するに、長老之を密室に招きて、懷を開き印定す。更に拈提向上若干の古則を引いて、揑合して證と爲す。士大夫是に於て、平生の痒處に抓著し、死に抵るまで疑はず、善行日に弛べ、惡業轉々肆なり。死して(ル)阿鼻に陷るを待たず、生れて一世の禍辱を招く、怖るべし畏るべし。佛曰く、「衆生の咎に非ず、邪師の過謬なり。」と、吁、其れ斯の謂乎。

(ヲ)心聞賁和尙曰く、「衲子禪に因つて病を致す者多し。病耳目に在る者あ

(ホ)澆漓は末世の意なり。

(ヘ)陵夷は山の高原の次第に低地に赴くを云ふ、即ち宗風陵夷は宗風の衰頽を意味す。

(ト)偸みは盜むの意なり。

(チ)三世は過去、現在、未來、なり。

(リ)瞿曇は釋尊の異名なり。

(ヌ)厖眉長老は厖眉は厚き眉毛の事にして老人の事なり、長老は內に智德ありて尊ぶべきものに名く。或は長者老年の德あるもの、必すしも出家を先んぜず、その善本を修し正行を分別し、設ひ年齒幼なるも諸根漏缺なきを長老と云ひ、又長阿含經には、耆年長老、法長老、作長老の三長老を擧ぐ、禪家には藏主、首座、二單寮、西堂、東堂の職にあるを、一般に長老と云ふ。

り、眉を瞠げ目を努り、耳を側て、頭を點ずるを以て禪と爲す。病口舌に在る者あり、顚言倒語、胡喝亂喝を以て禪と爲す。病手足に在る者あり、進前退後、指東劃西を以て禪と爲す。病心腹に在る者あり、玄を窮め妙を究め、情を超え見を離るゝを以て禪と爲す。實に據つて論ぜば、是れ病に非ずと云ふこと無し。惟り本色の宗師は(ワ)幾微を明察して、目擊して其の會と不會とを知り、門に入りて其の到と不到とを辨ず。然して後に一錐(カ)一箚を用ひて、其の廉纖を脱し其の搭滯を攻め、其の眞假を驗し其の虛實を定む。一方便を守りて變通に昧からず、終に安樂無事の境を蹈み、而して後に已む。」（禪門寶訓）

今、這の病を受くる底の漢子を求むるに、也た多く得べからず、祖道の下衰知る可きなり。

大惠禪師曰く、「近代の佛法傷むべし、人の師と爲る者、先づ奇特玄妙を以て、胸襟に蘊在して遞に相襲し、口耳傳授して以て宗旨と爲す。此くの如きの流、邪毒心に入りて治療すべからず。古德之を謗般若の人と謂ふ。千佛出世すとも懺悔を通せず。」

(ル)阿鼻は阿鼻旨の略、阿鼻地獄の稱、梵語(Avici.)、無間と譯す、現在に上品の惡業を爲したるもの來世に生れて、苦痛を受くべき地獄にして、獄域の周圍八萬餘里ありと。地藏菩薩本願經卷上には、この地獄につきて五種の無間を明せり、曰く、一に、この獄に墮落せるものは日夜苦を受け間斷なく。二に、一人の身も、大城内に徧滿し、多人の身も亦然り。三に、身を苦しむる器具數をつくして出で來り、間斷なく。四に、男女、老幼、貴賤、人畜を問はず、罪業を犯せるもの皆悉くこゝに苦みを受くるが故に、趣果無間。五に、この獄に墮落せるものは、一日、一夜に、萬死、萬生して受苦に間斷なきが故に、總じて無間地獄と名く。

(ヲ)心聞賁は萬年心聞賁禪師な

近代、專門潛授の禪、此に出でず。蓋し且つ奇特玄妙を以て、遞に相傳授するは尙ほ可なり。諸方の古則、只是れ淺近の博謎子なり、笑ふ可し。

無學祖元禪師曰く、「我れ日本の兄弟を見るに、一生悟を得る者多かる可らず。此の國の風たるや、只だ智才を貴んで、悟解を求めず。是の故に設ひ靈根ある者も、博く内外の典籍を覽、深く巧僞の文章を嗜み、自ら此の事を究むるに遑あらず。迷中に一生を過ぎ了る、固に憫むべしと爲す。或は一類の道人と稱する者あり、多くは是れ其の器量、博學强記に堪へず、故に閑坐を以て功業と爲して、眞實向道の心を辨ぜず。此の類も亦今生に開悟すべき者に非ず。」今已に三百餘年、往々に此の兩般の病を見る、達人の言、信に誣ひず。嗟乎、國風の習弊此くの如く其れ陋し、悲しいかな。

無著國師曰く、「如今、天下禪を解し道を解する者、河沙數の如く、佛を說き心を說くもの、百千萬億あり。纖塵も去らずんば、未だ輪廻を免れず、思念亡せずんば、盡く須らく沈墜すべし。斯くの如きの類、尙ほ自ら業果を識らず、妄に言ふ、自利々他、自ら上流と謂ひて、他の先德に並ぶ。但言ふ、觸目佛事に非ずと云ふことなく、擧足皆是れ道場と。其の習ふ所を原ぬるに、一箇五戒十善の凡夫に如かず。其の言を發するを觀るに、他の二乘十地の菩薩を嫌ふ。且た㊂醍醐の上味世の珍奇と爲すと

り。
(ワ)幾微。兆あり、微にして顯れざるを云ふ。易經に「機は動の微」とあり。
(カ)一劄。鍵又は鐍なり。

も、斯等の人に遇うては、翻つて毒藥と成る。」

近日、禪學の弊、覺識依通を以て悟明と爲す。穿鑿機緣傳授を以て、參學と爲す。險怪奇語を以て提唱と爲す、律儀を破壞するを以て解脫と爲す、貴達に交結し、㋟夤緣して位に據るを以て、出世の方便と爲す。（中峰廣錄）

往古に在りても、也た偶々此の弊あり、近世に在りては、也た一等に此くの如し。㋹於戲、魔說較退き、祖道再び行はれんことを得んと欲すとも、亦得べからず、傷むべし。

大珠惠海禪師に大德問ふ、「大虛能く靈智を生ずるや否や。眞心、善惡を緣するや否や。貪欲の人是れ道なりや否や。是を執し非を執する人、向後心通ずるや否や。境に觸れて心を生ずる人、定ありや否や。寂寞に住する人、惠ありや否や。傲物を懷く人、我ありや否や。空を執し有を執する人、智ありや否や。文を尋ね證を取る人、苦行して佛を求むる人、心を離れ佛を求むる人、心是れ佛なりと執する人、此の智道に稱ふや否や。請ふ禪師一々に爲に說け。」師曰く、「太虛、靈智を生ぜず。眞心、善惡を緣せず。嗜欲深き者は機淺し。是非交々爭ふ者は未だ通ぜず。境に觸れて心を生ずる者は定少し。寂寞にして機を忘ずる者は惠沈む。傲物高心なる者は我壯なり。空を執し有を執する者は皆愚なり。文を尋ねて證を取る者は益々滯る。苦行して佛を求むる者は外道なり。心是れ佛なりと執する者は魔たり。」大德曰く、「若し是くの如くならば畢竟して所有無かるべし。」師曰く、「畢竟して是なるは大德な

㋵醍醐は天台の五時教に喩へたる五味中最上の醍味なり、即ち實相涅槃を指すなり。
㋟夤緣は、まとひつく義なり。
㋹於戲、あゝ、嘆息の聲なり。

り。是れ畢竟して所有なきにあらず。」と、大德、（の）踊躍禮謝して去る。（傳燈錄）

眞淨文和尚曰く、「其の斷見と云ふは、自心の本妙明の性を斷滅卻して、一向に心外に空に著し禪寂に滯る。常見と云ふは一切法空を悟らず、世間諸の有無の法に執著して、以て究竟と爲す也。」（正法眼藏）

宗鏡錄に曰く、「緣を見て體を見ずんば卽ち是れ常見。體を見て緣を見ずんば卽ち是れ斷見。今因緣に從つて性を見れば、常に落ちず。眞性の中に於て緣起すれば、斷に墮せず、實知見と名づく。」

臨濟大師曰く、「夫れ出家と云ふは、須らく平常眞正の見解を辨得して、佛を辨じ魔を辨じ、眞を辨じ僞を辨じ、凡を辨じ聖を辨ずべし。若し是くの如く辨得せば眞の出家と名づけん。」

然も舊閑田地に閣くと雖も、一度贏ち來れば、方に始めて休す。而今、奴郎分たず佛魔辨せず。拍盲に休し將ち去る。自ら謂く、「此れ閑々地を守る。此れ休歇の田地なり」と。是れ眞の出家にあらず、只養恬の凡夫のみ。若し是にし去らんと要せば、死中に眼を具して始め得べし。

玄沙備禪師曰く、「一般、繩床に坐する和尚あつて、善知識と稱す。（の）問著すれば便ち身を搖し手を動し、眼を默し舌を吐いて（ゑ）瞪視す、更に一般あり。昭々靈々たる靈臺智性、能見能問を說いて、（十）五蘊身田の裏に向つて、主宰と作る。恁麼にし

（の）踊躍は手の舞ひ足のふむ處を知らざる喜悅の貌を云ふ也。
（の）問著。問ふに同じ、著は助語也。
（ゑ）瞪視す。目を張り、直視するを云ふ。
（十）五蘊は色、聲、香、味、觸の五なり。

て、善知識と爲さば大いに人を賺す。」

十　學道は須らく知るべし學解の病と爲ることを

臨濟和尚曰く、「今時の學人、得ざることは、蓋し名字を認めて解せんが爲めなり。㋶大策子上に死老漢の語を抄して、三重、五重、復子に裹んで、人をして見せしめず、之れを㋰玄旨なりと云うて、保重することを爲す。」

新豐和尚道く、「佛祖の言敎を見ること、生寃家の如くにして、始めて參學の分あり。」

黃檗和尚曰く、「今時の人、祇だ多智多解を得んと欲して、廣く文義を求むるを、喚んで修行となす。知らず、多智多解は翻つて壅塞となることを。唯多く兒に酥乳を與へて、喫せしむることを知つて、消と不消と總都て知らず。」（傳心法要）

浮山遠和尚、道悟眞に謂うて曰く、「學んで道に至らず、見聞を衒耀し、機解に馳騁し、口舌辨利を以て、勝つものは猶ほ厠室に、丹雘を塗汚するが如し。祇だ其の臭を增すのみ。」

潙山和尚曰く、「若し外に向つて、一智一解を得て、將た禪道と爲さば、且つ沒交涉、糞を運んで入ると名づく。糞を運んで出づると名づけず。汝が心田を汚す。所以に道ふ、是れ道にあらずと。」（會元）

十一　學道は須らく坐禪を修習することを要すべし

㋶大策子上、立派な册子の上と云ふ意。

㋰玄旨。玄妙不可思議の主旨、老子に曰く、玄之又玄と。上乘の眞理を云ふ。

（附　坐禪邪正）

六祖壇經に曰く、「何をか坐禪と名づく、外一切の善惡の境界において、心念起らざるを名づけて坐となす。內自性を見て動かざるを、名づけて禪となす。何をか禪定となす。外、相を離るゝを禪となし、內、亂れざるを定と爲す。若し諸境を見て、心亂れざるは是れ眞定なり。」と。

淨名經に曰く、「卽時に豁然として還つて本心を得」と。

龐居士語錄に云ふ、「心如なれば卽ち是、坐、境如なれば卽ち是、禪、如々都て假らず。大道中邊なく、若し能く是くの如き解くは、眠時も亦眠らず。」

天台師靜上座に人問うて曰く、「弟子每に夜坐するに當りて、心念紛飛す、未だ攝伏の方を明めず、願はくは示誨を垂れよ。」師曰く、「如し或は夜間にして安坐せんに心念紛飛せば、紛飛の心を得て、以て、紛飛の處を究めよ。之を究むるに處なきとは、紛飛の念何んぞ存せん。反つて究心を究めば、能究の心安んか在らん。又能照の智本空、所緣の境も亦寂なり、寂にして寂に非ざれば、蓋し能寂の人もなし。照にして照に非ざれば、蓋し所照の境もなし。境智俱に寂にして心慮安然たり。外枝を尋ねず內定に任せず、二途俱に泯して一性怡然たり。此れ乃ち還源の要道なり。」(會元)

臨濟禪師曰く、「儞若し不動淸淨の境を取りて是と爲さば、儞卽ち他の無明を認めて郎主と爲す。」

這箇の說話、多少か㋒椿々地に向つて㋼死模樣を傚ふ底の漢を驚動し了る。若し這裏に向つて覷得透し打得徹せば、一個に許す一半を救ひ得ることを。

臨濟曰く、「一般の瞎禿子ありて、飽まで飯を喫し了りて便ち坐禪觀行し、念漏を把促して放起せしめず、喧を厭ひ靜を求む、是れ外道の法なり。祖師の云く、『儞若し心に住して靜を看、心を擧して外を照し、心を攝して內を澄しめ、心を凝して定に入る、是くの如きの流皆是れ造作なり』」と。今初心の坐禪と稱する者を觀るに、但箇の㋨臭皮袋子を拘得し、浮想妄念起滅停らず、他の所謂心に住し靜を看、心を凝し內澄む底と倘ほ未だ交涉せず。而も況んや眞の圓湛に於てをや。畢竟狐兎の癡坐と異なることなし。

南陽忠國師に因に僧問ふ、「坐禪して靜を看る、此れ復た若爲ん。」師曰く、「不垢不淨、寧ろ心を起して淨相を看ることを用ひんや。」

大慧禪師曰く、「衆生の狂亂は是れ病、佛、寂靜波羅蜜の藥を以て之を治す。病去つて藥存すれば、其の病愈々甚だし。」

㋒椿々地。地盤、即ち地上を謂ふ。

㋼死模樣、螺髻仙人第四禪を得、出入の息斷ゆと、一樹下に坐し、兀然として動かず。鳥不動を見て、之を木と思ひ、頂に卵を生む。仙人定より起きて、其頂に卵を生むを覺ゆ。思惟して曰く、「我若し起きて行けば、鳥母來らず、卵必ず破壞せん」と。乃ち再び定に入る。鳥子飛去つて、方に起きて遊行すと。蓋し禪の分位を得たるを云ふ。

㋨臭皮袋子、卽ち此の穢身を云ふなり。

佛心才禪師の坐禪儀に云く、「夫れ坐禪は端身正意にして、己を潔くし心を虛にし、足を疊み(オ)跏趺して、視を收め聽を反して、惺々として昧まず、沈掉永離、縱ひ事を憶ひ來るも、情を盡して拋棄して、靜定の處に向つて正念諦觀す。坐を知るも是れ心、及び返照するも是れ心、有無中邊內外を知る者も心なり。此の心虛にして知り、寂にして圓明、了々として斷常に墮せず。靈覺昭々として、揀んで虛空に非ず。今覺家を見るに力め坐して悟らざる者は、病依計に由り、情偏邪に附き、迷ふて正因に背き、枉げて止作に隨ふ、悟らざるの失、其れ斯に在る焉。若し也た一念を(ク)斂澄して、密に無上に契はゞ智鑑廓然として、心華頓に發し、無邊の計執直下に消磨し、積劫の不明一時に豁現す。忘れて忽ちに記するが如く、病の頓に瘳するが如く、內に歡喜の心を生ず。自ら知る、當に作佛すべきことを。卽ち知る、自心の外に別佛なきことを。然して後、悟に順じて增修し、修に因つて證す。證悟の源是れ三。別なし、名づけて一解・一行・三昧と爲す、亦無功用の道と云ふ。」

仰山和尚曰く、「若し是れ祖宗・門下・上根智ならば、一聞千悟して大總持を得ん。其れ根徹にして智劣なるあり。若し安禪靜慮せずんば、這裏に到

(オ)跏趺、結跏趺坐の略、圓滿安坐の義、身體疲倦せず、精神また安穩、魔王も佛弟子の之を行ふを見ては怖畏すと云へり、これに全跏坐と半跏坐との二種あり、足の表を趺と云ひ、裏を跏といふ。兩足互に蟠結して坐するなり、即ち右足を以て左腿上に安し、左足を以て右腿上に安する坐相を全跏坐といひ、右足を以て左腿上に安するのみなるを半跏坐或は半坐といふ。前者を如來坐、吉祥坐と云ふに對して、後者を菩薩坐と云ふ。これ禪定を修する最も普通なる坐相なり。

(ク)斂澄。收めすましむるを云ふ。

りて總に須らく茫然たるべし。」

玄沙備禪師曰く、「饒ひ汝身心を錬り得て、虚空に同じ去り、饒ひ汝靜明湛不搖の處に到るも、識陰を出でず、古人喚んで急流の水の如しと作す、流急なれども覺せず、妄に恬靜と爲す。恁麼の修行盡く他の輪廻の際を出づること得ず、依前として輪廻を被し去らん。」

中峰和尚曰く、「或は靜默の中に坐在して、塵勞暫息の頃に於て、忽ちに陰識の中に於て、遽に箇の相似底の道理を省得すること有れば、便乃ち依約して是と爲す。經教の中の語言を勾引し、證過して心中に含む。知らず、此の病是れ陰識の依通、眞の生死の本にして見性に非ざることを。」

圓覺經に云く、「無礙清淨の惠、皆禪定に依つて生ず。」

趙州和尚曰く、「儞、衣單下に向つて坐すること十年、若し禪を會せずんば、老僧が頭を截取し去れ。」

古德曰く、「凡を超え聖を越ゆれば、必ず靜緣を假る、坐脱立亡は須らく定力に憑るべし。」

十二　學道は須らく見性明心を要すべし

達磨大師、二祖に謂つて曰く、「汝但外、諸緣を息め、内心喘ぐことなかれ、心、墻壁の如くにして以て道に入るべし」と。二祖、種々に心と説き性と説くことを作すとも契はず。一日忽ち悟りて乃ち曰く、「以て諸緣を息む可し」と。達磨曰く、「斷滅と成り去ること莫らんや不や」。曰く、「無し」。達磨

曰く、「子、作麼生。」二祖曰く、「了々として常に知る、故に之を言ふとも及ぶ可らず。」達磨曰く、「此れ諸佛の傳ふ所の心體、更に疑ふこと勿れ」と。（宗門統要）

佛、㋳阿難に告げ玉はく、「我常に説いて言ひき、汝が身と汝が心とは皆是れ妙明の眞精、妙心の中の所現の物なり。云何んぞ、汝等本妙圓妙の明心、寶明の妙性を遺失する。縁を聚めて内に搖ぎ外に趣いて奔逸す。昏擾々の相を以て心性と爲す。一たび迷ふて心と爲れば、決定して惑ふて色身の内と爲る。色身より外、山河虛空大地に洎るまで、咸く是れ妙明の眞心中の物と云ふことを知らず。譬へば澄清たる百千の大海、之を棄てゝ唯一浮漚の體を認めて、目けて全潮と爲して、㋮瀛渤を窮め盡すと云ふが如し。」（楞嚴經）

異見王、波羅提尊者に問ふ、「何者か是れ佛。」曰く、「見性是れ佛。」王曰く、「師見性するや否や。」曰く、「我れ佛性を見る。」王曰く、「性、何の處にか在る。」曰く、「性、作用に在り云々。」卽ち偈を説いて曰く、「胎に在りては身と爲り、世に處しては人と爲り、眼に在りては見と曰ひ、耳に在りては聞と曰ひ、鼻に在りては香を辨じ、口に在りては談論し、手に在りては執捉し、足に在りては運奔す。徧現して俱に沙界を該ね、收攝して一微塵に在り、識者は是れ佛性と知り、識らざる者は喚んで精魂と作す。」（會元達磨章）

㋳阿難。阿難陀(Ānanda)の略、釋尊の從弟にして、佛成道の年に生れ、釋尊五十五歳の時より二十餘年間、侍者となりて、東西の化導に隨行し、入滅の際にも、阿㝹樓陀とともに其左右に事へし弟子なるが、多聞强記を以て知られしにより、滅後、佛の敎法を編集するに當りては、經文の大部分は、この人の記憶裡に存せしものを原案とせられたり。

㋮瀛渤。大海と云ふに同じ。

潮州大顛和尚曰く、「夫れ學道の人は須らく自家の本心を識るべし、心を將て相示して、方に道を見るべし。多く時輩を見るに、只揚眉動目一語一默を認めて、驀頭に㋗印可して以て心要と爲す。此れ實に未だ了せず。吾れ今、汝諸人の爲に分明に説出せん、各々須らく聽受すべし。但一切の妄運・想念・思量を除御せば、卽ち汝が眞心なり。此の心、塵境及び靜默を守認する時と全く交涉なし。卽心是佛、修治を待たず。何を以ての故に、機に應じ照に隨つて冷々として自ら用ふ、其の用處を窮むるに、了に得べからず、喚んで妙用と作す。乃ち是れ本心大いに須らく護持すべし、容易にす可らず。」（傳燈錄）

寶塔紹巖禪師、衆に示して曰く、「諸仁者還つて心を明むるや、也た未だしや。是れ語言談笑の時、凝然㋘杜默の時、知識に參尋する時、道伴商畧する時、觀山翫水の時、耳目絕對の時、是れ汝が心にあらざること莫らんや否や、如上の所解盡く魔魅の爲に攝せらる、豈に心を明むと曰はんや、更に一類の人あり。身中の妄想を離れて、外別に十方世界に遍して日月を含み、太虛を包むことを認めて、是を本來の眞心と謂ふ。斯れ亦外道の所計なり、心を明むるに非ざるなり。諸仁者會せんと要するや。心、是なる者なし、亦不是なる者なし。汝、執認せんと擬せば、其れ得べけんや。」（會元）

眞淨和尚曰く、「佛法の至妙無二なり、但未だ妙に至らずんば、互に長短あらん。苟も妙に至りぬれ

㋗印可。佛の眞理として決定し給ふた云ふ。三法印とて、諸行無常印、一切法無我印、涅槃寂靜印と云ふことあり。この三法印に契ふものは佛敎の正しき敎理なり。今の印可とは、師が弟子に對して其の悟了徹底を證するに用ふ。

㋘杜默は默想に同じ。

ば、心を悟るの人なり。實の如く自心究竟本來成佛なることを知りぬれば、實の如くに自在に、實の如くに安樂に、實の如くに解脱し、實の如くに淸淨なり。而も日用唯自心を用ひよ、自心の變化把得して便ち用ひよ、是と非とを問ふこと莫れ。擬心思量せば早く不是なり、擬心せざれば一々に天眞、一々に明妙、一々に蓮花の水に著かざるが如く、心の淸淨なること彼に超えたり。所以に自心に迷ふが故に衆生と作り、自心を悟るが故に成佛す。而るに衆生卽佛、佛卽衆生、迷悟に由るが故に彼此あり。」(正法眼藏)

百丈禪師、潙山に謂うて曰く、「經に云く、『佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし。時節既に至りぬれば迷ひて忽ち悟るが如く、忘れて忽ち憶するが如し。方に己が物を省みるに、他に從つて得ず。』故に祖師の云く、『悟了同未悟、無心亦無法。』祇だ是れ虛妄凡聖等の心なければ、本來の心法元自ら備足せり。汝今既に爾り、善く自ら護持せよ。」(會元)

僧、仰山に問ふ、「和尙、人の禪を問ひ道を問ふを見て、便ち一圓相を作す、中に於て牛の字を書す、意何くにか在る。」仰山云く、「遮箇也た是れ閑事、忽ち若し會得せば外より來らず。忽ちに若し會せずんば、決定して識らず。我且く儞に問はん、諸方の老宿、儞が身上に於て、那箇か是れ儞が佛性と指示する。爲た復た語底是か默底是か、是れ不語不默底是なること莫らんや。爲た復た總に是か、爲た復た總に不是か。儞若し語底是と認めば、盲人の象尾に摸著するが如し。若し默底是と認めば、盲人

の象耳に摸著するが如し。若し不語不默底是と認めば、盲人の象鼻に摸著するが如し。若し物々都て是と道へば、盲人の象の四足に摸著するが如し。若し總に不是と道へば、本象を拋ちて空見に落在す。是くの如く衆盲の所見、只象の上に於て名邈差別す。儞好からんことを要せば、切に象を摸する莫れ。道ふことも莫れ、見覺是と。亦道ふこと莫れ、不是と。祖師云く、㊀『菩提本樹なく、明鏡亦臺なし、本來無一物、何でか塵埃に染むることを得ん。』又云く、『道本と形相なし、智惠卽是れ道、此の見解を作す者、是を眞の般若と名づく。明眼の人は象を見て、其の全體を得。佛の見性の如きも亦然り。」(碧巖)

巖頭和尚、衆に示して云く、「夫れ大統綱宗の中の事、須らく句を識るべし。若し句を識らずんば、個の話會を作し難し。甚麽か是れ句。百不思の時を喚んで正句と爲す。亦居頂と云ひ、亦得住と云ひ、亦歷々と云ひ、亦惺々と云ひ、亦的々と云ひ、亦佛未生の時と云ふ、亦得地と云ふ、亦與麽の時と云ふ。與麽の時を得て、等しく一切の是非を破す。纔かに與麽ならば便ち不與麽、便ち轉轆轆地、若し也た看不過ならば、纔かに人に刺著せ

㊀菩提本と樹なし。慧能禪師、始め五祖に參ずるや、五祖大師一日門人を喚んで總に來らしめて、世人生死事大なり、汝等日を終るまで福田を求め、生死の苦界を出離せんことを求めず、自性若し迷はば福なんぞ救ふべき、汝等各去つて自ら智慧を見、自の本心般若の性を取つて、各一偈を作り來りて吾に呈して看せしめよ、若し大意を悟らば汝に衣法を付して、第六代の祖となさん。衆退く。此時神秀上座たり、慧能槽廠にありて米を破り碓を踏む。四日を經て神秀壁間に偈を書して曰く、「身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々に勤めて拂拭せよ、塵埃をして惹かしむること勿れ」と、此時慧能此菩提本と樹なしの偈を稱す、よつて衣鉢をうけて六祖となる。

られて、眼眨瞪地、恰も殺不死底の羊に似て相似たり。見ずや、古人の道、沈昏不好なりと、須らく轉得し始めて得べし。」（正法眼藏）

章敬和尙上堂に曰く、「至理は言を亡ず、時の人悉にせず、彊ひて他事を習ふて以て功能と爲す。知らず自性元と塵境に非ざることを。是れ個の微妙の大解脱門、有らゆる鑑覺染まず礙せず、是くの如きの光明、未だ曾て休廢せず。㊤曩劫より今に至るまで、固に變易なし、猶ほ日輪の遠近斯れ照すが如く、衆色に及ぶと雖も、一切と和合せず。靈燭妙明にして、鍛錬を假るに非ず、了せざるが爲の故に物象を取る。但目を捏へて妄に㊦空花を起するが如し。徒らに自ら疲勞して、枉げて劫數を經る。若し能く返照せば、第二人なし。擧措施爲、實相を虧かず。」（會元）

浮山遠公、演首座に謂つて曰く、「心は一身の主、萬行の本なり。心妙悟せざれば、妄情自ら生ず。妄情既に生ずれば、見理明かならず。見理明かならざれば、是非謬亂す。所以に心を治むには、須らく妙悟を求むべし。悟るときは神和し、氣靜かにして容敬し色莊なり。妄想情慮皆融して眞心と爲る。此を以て心を治むれば、心自ら靈妙なり。然して後、物を導き迷を指す、孰れか化に從はざらん。」

㊤曩劫、無始以來と云ふに同じ。
㊦空花、幻（まぼろし）なり。

佛曰く、「一切衆生、妄に四大を認めて、自らの身相と爲す。六塵の緣境を自心の相と爲す。彼の病目の空中の華と、及び第二の月とを見るに譬ふ、故に無明と名づく。」（圓覺經）

佛曰く、「汝縁心を以て法を聽かば、此の法も亦縁なり。」

佛曰く、「思惟の心を以て、如來圓覺の境界を測度するは、螢火を取りて須彌山を燒くが如し。」

十三　學道は須らく話頭工夫を用ひて主と爲すを要すべし

趙州和尚曰く、「兄弟久立すること莫れ、事あらば商量し・事なくんば衣鉢下に向つて、坐して理を窮むれば好し。」

圓通德禪師曰く、「道眼若し未だ明かならずんば、甚麽の用處か有らん。無事にして切に須らく尋究すべし。」

圓悟禪師曰く、「但々心念をして澄靜ならしむ。紛々擾々の處、正に好し工夫を作すに。」

大惠禪師曰く、「工夫熟せは關棙子を撞發せん。所謂、工夫と云ふは、世世の塵勞を思量する底の心を、❼乾屎橛の上に囘在して、情識をして行ぜず、土木偶人の如くに相似らしむ。昏怛にして巴鼻の把促すべき沒しと覺得する時、便ち是れ好消息なり。」

❼乾屎橛、乾きし肥柄杓を云ふ、又箆なり、昔、雲門大師に僧問ふ、如何なるか是れ佛、門曰く「乾屎橛」と。閃電光、擊石火の活用、若し眨眼せば、既に蹉過す、禪の妙用大機は、この如くにして玆に存す。

古德曰く、「般若の上には虛しく棄つる底の工夫なし。」

大惠禪師曰く、「兄弟、工夫を做すに因縁を擧することを消せず。只去つて近處に看よ。只六祖、明上座の爲に云ふが如し、汝但善惡都て思量すること莫れ。當恁麽の時、一切思量せず、我に明上座

が本來の面目を還せと。但恁麼に看よ。」

大慧曰く、「工夫急なる可らず、急なれは躁動す。又緩なる可らず、緩なれは昏怛す。」

圜悟禪師曰く、「他、活句に參じて死句に參ぜざれ。活句下に薦得すれば、永劫にも忘れず。死句下に薦得すれば自救不了。若し祖佛の與めに師と爲ることを要せば、須らく活句を明取すべし。」(心要)

高峯妙和尙曰く、「若し實に著し參禪せんと謂はゞ、決して須らく三要を具足すべし。第一に大信根あらんことを要す、明かに知る此の事、一座の須彌山に靠るが如きことを。第二に大憤志あることを要す、父を殺す寃讐に偶うて、直に便與に一刀兩段せんことを欲するが如し。第三に大疑情あらんことを要す。暗地に一件の極事を做し了りて、正に露れんと欲し、未だ露れざるの時に在るが如し。十二時中果して能く此の三要を具し、日を尅し功を成すことを管取せよ。甕中鼈を走らすことを怕れず。苟も其の一を闕けば、譬へば折足の鼎の如く、終に廢器と成る。」(高峯錄)

高峰曰く、「疑は信を以て體と爲す、悟は疑を以て用と爲す、信十分あれば疑十分あり、疑十分を得れば悟十分を得。」(高峰錄)

草堂、晦堂に侍立す。晦堂、風幡の話を擧して、草堂に問ふ。堂云く、「迥かに入處なし。」晦堂云く、「汝、世間に猫の鼠を捕るを見るや。雙目瞪視して瞬かず、四足地に踞して動ぜず、六根順向し首尾一直なり。然して後に擧するに中らずと云ふことなし。誠に能く心に異緣なく、意に妄想を絕し、

六窓寂靜にして端坐默究せば、萬に一をも失せざる也。」（大慧武庫）

大慧禪師曰く、「生死の心未だ破れずんば、全體是れ一團の疑情、只疑情窟裏に就いて、個の話頭を擧せよ。僧、趙州に問ふ。『狗子に還つて佛性ありや也た無しや。』州曰く、『無。』行住坐臥、間斷することを得ず。妄念起る時亦心を將て遏捺することを得ざれ。但只此の話頭を擧せよ、靜坐を要して、纔かに昏沈を覺すれば、便ち精神を㋚抖擻して、此の話を擧せよ。忽地に㋖瞎老婆の火を吹き、眉毛に和して眼睫一時に燒き了るが如し、是れ差事にあらず。」

大惠曰く、「近世叢林、邪法潢に生じて、衆生の眼を瞎する者、勝げて數ふ可らず。若し古人の㋙公案を以て、擧覺提㋱撕せずんば、便ち盲人の手中の杖子を放却して、一歩も也た行くことを得ざるが如くならん。」（法語）

潙山和尚曰く、「法理を研窮して、悟を以て則と爲す。」

中峯本和尚曰く、「只々所參の話の上に向つて、一捱に捱住して、但生は與めに同生し、死は與めに同死せんことを伴取せよ。第一に別に方便を求むることを許さず。第二に咎を緣境に歸す可らず。第三に一念の惑情を瞥

㋚抖擻、持ち揚ぐる意。

㋖瞎老婆、瞎は一目盲なるを云ふ、又單に、めくらにも云ふ、十六國春秋に、「苻生一目なし、七歲の時、其祖洪之に戲れて曰く、瞎兒一淚なりと。」

㋙公案は公府の案牘なり。法のある所、王道の治亂實にこれに係る、公は聖賢其轍を一にし、其の道を同じうするの至理なり、案は乃ち聖賢の理を爲すを記する也、凡そ天下を有つ者は、未だ嘗て公府無かるべからず、公府未だ嘗て案牘なかるべからず、蓋し取つて以て法と爲さんとす。公案行はるれば天下正しうして王道治る、佛祖の機緣之を目づけて公案と云ふも然り。乃ち靈源に會し、妙旨に契し、死生を破り、情量を越えて、三世十方百千の開士と、同じく

起することを得ず。」(廣錄)
參禪の一著は生死に敵するを要す、是れ說き了つて便ち休するにあらず。參禪の一著は單に大道を明かにす、㊂朝に聞いて夕に死すとも可なり。參禪の一著は門を推して臼に落つ、切に忌む外に向つて馳求することを。參禪の一著は疑情を起すことを要す、大疑は必ず大悟あり。參禪の一著は英靈の衲子擧起すれば、便ち落處を知る。參禪の一著は本來の面目、經文語錄に載せ難し。參禪の一著は直指人心、貴むらくは自ら肯て承當せんことを要す。參禪の一著は萬人に敵して、怯戰して喪身失命するが如し。參禪の一著は猫の鼠を捕るが如く、睛移し眼を動すことを許さず。參禪の一著は大丈夫の事、將相の能く爲す所に非ず。(無門語錄)

中峯和尙、學者の只言通を尙んで、實悟を求めざることを斥けて、常に曰く、「今の參禪、靈驗あらざることは、第一に古人眞實の志氣なし。第二に生死無常を把りて、一件の大事と做さず。第三に積功以來の所習所重を拌捨し下らず、又久遠不退轉の身心を具せず、畢竟して病何くにか在る、其れ實に生死の根本を識らざるが故なり。」(行錄)

高峯和尙曰く、「兄弟家十年二十年以至一生、世と絕ち緣と忘れ、單に此の事を明む、透脫せざるこ

稟くるの至理なり。又義を以て解すべからず、言を以て傳ふべからず、文を以て詮すべからず、誠を以て度るべからず、故に靈山之れを別傳と云ふ、之れを傳ふる也。少林之れを直指と謂ふ、之を指すなり。夫れ公案は情識の昏暗を燭らすの慧炬なり、見聞の翳膜を揭げるの金鎞なり、生死の命根を斷つの利斧なり、凡聖の面目を見るの神鏡なり、祖意之れを以て廓明、佛心之を以て開顯すと。

㊁提撕は、とりもつを云ふ。

㊂論語に、「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と。

とは病何くにか在る。本分の衲僧試みに拈出して看よ、是れ宿に靈骨なきこと莫らん麽。是れ明師に遇はざること莫らん麽。是れ沈空滯寂すること莫らん麽。是れ雜毒心に入ること莫らん麽。是れ時節未だ至らざること莫らん麽。是れ言句を疑せざること莫らん麽。是れ未だ得ざるを得と謂ひ、未だ證せざるを證と謂ふこと莫らん麽。若し㊀膏肓の疾を論ぜば、總に者裏に在らず。既に者裏に在らず、畢竟甚麽の處にか在る。咄。三條椽下七尺單前。」(高峰錄)

佛鑑懃禪師曰く、「每に學道の兄弟を見るに、有るは省悟を求めず、唯々言說を務め、他の古人の因緣を會せんと要す、豈に大錯に非ずや。他の古人、只是れ一期病に對し方を施し、機に隨つて藥を發す、遂に如許多の㊁葛藤路門あり、月を標して指頭門を敲く瓦子の如く、意只是れ扣を假りて門を開き、標に因つて月を見、儻し門開き月現ずることを得ば、瓦子指頭、何の用か之れ有る。」

佛鑑曰く、「參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし。研窮して徹底し去らしむ、是れ今日一轉語を下し得て、明日一則の因緣を過ぎ得るにあらず。古今の因緣、數河沙の若し、甚の休歇かあらん、畢竟心地を明めずんば、如何が生死を了達せん。只達磨初めて來

㊀膏肓とは、醫學入門に曰ふ、醫緩は春秋の時の秦人也。姓は高、名は緩、晉の景公疾む、緩を求めて治せしむ。未だ到らず、時に夢む、二豎子相謂つて曰く、我は肓の上に居らん、汝は膏の下に居れと。緩至つて曰く、病膏肓にあり、藥爲さむべからずと。卽ち命根に入るを云ふ。故に病の治すべからざるを膏肓に入ると云ふ。

㊁葛藤とは、雙方の間に爭論の起るを云ふ。范成大の詩に「三十年來共葛藤」と。

りし時の如く、未だ許多の因緣あらず、甚としてか人、道を悟ることあらん、云々。」又曰く、「兄弟を勸め奉る、但心地を明め、因緣を會ぜざることを愁ふること莫れ、古今の因緣なり。一時看ざれとは道はず、但々一則を將ち去りて看得透すれば、千則萬則皆同じ。若し這の一則を會得すれども、未だ那一則を會せず」と道はゞ、決定して未だ是ならず。」（普燈錄）

大慧禪師曰く、「千疑萬疑、只是れ一疑、話頭上に疑ひ破るれば、千疑萬疑一時に破る。」

圜悟禪師曰く、「直に大死底の人の氣息を絕して、然して後㊆穌醒するに似て、始めて廓いなること太虛に同じきことを知らん。」（心要）

瑞鹿本先禪師上堂、大凡そ參學は未だ必ずしも、問話を學ぶ、是れ參學にあらず。未だ必ずしも揀話を學ぶ、是れ參學にあらず。未だ必ずしも代語を學ぶ、是れ參學にあらず。未だ必ずしも別語を學ぶ、是參學にあらず。未だ必ずしも經論中奇特の言語を捻破することを學ぶ、是れ參學にあらず。未だ必ずしも祖師の奇特の言語を捻破する、是れ參學にあらず。若し是くの如き等の參學に於て、任ひ儞七通八達なるも、佛法の中に於て儻し見處なくんば、喚んで乾慧の徒と作さん。豈に聞かずや、古德の曰く、「聰明、生死に敵せず、乾慧豈に苦輪を免れんや。」諸人若し也た參學せば須らく眞實に參學して始めて得べし。行時は行時に參取し、立時は立時に參取し、坐時は坐時に參取し、眠時は眠時に參取し、語時は語時に參取し、默時は默時に參

㊆穌醒、蘇生に同じ、よがみへるなり。

取し、一切作務の時は一切作務の時に參取せよ。既に是くの如き等の時に向つて參ず、且く道へ、個の甚人にか參じ、個の甚麽の語にか參ず。這裏に到つて須らく自ら個の明白の處ありて始めて得べし。若し是くの如くならずんば、喚んで㊅造次の流と作さん、究了の旨なし。（會元）

開善謙禪師曰く、「時光過ぎ易し、且つ緊々に工夫を做せ。別に工夫なし、但々放下すれば便ち是なり。只心識上に有らゆる底を將て、一時に放下せよ、此は是れ眞正徑截の工夫なり。若し別に工夫あらば、盡く是れ痴狂外邊に走らん。」

黃龍庵主（祖心也）、門に牓して曰く、「諸禪學に告ぐ、此の道を窮めんと欲せば、切に須らく自ら看るべし、人の替代るなし。時中或は是れ因緣を看得して、自ら歡喜入處あらば、卻つて來りて入室吐露して、爲に是非深淺を品評することを待て。如し、未だ發明せずんば、但且つ歇し去れ、道自ら現前せん。苦々として馳求すれば、轉々迷悶を增す。此れは是れ離言の道要自ら肯ふに在り、他に由つて悟らず、此くの如く發明するを方に㊆無量劫來生死の根本を了達すと名づく。若し離言の道を見得すれば、卽ち一切の聲色言語是非を見るに、更に別法なし。若し離言の道を見ざれば、便ち類を將て目前差別の因緣を會して、以て所得と爲す。只恐らくは、誤りて門庭目前の光影を認めて、自ら覺知せず、飜つて剩語と成ることを。到頭、只是れ自ら謾じ枉げて心力を費す。宜なるかな、晝夜已に克

㊅造次は、一寸の義に同じ。
㊆無量劫來。一劫とは、吾人の算數にて計へ難き年月也、その劫の無量なる程久しき以來の——との義にて、迷惑生死の根本の因業深く遠きなりといふ也。

つて精誠、行住觀察微細に審思すること、別に用心なければ、久遠自然に個の入路あり。是れ朝夕に學んで事業を成ずるに非ず。若し也た是くの如く參詳すること能はずんば、如かず看經持課して此の殘生を度らんには。亦自ら亂生謗法の如きに勝る。若し老を送るの時敢保す、個の無事の人となりて、更に他の累なきことを。其の餘の入室今去つて、(ス)朔望兩度、卻つて請ふ、訪ひ及すことを。」(羅湖野錄)

(ス)朔望。朔は月の始めにして、一日をいひ、望は月の中にして十五日をいふ。

國譯緇門寶藏集卷之中　終

國譯緇門寶藏集卷之下

十四　學道は須らく直截の一路に參得することを要すべし

德山宣鑒禪師、出世して、凡そ僧の門に入るを見ては便ち棒す。臨濟義玄禪師、出世して、凡そ僧の門に入るを見ては便ち喝す。大惠、人に示す法語の略に云く、「但々平昔坐禪の處に得る底、經敎を看る處に得る底、語錄上に記得する底、宗師の口頭言下に領覽し得る底を將て、一時に他方世界に掃向して、卻つて緩々地に子細に看よ。他の德山、何が故ぞ、僧の門に入ると見ては便ち棒す、臨濟何が故ぞ、僧の門に入るを見ては便ち喝す。若し二大老の用處を識らば、日用境に觸れ緣に逢ふ處に於て、世諦流布を作さず。亦佛法の理論を作さず。既に此の二邊に著せず、須らく知るべし、自ら一條の活路あることを。」

祕魔岩和尚、常に一木叉を持して、僧の來りて禮拜するを見る毎に、卽ち頸を叉卻して曰く、「那箇の魔魅か汝をして出家せしむ。那箇の魔魅か汝をして行脚せしむ。道ひ得るも也た叉下に死す、道ひ得ざるも也た叉下に死す。速かに道へ速かに道へ。」學徒、對ふる者あること鮮し。(會元)

慈明和尚、室中に劍一口を揷し、草鞋一對、水一盆を以て劍邊に置在す。入室するを見る毎に卽ち

曰く、「看よ看よ。」劍邊に至りて擬議する者あれば、師曰く、「喪身失命し了れり。」便ち喝出す。（會元）

紫胡和尙、山門に一牌を立つ、牌中字あり、云く、「紫胡に一狗あり、上は人の頭を取り、中は人の腰を取り、下は人の脚を取る、擬議せば喪身失命す」と。凡そ新到を見ては、便ち喝して云く、「狗を看よ。」僧纔かに首を回せば、紫胡便ち方丈に歸る。（碧巖）

佛鑑懃禪師、室中に❶木骰子六隻を以て、面々皆厶の字を書す。僧纔かに入る。師擲つて曰く、「會す麼。」僧擬不擬す。師卽ち打出す。（會元）

❶木骰子。博奕の采、すごろくのさい。

晦堂心禪師、室中常に拳を擧す。僧に問うて曰く、「喚んで拳頭と作すときは觸る、喚んで拳頭と作さゞるときは背く、喚んで甚麼とか作さん。」

大慧禪師、室中常に竹篦を擧す、僧に問うて曰く、「喚んで竹篦と作すときは觸る、喚んで竹篦と作さゞるときは背く、下語することを得ず、無語なることを得ず、速かに道へ、速かに道へ。」

香嚴和尙、衆に示して曰く、「若し此の事を論ぜば、人の樹に上るが如し。口に樹枝を銜み、脚枝を蹋まず、手枝を攀ぢず、樹下に忽ち人ありて問はん。『如何なるか是れ祖師西來意』と。他に對へざれば又他の所問に違す、若し他に對ふれば又喪身失命す。恁麼の時に當つて作麼生か卽ち得ん。」

芭蕉淸禪師、衆に示して曰く、「儞に拄杖子あらば、我れ儞に拄杖子を與へん。儞に拄杖子なくんば我れ儞が拄杖子を奪はん。」

開善謙禪師曰く、「山僧尋常道ふ、行住坐臥決定して不是、見聞覺知決定して不是、思量分別決定して不是、語言問答決定して不是。試みに此の四個の路頭を絶卻して看よ、若し絶せずんば決定して悟らず。此の四個の路頭若し絶せば、僧、趙州に問ふ、『狗子に還つて佛性ありや、也た無や。』趙州云く、『無。』『如何なるか是れ佛。』雲門道く、『乾屎橛。』管取して呵々大笑せん。」（羅湖野錄）

楊岐和尚、室中僧に問ふ、「栗棘蓬儞作麼生か呑まん。金剛圏儞作麼生か透らん。」

大慧禪師、室中僧に問ふ、「不是心、不是佛、不是物、是れ箇の作麼。」

石頭和尚曰く、「恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず。恁麼不恁麼、總に得ず、子作麼生。」

羅山和尚曰く、「會す麼、是れ禪にあらず、是れ道にあらず、是れ佛にあらず、是れ法にあらず。是れ甚麼ぞ。」

古德曰く、「此の事は有心を以て求む可らず、無心を以て得べからず、語言を以て造るべからず、寂默を以て通ずべからず。」大慧曰く、「此れは是れ第一等㊀泥に入り水に入る老婆の說話なり。往々に參禪の人、只々恁麼に念過して、殊に子細に是れ甚の道理ぞと看ず。」（大慧書）

㊀泥に入り云々、田夫野人の言に同じ。

十五　學道は須らく泥に入り水に入る老婆の說話を知ることを要すべし

雲門大師曰く、「古人大いに葛藤相爲にするの處あり。祇雪峰和尚の道ふが如くんば、盡大地是れ

儞。」夾山和尙の道く、「百草頭上に老僧を薦取し、鬧市裏に天子を識取せよ。」洛浦和尙の云く、「一塵纔かに起らば、大地全く收る。一毛頭の師子全身總て是れ儞。把取して翻覆思量して看よ、日久しく歳深うして自然に個の入路あらん。」

圜悟禪師曰く、「古來大いに眉毛を惜まず人の爲に指出する處あり。雲門は覩體全眞、臨濟は報化佛頭を坐斷す。德山は心に無事に、心に於て無事なれば、虛にして靈に、寂にして照なり。巖頭は只只閑々地を守る、一切時中無欲無依なれば、自然に諸三昧を超ゆ」。趙州道く、「我百千個の漢子を見るに、只是れ作佛を覓むる底、中間、個の無心の道人を覓むるに得がたし。但々熟々其の言を味ふて心を休して履踐せよ、他時異日、境に逢ひ緣に遇ふて乃ち力を得ん。」(心要)

魏府の老華嚴、示衆の語に曰く、「佛法は儞が日用の處に在り、儞が行住坐臥の處、喫茶喫飯の處、語言相問の處、所作所爲の處に在り。若し擧心動念すれば、又却つて不是なり。還つて會す麼。儞若し會得せば、卽ち是れ擔枷帶鎖重罪の人なり。」

雪峰存禪師、衆に示して曰く、「一々蓋天蓋地、更に玄と說き妙と說かず、亦心と說き性と說かず、突然として獨露す。大火聚の如く、之に近づくときは面門を燎却す。太阿の劍に似て之に擬するときは、喪身失命す。若し也た佇思停機せば、干涉を沒す。」(碧巖)

雲門大師曰く、「汝若し相當り去らば且く個の入路を覓めよ。微塵の諸佛、儞が脚跟下に在り。三藏

の聖教、儞が舌頭上に在り。如かず悟り去つて好からんには。」

大慧禪師曰く、「龍の半盞の水を得て、便ち能く雲を興し霧を吐いて、大雨を降霔するが如し。那裏か祇管大海の裏に去りて㊇輥じて我に許多の水ありと謂はん。」

大慧曰く、「儞但々心念を灰卻し來りて看よ、灰し來り灰し去りて、驀然として冷灰に一粒の豆、爐外に爆在せよ、便ち是れ沒事の人ならん。」

大慧曰く、「我が這裏日を逐ふて長へに進む底の禪なし。遂に彈指一下して云く、若し會し去らば便ち罷參。」（武庫）

佛曰く、「定法の㊁阿耨多羅三藐三菩提と名づくるもの有ることなし。亦定法として如來の說く可きもの有ることなし。」

臨濟和尚曰く、「我れに一法の人に與ふるなし、只是れ病を治し縛を解す。」

德山和尚曰く、「我宗に語句なし、實に一法の人に與ふるなし。」

大慧禪師曰く、「此の事若し一毫毛の工夫を用ひて取證せば、人の手を以て虛空を撮摩するが如し、只益々自ら勞するのみ。」又曰く、「心意識を以て領會を容れず。」

臨濟和尚曰く、「物と拘はらず、脫體現成。」

㊇輥、めぐらすなり。

㊁阿耨多羅三藐三菩提。(Anuttara-samyak-sambodhi) の音寫、無上正偏智と譯す、佛陀の智德を稱する一名號にして、佛は絕對智者にして其智を超えて、大なるものなきが故に無上といひ、萬有の一一を悟了せざるなきを以て、正偏智といふ。傳敎大師の歌に「あのくたらさみやくさぼだいのほとけたち、我たつそまに冥加あらせたまへ」とあり、古今集に見えて古來の相傳とすといふ。

地藏琛和尙曰く、「若し佛法を論ぜば一切現成。」

眞淨和尙曰く、「一切現成、更に誰をしてか會せしめん。」

十六　學道は須らく向上の一路を洞明することを要すべし

趙州和尙曰く、因に僧問ふ、「狗子に還つて佛性ありや、也た無きや。」州云く、「無。」

趙州因に僧、婆子に問ふ、「臺山の路甚處に向つてか去る。」婆云く、「驀直に去れ。」僧纔かに行くこと三五步。婆云く、「好箇の師僧、又恁麼に去れ。」後に僧あり州に擧似す。州云く、「我去りて儞が這の婆子を勘過せんを待つて、明日便ち去りて亦是くの如く問ふ。婆も亦是くの如く答ふ。」州歸りて衆に謂つて云く、「臺山の婆子、我儞が與に勘破し了れり。」

趙州、一庵主の處に到りて問ふ、「有り麼有り麼。」主、拳頭を竪起す。師曰く、「水淺くして是れ船を泊むる處にあらず」と云つて、便ち行く。又一庵主の處に到りて問ふ、「有り麼有り麼。」主亦拳頭を竪起す。師曰く、「能縱能奪能殺能活」と云つて便ち作禮す。

僧、淸平和尙に問ふ、「如何なるか是れ大乘」曰く、「㋭井索。」「如何なるか是れ小乘。」曰く、「鐵索。」「如何なるか是れ有漏。」曰く、「笊籬。」「如何なるか是れ無漏。」曰く、「木杓。」

㋭井索は井戸の釣瓶繩なり、鐵索は鐵索なり、笊籬は竹などにて作るまがき也。

南泉和尙、因に東西兩堂、猫兒を爭ふ。泉乃ち提起して云く、「大衆道ひ得ば即ち救はん、道ひ得ず

んば即ち斬却せん。」衆對ふるものなし。泉遂に之を斬る。晩に趙州外より歸る。泉、州に擧似す。州乃ち履を脫いで頭上に安じて出づ。泉云く、「子若し在りしならば、即ち猫兒を救ひ得ん。」

洞山和尙、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」山云く、「麻三斤。」

雲門大師、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」門云く、「乾屎橛。」

楊岐和尙、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」岐云く、「三脚の驢子、蹄を弄して行く。」

僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ佛。」州云く、「殿裏底。」

龐居士馬祖に問ふ、「萬法と侶たらず、是れ什麽の人ぞ。」祖云く、「儞が一口に西江水を吸盡するを待つて、即ち汝に向つて道はん。」士豁然として大悟。頌を作りて曰く、「十方同聚會、箇々學無爲、此は是れ選佛場、心空及第して歸る。」と。

僧、巖頭和尙に問ふ、「古帆未だ挂けざる時如何。」師曰く、「小魚、大魚を呑む。」又僧前の如く問ふ。師曰く、「後園の驢、草を喫す。」

大潙安和尙曰く、「有句無句は藤の樹に倚るが如し。」疎山問ふ、「忽ち樹倒れ藤枯るゝに遇ふ時如何。」師、呵々大笑して方丈に歸る。

寶樹和尙開堂して曰く、「三聖、一僧を推出す。師便ち打す。聖曰く、『與麽に人の爲にせば、但々這の僧の眼を瞎却するのみに非ず。鎭州一城の人の眼を瞎却し去ること在らん。』法眼云く、『甚麽の處か

是れ人の眼を瞎卻する處ぞ。』師、拄杖を擲卻して便ち方丈に歸る。」

三聖和尙上堂、我れ人に逢ふときは出づ、出づるときは人の爲にせず。興化曰く、「我れ人に逢ふときは出でず、出づるときは便ち人の爲にす。」と。

十七　學道は須らく噴地の契劵を領會することを要すべし

臨濟三度、黃檗に佛法的々の大意を問うて、三度打せらる。遂に大愚の處に到りて有過無過を問ふ。愚曰く、「黃檗與麼に老婆心切なり、汝が爲に徹困なることを得、更に這裏に來りて、有過無過と問ふ。」師、言下に於て大悟す。乃ち曰く、「元來、黃檗の佛法多子なし。」と。

興化、大覺に到りて院主と爲る。一日覺、院主と喚ぶ。「我れ聞く、儞道ふ南方に向つて行脚一遭す、拄杖頭曾て一個の佛法を會する底を撥著せずと、儞個の甚麼の道理に憑りてか、與麼に道ふ。」師便ち喝す。覺便ち打す。師又喝す。覺又打す。師來日、法堂より過ぐ。覺、院主と召す。「我れ直下に儞が昨日の這の兩喝を疑ふ。」師又喝す。覺又打す。師再び喝す。覺又打す。師曰く、「某甲、三聖師兄の處に於て個の賓主の句を學得す、總に師兄に折倒し了らる。願はくは某甲に個の安樂の法門を與へよ。」覺曰く、「這の瞎漢、這裏に來りて敗闕を納る、納衣を脫下して痛く打すること一頓せん。」師、言下に於て臨濟先師、黃檗の處に於て棒を喫する底の道理を薦得す。

歸靜禪師初め西院に參す。便ち問ふ、「問はんと擬して問はざるとき如何」。院便ち打す、師良久す。

院曰く、「若し喚んで棒と作さば眉鬚墮落せん。」師、言下に於て大悟す。

僧、趙州に問ふ、「學人乍入叢林、乞ふ師指示せよ。」師云く、「喫飯了也。」僧云く、「喫飯了。」州云く、「鉢盂を洗ひ去れ。」這の僧豁然として大悟。後來雲門大師拈じて云く、「且く道へ、指示あるか、指示なきか。若し有りと言はゞ趙州他に向つて甚麽とか道はん、若し無しと言はゞ、這の僧、甚としてか悟り去る。」

高亭簡禪師、德山に參ず。江を隔てゝ纔かに見て便ち云ふ、「不審。」山乃ち扇を搖して之を招く。師忽ち開悟す。乃ち橫に趨り去る、更に回顧せず。

鳥窠道林禪師、因に侍者會通禮辭して曰く、「某甲法の爲に出家す、和尚慈誨を垂れず、今諸方に往いて佛法を學び去らん。」師云く、「若し是れ佛法ならば、吾が此の間にも亦少許あり。」曰く、「如何なるか是れ和尚、此の間の佛法。」師、身上に於て布毛を拈起して之を吹く。侍者大悟す。

龍潭信禪師、一日天皇に問うて曰く、「某、到來してより心要を指示することを蒙らず。」皇曰く、「汝到來してより、吾れ未だ嘗て汝に心要を指さざるにあらず。」師曰く、「何處か指示する。」皇曰く、「汝、茶を擎し來れば、吾れ汝が爲に接す。汝、食を行じ來れば、吾れ汝が爲に受く。汝和南するときは、吾れ便ち低首す、何處か心要を指示せざる。」師低頭良久す。皇曰く、「見は直下に便ち見よ、擬思せば卽ち差ふ。」師當下に開解す。復た問ふ、「如何なるか保任せん。」皇曰く、「性に任せて逍遙し、緣に隨つ

て㋬放曠たり、但凡心を盡せ、別に聖解なし。」

僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の柏樹子。」僧云く、「和尚境を將て人に示す莫れ。」州云く、「我れ境を以て人に示さず。」僧云く、「既に境を將て人に示さずんば、卻つて如何なるか是れ祖師西來意。」州只云く、「庭前の柏樹子。」其の僧、言下に於て忽然として大悟す。（傳燈會元等大悟の義なし、今大慧法語に依りて之を記す。）

葉縣省和尚、因に僧、趙州柏樹子の話を請益す。省曰く、「我れ汝が與に說くことを辭せず、還つて信ぜんや。」云く、「和尚の重言爭でか敢て信ぜざらん。」曰く、「汝還つて簷頭の雨滴聲を聞く麼。」其の僧豁然として覺せず、失聲して曰く、「㋣哪。」省曰く、「汝箇の甚麼の道理をか見る。」僧便ち頌を以て對へて云く、「簷頭の雨滴、分明に瀝々、乾坤を打破して、當下に心息む。」省忻然たり。

洞山初禪師、初め雲門に參ず。門問ふ、「近離甚の處ぞ。」師曰く、「㋠查渡。」門曰く、「夏、甚の處にか在る。」師曰く、「湖南の報慈。」門曰く、「幾時か彼を離る。」師曰く、「八月二十五。」門曰く、「汝に三頓の棒を放す。」師、明日に至つて卻つて上りて問訊す。昨日和尚の三頓の棒を放つことを蒙る。知らず過甚麼の處にか在る。」門曰く、「㋨飯袋子、江西湖南に恁麼にし去る。」師、言下に於て大悟す。遂に曰く、「他後、人煙なき處に向つて、一粒米を蓄へず、

㋬放曠。悠然として寬ろぎ物累に煩はされぬを云ふ。
㋣哪。音「シヤ」、我なる程と云ふ意の時發する聲。
㋠查渡。渡し場なり。
㋨飯袋子。穀潰しと云ふが如し。

一莖菜を種ゑず、十方往來を攝待して盡く(ヌ)伊が與に釘を抽き楔を拔いて炙脂帽子を拈却し、(ル)鶻臭布衫を脫却して、伊をして洒々地に箇の無事の衲僧と作さしめん、豈に快ならざらんや。」門曰く、「儞身は椰子の大の如くにして、如許の大口を開き得たり。」師便ち禮拜す。

嚴陽尊者初め趙州に參ず。問ふ、「一物(ヲ)不將來の時如何。」州曰く、「放下著。」師曰く、「既に是れ一物不將來、箇の甚麽をか放下せん。」州曰く、「放不下ならば擔取し去れ。」師、言下に於て大悟す。

歸宗拭眼禪師曾て僧あり、問ふ、「如何なるか是れ佛。」宗云く、「我れ汝に向つて道はん、汝還つて信ぜんや否や。」僧云く、「和尚の誠言、焉んぞ信ぜざらん。」宗云く、只汝便ち是。」僧、宗の語を聞いて(ワ)諦審思惟、良久して曰く、「某便ち是れ佛ならば、卻つて如何が保任せん。」宗曰く、「一翳目に在りて空花亂墜す。」其の僧言下に於て、忽然として契悟す。(會元少しく異なり、今大惠法語に依りて之を記す、僧は芙蓉道訓なり。)

(ヌ)伊。彼れと云ふに同じ。
(ル)鶻臭。乳臭なり。
(ヲ)不將來。持ち來らざるなり。
(ワ)諦審。あきらか、つまびらかなり。

法眼嘗て地藏に參ず。日に見解を呈して道理を說く。藏之に語りて曰く、「佛法恁麽にあらず。」師曰く、「某甲、詞究り理絕す。」藏曰く、「若し佛法を論ぜば、一切見成。」師、言下に於て大悟す。

香嚴閑禪師遂に潙山に參ず。山問ふ、「我れ聞く汝百丈先師の處に在りて、一を問へば十を答へ、十を問へば百を答ふと、此は是れ汝が聰明靈利、意解識想は生死の根本なり。父母未生の時、試に一句を道へ看ん。」師一問せられて直に得たり、茫然たることを。寮に歸りて平日看過する底の文字を將

て、㋕頭めより一句を尋ねて㋙酧對せんと要するに、竟に得ること能はず。乃ち自ら嘆じて曰く、「畫餅、饑に充つ可らず云云。」と。一日草木を芟除す、偶々瓦礫を拋ち竹を撃ちて聲を作す、忽然として省悟す。

十八　學道は須らく見地の淺深を委悉することを要すべし

雲門大師衆に示して曰く、「直に乾坤大地、纖毫の過患なきことを得るも、轉句一色を見ざるも、始めて是れ半提、更に全提の時節あることを知る可し。」

雲門曰く、「法身に亦兩般の病あり、法身に到ることを得るも、㋟法執忘れ己見猶ほ存するが爲に、法身邊に坐在する、是れ一。直饒ひ法身を透得し去るも、放過すれば卽ち不可なり。子細に檢點し來るに甚麼の氣息か有らんと云ふ、亦是れ病なり。」大惠曰く、「而今、實法を學する者の法身を透過するを以て極致と爲す、而も雲門返つて以て病と爲す。知らず法身を透過し了りて、作麼生かすべき。這裏に到りて人の水を飲んで、㋹冷煖自知するが如し。別人に問ふことを著けず。別人に問はゞ㋡禍事なり。」

洞山价禪師曰く、「末法の時代、人乾惠多し。若し眞僞を辨せんと要せば、三種の滲漏あり。一には

㋕頭めは、初めなり。
㋙酧對、應對と云ふが如し。
㋟法執は、法は物の意なり、卽ち一切の事物に對する執着を云ふ。
㋹冷煖自知、自ら水の冷き、火の煖き事を實驗するの意にて、體得する事を云ふ。
㋡禍事は、誤りと云ふ程の意なり。

見滲漏、謂ゆる機、位を離れざれば、毒海に墮在す。明安云く、「見、所知に滯在するが爲なり、若し位を轉せざれば一色に坐在す。」言ふ所の滲漏と云ふは只是れ可の中、未だ善を盡さずんば、須らく來蹤を辨じて始めて玄機妙用を相續することを得べし。二には情滲漏、謂ゆる智常に㋨向背して見處㋧偏枯なり。明安云く、『情境、圓かならざるが爲に取捨に滯在して、前後偏枯にして鑑覺全からず。』是れ識浪流轉、途中邊岸の事なり。直に須らく句々二邊を離れて、情境に滯らざるべし。三には語滲漏、謂ゆる體、妙宗を失して機終始に昧し。學者濁智流轉して此の三種を出でず。明安曰く、『體妙、宗を失すとは語路に㋤滯在して、句宗旨を失す。機終始に昧しとは、謂ゆる機に當りて暗昧にして、只語中に在りて宗旨圓かならず。』句々須らく是れ有語中の無語、無語中の有語にして始めて妙旨密圓なることを得るなり。」

無業國師曰く、「設ひ理を悟るの旨あつて、一知一解あるも是れ悟中の則、入理の門なることを知らず。㋶便ち永く世利を出すと云つて、山を巡り澗に傍ふて上流を輕忽し、心漏をして盡さず、理智をして明ならざらしむることを致す。空しく老死して成ずることなく、虛しく歲月を延ぶるに到る。且つ聰明、業に敵すること能はず、乾慧未だ苦輪を免れず、假使ひ才、㋰馬

㋨向背は、背くの意にて、眞處を見る能はざるを云ふ。
㋧偏枯は、偏狹の意なり。
㋤滯在は、行きつまるの意なり。
㋶便は、即ちなり。
㋰馬鳴は梵語にては、阿濕縛窶沙（Aśvaghoṣa）といひ西印度の人、釋尊の滅後七百年代に出生し、始め外道に歸して佛教に抗せしも、脇尊者に論破せられて佛教に歸し、却つて外道及び小乘教を摧破して、大乘佛教を興起す、起信論は實に其の作なりと傳ふ、知辨、世に絕したる人なり。

鳴に並び、解、(ワ)龍樹に齊しきも、只是れ一生兩生、人身を失せず、根思、宿に淨きものは聞知して即解す。」（傳燈錄）

圜悟禪師曰く、「大死底の人、都て佛法の道理、玄妙、得失、是非、長短なし。這裏に到りて只恁麽に休し去る。古人之を平地上の死人無數、(ヰ)荊棘林を過得する是れ好手と謂ふ。須らく是れ那邊に透過して始めて得べし。然も是くの如くなりと雖も、如今の人、這般の田地に到ること、早く是れ得難し。或は若し依倚ありて解會あらば、則ち沒交涉。喆和尚、之を見、不淨潔と謂ふ。五祖先師、之を命根不斷と謂ふ。須らく是れ大死一番して、却つて活して始めて得べし。浙中の永光和尚道く、『言鋒若し(ノ)差へば鄕關萬里、直に須らく懸崖に手を撒して、自ら肯て承當すべし。絕後に再び(オ)甦らば君を欺くことを得ず。』非常の旨、人焉んぞ廋さんや。」（碧巖）

古人曰く、「言を承りて須らく宗を會すべし、自ら規矩を立つること勿れ」と。如今の人只管に擡將し去りて便ち了す。得ることは則ち得たり、(ク)爭奈せん顢頇儱侗なることを。若し作家面前に到りて三要の語を將て、空に印し泥に印し水に印して他を驗すれば、便ち見ん、方木圓孔に逗して

(ワ)龍樹は梵名那伽閼剌樹那(Nāgārjuna)にして、亦龍猛、龍勝等と譯す、佛滅七百年の頃(卽ち支那後漢の末葉)、南天竺、婆羅門種、富豪の家に生る、天資聰明、弱冠の頃、天文、地理等、當時世に行はれたる學藝を修め通ぜざるなし、後佛法に志し大乘經典を究め之を弘通せしかば、之より大乘佛教大に興る、故に龍樹菩薩と尊稱せられ、大乘諸宗の祖師と敬せらる、多くの著述あり。

(ヰ)荊棘林は「イバラ林」の事にて、難關或は難所の意なり。

(ノ)差へばは違へばの如し。

(オ)甦は「よみがへる」、再生なり。

(ク)爭奈は如何の如し。

下落の處なきことを。（碧巖）

圜悟禪師曰く、「學道の士、初より信向あり、世の㋳煩惱を厭ふ。長に恐る個の入路を得ること能はざることを。既に師の指に逢ふ、或は自己に因つて、直下に從本以來元自ら具足せる妙圓の眞心を發明して、境に觸れ緣に遇ふて、自ら落著を知りて㋮便乃ち守住す。患ふらくは出得すること能はざることを。遂に㋘窠臼を作す、機境の上に向つて照を立て用を立て、咄を下し拍を下し眼を努り眉を揚ぐ、一場の特地なり。更に本色の㋫宗匠の盡く與に知許の知解を拈卻するに遇ふて、直下に本來無爲無事無心の境界を㋙契證す。然して後羞慚を識り休歇を知りて一向に冥然たり。諸聖すら尙ほ他の起處に㋓覓むるに得ず、況んや其の餘をや。所以に巖頭道く、『他の得底の人は只々閒々地を守る、㋢二六時中無欲無依なり。』是れ安樂の法門ならざる可けんや。」（圜悟心要）

洛浦和尙上堂末後の一句、始めて牢關に到る、要津を鎖斷して㋐凡聖を通せず。尋常諸人に向つて道ふ、㋚任從ひ天下樂み欣々たるも、我れ獨り肯せず、上流の士を知らんと欲す。佛祖の言敎を將て、額頭上に貼在せざれ、龜の圖を負ふが如く、自ら喪身の兆を取れ。鳳、金網に縈はる、霄漢に趨ること何を以てか期せん。直に須らく旨外に宗を

㋳煩惱の惱は穢る、或は濁るの意なり、故に煩はしき濁世と云ふ事なり。
㋮便乃は卽ちなり。
㋘窠臼は穴の事なり、「同一窠臼に落つ」等の語あり。
㋫宗匠は師家、或は知識に同じ。
㋙契證は悟了なり。
㋓覓むるは求むの意なり。
㋢二六時中は十二時間中の事にて、終日と云ふの意なり。
㋐凡聖は凡夫と佛との意なり。
㋚任從ひは「たとひ」なり。

明むべし、言中に向つて則を取ること勿れ。是を以て石人の機、汝に似らば也た巴歌を唱ふることを解せん。汝若し石人に似たらば雪曲も也た和すべし。(會元)

白雲端和尚曰く、「直に須らく悟りて始めて得べし。悟後更に須らく人に遇ふて始めて得べし。儞道ふ、既に悟り了りて便ち休せん、又何んぞ更に人に遇ふことを須ひんと。若し悟り了りて人に遇ふ底は、垂手方便の時に當つて、着々自ら出身の路あつて、學者の眼を瞎却せず。若し祇だ(キ)乾羅蔔頭を悟得する底は、唯だ學者の眼を瞎却するのみにあらず、自己を兼ねて動もすれば、便ち先づ自ら鋒を犯し手を傷る。」(會元)

五祖演和尚道く、「一般の人あつて參禪す、琉璃瓶裏に(コ)糍糕を搗くが如くに相似たり。更に動轉することを得ず、抖擻し出さず、觸著すれば便ち破る。若し活潑潑地ならんことを要せば、但々皮殼漏子の禪に參ぜよ。直に高山上に向つて撲將下來するに、亦不破亦不壞。」(碧巖)

(キ)乾羅蔔頭。趙州大蘿蔔頭は碧巖第三十則にあり。
(コ)糍糕は、餅或は團子の事なり。
(メ)執すればは、物に執著するの意なり。

晦堂和尚、衆に示して云く、「若し也た單に自己を明めて、目前を悟らざれば、此の人眼あつて足なし。若し目前を悟りて自己を明めざれば、此の人足あつて眼なし。此の二人に據るに十二時中常に一物あつて胸中に蘊在す、物既に胸に在らば不安の相、常に目前に在らん。既に目前に在りて途に觸れて滯を成さば、作麼生か平穩なることを得去らん。祖も言はずや、之を(メ)執すれば度を失す、必ず邪

路に入る。之を放てば自然に體に去住なし。」(正法眼藏)

葉縣省和尚云く、「參學は須らく參學の眼を具すべし。見地は須らく見地の句を得べし。有る時は句到りて意到らず、妄に前塵を緣し影事を分別す。有る時は意到りて句到らず、盲の象を摸し各々㊀異端を說くが如し。有る時は意句倶に到る、虛空界を打破し光明十方を照す。有る時は意句倶に到らず、無目の人縱橫に走りて、忽然として覺えず深坑に落つ。」(會元)

玄沙備禪師、大法擧し難く上根に遇ふこと罕にして、學者語に依りて解を生じ、照に隨つて宗を失することを疾んで、廼ち綱宗三句を示す。曰く、「第一句。且く自ら承當して現成具足せり、盡十方世界更に他なきが故に、祇だ是れ仁者なり。更に誰をして見、誰をして聞かしめん。都來是れ汝が心王の所爲、全く不動智と成る、只自ら承當することを闕く。喚んで開方便門と作す。汝をして一分の眞常流注有ることを信ぜしむ。古に亘り今に亘りて、未だ不是あらず、未だ非ならざる者あらず。然も此の句只々平等の法を成ず。何を以ての故に、但是れ言を以て言を遣り、理を以て理を逐ふ、平常の性相、攝物利生のみ。且つ宗旨に於て猶ほ是れ前を明めて後を明めず、號して一味平實分證法身の量と爲る、未だ出格の句あらず、句下に死在して未だ自由の分あらず。若し出格の量を知らば、心魔に使はるゝことを被らず。手中に入到して

㊀異端を說くが如しは、盲人が二人、象を撫でて各々自己の撫でて知つた一端を以て爭つたと云ふ事なり、卽ち徹底せざるものは、只己の知る一面を見て、全體なりと執するに譬ふ。

便ち轉換落々地なり。言、大道に通じ平懷の見に墮せず、是を第一句綱宗と謂ふなり。第二句。因を廻し果に就いて、平常一如の理に著せず、方便喚んで轉位投機と作す。生殺自在、(ト)縱奪隨宜、出生入死廣く一切を利す、遙かに色欲愛見の境を脱す、方便喚んで頓超三界の佛性と作す、此を二理雙明に二義齋照と名づく、二邊に動さるゝことを被らず。妙用現前是を第二句綱宗と謂ふなり。第三句。大智性相の本あることを知る、其の過量の見に通ず。明陰洞陽、廓周法界、一眞體性、大用現前、(ニ)應化無方、全用全不用、全生全不生、方便喚んで慈定の門と作す。是を第三句綱宗と謂ふなり。」

(ト)縱奪隨宜は、與ふも奪ふも時宜の宜しきに隨ふを云ふ。
(ニ)應化無方は、如何なるものにも接化の及ぶ事を云ふ、無方は限りなきの意なり。
(ヒ)從容は「落ち付く」の貌なり。

十九　學道は須らく得底の人に在りて必ずしも知解を嫌はざることを識るを要すべし

遠錄公云く、「未透底の人は句に參ずるより、如かず意に參ぜんには。透得底の人は意に參ぜんよりは、如かず句に參ぜんには。」（碧巖）

黃龍心禪師大悟の後、(ヒ)從容游泳して衆中に陸沈す。時々往いて雲門の語句を決す。南公曰く、「是れ般の事を知らば便ち休せよ。汝許多の工夫を用ひて作麽。」公曰く、「然らず、但々纖疑の在るあれば無學に到らず、安んぞ能く七縱八横、天廻り地轉ぜんや。」南公、之を肯ふ。（僧寶傳）

圜悟禪師曰く、「久參の先德、見て未だ透らず、透りて未だ明めざるあり、之を請益と謂ふ。若し是

れ見得透する請益は、卻つて語句上に周旋して、凝滯あること無きことを要す。久參の請益は賊の與めに梯を過す。」（碧巖）

歸宗和尚曰く、「從上の古德、是れ知解なきにあらず。他の高尙の士は常流に同じからず、今時自ら成し自ら立すること能はず、虛しく時光を度る。湧泉云く、『見解言語總に知通せんことを要す。若し識不盡ならば敢て輪廻し去ること在りと道はん。』何と爲して此くの如くなる。蓋し識漏未だ盡きざるが爲なり。汝盡卻して今時始めて成立することを得ん。」（會元）

大惠禪師曰く、「從上の大智惠の士、皆知解を以て㋲儔侶と爲し、知解を以て方便と爲し、知解の上に於て平等の慈を行じ、知解の上に於て諸の佛事を作さずと云ふこと莫し。龍の水を得るが如く、虎の山に㋝靠るに似たり。終に此を以て惱と爲さず、只他知解の起處を識得するが爲なり。」

宗鏡錄に云く、「若し智惠を以て非と爲さば、大智の文殊、應に法王の子と稱す可らず。若し多聞を以て是れ過とせば、無聞の比丘、地獄の人と作るべからず、應に須らく智惠を以て其の多聞に合すべし。終に詮を執して指を認めず、多聞を以て其の智惠を廣うせば、孤陋と成りて面墻することを免れん。所以に云ふ、『㋜智あつて行なきは國の師なり、行あつて智なきは國の用なり。智あり行あるは國の寶なり。智なく行なきは國の賊なり。』是を以て智は須らく學すべし、行

㋲儔侶は伴侶、或は同輩と云ふに同じ。
㋝靠るは依るの意なり。
㋜智あつて云々の國の師、國の用、國の寶等は傳敎大師の言なり。

は須らく修すべし。智を闕けば道の讐なり。行なきは乃ち國の賊なり、當に知るべし、㊀名相の關鎖は智鑰に非ざれば開悟し難く、㊁情想の勾牽は惠刀に非ざれば斷なきことを。」

二十　學道は須らく賓主の句を辨ずることを要すべし

臨濟和尚曰く、「參學の人、大いに須らく子細にすべし。主客相見するが如くんば、便ち言論往來あり。或は物に應じて形を現じ、或は全體作用し、或は機權を把りて喜怒し、或は半身を現じ、或は獅子に乘り、或は象王に乘る。眞正の學人あるが如くんば、便ち喝して先づ一箇の膠盆子を拈出す。善知識是れ境なることを辨ぜず、便ち他の境上に上りて、模を作し樣を作す、學人便ち喝す。前人肯へて放たず。此は是れ膏肓の病醫するに堪へず、喚んで客主を看ると作す。或は善知識、物を拈出せず。學人の問處に隨つて即ち奪ふ、學人奪はれて死に抵るまで放たず。此は是主客を看る。或は學人あつて一個清淨の境に應じて、善知識の前に出す。善知識是れ境なることを辨じて、把得して坑裏に拋向す。學人言く、『大好善知識』と。即ち云く、『咄哉、好惡を知らず』と。學人便ち禮拜す。此は喚んで主を主と看ると作す。或は學人あつて枷を被り鎖を帶し、善知識更に與に一重の枷鎖を安す。學人歡喜して彼此辨せず、客、客を看ると爲す。」

首山念和尚、衆に示して曰く、「諸上座盲喝亂喝することを得ざれ。尋常汝に向つて道ふ、賓は始終

㊀名相の關鎖は、名や形相に囚はれて居る事を云ふ。
㊁情想の勾牽は、凡情や忘想に縛られて居る事を云ふ。

賓、主は始終主、賓に二賓なく、主に二主なし。若し二賓二主あらば、兩箇㋩瞎漢と成る。所以に我れ若し立せば、儞須らく坐すべし。我れ若し坐せば、儞須らく立つべし。坐は儞と共に坐、立は儞と共に立、然も是くの如くなりと雖も、急に眼を著けて始めて得べし。」

二十一　學道は須らく㋥履踐の工夫を辨ずることを要すべし

唐の宣宗皇帝、弘辨禪師に問うて曰く、「何をか頓見と爲し、何をか漸修と爲す。」對へて曰く、「頓に自性を明むれば佛と㋭同儔なり、然も無始の染習あるが故に、漸修を假りて對治し、性に順じて用を起さしむ。人の飯を喫して一口に卽ち飽くが如し。」

潙山和尚上堂、夫れ道人の心は質直無僞、㋬背なく面なく、詐妄の心なく、一切時中視聽尋常なり。更に委曲なし、亦眼を閉ぢ耳を塞がず。但情物に附かざれば卽ち得。㋣從上の諸聖祇だ濁邊の過患を説く。若し如許多の惡覺情見想習の事なくば、譬へば秋水の澄渟清淨無爲澹泞無礙なるが如し。他を喚んで道はんと作す、亦無事の人に名づく。時に僧あり、問ふ、「頓悟の人更に修ありや否や。」師曰く、「若し眞悟して本を得ば、他自ら時を知る、修と不修と是れ兩頭の語、如今初心、緣より一念頓に自理を悟ることを得ると雖も、猶は無始曠劫の㋠習氣あり、未だ頓に淨きこと能はず、須らく渠をして現業の流識を

㋩瞎漢は、「ドメクラ」の程の意なり。
㋥履踐は、實踐躬行なり。
㋭同儔は、同輩なり。
㋬背なく云々は、裏面なくの意なり。
㋣從上は、從來の如し。
㋠習氣とは、例へば香料の香氣の如し、目に見る能はざれども、香りの殘るが如し、煩惱も亦此の如し、煩惱の垢は除去すとも香氣の如き習氣の染み付きて殘るを云ふ。

淨除せしむべし、卽ち是れ修なり。別に法あつて渠をして修行趣向せしむ可らず。聞より理に入り、聞理深妙にして、心自ら圓明なれば惑地に居らず。縱ひ百千の妙義あつて、抑揚、時に當るも、此れ乃ち得坐被衣自ら活計を作すことを解して始めて得。要を以て之を言へば、實際理地一塵を受けず、萬行門中一法を捨てず。若し也た單刀直入せば、凡聖情盡き、體露眞常、(リ)理事不二卽ち如々の佛。」(會元)

達磨大師、二祖に告げて曰く、「正法眼藏我れ今汝に付す、吾が滅後二百年、衣は止つて傳はらず、法は沙界に周し。道を明むる者多く、道を行ずる者は少し。理を說く者は多く、理に通ずる者は少し。(ヌ)潛符密證千萬有餘、汝當に闡揚すべし。未悟を輕んずる勿れ、一念機を廻せば便ち本得に同じ。」

大珠和尙、僧問ふ、「如何なるか是れ修行。」師曰く、「但自性を汚染すること莫れ、卽ち是れ修行。自ら欺誑すること莫れ、卽ち是れ修行。大用現前卽ち是れ(ル)無等等の法身なり。」(傳燈錄)

湧泉欣禪師上堂、我れ四十九年、這裏に在るすら尙ほ自ら時あつて走作す。汝等諸人大口を開くこと莫れ。見解の人は多く、行解の人は萬中に一箇もなし。見解言語總に知通せんことを要す。若し識

(リ)理事不二。理は本源の眞理卽ち平等絕對の本體なり、事は現象差別の森羅萬象を云ふ、此二、本と別ならず、本體と萬象と融卽して不二なるを云ふ。

(ヌ)潛符密證は、以心傳心と云ふが如し。

(ル)無等々、等比するものなき、絕對の意なり。

不盡ならば、敢へて輪廻し去ること在りと道はん。何としてか此くの如くなる、蓋し識漏未だ盡きざるが爲なり。汝但々盡却して今時始めて成立つことを得。（會元）

大慧禪師曰く、「此の事は極めて容易ならず、須らく慚愧を生じて始めて得べし。往々に㋷利根上智の者は之を得るに力を費さず、遂に容易の心を生じて便ち修行せず。多くは目前の境界に奪ひ將ち去られて、主宰と作ることを得ず。日久しく月深うして、迷ふて返らず、道力、業力に勝つこと能はず。魔其の便を得て、定んで魔の爲に攝持せられて、臨命終の時亦力を得ず。」

圜悟禪師曰く、「人の射を學ぶが如く、久々にして㋻方に中る。悟は則ち刹那なり、履踐の工夫は須らく長遠に資るべし。鶉鳩兒の出生下し來りて、赤骨歴地、養ひ來り餧ひ去りて、日久しく時深うして羽毛既に就りて、便ち高く飛び遠く擧ることを解するが如し。所以に悟明かに透徹して、㋕政に調伏することを要す。」（心要）

圜悟曰く、「理は須らく頓悟すべし、事は漸修を要す。」（心要）

南泉云く、「我れ十八上にして、作活計を解す。」趙州道く、「我れ十八上にして、破家散宅を解す。」又道く、「我れ南方に在る二十年、粥飯の二時是れ雜用心の處を除く。」

㋷利根上智は、利發有識の意なり。

㋻方は、的の意なり。

㋕調伏、梵語毘奈耶（Vinaya）の意なり、譯して離行と云ふ、舊譯には律と云ふ、能く衆生の身、口、意の三業を調和し、諸の惡業を伏滅して、諸の善業を作さしむるが故に此名あり。

洞山价禪師曰く、「直に須らく心心、物に觸れず、歩々、處所なくして、常に間斷せずんば相應することを得べし。」（傳燈錄）

大慈寰中禪師曰く、「一丈を說得せんより、如かず一尺を行取せんには。一尺を說得せんより、如かず一寸を行取せんには。」洞山又云く、「行不得底を說取せんより、如かず說不得底を行取せんには。」

晦堂心和尙曰く、「予初め道に入る、自ら甚だ易きことを恃む。㊂黃龍先師に見えて後に退いて日用を思ふに、理と矛盾する者極めて多し。遂に力めて之を行ふこと三年、㊃祁寒溽暑なりと雖も、志を確にして移らず、然して後に、方に事々、理の如きことを得たり。

而今、咳唾掉臂も也た是れ祖師西來意。」（禪門寶訓）

香林遠禪師嘗て云く、「老僧四十年、方に打成一片。」

圜悟、此の語を擧して得底の人をして、勤めて履踐工夫せしむ。眞に旨ある哉。

圭峯禪師曰く、「眞理は卽ち悟りて頓に圓かなるとも、妄情は之を息めて漸に盡く。頓圓は初生の㋺孩子の如く、一日にして肢體全し、漸修は長養して人と成るが如し。多年にして志氣方に立す。」（會元）

圭峯、又山南の溫造尙書問ふ、「理を悟り妄を息むるの人、結業せず。一期の壽終るの後、靈性何にか依る。」師曰く、「一切衆生、覺性を具有せずと云ふことなし。靈明空寂、佛と殊なることなし。但々

㊂黃龍先師、黃龍慧南禪師なり。

㊃祁寒溽暑は、大寒酷暑の意なり。

㋺孩子は赤子なり。

無始劫來未だ曾て了悟せざるを以て、妄に身を執して我相と爲す、故に愛惡等の情を生ず。情に隨ふて㊟業を造る、業に隨ふて報を受く。生老病死、長劫輪廻す。然も身中の覺性未だ曾て生死せず。夢に驅役を被むるとも、身本安閑なるが如し。水の氷と作るとも、濕性不易なるが如し。若し能く此の性を悟れば、即ち是れ法身、本自ら無生、何んぞ依託あらん。靈々と昧まず、了々として常に知る、從來する所なく、亦所去なし。然も多生の妄執習ふて性を以て成る。喜怒哀樂微細に流注す。眞理然も頓に達すと雖も、此の情以て卒に除き難し。須らく長へに覺察して之を損して又損すべし。風の頓に止んで波浪漸々停まるが如く、豈に一生に修する所、諸佛の力用に同じかる可けんや。但々空寂を以て自體と爲すべし、色身を認むる勿れ。靈知を以て自心と爲して、妄念若し起らば、都べて之に隨はず、即ち臨命終の時、自然に業繋ぐこと能はず、中陰ありと雖も向ふ所自由、天上人間意に隨つて寄託す。若し愛惡の念已に㊟泯すれば、即ち分段の身を受けず。自ら能く短を易へて長と爲し、麤を易へて妙と爲す。若し微細の流注、一切寂滅すれば、唯々圓覺の大智、朗然として獨り存す。即ち機に隨つて千百億の化身を應現して、有緣の衆生を度す。之を名づけて佛と爲す。謹對。」

圓悟和尚曰く、「古の有道宿德、人をして既に根塵を脫し、密印を弘むるに當りて、三十二年冷寂々

㊟業とは、梵語の Karman なり、業は造作を義とす、精神中に心をして或る事を造作せしむる一つの力ありと云ふ、業に就いては部執に依りて其說一ならず。

㊟泯は、亡なり。

地の工夫を做さしむ。纔かに纖毫の知見解路あれば、隨つて卽ち掃揮す。亦掃揮の迹を留めず、手を那邊に撒して、全身放下す。硬糾々地に大快活を得。唯恐る、是くの如きの作略あるを知ることを。禍事なり。」(圜悟心要)

嫩安和尙云く、「安んぞ潙山に在ること三十年來、潙山の飯を喫し、潙山の屎を屙し、潙山の禪を學ばず、只一頭の水牯牛を看る。若し路に落ちて草に入れば、便ち牽き出す。若し人の苗稼を犯さば卽ち鞭撻す、調伏すること既に久し、可憐生、人の言語を受く。如今變じて箇の露地の白牛と作る、常に面前に終日露迥々地、趁くとも亦去らざるなり。」(正法眼藏)

圜悟和尙曰く、「既に旨を得るの後、綿々として相續し管帶して、間斷なからしめよ。聖胎を長養し、縱ひ境界惡緣に逢ふとも、能く正知見定力を以て、融攝して一片と成さしめば、生死の大變も自己の胸次を動ずるに足らず。養ひ得ること歲深くして、個の無爲無事大解脫の人と成る。豈に是れ能事已に辨じ、行脚事畢るにあらずや。」(圜悟心要)

興善惟寬禪師、憲宗詔して闕下に至る、侍郎白居易嘗て問うて曰く、「既に禪師と曰ふ、何を以てか說法する。」師曰く、「無上菩提と云ふは、身に被むるを律と爲す、口に說くを法と爲す、心に行ずるを禪と爲す。應用のものは三。其の致は一なり、譬へば江湖淮漢の處に在りて名を立つるが如く、名、一ならずと雖も、水性は無二なり。律は卽ち是れ法、法は禪と離れず、云何んぞ中に於て妄に分別を起

さん。」曰く、「既に分別なくんば何を以てか心を修せん。」師曰く、「心本損傷なし、云何んぞ修理を要す、垢と淨とを論ずることなく、一切念を起すこと勿れ。」曰く、「垢は卽ち念ずべからず、淨は念ずることなくんば可ならんや。」師曰く、「人の㋤眼睛の上に一物を住す可らざるが如く、金屑、珍寶なりと雖も、眼に在りて亦病と爲る。」曰く、「修なく念なくば又何んぞ凡夫に異ならんや。」師曰く、「凡夫は無明、二乘は執著、此の二病を離る、是れ眞修と曰ふ、眞修は勤むることを得ず、忘るゝことを得ず。勤むれば卽ち執著に近し、忘るれば卽ち無明に落つ、此れを心要と爲すと云爾。」(會元)

潙山和尙、仰山に問うて曰く、「寂子儞が心識微細の流注、無にし來ること幾年ぞや。」仰山未だ卽答せず、卻つて問ふ、「和尙無にし來ること幾年ぞ。」其の時、潙山自ら是れ七十餘歲。仰山に謂つて曰く、「老僧無にし來ること已に七年、寂子何如ん。」仰山云く、「惠寂正に鬧すること在り。此を以て之を觀れば、這裏麤心をして脫空を說いて相瞞せしむること得てんや。眞に大力量あつて始めて得ん。」(大惠普說)

二十二　學道は須らく大休歇の田地に到り得ることを要すべし

斯の集成りぬ。㊉大休歇の田地に至りて編類を著けざるもの久し。一日僧あり、問うて曰く、「庵主斯の集を作る、謂つ可し、初學の觀覽に便ありと。然も大休歇の一門に至りて、編排を著けざることは何んぞや。」予曰く、「我れ知らず、我れ會せず。」僧曰く、「庵主什麼と爲す。」語未だ終らざるに、

㋤眼睛は、瞳(ひとみ)なり。
㊉大休歇は、大安樂と云ふが如し。

予、手を拍つて呵々として笑ふ。其の僧茫然たり、仍つて山中四威儀の偈を作る。聯陳志に云く、「山中の行赤脚、尖頭鳥道平かなり、㋒大蟲に逢著して牙爪に觸れ、歸來杖子暗に相驚く。山中の住、只識る、朝より又暮に到ることを。客來りて若し什麼に因ると問はゞ、萬岳千峯努力して怒る。山中の坐靠取す、㋰須彌那一座、是れ禪に倦んで駱駝を學ぶ、時に衲衣を把りて破を補はんと欲す。山中の臥、飽齁々地、一箇を消す、默耀韜輝枕兒に付す、幸然として人の滯貨を求むること無し。」

㋒大蟲、蛇を大虫といふ。
㋰須彌、梵語「スメール」の譯語にして、宇宙最高の山なり、故に最上の意にこの文字を用ゆ。

國譯緇門寶藏集卷之下 終

古德曰く、「多く前言往行を識りて、遂に其の志を成す」と。一絲先師嘗て丹山に隱れ、宴寂の餘、華竺の墳典を閱し、言行に便ある者を拾ふて、輯錄して編を爲す、之を目づけて緇門寶藏と曰ふ。總て三卷二十二章を得、始め信心を決し、生死を怕るるを以て本と爲す。終り履踐を勸め休歇に到るを以て極と爲す。其の中間に在る者師を擇び友を簡ぶの要、性を見、心を明むるの理以て向上末後、邪正賓主の句に至るまで、部類を剖列して該載せざるなし。間々評論を加へて之を折衷す。學者往々に襲藏して、夜光を獲るが如くす。余竊かに之を觀るに、魯魚豕亥相誤ること甚だ夥し。客歲の冬、本書を參考して、大概訂正し傍ら倭點を加へて、以て初學の觀覽に便とす。尙ほ恐らくは訛舛鮮からざらんことを。今將に(イ)梓に鏤し諸れを不朽に傳へて、以て後進の鑑と爲さんとす。讀者(ロ)儻し能く言に順ひ行に遵へば、遂に其の大志を成ずる者必せり矣、決せり矣。若し夫れ宿に靈骨あり、超宗の異同を具す、亦剩語を成さず。

寬文　龍集癸丑正　月　穀旦　　永源小比丘惠詢謹跋

(イ)梓に鏤し、は版に上するを云ふ。
(ロ)儻しは、若しなり。

重刊緇門寶藏集叙

道本無言、由言顯道、是故有漫錄、有寶訓、有筆語、有武庫、伏惟　一絲守和尚、初隱洛之西岡、後入丹山杳絕蹤跡、然湖海緇徒、繭足走風、就樹縛茅者不知其幾也、終名達九重、開榛法常靈源二刹、特賜徽號、曰定慧明光佛頂國師、示住庵古標之暇、捃摭佛祖遺言往行、間加品藻、名曰緇門寶藏集、杆知、昏衢慧炬病家良藥也、不翅利今時、抑亦垂化於後昆者歟、善哉因加焉、嗚呼寶永之頃、罹池魚之患、板成烏有、欲行于世、未由也已矣、邇日有一僧、重鏤于梓、圖之弘通、臨傍其功、謁叙於予、確辭不可、言忘謭劣、莠語以題卷首、參玄之徒行有餘力、則且繙且閱、拳拳服膺、一字一字一言一言、果知國師之骨髓也、此又由言顯道者不耶、然則啓開寶藏、運出家珍、、在於斯矣、雖然玉匙金鑰、今歸何人手裡、勿道新羅在海東、

安永第八星躔己亥孟冬日　　前華嶽良哉元明謹撰

緇門寶藏集卷之上

桐江庵主　文守編輯

一　學道須﹅要﹅生﹅決定信﹅

佛曰、信爲﹅道元功德母、長﹅養一切諸善法、斷﹅除疑網﹅、出﹅愛流﹅開﹅示涅槃無上道﹅、又云、信能增﹅長智功德﹅、信能必到﹅如來地﹅。

經曰、信能永斷﹅煩惱本﹅、又云、信能速證﹅解脫門﹅。

高峯妙和尚曰、從上若佛、若祖、超﹅登彼岸﹅、轉﹅大法輪﹅、攝物利生、莫﹅不﹅皆由﹅此一個信字中﹅流出﹅、昔有﹅善星比丘﹅、侍﹅佛二十年、不﹅離﹅左右﹅、蓋謂﹅無﹅此一箇信字﹅、不﹅成﹅聖道﹅、生陷﹅泥犂﹅。

華嚴觀云、有﹅信無﹅解、增﹅長無明﹅、有﹅解無﹅信、增﹅長邪見﹅、信解圓通、方爲﹅行本﹅云云、又云、有﹅信不﹅信﹅法界﹅、信是邪。

大惠禪師曰、具﹅正信﹅立﹅正志﹅、此乃成佛作祖基本也、舍利弗曰、以﹅信得﹅入、非﹅己智分﹅。

智度論云、佛言、若人有﹅信、能入﹅我大法海中﹅、能得﹅沙門果﹅、不﹅空剃頭染衣﹅、若無﹅信、是人不﹅能﹅入﹅我大法海﹅、如﹅枯樹不﹅生﹅華實﹅、不﹅得﹅沙門果﹅、雖﹅剃頭染衣﹅、讀﹅種種經﹅、能﹅難能﹅答、於﹅佛法中﹅空無﹅所﹅得、以﹅是義﹅故、在﹅佛法初﹅、善﹅以﹅信根﹅故。

經云、佛法大海信爲﹅能入﹅。

二　學道須要信得生死大事

無業國師曰、只這口食身衣、盡是欺賢罔聖、求得將來、他心惠眼觀之如喫膿血一般、總須償他始得云云、又曰、臨終之時、一毫凡聖情量不盡、纖塵思念未忘、隨念受生輕重五陰、向驢胎馬腹裏託質泥犂、鑊湯裏煑煠一偏了、從前記持憶想、見解智惠、都盧一時失却、依前再爲螻蟻蚊虻。

如今學佛之徒、日學月積爲功者、不出記持憶想、見解智惠八字、這個已如一時失却、畢竟何以敵佗生死、眞正學人、豈得不著忙耶。

大惠禪師曰、如某未睡著時、佛所讚者依而行之、佛所訶者不敢違犯、從前依師、及自做工夫、零碎所得者惺惺時、都得受用、及乎上牀半惺半覺時、已作主宰不得、夢見得金寶、則夢中歡喜無限、夢見被人以刀杖相逼、及諸惡境界、則夢中怕怖惶恐、自念此身尙存、只是睡著、已作主宰不得、況地水火風分散、衆苦熾然、如何得不被回換、到這裏方始著忙。

妙喜翁、自二十餘歲甫三十六、懷此大疑、一日忽在圜悟一言之下、始得平穩、蓋他上梢、只爲怕生死之心切、又不明實敵生死之法、則不能自休而已、今之學者、初無深怕生死之正念、只將麤心淺志、參禪學道、纔得小見小解、以爲萬足、嗚呼、古今之異因是岐焉、宜矣哉。

人天寶鑑云、湖南雲蓋山智禪師夜坐丈室、忽聞焦灼氣、枷鎖聲、卽而見之、廼有荷火枷者、火猶起滅不停、枷尾倚於門閫、智驚問曰、汝爲誰、苦至斯極耶、荷枷者對曰、前住當山守顒也、不合互將檀越供僧物、造僧堂、故受此苦、智曰、作何方便可免、顒曰、望爲估直僧堂、塡設僧供可

免爾、智以己貲如其言、爲償之、一夕夢、頤謝曰、賴師力、獲免地獄苦、生人天中、三生後、復得爲僧、今門閭燒痕猶存。 淸規

王荊公之子雱、所爲不善、雱死後、荊公恍然見雱荷鐵枷立門側、因捨宅爲寺、爲雱追薦冥福。 名臣言行錄

山庵恕中禪師曰、杭州天目山義斷崖、見高峯得旨、歸向者甚衆、既死、現夢託生於吳興細民家、後爲僧、名瑞應、字寶曇、自幼至壯、受人禮拜供養無虛日、余寓居天界時、寶曇亦在焉、隣居頗久、察其所爲、碌碌與常人無以異、間有以己躬事叩之者、但憮憮而已、前身實非常人、胡乃頓忘前世所習如是、古人謂、聲聞尙昧於出胎、菩薩猶迷於隔陰、然則修行人、可不愼歟。 山庵雜錄

又曰、洪武庚戌冬、奉化田子中、訪余太白、同居者久、余偶言、金剛般若經、閻羅王界稱爲功德經、故世人薦亡者多讀之、子中誓終身受持、一日値其母諱日、發心誦此經百過、以薦、晨起坐松榻上、方誦至九遍、見鬼卒枷杻一老媼、跪榻前、髮離披覆面、熟視之乃亡母也、子中倉卒不知所爲、須臾引去、若將脫枷者、於是子中大泣、恨不卽時輟經與母相勞問、余謂、此經功德之大、不可云喩、若子中發心持誦、卽冥感陰界、使母子兩得相見、以釋其苦、嗚呼、偉哉。 山庵雜錄

玄沙備禪師曰、如今若不了、明朝後日、入驢胎馬肚裏、牽犂拽把、銜鐵負鞍、碓擣磨磨、水火裏燒煮去、大不容易受、大須恐懼。

鳩摩羅多尊者曰、善惡之報有三時焉、凡人但見仁夭、暴壽、逆吉、義凶、便謂亡因果虛罪福、殊

不知、影響相隨毫釐靡忒、縱經百千萬劫、亦不磨滅。

經曰、假使百千劫、所作業不亡、因緣會遇時、果報還自受。

無業國師曰、嗟乎、得人身者、如爪甲上土、失人身者、如大地土、良可傷哉。

三　學道須要不毀犯佛祖規範

智論云、學習外典、如以刀割泥、泥無所成、而刀自損、又如視日光、令人眼暗。

今時僧侶、未解半卷金文一冊語錄、還習詩文讀外典、尤可憐也、雖然往古高僧、或通異學、或善篇章、其意無他、只要摧伏外道、助通佛化而已、因是驅得局見陋儒、偏墮俗士、以成內外護、蓋由此也、如夫大顛之於韓愈、明教之於歐陽、此其人也、豈其同今時庸緇、衒才、飾能、求名、徼利之類乎、謹報道流、器量有分、世齡有數、確守割泥之誡、莫觸外典詩文等之書、幸有佛祖文字、工夫若有餘力則請染指矣。

智覺禪師曰、若不去婬斷一切清淨種、若不去酒斷一切智惠種、若不去盜斷一切福德種、若不去肉斷一切慈悲種。

而今門下禪侶、於此婬盜酒肉、確得一生不犯之力、足以爲我家種草、其餘微細過患自然脫去、蓋使他常學無心道故。

楞嚴曰、婬心不除塵不可出、縱有多智禪定現前、如不斷婬必落魔道、若不斷婬修禪定者、如蒸砂石欲其成飯、經百千劫祇名熱砂、汝以婬身求佛妙果、縱得妙悟、皆是婬根、根本成婬、輪轉三塗、必不能出、必使婬機身心俱斷、斷性亦無、於佛菩提斯可希冀。

功德圓滿經曰、末世比丘、婬欲熾盛、日夜犯小童、外相似僧、內心如外道、雖各別男女、所念業因一。

近古以來、禪門徒以犯男色爲常、時俗循習爲弊、更無知其非者、至若領知識名字者、亦至無忌憚、何其狂妄如此甚乎、竊覩他耽著男色者、其愛纏嫉妬、甚於塵俗之荒女色、夫沙門、以佛祖大事爲念、又何暇耽著塵俗所嗜乎、山僧會裏、不許失口打這般俗話、何況就他少年沙彌等、做戲言戲動者乎。

四　學道須要生慚愧

希顏首座釋難文曰、蓋出家爲僧、豈細事乎、非求安逸也、非求溫飽也、非求蝸角利名也、爲生死也、爲衆生也、爲斷煩惱出三界海、續佛惠命也、去聖時遙佛法大壞、汝敢妄爲爾、寶梁經云、比丘不修比丘法、大千無唾處云云、有六尺之身而無智惠、佛謂之癡僧、有三寸舌而不能說法、佛謂之啞羊僧、似僧非僧、似俗非俗、佛謂之鳥鼠僧、亦曰禿居士。

懶庵樞和尙曰、楞嚴經云、云何賊人假我衣服、裨販如來、造種種業、若不以戒攝心者、縱饒解齋佛祖、未免裨販如來、造種種業、況平平之人。

高庵住雲居、每見衲子室中不契其機者、卽把其袂、正色責之曰、父母養汝身、師友成汝志、無飢寒之迫、無征役之勞、於此不堅確精進、成辦道業、他日何面目見父母師友乎、衲子聞其語、有泣涕而不已者、其號令整嚴如此。　禪門寶訓

古德法令、感人如此、古之衲子、以至誠而求道也如此、今雖垂五百歲、若有眞實辦道衲子、

讀之豈得不寒心乎。

雲峯悅和尙小參略云、豈不見、敎中道、寧以熱鐵纏身、不受信心人衣、寧以洋銅灌口、不受信心人食、上座若也是去、直饒變大地作黃金、攪長河爲酥酪、供養上座、未爲分外、若也未是、至於滴水寸絲、便須披毛戴角、牽犂拽把、償他始得。

五　學道須要擇師擇友

先聖曰、寧可破戒如須彌山、不可被邪師薰一邪念如芥子許、在情識中、如油入麪、永不可出。　大慧書

佛曰、若諸衆生、雖求善友、遇邪見者、未得正悟、是則名爲外道種性、邪師過謬、非衆生咎。　圓覺經

圓悟禪師曰、學道先於擇師、既得眞正具頂門眼善知識、依其決擇死生大事。　心要

志公曰、不逢出世明師、枉服大乘法藥。　傳心法要

尸迦越經云、弟子事師有五事、一當敬難之、二當知其恩、三所敎隨之、四思念不厭、五當從後稱譽。　釋氏要覽

潙山祐禪師曰、生我者父母、成我者朋友、親附善者、如霧露中行、雖不濕衣、時時有潤、狎習惡者長惡知見、曉夕造惡、卽目交報、歿後沈淪。

湛堂和尙、謂妙喜曰、像季比丘、外多徇物、內不明心、縱有弘爲、皆非究竟、蓋所附卑猥而使然、如搏牛之蝱飛止數步、若附驥尾、便有追風逐日之能、乃依托之勝也、是故學者、居必擇處、遊

必就士、遂能絶邪僻、近中正、聞正言也。　禪門寶訓

因果經云、朋友有三要法、一者見有失輙相曉諫、二見有好事深生隨喜、三在苦厄不相棄捨。

四分律云、具七法方成親友、一難作能作、二難與能與、三難忍能忍、四密事相告、五互相覆藏、六遭苦不捨、七貧窮不輕。

尸迦越經云、一見作惡往屛處曉諫呵止、二所有急事、當奔赴救護、三所有私語、不得說向他人、四常相敬難、五所有好事、當多少分與之。　釋氏要覽

善知識者難得遭逢、譬如梵天投一芥子、安下界針鋒之上、猶易、値明師道友、得聞正法、甚難、如西天九十六種外道、皆求出離、因遇邪師、反沈生死。　宗鏡錄

六　學道須要如實信受

六祖、一日謂衆曰、汝等自心是佛、更莫狐疑、外無一物而能建立、皆是本心、生萬種法、故經曰、心生種種法生、心滅種種法滅、若欲成就種智、須達一相三昧、一行三昧、若於一切處而不住相、於彼相中、不生憎愛、亦無取捨、不念利益成壞等事、安間恬靜、虛融澹泊、此名一相三昧、若於一切處、行住坐臥、純一直心、不動道場、直成淨土、此名一行三昧。

百丈懷海禪師、僧問、如何是大乘頓悟法要、師曰、汝等先歇諸緣、休息萬事、善與不善世出世間一切諸法、莫記憶、莫緣念、放捨身心、令其自在、心如木石、無所辨別、心無所行、心地若空、慧日自現、如雲開日出相似、但歇一切攀緣、貪瞋愛取、垢淨情盡、對五欲八風不動、不被見聞覺知所縛、不被諸境所惑、自然具足神通妙用、是解脫人、對一切境、心無亂靜、不攝不散、透過一

切聲色、無有滯礙、名爲道人云云、又曰、夫學道人、若遇種種苦樂、稱意不稱意事、心無退屈、不念名聞利養衣食、不貪功德利益、不爲世間諸法之所滯礙、無親無愛、苦樂平懷、麤衣遮寒、糲食活命兀兀如愚如聾、稍有相應分、若于心中、廣學知解、求福求智、皆是生死、于理無益、却被知解境風之所漂溺、還歸生死海裏云云、又曰、但是三乘敎、皆治貪瞋等病、祇如今、念念若有貪瞋等病、先須治之、不用求覓義句知解、知解屬貪、貪變成病、祇如今、但離一切有無諸法、亦離于離、透過三句外、自然與佛無差、既自是佛、何慮佛不解語、祇恐不是佛、被有無諸法縛不得自由、以理未立先有福智、被福智載去、如賤使貴、不如先立理、後有福智云云。　會元

馬大師曰、道不用修、但莫汚染、何爲汚染、但有生死心、造作趣向、皆是汚染、若欲直會其道、平常心是道、謂平常心無造作、無是非、無取捨、無斷常、無凡無聖、經云、非凡夫行、非賢聖行、是菩薩行、只如今、行住坐臥、應機攝物、盡是道。　傳燈錄

黃檗和尙曰、若欲得成佛、一切佛法總不用學、唯學無求無著、八萬四千法門、對八萬四千煩惱、祇是敎化攝引門、又曰、但隨緣消舊業、更莫造新殃。

德山和尙上堂、若也於己無事、則勿妄求、妄求而得亦非得也、汝但無事於心、無心於事、則虛而靈、空而妙、若毛端許言之本末者、皆爲自欺、何故、毫釐繫念三途業因、瞥爾情生萬劫羈鎖、聖名凡號盡是虛聲、殊相劣形皆爲幻色、汝欲求之得無累乎、及其厭之又成大患、終而無益。
會元

臨濟和尙曰、已起者莫續、未起者不要放起、便勝儞十年行脚。

圜悟禪師曰、但一念不生、放敎玲瓏、纔有是非彼我得失、勿隨他去、乃是終日竟夜、親參自家眞善知識、何憂此事不辨、切須自看。　心要

雪堂行和尙曰、尋常向兄弟說、不要上他機境、如何謂之機境、佛謂之機境、法謂之機境、而況文章一切雜事乎、若守閒閒地、自然虛而靈、寂而妙、如水上葫蘆子相似、蕩蕩地無拘無絆、撥著便動、捺著便轉、眞得大自在也。　拾遺錄

懶庵和尙、示衆云、汝等諸人總來就安、求覓甚麽、若欲作佛、汝自是佛、而却傍家走、忽忽如渴鹿趁陽燄、何時得相應去、阿儞欲作佛、但無如許多顚倒攀緣妄想惡覺垢欲不淨衆生之心、則汝便是初心正覺佛、更向何處別討。

七　學道須要識取先言往行

圜悟禪師曰、佛道懸曠、久受勤苦、乃可得成、祖師門下、斷臂立雪、腰石舂碓、擔麥推車、事園作飯、開田疇、施湯茶、般土拽磨、皆抗志絕俗、自彊不息、圖成功業者、乃能之、所謂未有一法從嬾墮懈怠中生。　心要

圜悟禪師曰、衲子當痛以死生爲事、務消知見解礙、徹證佛祖所傳付大因緣、勿好名聞、退步就實、竢行解道德充實、愈濳遁而愈不可匿、諸聖天龍將推出人爾。　心要

黃龍曰、未見性人、不可安然拱手傚無作無修。　冥樞會要

五祖演和尙曰、今時叢林學道之士、聲名不揚、匪爲人之所信者、蓋爲梵行不淸白、爲人不諦當、輙或苟求名聞利養、乃廣衒其華飾、遂被識者所譏、故蔽其要妙、雖有道德如佛祖、聞見疑

而不信矣、爾輩他日、若有把茅蓋頭、當以此而自勉。

演祖曰、古人樂聞己過、喜於爲善、長於包荒、厚於隱惡、謙以交友、勤以濟衆、不以得喪貳其意、所以光明碩大、照映今昔矣。

嵩嶽元珪禪師曰、以有心爲物而無心想身。　會元

衲子日用用心、幾不過此。

大覺璉和尚曰、禍患藏於隱微、發於所忽。

潙山和尚曰、舉措看他上流、莫擅隨於庸鄙。

朱世英問晦堂曰、君子不幸、小有過差、而聞見指目之不暇、小人終日造惡、而不以爲然、其故何哉、晦堂曰、君子之德比美玉焉、有瑕生內、必見於外、故見者稱異、不得不指目也、若夫小人者日用所作、無非過惡、又安用言之。

黃龍南和尚曰、自損者人益、自益者人損、情之得失、豈容易乎。

黃龍曰、聖賢之學非造次可成、須在積累、積累之要惟專與勤、屛絕嗜好、行之勿倦、然後擴而充之、可盡天下之妙。

英邵武曰、物暴長者必夭折、功速成者必易壞、不推久長之計、而造卒成之功、皆非遠大之資。

昔、喆侍者夜坐不睡、以圓木爲枕、小睡則枕轉、覺而復起安坐如故、率以爲常、或謂、用心太過、喆曰、我於般若緣分素薄、若不刻苦勵志、恐爲妄習所牽。　禪門寶訓

水庵一和尚曰、昔大愚慈明、谷泉瑯琊結伴參汾陽、河東苦寒、衆人憚之、惟慈明志在於道、曉

夕不怠、夜坐欲睡、引錐自刺、嘆曰、古人爲生死事大、不食不寢、我何人哉、而縱荒逸、生無益於時、死無聞於後、是自棄也、一旦辭歸、汾陽嘆曰、楚圓今去、吾道東矣。

靈源淸和尙曰、先哲言、學道悟之爲難、旣悟守之爲難、旣守行之爲難、今當行時、其難又過於悟守、蓋悟守者、精進堅卓勉在己躬而已、惟行者、必等心死誓、以損己益他爲任、若心不等、誓不堅、則損益倒置、便墮爲流俗阿師、是宜祇畏。

靈源、謂圓悟曰、衲子雖有見道之資、若不深蓄厚養、發用必峻暴、非特無補教門、將恐有招禍辱。

圓悟和尙曰、人誰無過、過而能改、善莫大焉、從上皆稱改過爲賢、不以無過爲美、故人之行已多有過差、上智下愚俱所不免、唯智者能改過遷善、而愚者多蔽過飾非、遷善則其德日新、是稱君子、飾過則其惡彌著、斯謂小人、是以聞義能徙、常情所難、見善樂從、賢德所尙、望公相忘於言外可也。

圓悟、謂佛鑑曰、白雲師翁、動用擧措必稽往古、嘗曰、事不稽古、謂之不法、予多識前言往行、遂成其志、然非特好古、蓋今人不足法。

白雲端和尙曰、守道安貧衲子素分、以窮達得喪移其所守者、未可語道也。

佛鑑懃和尙、謂佛燈曰、高上之士、不以名位爲榮、達理之人、不爲抑挫所困、其有承恩而効力、見利而輸誠、皆中人以下之所爲。

佛鑑曰、爲道不憂、則操心不遠、處身常逸、則用志不大、古人歷艱難嘗險阻、然後享終身之安、

蓋事難則志銳、刻苦則慮深、遂能轉禍爲福、轉物爲道、多見學者逐物而忘道、背明而投暗、於是飾己之不能、而欺人以爲智、彊人之不逮、而侮人以爲高、以此欺人、而不知有不可欺之先覺、以此掩人、而不知有不可掩之公論、故自智者人愚之、自高者人下之。

佛眼遠和尙曰、林下人發言用事、擧措施爲、先須籌慮然後行之、勿倉卒暴用、或自不能予決、應須諮詢耆舊、博問先賢、以廣見聞、補其未能、燭其未曉、豈可虛作氣勢、專逞貢高、自彰其醜、苟一行失之于前、雖百善不可得而掩於後矣。

靈源和尙曰、凡人平居、內照多能曉了、及涉事外馳、便乖混融、喪其法體、必欲思紹佛祖之任、啓迪後昆、不可不常自檢責也。

雪堂行和尙曰、學者氣勝志則爲小人、志勝氣則爲端人正士、氣與志齊爲得道賢聖、有人剛很不受規諫、氣使然也、端正之士、雖彊使爲不善、寧死不二、志使然也。

草堂清和尙曰、燎原之火生於熒熒、壞山之水漏於涓涓、夫水之微也捧土可塞、及其盛也漂木石、沒丘陵、火之微也勺水可滅、及其盛也焦都邑、燔山林、與夫愛溺之水、瞋恚之火、曷常異乎。

草堂曰、學者立身須要正當、勿使人竊議、一涉異論、則終身不可立矣。

晦堂心和尙曰、稠人廣衆中、賢不肖攝踵、以化門廣大、不容親疏於其間也、惟在少加精選、苟才德合人望者、不可以己之所怒、而疎之、苟見識庸常、衆人所惡者、亦不可以己之所愛、而親之、如此則賢者自進、不肖者自退、叢林安矣。

自得輝和尚曰、大凡衲子誠而向正、雖愚亦可用、佞懷邪、雖智終爲害、大率林下人、操心不正、雖有才能、而終不可立矣、

簡堂機和尚、淸明坦夷慈惠及物、衲子稍有詿誤、蔽護保惜以成其德、嘗言、人誰無過、在改之爲美。

大惠禪師曰、學道人逐日、但將檢點他人底工夫、常自檢點、道業無有不辨、或喜、或怒、或靜、或鬧、皆是檢點時節。

大惠曰、逆境界易打、順境界難打、逆我意者、只消一箇忍字、定省少時便過了、順境界直是無儞回避處、如磁石與鐵相遇、彼此不覺合作一處。

八　學道須要辨病中用心　瞻病附

幻住老人曰、身屬報緣、誰無老病、百丈建立、意在於斯、古宿扁延壽堂、爲省行使其省察行苦、而興悲智、乃有病人易得生煩惱、健者常懷惻隱心之句、十方聚會、四海同家、旣無親疎貧富之殊、彼病卽己病、人安卽我安、故敎中謂、看病乃福田中之最勝者也、謂、攝養其可罔諸、又曰、或輪次直病深懷惻隱、密運慈悲、觀彼病緣、如自己受、寒溫飢飽、隨量觀察、湯藥所需、時時問候、病者或妄生異見、暫起嗔心、徐語應酬勉其正念、庶自利利他也。

圜悟禪師曰、疾苦在身、宜善攝心不爲外境所搖、中心亦不起念、常以生死事大、無常迅速爲意、不可斯須恣縱、唯嗔一法、於三業爲大過患、儻有順違、切勿令生、常虛己正心、觀外來觸、如虛舟飄瓦、則物我俱寂、到不動地、爾思之、諦思之。　心要

古德曰、生也猶如著衫、死也還同脫袴、不以生死爲大變可知矣。　心要

諸苦之中、病苦爲深、作福之中、省病爲最、是故古人、以有病爲善知識、曉人以看病爲福田。

緇門警訓、省行堂記

瞻病人五德、四分律云、一知病人可食不可食、二不惡病人便利唾吐、三有慈愍心不爲衣食、四能經理湯藥、五能爲病人說法、令歡喜已增長善法、瞻病人六失、增一經云、一不辨良藥、二懈怠、三喜瞋好睡、四但貪衣食、五不以法供養、六不共病人言語談笑。　釋氏要覽

緇門寶藏集卷之上　終

緇門寶藏集卷之中

九　學道須要辨邪正

勸參禪文云、夫解須圓解、還他明眼宗師、修必圓修、分付叢林道伴、初心薄福不善親依、見解偏枯修行嬾惰、或高推聖境、孤負己靈、寧知德相神通、不信凡夫悟道、或自恃天眞、撥無因果、但向胸襟流出、不依地位修行、所以粗解法師不通教眼、虛頭禪客不貴行門、此偏枯之罪也、

緇門警訓

百丈懷海禪師曰、常勸衆人、須懼法塵煩惱、如懼三途、乃有獨立分、假使有一法過於涅槃者、亦無少許生珍重、此人步步是佛、若執本清淨本、解脫自是佛、自是禪道、解者卽屬自然外道、若執因緣修成、證得者卽屬因緣外道、執有卽屬常見外道、執無卽屬斷見外道、執亦有亦無卽屬邊見外道、執非有非無卽屬空見外道、祇如今但莫作佛見涅槃等見、都無一切有無等見、亦無無見、名正見、無一切聞、亦無無聞、名正聞、是摧伏外道。　廣燈錄

萬庵顏禪師曰、叢林所至邪說熾然、乃云、戒律不必持、定慧不必習、道德不必修、嗜慾不必去、又引維摩圓覺、爲證、贊貪瞋癡殺盜婬、爲梵行、烏乎、斯言豈特起叢林今日之害、眞法門萬世之害也、且博地凡夫、貪瞋愛慾人我無明、念念攀緣如一鼎之沸、何由淸冷、先聖必思大有於此者、遂設戒定慧三學、以制之、庶可廻也、今、後生晩進、戒律不持、定慧不習、道德不修、專以博

學彊辨、搖動流俗、牽之莫返、予固所謂斯言乃萬世之害也。　禪門寶訓

所謂萬世之害、乃在今時禪林可見焉。

智覺禪師曰、近嗟末世誑說一禪、只學虛頭、全無實解、步步行有、口口談空、自不責業力所牽、更教人撥無因果、便說飲酒食肉不礙菩提、行盜行淫無妨般若、生遭王法、死陷阿鼻。

吾國、方法之澆漓、宗風陵夷、異見競起、珍位師席闡化大方者、盛唱誑說一禪、幻惑後學、幾乎百餘年矣。已至承虛接響、碁布天下、想夫天魔之屬、偸我衣服、壞我法之時乎、凡捐大家族、內荒酒色、外好畋獵、所其施爲、多以惡業爲樂、不喜爲善、是亦富貴叢中常分也、是故常愛無因無果之說、而不喜說三世業報、將謂、瞿曇徵惡方便、適就住持大方厖眉長老、竊呈平日狂解、長老招之密室、開懷印定、更引拈提向上若干古則、揑合爲證、士大夫於是抓著平生痒處、抵死不疑、善行日弛、惡業轉肆、不待死陷阿鼻、生招一世禍辱、可怖可畏、佛曰、非衆生咎、邪師過謬也、吁其斯之謂乎。

心聞賁和尙曰、衲子因禪致病者多、有病在耳目者、以瞠眉努目、側耳點頭爲禪、有病在口舌者、以顚言倒語、胡喝亂喝爲禪、有病在手足者、以進前退後、指東劃西爲禪、有病在心腹者、以窮玄究妙、超情離見爲禪、據實而論、無非是病、惟本色宗師明察幾微、目擊而知、其會不會、入門而辨其到不到、然後用一錐一箚、脫其廉纖、攻其搭滯、驗其眞假、定其虛實、而不守一方便昧乎變通、使終蹈於安樂無事之境、而後已矣。　禪門寶訓

今求受這病底漢子、也不可多得、祖道下衰可知也。

大惠禪師曰、近代佛法可傷、爲人師者、先以奇特玄妙、蘊在胸襟、遞相沿襲、口耳傳授以爲宗旨、如此之流、邪毒入心不可治療、古德謂之謗般若人、千佛出世不通懺悔。　法語

近代、專門潛授之禪、不出于此、蓋且以奇特玄妙、遞相傳授尙可矣、諸方古則只是淺近博謎子也、可笑。

無學祖元禪師曰、我見日本兄弟、一生得悟者不可多矣、此國之爲風也、只貴智才不求悟解、是故設有靈根者、博覽內外典籍、深嗜巧僞文章、不遑自究此事、迷中過了一生、固爲可憫、或有一類稱道人者、多是其器量、不堪博學彊記、故以閒坐爲功業、而不辨眞實向道之心、此類亦非今生可開悟者。

今已三百餘年、往往見此兩般病、達人之言、信不誣矣、嗟乎、國風習弊如此其陋矣、悲夫。

無業國師曰、如今天下解禪解道、如河沙數、說佛說心、有百千萬億、纖塵不去未免輪廻、思念不亡盡須沈墜、如斯之類、尙不能自識業果、妄言自利利他、自謂上流、並他先德、但言觸目無非佛事、擧足皆是道場、原其所習、不如一箇五戒十善凡夫、觀其發言、嫌他二乘十地菩薩、且醍醐上味爲世珍奇、遇斯等人翻成毒藥。

近日、禪學之弊、以覺識依通爲悟明、以穿鑿機緣傳授爲參學、以險怪奇語爲提唱、以破壞律儀爲解脫、以交結貴達、夤緣據位爲出世方便。　中峰廣錄

在往古、也偶有此弊、在近世、也一等如此、於戲、欲得魔說較退、祖道再行、亦不可得焉、可傷也。

大珠惠海禪師、大德問、太虛能生靈智否、眞心緣於善惡否、貪欲人是道否、執是執非人、向後心通否、觸境生心人、有定否、住寂寞人、有惠否、懷傲物人、有我否、執空執有人、有智否、尋文取證人、苦行求佛人、離心求佛人、執心是佛人、此智稱道否、請禪師一一爲說、師曰、太虛不生靈智、眞心不緣善惡、嗜欲深者機淺、是非交爭者未通、觸境生心者少定、寂寞忘機者惠沈、傲物高心者我壯、執空執有者皆愚、尋文取證者益滯、苦行求佛者俱迷、離心求佛者外道、執心是佛者爲魔、大德曰、若如是、應畢竟無所有、師曰、畢竟是大德、不是畢竟無所有、大德踊躍禮謝而去。　傳燈錄

眞淨文和尙曰、其斷見者、斷滅卻自心本妙明性、一向心外著空滯禪寂、常見者、不悟一切法空、執著世間諸有爲法、以爲究竟也。　正法眼藏

宗鏡錄曰、見緣而不見體、卽是常見、見體而不見緣、卽是斷見、今從因緣而見性、則不落常、於眞性中而緣起、則不墮斷、名實知見。

臨濟大師曰、夫出家者、須辨得平常眞正見解、辨佛辨魔、辨眞辨僞、辨凡辨聖、若如是辨得名眞出家。

雖然舊閑田地、一度贏來方始休、而今、奴郎不分佛魔不辨、拍盲休將去、自謂、此守閒地、此休歇田地也、不是眞出家、只養恬凡夫而已、若要是去、死中具眼可始得矣。

玄沙備禪師曰、有一般坐繩床和尙、稱善知識、問著便搖身動手、點眼吐舌瞪視、更有一般、說昭昭靈靈靈臺智性能見能聞、向五蘊身田裏作主宰、恁麼爲善知識大賺人。

十　學道須要知學解爲病

臨濟和尙曰、今時學人、不得、蓋爲認名字爲解、大策子上抄死老漢語、三重、五重、復子裹、不敎人見、道是玄旨、以爲保重。

新豐和尙、道見祖佛言敎、如生冤家、始有參學分。

黃檗和尙曰、今時人、祇欲得多智多解、廣求文義喚作修行、不知、多智多解翻成壅塞、唯知多與兒酥乳喫、消與不消都總不知。　傳心法要

浮山遠和尙、謂道吾眞曰、學未至於道、衒耀見聞、馳騁機解、以口舌辯利相勝者、猶如廁屋塗汚丹雘、祇增其臭耳。

潙山和尙曰、若向外得一知一解、將爲禪道、且沒交涉、名運糞入、不名運糞出、汙汝心田、所以道、不是道。　會元

十一　學道須要修習坐禪　附坐禪邪正

六祖壇經曰、何名坐禪、外於一切善惡境界、心念不起名爲坐、內見自性不動名爲禪、何名禪定、外離相爲禪、內不亂爲定、若見諸境心不亂者、是眞定也。

淨名經云、卽時豁然還得本心。

龐居士語錄云、心如卽是、坐境如卽是、禪如如都不假、大道無中邊、若能如是解、眠時亦不眠。

天台師靜上座、人問曰、弟子每當夜坐、心念紛飛、未明攝伏之方、願垂示誨、師曰、如或夜間安坐、心念紛飛、却將紛飛之心、以究紛飛之處、究之無處、則紛飛之念何存、反究究心、則能究之

心安在、又能照之智本空、所緣之境亦寂、寂而非寂者、蓋無能寂之人也、照而非照者、蓋無所照之境也、境智俱寂心慮安然、外不尋枝、內不住定、二途俱泯一性怡然、此乃還源之要道也。

會元

臨濟禪師曰、儞若取不動淸淨境爲是、儞即認他無明爲郎主。

這箇說話、多少驚動向椿椿地、做死模樣底漢了、若向這裏覰得透打得徹、許儞救得一半。

臨濟曰、有一般瞎秃子、飽喫飯了便坐禪觀行、把促念漏不令放起、厭喧求靜、是外道法、祖師云、儞若住心看靜、擧心外照、攝心內澄、凝心入定、如是之流皆是造作。

今觀初心稱坐禪者、但拘得箇臭皮袋子、浮想妄念起滅不停、與他所謂住心看靜、凝心內澄底、尙未交涉、而況於眞圓湛乎、畢竟與狐兎癡坐無異也。

南陽忠國師、因僧問、坐禪看靜、此復若爲、師曰、不垢不淨、寧用起心而看淨相。

大惠禪師曰、衆生狂亂是病佛、以寂靜波羅蜜藥治之、病去藥存、其病愈甚。

佛心才禪師坐禪儀云、夫坐禪者端身正意、潔己虛心、疊足跏趺、收視反聽、惺惺不昧、沈掉永離、縱憶事來、盡情拋棄、向靜定處正念諦觀、知坐是心、及返照是心、知有無中邊內外者心也、此心虛而知、寂而照、圓明了了不墮斷常、靈覺昭昭揀非虛妄、今見覺家力坐不悟者、病由依計、情附偏邪、迷背正因、枉隨止作、不悟之失、其在斯焉、若也斂澄一念、密契無生、智鑑廓然心華頓發、無邊計執直下消磨、積劫不明一時豁現、如忘忽記、如病頓瘳、內生歡喜心、自知當作佛、即知自心外無別佛、然後順悟增修、因修而證、證悟之源是三、無別名爲一解、一行、三昧、亦

云無功用道。

仰山和尙曰、若是祖宗門下、上根上智、一聞千悟得大總持、其有根微智劣、若不安禪靜慮、到這裏總須茫然。

玄沙備禪師曰、饒汝鍊得身心同虛空去、饒汝到精明湛不搖處、不出識陰、古人喚作如急流水、流急不覺、妄爲恬靜、恁麼修行盡出他輪廻際不得、依前拔輪廻去。

中峰和尙曰、或有坐在靜默中、於塵勞暫息之頃、忽於陰識中、遽省得箇相似底道理、便乃依約爲是、勾引經敎中語言、證過含於心中、不知、此病是陰識依通、眞生死本、非見性也。

圓覺經云、無礙清淨惠、皆依禪定生。

趙州和尙曰、爾向衣單下坐十年、若不會禪、截取老僧頭去。

古德曰、超凡越聖必假靜緣、坐脫立亡須憑定力。

十二　學道須要見性明心

達磨大師、謂二祖曰、汝但外息諸緣、內心無喘、心如墻壁、可以入道、二祖作種種說心說性、不契、一日忽悟乃曰、可以息諸緣也、達磨曰、莫成斷滅去不、曰、無、達磨曰、子作麼生、二祖曰、了了常知、故言之不可及、達磨曰、此諸佛之所傳心體、更勿疑也。　宗門統要

佛告阿難、我常說言、汝身汝心皆是妙明眞精、妙心中所現物、云何、汝等遺失本妙圓妙明心、寶明妙性、聚緣內搖、趣外奔逸、昏擾擾相以爲心性、一迷爲心、決定惑爲色身之內、不知色身外、洎山河虛空大地、咸是妙明眞心中物、譬如澄清百千大海、棄之唯認一浮漚體、目爲全潮、

窮盡瀛渤。　楞嚴經

異見王、問波羅提尊者、何者是佛、曰、見性是佛、王曰、師見性否、曰、我見佛性、王曰、性在何處、曰、性在作用、云云、卽說偈云、在胎爲身、處世爲人、在眼曰見、在耳曰聞、在鼻辨香、在口談論、在手執捉、在足運奔、徧現俱該沙界、收攝在一微塵、識者知是佛性、不識喚作精魂。　會元達磨章

潮州大顚和尚曰、夫學道人須識自家本心、將心相示方可見道、多見時輩、只認揚眉動目一語一默、驀頭印可以爲心要、此實未了、吾今爲汝諸人分明說出、各須聽受、但除卻一切妄運想念見量、卽汝眞心、此心與塵境及守認靜默時、全無交涉、卽心是佛、不待修治、何以故、應機隨照冷冷自用、窮其用處了不可得、喚作妙用、乃是本心大須護持、不可容易。　傳燈錄

寶塔紹巖禪師、示衆曰、諸仁者還明心也未、莫不是語言談笑時、凝然杜默時、參尋知識時、道伴商畧時、觀山翫水時、耳目絕對時、是汝心否、如上所解盡爲魔魅所攝、豈曰明心、更有一類人、離身中妄想、外別認遍十方世界、含日月包太虛、謂是本來眞心、斯亦外道所計、非明心也、諸仁者要會麼、心無是者、亦無不是者、汝擬執認、其可得乎。　會元

眞淨和尚曰、佛法至妙無二、但未至於妙、則互有長短、苟至於妙則悟心之人、如實知自心究竟本來成佛、如實自在、如實安樂、如實解脫、如實清淨、而日用唯用自心、自心變化把得便用、莫問是之與非、擬心思量早不是也、不擬心一一天眞、一一明妙、一一如蓮花不著水、心清淨超於彼、所以迷自心故作衆生、悟自心故成佛、而衆生卽佛、佛卽衆生、由迷悟故有彼此也。

百丈禪師、謂溈山曰、經云、欲識佛性義、當觀時節因緣、時節既至、如迷忽悟、如忘忽憶、方省己物不從他得、故祖師云、悟了同未悟、無心亦無法、祇是無虛妄凡聖等心、本來心法元自備足、汝今既爾、善自護持。 會元

僧問仰山和尚、見人問禪問道、便作一圓相、於中書牛字、意在於何、仰山云、這箇也是閒事、忽若會得、不從外來、忽若不會、決定不識、我且問爾、諸方老宿、於爾身上、指出那箇是爾佛性、爲復語底是、默底是、莫是不語不默底是、爲復總是、爲復總不是、爾若認語底是、如盲人摸著象尾、若認默底是、如盲人摸著象耳、若認不語不默底是、如盲人摸著象鼻、若道物物都是、如盲人摸著象四足、若道總不是、拋本象落在空見、如是衆盲所見、只於象上名邈差別、爾要好切莫摸象、莫道見覺是、亦莫道不是、祖師云、菩提本無樹、明鏡亦無臺、本來無一物、爭得染塵埃、又云、道本無形相、智惠即是道、作此見解者、是名眞般若、明眼人見象得其全體、如佛見性亦然。 碧巖

巖頭和尚、示衆云、夫大統綱宗中事、須識句、若不識句、難作個話會、甚麼是句、百不思時喚作正句、亦云居頂、亦云得住、亦云歷歷、亦云惺惺、亦云的的、亦云佛未生時、亦云得地、亦云與麼時、將與麼時等破一切是非、纔與麼便不與麼、便轉轆轆地、若也看不過、纔被人刺著、眼盵瞪地、恰似殺不死底羊相似、不見古人道、沈昏不好、須轉得始得。 正法眼藏

章敬和尚、上堂曰、至理亡言、時人不悉、彊習他事以爲功能、不知自性元非塵境、是個微妙大解脫門、所有鑑覺不染不礙、如是光明未曾休廢、曩劫至今固無變易、猶如日輪遠近斯照、雖

及衆色、不與一切和合、靈燭妙明非假鍛錬、爲不了故取于物象、但如捏目妄起空花、徒自疲勞枉經劫數、若能返照、無第二人、擧措施爲、不虧實相。 會元

浮山遠公、謂演首座曰、心爲一身之主、萬行之本、心不妙悟、妄情自生、妄情既生、見理不明、見理不明、是非謬亂、所以治心、須求妙悟、悟則神和、氣靜容敬色莊、妄想情慮皆融爲眞心矣、以此治心、心自靈妙、然後導物指迷、孰不從化。

佛曰、一切衆生、妄認四大爲自身相、六塵緣境爲自心相、譬彼病目見空中華、及第二月、故名無明。 圓覺經

佛曰、汝以緣心聽法、此法亦緣。

佛曰、以思惟心、測度如來圓覺境界、如取螢火燒須彌山。

十三　學道須要用話頭工夫爲主。

趙州和尙曰、兄弟莫久立、有事商量、無事向衣鉢下、坐窮理好。

圓通德禪師曰、道眼若未明、有甚麽用處、無事切須尋究。

圓悟禪師曰、但令心念澄靜、紛紛擾擾處、正好作工夫。

大惠禪師曰、工夫熟則撞發關棙子矣、所謂工夫者、思量世間塵勞底心、回在乾屎橛上、令情識不行、如土木偶人相似、覺得昏怛沒巴鼻可把促時、便是好消息也。

古德曰、般若上無虛棄底工夫。

大惠禪師曰、兄弟做工夫、不消擧因緣、只去近處看、只如六祖爲明上座云、汝但善惡都莫思

量、當恁麼時、一切不思量、還我明上座本來面目、但恁麼看。
大惠曰、工夫不可急、急則躁動、又不可緩、緩則昏怛矣。
圜悟禪師曰、他參活句、不參死句、活句下薦得永劫不忘、死句下薦得自救不了、若要與祖佛爲師、須明取活句。　心要
高峯妙和尚曰、若謂著實參禪、決須具足三要、第一要有大信根、明知此事如靠一座須彌山、第二要有大憤志、如遇殺父冤讎、直欲便與一刀兩段、第三要有大疑情、如暗地做了一件極事、正在欲露未露之時、十二時中果能具此三要、管取剋日成功、不怕甕中走鼈、苟闕其一、譬如折足之鼎、終成廢器。　高峯錄
高峯曰、疑以信爲體、悟以疑爲用、信有十分疑有十分、疑得十分悟得十分。　高峯錄
草堂侍立晦堂、晦堂擧風幡話、問草堂、堂云、迥無入處、晦堂云、汝見世間猫捕鼠乎、雙目瞪視而不瞬、四足踞地而不動、六根順向、首尾一直、然後擧無不中、誠能心無異緣、意絕妄想、六窓寂靜端坐默究、萬不失一也。　大惠武庫
大惠禪師曰、生死心未破、則全體是一團疑情、只就疑情窟裏擧個話頭、僧問趙州、狗子還有佛性也無、州曰、無、行住坐臥、不得間斷、妄念起時亦不得將心遏捺、但只擧此話頭、要靜坐纔覺昏沈、便抖擻精神擧此話、忽地如瞎老婆吹火、和眉毛眼睫一時燒了、不是差事。
大惠曰、近世叢林、邪法橫生、瞎衆生眼者、不可勝數、若不以古人公案擧覺提撕、便如盲人放卻手中杖子、一步也行不得。　法語

潙山和尚曰、研窮法理、以悟爲則。

中峯本和尚曰、只向所參話上、一捱捱住、但拌取生與同生、死與同死、第一不許別求方便、第二不可歸咎於緣境、第三不得瞥起一念惑情。　廣錄

參禪一著要敵生死、不是說了便休、參禪一著單明大道、朝聞夕死可矣、參禪一著推門落臼、切忌向外馳求、參禪一著要起疑情、大疑必有大悟、參禪一著英靈衲子舉起便知落處、參禪一著本來面目、經文語錄難載、參禪一著直指人心、貴要自肯承當、參禪一著如敵萬人怯戰喪身失命、參禪一著如猫捕鼠、不許移睛動眼、參禪一著大丈夫事、非將相所能爲。　無門語錄

中峯和尚、斥學者只尙言通、不求實悟、常曰、今之參禪不靈驗者、第一無古人眞實志氣、第二不把生死無常做一件大事、第三拌捨積功以來所習所重不下、又不具久遠不退轉身心、畢竟病在於何、其實不識生死根本故也。　行錄

高峯和尚曰、兄弟家十年二十年以至一生、絕世忘緣、單明此事、不透脫者病在於何、本分衲僧試拈出看、莫是宿無靈骨麼、莫是不遇明師麼、莫是一暴十寒麼、莫是根劣志微麼、莫是汨沒塵勞麼、莫是沈空滯寂麼、莫是雜毒入心麼、莫是時節未至麼、莫是不疑言句麼、莫是未得謂得、未證謂證麼、若論膏肓之疾、總不在者裏、既不在者裏、畢竟在甚麼處、咄、三條椽下七尺單前。　高峰錄

佛鑑懃禪師曰、每見學道兄弟、有者不求省悟、唯務言說、要會他古人因緣、豈非大錯、他古人只是一期對病施方、隨機發藥、遂有如許多葛藤路門、如標月指頭敲門瓦子、意只是假扣開

門因標見月、儻得門開月現、元子指頭、何用之有。

佛鑑曰、參須實參、悟須實悟、硏窮教徹底去、不是今日下得一轉語、明日過得一則因緣、古今因緣數若河沙、有甚休歇、畢竟不明心地、如何了達生死、只如達磨初來時、未有許多因緣、爲甚有人悟道云云、又曰、奉勸兄弟、但明心地、莫愁不會因緣、古今因緣也、不道一時不看、但將一則去看得透、千則萬則皆同、若道會得這一則、未會那一則、決定未是。 普燈錄

大惠禪師曰、千疑萬疑、只是一疑、話頭上疑破、則千疑萬疑一時破。

圜悟禪師曰、直似大死底人絕氣息、然後穌醒、始知廓同太虛。 心要

瑞鹿本先禪師、上堂、大凡參學、未必學問話是參學、未必學揀話是參學、未必學代語是參學、未必學別語是參學、未必學捻破經論中奇特言語是參學、未必捻破祖師奇特言語是參學、若於如是等參學、任儞七通八達、於佛法中儻無見處、喚作乾慧之徒、豈不聞、古德道、聰明不敵生死、乾慧豈免苦輪、諸人若也參學、應須眞實參學始得、行時行時參取、立時立時參取、坐時坐時參取、眠時眠時參取、語時語時參取、默時默時參取、一切作務時、一切作務時參取、既向如是等時參、且道、參個甚人、參個甚麼語、到這裏須自有個明白處始得、若不如是、喚作造次之流、則無究了之旨。 會元

開善謙禪師曰、時光易過、且緊緊做工夫、別無工夫、但放下便是、只將心識上所有底、一時放下、此是眞正徑截工夫、若別有工夫、盡是痴狂外邊走。

黃龍庵主祖心也、牓門曰、告諸禪學、要窮此道、切須自看、無人替代、時中或是看得因緣、自有歡

喜入處、卻來入室吐露、待爲品評是非深淺、如未發明、但且歇去、道自現前、苦苦馳求、轉增迷悶、此是離言之道要在自肯、不由他悟、如此發明方、名了達無量劫來生死根本、若見得離言之道、卽見一切聲色言語是非、更無別法、若不見離言之道、便將類會目前差別因緣、以爲所得、只恐誤認門庭目前光影、自不覺知、翻成剩語、到頭只是自謾枉費心力、宜乎晝夜克己精誠行住觀察微細審思、別無用心、久遠自然有個入路、是非朝夕學成事業、若也不能、如是參詳、不如看經持課度此殘生、亦自勝如亂生謗法、若送老之時敢保、成個無事人、更無他累、其餘入室、今去朔望兩度、卻請訪及。　羅湖野錄

緇門寶藏集卷之中終

緇門寶藏集卷之下

十四　學道須要參得直截一路

德山宣鑒禪師、出世、凡見僧入門便棒、
臨濟義玄禪師、出世、凡見僧入門便喝。

大惠、示人法語略云、但將平昔坐禪處得底、看經敎處得底、語錄上記得底、宗師口頭言下領覽得底、一時掃向他方世界、卻緩緩地子細看、他德山、何故、見僧入門便棒、臨濟何故、見僧入門便喝、若識二大老用處、則於日用觸境逢緣處、不作世諦流布、亦不作佛法理論、既不著此二邊、須知、自有一條活路。

祕魔岩和尙、常持一木叉、每見僧來禮拜、卽叉卻頸曰、那箇魔魅敎汝出家、那箇魔魅敎汝行脚、道得也叉下死、道不得也叉下死、速道速道、學徒鮮有對者。　會元

慈明和尙、室中揷劍一口、以草鞋一對、水一盆置在劍邊、每見入室卽曰、看看、有至劍邊擬議者、師曰、險喪身失命了也、便喝出。　會元

紫胡和尙、山門立一牌、牌中有字、云、紫胡有一狗、上取人頭、中取人腰、下取人脚、擬議則喪身失命、凡見新到便喝云、看狗、僧纔回首、紫胡便歸方丈。　碧巖

佛鑑懃禪師、室中以木骰子六隻、面面皆書厶字、僧纔入、師擲曰、會麼、僧擬不擬、師卽打出。

會元

晦堂心禪師、室中常擧拳問僧曰、喚作拳頭則觸、不喚作拳頭則背、喚作甚麼。

大惠禪師、室中常擧竹篦問僧曰、喚作竹篦則觸、不喚作竹篦則背、不得下語、不得無語、速道、速道。

香嚴和尚、示衆曰、若論此事、如人上樹、口銜樹枝、脚不蹋枝、手不攀枝、樹下忽有人問、如何是祖師西來意、不對他又違他所問、若對他又喪身失命、當恁麼時作麼生卽得。　會元

芭蕉清禪師、示衆曰、儞有拄杖子、我與儞拄杖子、儞無拄杖子、我奪儞拄杖子。

開善謙禪師曰、山僧尋常道、行住坐臥決定不是、見聞覺知決定不是、思量分別決定不是、語言問答決定不是、試絕卻此四個路頭看、若不絕決定不悟、此四個路頭若絕、僧問趙州狗子還有佛性也無、趙州云、無、如何是佛、雲門道、乾屎橛、管取呵呵大笑。　羅湖野錄

楊岐和尚、室中問僧、栗棘蓬儞作麼生吞、金剛圈儞作麼生透。

大惠禪師、室中問僧、不是心、不是佛、不是物、是箇什麼。

石頭和尚曰、恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼不恁麼、總不得、子作麼生。

羅山和尚曰、會麼、不是禪、不是道、不是佛、不是法、是甚麼。

古德曰、此事不可以有心求、不可以無心得、不可以語言造、不可以寂默通、大惠曰、此是第一等入泥入水老婆說話、往往參禪人、只恁麼念過、殊不子細看是甚道理。　大惠書

十五　學道須要知入泥入水老婆說話

雲門大師曰、古人大有葛藤相爲處、祇如雪峰和尙道、盡大地是儞、夾山和尙道、百草頭上薦取老僧、鬧市裏識取天子、洛浦和尙云、一塵纔起、大地全收、一毛頭師子全身總是儞、把取翻覆思量看、日久歲深自然有箇入路。

圜悟禪師曰、古來大有不惜眉毛、爲人指出處、雲門覩體全眞、臨濟坐斷報化佛頭、德山無事於心、於心無事、則虛而靈、寂而照、巖頭只守閑閑地、一切時中無欲無依、自然超諸三昧、趙州道、我見百千箇漢子、只是覓作佛底、中間覓箇無心道人難得、但熟味其言、休心履踐、他時異日、逢境遇緣乃得力也。 心要

魏府老華嚴、示衆語曰、佛法在儞日用處、在儞行住坐臥處、喫茶喫飯處、語言相問處、所作所爲處、若擧心動念、又卻不是也、還會麼、儞若會得、卽是擔枷帶鎖重罪之人。

雪峰存禪師、示衆曰、一一蓋天蓋地、更不說玄說妙、亦不說心說性、突然獨露、如大火聚、近之則燎卻面門、似太阿劍、擬之則喪身失命、若也佇思停機、則沒干涉。 碧巖

雲門大師曰、汝若相當去、且覓箇入路、微塵諸佛、在儞腳跟下、三藏聖教、在儞舌頭上、不如悟去好。

大惠禪師曰、如龍得水、便能興雲吐霧、降霔大雨、那裏祇管去大海裏、輥謂我有許多水也、

大惠曰、儞但灰卻心念來看、灰來灰去、驀然冷灰一粒豆爆在爐外、便是沒事人也。

大惠曰、我這裏無逐日長進底禪、遂彈指一下云、若會去便罷參。 武庫

佛曰、無有定法名阿耨多羅三藐三菩提、亦無有定法如來可說。

臨濟和尚曰、我無一法與人、只是治病解縛。

德山和尚曰、我宗無語句、實無一法與人。

大慧禪師曰、此事若用一毫毛工夫取證、則如人以手撮摩虛空、只益自勞耳、又曰、不容以心意識領會。

臨濟和尚曰、不與物拘、脫體現成。

地藏琛和尚曰、若論佛法一切現成。

眞淨和尚曰、一切現成、更使誰會。

十六　學道須要洞明向上一路

趙州和尚、因僧問、狗子還有佛性也無、州云、無。

趙州、因僧問婆子、臺山路向甚處去、婆云、驀直去、僧纔行三五步、婆云、好箇師僧、又恁麼去、後有僧舉似州、州云、待我去與儞勘過這婆子、明日便去亦如是問、婆亦如是答、州歸謂衆云、臺山婆子、我與儞勘破了也。

趙州、到一庵主處問、有麼有麼、主竪起拳頭、師曰、水淺不是泊船處、便行、又到一庵主處問、有麼有麼、主亦竪起拳頭、師曰、能縱能奪能殺能活、便作禮。

僧問淸平和尚、如何是大乘、曰、井索、如何是小乘、曰、錢索、如何是有漏、曰、笊籬、如何是無漏、曰杓。

南泉和尙、因東西兩堂爭猫兒、泉乃提起云、大衆道得卽救、道不得卽斬卻也、衆無對、泉遂斬之、晩趙州外歸、泉擧似州、州乃脫履安頭上而出、泉云、子若在、卽救得猫兒。

洞山和尙、因僧問、如何是佛、山云、麻三斤。

雲門大師、因僧問、如何是佛、門云、乾屎橛。

楊岐和尙、因僧問、如何是佛、岐云、三脚驢子、弄蹄行。

僧問趙州、如何是佛、州云、殿裏底。

龐居士、問馬祖、不與萬法爲侶、是什麼人、祖云、待儞一口吸盡西江水、卽向汝道、士豁然大悟、作頌云、十方同聚會、箇箇學無爲、此是選佛場、心空及第歸。

僧問巖頭和尙、古帆未挂時如何、師曰、小魚吞大魚、又僧如前問、師曰、後園驢喫草。

大潙安和尙曰、有句無句如藤倚樹、疎山問、忽遇樹倒藤枯時如何、師呵呵大笑歸方丈。

寶壽和尙、開堂曰、三聖推出一僧、師便打、聖曰、與麼爲人、非但瞎卻這僧眼、瞎卻鎭州一城人眼去在、法眼云、甚麼處是瞎卻人眼處、師擲下拄杖便歸方丈。

三聖和尙、上堂、我逢人則出、出則不爲人、興化云、我逢人則不出、出則便爲人。

十七　學道須要領會噴地契券

臨濟三度問黃檗佛法的的大意、三度被打、遂到大愚、問有過無過、愚曰、黃檗與麼老婆心切、爲汝得徹困、更來這裏問有過無過、師於言下大悟、乃曰、元來黃檗佛法無多子。

興化、到大覺爲院主、一日覺喚院主、我聞、儞道向南方行脚一遭、拄杖頭不曾撥著一個會佛

法底、儞憑個甚麽道理、與麽道、師便喝、覺便打、師又喝、覺又打、師來日、從法堂過、覺召院主、我直下疑儞昨日這兩喝、師又喝、覺又打、師再喝、覺又打、師曰、某甲於三聖師兄處、學得個賓主句、總被師兄折倒了也、願與某甲個安樂法門、覺曰、這瞎漢、來這裏納敗闕、脫下衲衣痛打一頓、師於言下、薦得臨濟先師、於黃檗處喫棒底道理。

歸靜禪師、初參西院、便問、擬問不問時如何、院便打、師良久、院曰、若喚作棒眉鬚墮落、師於言下大悟。

僧問趙州、學人乍入叢林、乞師指示、州云、喫粥了也、僧云、喫粥了、州云、洗鉢盂去、這僧豁然大悟、後來雲門大師拈云、且道、有指示無指示、若言有、趙州向他道甚麽、若言無、這僧爲甚悟去。

高亭簡禪師、參德山、隔江纔見便云、不審、山乃搖扇招之、師忽開悟、乃橫趨而去、更不回顧。

鳥窠道林禪師、因侍者會通禮辭曰、某甲爲法出家、和尙不垂慈誨、今往諸方學佛法去、師云、若是佛法、吾此間亦有少許、曰、如何是和尙此間佛法、師於身上拈起布毛吹之、侍者大悟。

龍潭信禪師、一日問天皇曰、某自到來、不蒙指示心要、皇曰、自汝到來、吾未嘗不指汝心要、師曰、何處指示、皇曰、汝擎茶來、吾爲汝接、汝行食來、吾爲汝受、汝和南時、吾便低首、何處不指示心要、師低頭良久、皇曰、見則直下便見、擬思卽差、師當下開解、復問、如何保任、皇曰任性逍遙、隨緣放曠、但盡凡心、別無聖解。

僧問趙州、如何是祖師西來意、州云、庭前柏樹子、僧云、和尙莫將境示人、州云、我不將境示人、僧云、既不將境示人、卻如何是祖師西來意、州只云、庭前柏樹子、其僧於言下忽然大悟。　傳

燈會元等無大悟義、今依大惠法語記之。

葉縣省和尚、因僧、請益趙州柏樹子話、省曰、我不辭與汝說、還信麼、云、和尚重言爭敢不信、曰、汝還聞簷頭雨滴聲麼、其僧豁然不覺、失聲曰、哪、省曰、汝見箇甚麼道理、僧便以頌對云、簷頭雨滴、分明瀝瀝、打破乾坤、當下心息、省忻然。

洞山初禪師、初參雲門、門問、近離甚處、師曰、查渡、門曰、夏在甚處、師曰、湖南報慈、門曰、幾時離彼、師曰、八月二十五、門曰、放汝三頓棒、師至明日、卻上問訊、昨日蒙和尚放三頓棒、不知過在甚麼處、門曰、飯袋子、江西湖南恁麼去、師於言下大悟、遂曰、他後向無人煙處、不蓄一粒米、不種一莖菜、接待十方往來、盡與伊抽釘拔楔、拈卻炙脂帽子、脫卻鶻臭布衫、教伊洒洒地作箇無事衲僧、豈不快哉、門曰、儞身如椰子大、開得如許大口、師便禮拜。

嚴陽尊者、初參趙州、問、一物不將來時如何、州曰、放下著、師曰、既是一物不將來、放下箇甚麼、州曰、放不下擔取去、師於言下大悟。

歸宗拭眼禪師、曾有僧問、如何是佛、宗云、我向汝道、汝還信否、僧云、和尚誠言焉敢不信、宗云、只汝便是、僧聞宗語諦審思惟、良久曰、某便是佛、卻如何保任、宗曰、一翳在目空花亂墜、其僧於言下忽然契悟。會元少異、今依大惠法語記之、僧者芙蓉道訓。

法眼、嘗參地藏、日呈見解說道理、藏語之曰、佛法不恁麼、師曰、某甲詞究理絕也、藏曰、若論佛法一切見成、師於言下大悟。

香嚴閑禪師、遂參潙山、山問、我聞汝在百丈先師處、問一答十、問十答百、此是汝聰明靈利、意

解識想生死根本、父母未生時、試道一句看、師被一問直得茫然、歸寮、將平日看過底文字、從頭要尋一句酧對、竟不能得、乃自歎曰、畫餅不可充饑云云、一日芟除草木、偶抛瓦礫、擊竹作聲、忽然省悟。

十八　學道須要委悉見地淺深

雲門大師、示衆曰、直得乾坤大地、無纖毫過患、猶是轉句不見一色、始是半提、更須知有全提時節。

雲門曰、法身亦有兩般病、得到法身、爲法執不忘己見猶存、坐在法身邊、是一、直饒透得法身去、放過卽不可、子細檢點來有甚麼氣息、亦是病、大惠曰、而今、學實法者以透過法身爲極致、而雲門返以爲病、不知透過法身了、合作麼生、到這裏如人飮水冷煖自知、不著問別人、問別人則禍事也。

洞山价禪師曰、末法時代、人多乾惠、若要辨眞僞、有三種滲漏、一見滲漏、謂機不離位墮在毒海、明安云、爲見滯在所知、若不轉位坐在一色、所言滲漏者只是可中、未盡善、須辨來蹤始得相續玄機妙用、二情滲漏、謂智常向背見處偏枯、明安云、爲情境不圓、滯在取捨、前後偏枯鑑覺不全、是識浪流轉、途中邊岸事、直須句句離二邊、不滯情境、三語滲漏、謂體妙失宗、機昧終始、學者濁智流轉、不出此三種、明安曰、體妙失宗者、滯在語路、句失宗旨、機昧終始者、謂當機暗昧只在語中、宗旨不圓、句句須是有語中無語、無語中有語、始得妙旨密圓也。

無業國師曰、設有悟理之者、有一知一解不知是悟中之則、入理之門、便謂永出世利、巡山傍

潤輕忽上流、致使心漏不盡、理地不明、空到老死無成、虛延歲月、且聰明不能敵業、乾惠未免苦輪、假使才並馬鳴、解齊龍樹、只是一生兩生、不失人身、根思宿淨、聞知卽解。 傳燈錄

圜悟禪師曰、大死底人、都無佛法道理、玄妙得失、是非長短、到這裏只恁麼休去、古人謂之平地上死人無數、過得荊棘林是好手也、須是透過那邊始得、雖然如是、如今人到這般田地、早是難得、或若有依倚有解會、則沒交涉、喆和尙、謂之見不淨潔、五祖先師、謂之命根不斷、須是大死一番、卻活始得、浙中永光和尙道、言鋒若差鄉關萬里、直須懸崖撒手、自肯承當、絕後再甦、欺君不得、非常之旨、人焉廋哉、 碧巖

古人曰、承言須會宗、勿自立規矩、如今人只管撞將去便了、得則得、爭奈顢頇儱侗、若到作家面前、將三要語、印空印泥印水驗他、便見方木逗圓孔、無下落處。 碧巖

圜悟禪師曰、學道之士、初有信向、厭世煩溷、長恐不能得個入路、既逢師指、或因自己直下發明從本已來元自具足妙圓眞心、觸境遇緣、自知落著、便乃守住、患不能出得、遂作窠臼、向機境上立、照立用、下咄下拍、努眼揚眉、一場特地、更遇本色宗匠、盡與拈卻如許知解、直下契證本來無爲無事無心境界、然後識羞慚、知休歇、一向冥然、諸聖尙覓他起處不得、況其餘耶、所以巖頭道、他得底人只守閒閒地、二六時中無欲無依、可不是安樂法門。 心要

洛浦和尙、上堂、末後一句、始到牢關、鎖斷要津、不通凡聖、尋常向諸人道、任從天下樂欣欣、我獨不肯、欲知上流之士、不將佛祖言敎貼在額頭上、如龜負圖、自取喪身之兆、鳳縈金網、趨霄漢以何期、直須旨外明宗、莫向言中取則、是以石人機似汝也解唱巴歌、汝若似石人、雪曲也

應和　會元

白雲端和尚曰、直須悟始得、悟後更須遇人始得、儞道、既悟了便休、又何必更須遇人、若悟了遇人底、當垂手方便之時、著著自有出身之路、不瞎卻學者眼、若祇悟得乾蘿蔔頭底、不唯瞎卻學者眼、兼自己動便先自犯鋒傷手。　會元

五祖演和尚道、有一般人參禪、如琉璃瓶裏搗糍糕相似、更動轉不得、抖擻不出、觸著便破、若要活潑潑地、但參皮殼漏子禪、直向高山上撲將下來、亦不破、亦不壞。　碧巖

晦堂和尚、示衆云、若也單明自己、不悟目前、此人有眼無足、若悟目前不明自己、此人有足無眼、據此二人、十二時中、常有一物蘊在胸中、物既在胸不安之相、常在目前、既在目前觸途成滯、作麼生得平穩去、祖不言乎、執之失度、必入邪路、放之自然體無去住。　正法眼藏

葉縣省和尚云、參學須具參學眼、見地須得見地句、有時句到意不到、妄緣前塵分別影事、有時意到句不到、如盲摸象各說異端、有時意句俱到、打破虛空界光明照十方、有時意句俱不到、無目之人縱橫走、忽然不覺落深坑。　會元

玄沙備禪師、疾大法難擧罕遇上根、學者依語生解隨照失宗、廼示綱宗三句、曰、第一句、且自承當現成具足、盡十方世界更無他故、祇是仁者、更教誰見誰聞、都來是汝心王所爲、全成不動智、只缺自承當、喚作開方便門、使汝信有一分眞常流注、亘古亘今、未有不是、未有不非者、然此句只成平等法、何以故、但是以言遣言、以理逐理、平常性相、攝物利生耳、且於宗旨猶是明前不明後、號爲一味平實分證法身之量、未有出格之句、死在句下未有自由分、若知出格

量、不被心魔所使、入到手中便轉換落落地、言通大道、不墮平懷之見、是謂第一句綱宗也、第二句、廻因就果、不著平常一如之理、方便喚作轉位投機、生殺自在、縱奪隨宜、出生入死廣利一切、迴脫色欲愛見之境、方便喚作頓超三界之佛性、此名二理雙明二義齊照、不被二邊之所動、妙用現前、是謂第二句綱宗也、第三句、知有大智性相之本、通其過量之見、明陰洞陽、廓周法界、一眞體性、大用現前、應化無方、全用全不用、全生全不生、方便喚作慈定之門、是謂第三句綱宗也。

十九　學道須要識在得底人、不必嫌知解

遠錄公云、未透底人參句、不如參意、透得底人參意、不如參句　碧巖

黃龍心禪師、大悟之後、從容游泳陸沈衆中、時時往決雲門語句、南公曰、知是般事便休、汝用許多工夫作麼、公曰、不然、但有纖疑在、不到無學、安能七縱八橫、天廻地轉哉、南公肯之。　僧寶傳

圜悟禪師曰、久參先德、有見而未透、透而未明、謂之請益、若是見得透請益、卻要語句上周旋、無有凝滯、久參請益與賊過梯。　碧巖

歸宗和尚曰、從上古德、不是無知解、他高尚之士不同常流、今時不能自成自立、虛度時光、湧泉云、見解言語總要知通、若識不盡敢道輪廻去在、爲何如此、蓋爲識漏未盡、汝但盡卻今時始得成立。　會元

大惠禪師曰、從上大智惠之士、莫不皆以知解爲儔侶、以知解爲方便、於知解上行平等慈、於

知解上作諸佛事、如龍得水、似虎靠山、終不以此爲惱、只爲他識得知解起處。

宗鏡錄云、若以智惠爲非、則大智文殊、不應稱法王之子、若以多聞是過、則無聞比丘、不合作地獄之人、應須以智惠合其多聞、終不執詮而認指、以多聞而廣其智惠、免成孤陋而面墻、所以云、有智無行國之師、有行無智國之用、有智有行國之寶、無智無行國之賊、是以智應須學、行應須修、闕智則爲道之瞽、無行乃國之賊、當知名相關鎖、非智鑰而難開、情想勾牽非惠刀而莫斷。

二十　學道須要辨賓主句

臨濟和尙曰、參學之人、大須子細、如主客相見、便有言論往來、或應物現形、或全體作用、或把機權喜怒、或現半身、或乘獅子、或乘象王、如有眞正學人、便喝先拈出一箇膠盆子、善知識不辨是境、便上他境上、作模作樣、學人便喝、前人不肯放、此是膏肓之病不堪醫、喚作客看主、或是善知識、不拈出物、隨學人問處卽奪、學人被奪抵死不放、此是主看客、或有學人應一個淸淨境、出善知識前、善知識辨得是境、把得抛向坑裏、學人言、大好善知識、卽云、咄哉、不識好惡、學人便禮拜、此喚作主看主、或有學人披枷帶鎖、出善知識前、善知識更與安一重枷鎖、學人歡喜彼此不辨、呼爲客看客。

首山念和尙、示衆曰、諸上座不得盲喝亂喝、尋常向汝道、賓則始終賓、主則始終主、賓無二賓、主無二主、若有二賓二主、兩箇卽成瞎漢、所以我若立、儞須坐、我若坐、儞須立、坐則共儞坐、立則共儞立、雖然如是、急著眼始得。

二十一　學道須要辨履踐工夫

唐宣宗皇帝、問弘辨禪師曰、何爲頓見、何爲漸修、對曰、頓明自性與佛同儔、然有無始染習故、假漸修對治、令順性起用、如人喫飯不一口即飽。

溈山和尙、上堂、夫道人之心質直無僞、無背無面、無詐妄心、一切時中視聽尋常、更無委曲、亦不閉眼塞耳、但情不附物即得、從上諸聖祇說濁邊過患、若無如許多惡覺情見想習之事、譬如秋水澄渟清淨無爲澹泞無礙、喚他作道人、亦名無事人、時有僧問、頓悟之人更有修否、師曰、若眞悟得本、他自知時、修與不修是兩頭語、如今初心、雖從緣得一念頓悟自理、猶有無始曠劫習氣、未能頓淨、須敎渠淨除現業流識、即是修也、不可別有法敎渠修行趣向、從聞入理、聞理深妙、心自圓明不居惑地、縱有百千妙義抑揚當時、此乃得坐被衣、自解作活計始得、以要言之、則實際理地不受一塵、萬行門中不捨一法、若也單刀直入、則凡聖情盡、體露眞常、理事不二、即如如佛。　會元

達磨大師、告二祖曰、正法眼藏我今付汝、吾滅後二百年、衣止不傳、法周沙界、明道者多、行道者少、說理者多、通理者少、潛符密證千萬有餘、汝當闡揚、勿輕未悟、一念廻機便同本得。

大珠和尙、僧問、如何是修行、師曰、但莫汚染自性、即是修行、莫自欺誑、即是修行、大用現前即是無等等法身。　傳燈錄

湧泉欣禪師、上堂、我四十九年、在這裏尙自有時走作、汝等諸人莫開大口、見解人多、行解人萬中無一箇、見解言語總要知通、若識不盡、敢道輪廻去在、爲何如此、蓋爲識漏未盡、汝但盡

卻今時始得成立。　會元

大慧禪師曰、此事極不容易、須生慚愧始得、往往利根上智者得之不費力、遂生容易心、便不修行、多被目前境界奪將去、作主宰不得、日久月深、迷而不返、道力不能勝業力、魔得其便、定爲魔所攝持、臨命終時亦不得力。

圜悟禪師曰、如人學射、久久方中、悟則刹那、履踐工夫須資長遠、如鵓鳩兒出生下來、赤骨𩪘地、養來餧去、日久時深羽毛既就、便解高飛遠擧、所以悟明透徹、政要調伏。　心要

圜悟曰、理須頓悟、事要漸修。　心要

南泉云、我十八上、解作活計、趙州道、我十八上、解破家散宅、又道、我在南方二十年、除粥飯二時是雜用心處。

洞山价禪師曰、直須心心不觸物、步步無處所、常不間斷、稍得相應。　傳燈錄

大慈寰中禪師曰、說得一丈、不如行取一尺、說得一尺、不如行取一寸、洞山又云、說取行不得底、不如行取說不得底。

晦堂心和尙曰、予初入道、自恃甚易、逮見黃龍先師、後退思日用、與理矛盾者極多、遂力行之三年、雖祁寒溽暑、確志不移、然後方得事事如理、而今、咳唾掉臂也是祖師西來意。　禪門寶訓

香林遠禪師嘗云、老僧四十年、方打成一片。

圜悟、擧此語、教得底人、勤履踐工夫、眞有旨哉。

圭峯禪師曰、眞理卽悟而頓圓、妄情息之而漸盡、頓圓如初生孩子、一日而肢體已全、漸修如

長養成人、多年而志氣方立。 合元

圭峯、又山南溫造尚書問、悟理息妄之人、不結業、一期壽終之後、靈性何依、師曰、一切衆生、無不具有覺性、靈明空寂、與佛無殊、但以無始劫來未曾了悟、妄執身爲我相、故生愛惡等情、隨情造業、隨業受報、生老病死、長劫輪廻、然身中覺性未曾生死、如夢被驅役、而身本安閑、如水作氷、而濕性不易、若能悟此性、卽是法身、本自無生、何有依託、靈靈不昧、了了常知、無所從來、亦無所去、然多生妄執習以性成、喜怒哀樂微細流注、眞理雖然頓達、此情難以卒除、須長覺察損之又損、如風頓止波浪漸停、豈可一生所修、便同諸佛力用、但可以空寂爲自體、勿認色身、以靈知爲自心、勿認妄念、妄念若起、都不隨之、卽臨命終時、自然業不能繫、雖有中陰、所向自由、天上人間隨意寄託、若愛惡之念已泯、卽不受分段之身、自能易短爲長、易麤爲妙、若微細流注、一切寂滅、唯圓覺大智、朗然獨存、卽隨機應現千百億化身、度有緣衆生、名之爲佛、謹對。

圜悟和尚曰、古之有道宿德、令人既脫根塵、當弘密印、三十二十年做冷寂寂地工夫、纔有纖毫知見解路、隨卽掃摒、亦不留掃摒之迹、撒手那邊、全身放下、硬糾糾地得大快活、唯恐知有如是作略、知則禍事也。 心要

嬾安和尚云、安在潙山三十年來、喫潙山飯、屙潙山屎、不學潙山禪、只看一頭水牯牛、若落路入草、便牽出、若犯人苗稼、卽鞭撻、調伏既久、可憐生、受人言語、如今變作箇露地白牛、常在面前、終日露逈逈地趁亦不去也。 正法眼藏

圓悟和尚曰、既得旨之後、綿綿相續管帶、令無間斷、長養聖胎、縱逢境界惡緣、能以正知見定力、融攝之使成一片、則生死大變、不足動自己胸次、養得歲深、成個無爲無事大解脫人、豈不是能事已辨、行腳事畢耶。　心要

興善惟寬禪師、憲宗詔至闕下、侍郎白居易嘗問曰、既曰禪師、何以說法、師曰、無上菩提者、被於身爲律、說於口爲法、行於心爲禪、應用者三、其致一也、譬如江湖淮漢在處立名、名雖不一、水性無二、律卽是法、法不離禪、云何於中妄起分別、曰、既無分別、何以修心、師曰、心本無損傷、云何要修理、無論垢與淨、一切勿念起、曰、垢卽不可念、淨無念可乎、師曰、如人眼睛上一物不可住、金屑雖珍寶、在眼亦爲病、曰、無修無念又何異凡夫耶、師曰、凡夫無明、二乘執著、離此二病、是曰眞修、眞修者不得勤、不得忘、勤卽近執著、忘卽落無明、此爲心要云爾。　會元

潙山和尚、問仰山曰、寂子儞心識微細流注、無來幾年耶、仰山未卽答、卻問、和尚無來幾年、其時潙山自是七十餘歲、謂仰山曰、老僧無來已七年矣、寂子何如、仰山云、惠寂正閙在、以此觀之、這裏使麤心說脫空相瞞得麼、眞有大力量始得。　大惠普說

二十二　學道須要到得大休歇田地

斯集成焉、至大休歇田地、不著編類者久矣、一日有僧問曰、庵主作斯集、可謂便於初學觀覽、然至大休歇一門、不著編排何也、予曰、我不知、我不會、僧曰、庵主爲什麼、語未終、予拍手呵呵笑、其僧茫然、仍作山中四威儀偈、聊陳志云、山中行赤腳、尖頭鳥道平、逢著大蟲觸牙爪、歸來杖子唔相驚、山中住、只識從朝又到暮、客來若問因什麼、萬岳千峯努力怒、山中坐藁取、須彌

那一座、不是倦禪學駱駝、時把衲衣欲補破、山中臥、飽𩰋𩰋地、消一箇默耀韜輝付枕兒、幸然無人求滯貨。

緇門寶藏集卷之下終

古德曰、多識前言往行、遂成其志、一絲先師曾隱丹山、宴寂之餘、閱華竺墳典、拾便言行者、而輯錄爲編、目之曰緇門寶藏、總得三卷二十二章、始以決信心、怕生死而爲本、終以勤履踐到休歇而爲極、在其中間者、擇師簡友之要、見性明心之理、以至向上末後、邪正賓主之句、剖列部類、靡不該載、間加評論、而折衷之、學者往往襲藏、如獲夜光、余竊觀之、魯魚豕亥相誤甚夥、客歲之冬、參考本書、大概訂正、傍加倭點、以便初學之觀覽、尙恐訛舛不鮮、今將鏤梓傳諸不朽、以爲後進之鑑也、讀者儻能順言遵行、則遂成其大志者必矣、決矣、若夫宿有靈骨、具超宗異目、亦不成剩語。

寛文龍集癸丑正月穀旦　永源小比丘惠詢謹跋

昭和五年九月十五日印刷
昭和五年九月二十日發行

國譯禪學大成奥付

編者　國譯禪學大成編輯所
代表者　宮裡祖泰

發行者　宮下軍平
東京市神田區錦町一丁目十六番地

印刷者　藤本茂人
東京市神田區猿樂町二丁目五番地

印刷所　藤本印刷所
東京市神田區猿樂町二丁目五番地

發行所　二松堂書店
東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三四〇九番